

東方人狼行軍

BATTU

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の人狼は戦いの中で死に次の夢を見るために眠った

そして目覚めたのは優しくも残酷な幻想の夢

人狼はその夢の中で何を見るのか

目次

19話	123
18話	116
17話	111
16話	105
15話	99
14話	92
日常編 1	
設定と紹介	88
13話	80
12話	72
11話	60
10話	50
⑨話	41
8話	35
7話	27
東方紅魔卿	
6話	21
5話	17
4話	14
3話	11
2話	7
1話	4
プロローグ	1

40話	39話	38話	37話	36話	35話	34話	33話	32話	31話	30話	29話	28話	27話	東方妖々夢	設定と紹介	26話	25話	25話	25話	24話	23話	22話	21話	20話
																	後	中	前					
																2								
296	292	282	272	258	249	240	229	224	219	209	203	199	193		188	181	173	167	162	158	152	146	136	130

6
1
話

6
0
話

5
9
話

5
8
話

5
7
話

5
6
話

東方風神録

設定と紹介
3

5
5
話

5
4
話

5
3
話

5
2
話

5
1
話

5
0
話

4
9
話

東方萃夢想

4
8
話

4
7
話

4
6
話

4
5
話

4
4
話

4
3
話

4
2
話

4
1
話

日常編2

440 432 427 420 412 405

398 389 382 376 367 361 353 344

341 336 329 324 320 315 308 304

7
0
話

6
9
話

6
8
話

6
7
話

6
6
話

6
5
話

6
4
話

6
3
話

6
2
話

496 489 481 472 468 462 455 451 444

プロローグ

「狼男の旦那、50年前の誰かさんからのお返しだ。受け取れ！」

そう言ったのは敵の女兵士、セラス・ヴィクトリアと同化したと思われる男だ。男の放った拳には銀の入れ歯が握られている戦闘中に自分が敵に与えたものだ

男の拳が体を貫き、体の中に銀の入れ歯が入る。その瞬間、体中に激痛が走った

どうやらハンデを与えすぎたようだ

人狼は吸血鬼とは違い十字架や聖水は効かない。ただ唯一の弱点である銀はその量関係なく体に入りこめば即死につながる

バタツ！

激痛はいつの間にか、力が抜けていく感覚にかわる。もはや立つ力もなくなり、地面に倒れる

・・・ああ、地面が冷たい

女が俺を見下ろしていた・・・楽しい戦いだっただ

徐々に意識が薄れて行く・・・だが、死ぬとゆう感覚とは違う感じだ・・・そう、夢だ。まるで楽しい夢を見たような満足な気持ちだ

楽しい夢だったな・・・次はどんな夢が見れるだろうか？そう考えるだけで死ぬ間際だと言うのに期待がふくれあがる

さあ、眠ろう・・・次に見る夢が・・・楽しみだ

その瞬間、体を青い炎が包み込む

その時の敵の表情を見てセラスは後にこう語った

「まるで、楽しい夢を見た子供のような顔だった」と・・・

日も差さない雲とポツポツと降ってくる雨の中、雨に濡れた道を歩

く2つの影があった

一人は小さな和傘をさし、雨の中も構わず元気にはしゃいでいた

「あつめあめ♪ふれふれ♪もつとふれ♪」

「これ以上降ったら、大変になるな」

もう一人は同じく和傘をさし、前ではしゃぐ子を見ながらゆつくりと歩いていた

長髪で黒髪、凜とした風格を持ち巫女のような服装をしている女性だ

歩くこと数分後、一つの長い石階段にたどりつき巫女服姿の女性は小さい女の子を抱きかかえて長い石階段を飛びながら数歩で頂上にたどり着く

そこは一つの神社らしき建物があり、鳥居には博麗神社と書かれていた

「さて、体が冷える前に早く中に入って風呂でも入るか」

「ねえ母さん」

「ん？どうした霊夢？」

「あれ、なんだろう？」

霊夢と言う名の少女はこの博麗神社の賽銭箱がある方に指をさす。

そこには雨によって良く見えないが一つの影があった

「・・・霊夢、母さんの後ろから離れるな」

「うん」

左手は傘を持ち、右手はいつでも戦えるように握り締め影にゆつくりと近づいて行く

「・・・なんだこれは？」

目に入ったのは大きな服の様な物だった。色は深い緑で大きさは通常の人間が着る物にしては大きい

「おっきいね」

（人間が身につけるにしては確かに大きいな・・・人間だったら、な）

ゴソツ

「ツ・・・」

突然、服の中からゴソツと何かが動いた。女性は服にあるボタンら

しきものを慎重に外し中を確認した

「誰だ・・・この子は？」

服の中には小さな子が目を閉じ眠っていた。髪は白髪で霊夢より年は1、2歳は上の少年だ

だが、その少年には人間とは思わせない白狼の耳と尾があった

1話

「・・・」

意識が覚めていき、ゆつくりと目を開けてみると最初に見えたのは見知らぬ木製の天井、そして・・・

「あつ、おきたー!」

バツと横から俺の視線にいきなり入って来た一人の少女だった

「まっつててね!すぐお母さんよんでくるから」

勢いよく立ち上がって部屋を出た・・・元気だな

また視線を天井に移した後、体を起こすとふらつく様な感覚があり右手で頭をおさえた

ここは一体どこだ?俺は確かに・・・死んだはず。あの女兵士が助けた?いや、体に銀が入った時点で俺はもう助からない

仮に助かったとしても生かす意味が無い。そう考えていた時、一つの異変に気づく

意識もだいぶ覚めてぼんやりしていた景色がはっきり見えるようになり周りを見渡してみると、何故かこの部屋にあるものが異様に大きく見えるのだ

俺はそつと自分の体を見てみた

体が縮んでる・・・と言うより、幼くなっている?

自分でも訳のわからないことを言っている気がするが、確かに体が子供の様になっているのだ

何故こうなったのか考えていると二つの気配が近づいて来た。一人は先程の少女でもう一人は知らないが確実に強い気配を放っていた

「お、本当に起きてたな」

最初に部屋に入ってきたのは、先程から感じていたもつとも気配が強かった人物、しかも女性だった。その後にも先程の少女も入ってきた

「さて、起きてすぐで悪いんだが君に聞かなければならないことがあ

る妖怪くん」

「・・・この女、俺が人間ではないことに気づいているようだ。しかし、妖怪とはな

これも少佐から聞いた話だが、日本と言う国には妖怪と言う俺たちの様な化物が存在するらしい

「じゃあまずは互いに自己紹介からだ。私は博麗霊香（ハクレイレイカ）、この博麗神社の巫女だ。この子は娘の霊夢（レイム）血は繋がっていないがな」

「よろしくね！」

「・・・」コクツ

前に出てきて元気に挨拶してきたのでとりあえず頷いておいた

「霊夢、おしゃべりしたい気持ちは分かるが少しだけ我慢だ」

「はい」

「じゃあ、次は君の名前を教えてくださいませんか」

名前・・・ミレニアムに居た頃からそうだが俺には名前が無い。大尉と呼ばれていたがあれはただの階級だ、名前とは言えない

「・・・」フルフル

俺はとりあえず顔を左右に振ってみた

「名前を教えられないのか？それとも名前が無いのか？」

「・・・」

やはり、行動だけで示すのは限度があるようだ。別に喋れない訳では無いがあつ頃の頃は特に俺が口を出す事など無くただ少佐の命令を遂行するだけだったのでずっと喋らなかつた。故に皆からは無口な奴だと思われていたな

流石にこれ以上は無理がある。俺はゆっくりと口を開き話した

「名前は・・・無い」

「ん？喋れないかと思つたらちゃんと喋れるんだな」

喋れる事に少しだけ驚いたがその後も質問が来た

Q. どこから来たか

A. ロンドン

Q. ここが何処か知っているか

A. 知らない

Q. 君は白狼天狗か

A. なにそれ？

「質問を質問で返さない」

「・・・違う、人狼だ」

Q. 帰る場所はあるか

A. 無い

名前の質問を入れて全部で5回の問いに答えた

「・・・霊夢、お母さんは少し知り合いの所に行ってくる。この子が勝手をしないように見ててくれる？」

「はい」

「と言う訳だ。私は出掛けるが勝手にここから出ることはするな、わかったな」

「・・・」コクッ

頷いたのち、霊香は部屋を後にし気配が徐々に遠くなった

とりあえず俺はもう一度横になり、これからどうするかを考える事にしたが

「ねえねえ、つぎはわたしとおはなししよー」

・・・この子の相手をするのが先のようにだ

2話

霊香が部屋を後にしてから数時間が立つ。だが、まだ外は明るい未だに帰ってくる感じはしない

「・・・」

「ふふふーん♪」

横になっっている俺に寄り添うように霊夢がくつついてくる。少し話ただけで懐かれたようだ

話と言っても本当に些細なことしか話していない。好きなものや遊びとか子供が話しそうな事ばかりだ

どうせ、何も出来ない。だからこの子の話相手になつてやろうと思つた、特に他意は無かつた

「ねえねえ」

「どうした？」

「じんろうつてなにができるの？」

「そうだな・・・狼になれる、かな」

「ほうとう！ねえねえ、なつてみて！」

・・・特に獣化する必要は無いが、今思えばこの幼い体になつてから力が扱えるか不安があつた。ここが何処か分からない以上にかあつてもおかしくない・・・試すだけ試してみよう

大尉は身にまどつていた知らない服を少し緩め、全身に力を込め獣化を始めた

最初に両手両足から白い獣毛が生え始め、爪も長く鋭くなる。体と顔の骨格も変わり始め数分もしないうちに小さな白狼の姿になつた

・・・どうやら力は特に変わった所はないようだ。これなら霧に変わる能力も問題ないかもしれない・・・ただ、この小さい体では体力が劣っているせいか今の状態を保つのが少々辛く感じる

万が一の為に体を鍛えることも考えて置かないといけないかもしれないな・・・まあ今は

「すごいー！かわいいー！もふもふしていい？もふもふ」

霊夢が満足するまで相手をしてやる事だ。もふもふとはなんだろうか？よくはわからないが好きにさせてやろう

顔を縦に振ってとりあえず許可した。だが、俺はこの時の安易な許可を後悔することになった

「わーい！もふもふだー！」

ガシッ！

「ッ!!」

いきなり霊夢が抱きついて背に顔をうずめてきたのだ。そのまま顔をこすり付けるように左右に顔を動かす

い、痛い！痛い!!霊夢は喜んでいいるが実際やられている俺は背中がすごく痛い！

「おなかぽふぽふ。しっぽふわふわ」

そのまま腹と尻尾を触る霊夢

ぬっ！くっくく！腹と尻尾を触られると逆にくすぐったいのだ。

だが一度手を休めまた顔を、い、いだだだだッ!!

この時俺はもふもふをやられる苦しさを身を持って知ることになった

痛いと思ったら次はくすぐられ、また痛い思いを味あわせられる・・・今の体で獣化するのには控える事ももふもふをくくわらない策を考えるようにとこの日をさかいに誓った

数分後

「スー・・・スー・・・」

「・・・」

返事が無い疲れているようだ

もふもふ行為が終わり、やっと解放された。霊夢は満足したのか眠ってしまった、俺は元の姿に戻り疲労困憊で倒れていた

「・・・ふっ」

今思えば、戦い以外で疲れたと思った事はなかった。ここに来てわからない事ばかりだが俺がこの見知らぬ場所に目覚めたのは何か意

味がある筈だ

これから色々知るだろう。今はこの状況に身を任せて生きてみる
としよう

俺は眠る霊夢に掛け布団をかけて、頭を撫でた

おまけ

「霊夢、帰ったぞ」

どうやら、霊香が帰ってきたようだ

「霊夢？この部屋に…い、る…」

部屋に霊香が入ってくると何故か顔の表情を固め、数秒動かなくなつた。どうした？

「…霊香？ツ!!」

名を呼んだ瞬間、霊香から凄まじい殺気を放ち始めた。い、一体どうしたんだ？この殺気からかなりの實力を持っている事を思わせた
「お前…娘の霊夢に何をしようとしているんだ？」

拳を握り締め、プルプルと震えている霊香

俺の事を言っているのか？い、いやだが霊夢に何をつて…やられたのは俺のほうなんだが

この時の大尉は今、自分の格好に気づいていなかった…裸体であることに

例え、今の大尉が小さな子の姿でも霊香は冷静さを失い混乱して
た

「ま、まて霊香…何を怒って…」

「歯をくいしばれえええ!!!」

バキツ!!

「ぐっ!!」

力強い右ストレートが頬に直撃し、俺は床に倒れる

本当に…俺が何を、したんだ…

この後、俺は気を失い次の日まで起きなかった

・
・
・
厄日だ

3話

次の日

目覚めた時にはまた木製の天井が見えた、どうやらあの後からそのまま寝てしまったようだ

起きた後、すぐに霊香が謝ってきた。「誤解してごめんなさい！」と・・・とりあえず、大丈夫だと言って謝るのをやめて貰った

しかし、一体何を誤解していたのか聞いてみても教えては貰えなかった。昨日は確か霊香が出掛けた後・・・霊夢に獣化を見せて、もふもふを喰らって、霊夢は疲れて眠ったから掛け布団をかけた。その後、霊香が帰ってきて殴られる

・・・駄目だ。その間に自分が何か怒られる様な事をした記憶は確かに無いはず、一体どこで失敗したのか?・・・とりあえず、今後は気を付けよう

部屋を出て居間とやらにつき、テーブルの前に霊香が指定した場所に座った

「おはよう」

「・・・おはよう」

隣に座っていた霊夢が挨拶したので俺も挨拶を返した

テーブルには朝食が並んでおり、霊香も席についた

「じゃあ、いただきます」

「いただきます!」

「・・・いただきます」

二人の動作を見ながら俺も同じことをした。かつてドイツが日本と同盟を結んでいた時に日本語と文化、作法なども学んだことがある。まあ、ほとんどは本などで見た程度の知識だが

確か食事を摂る前に両手を合わせ、いただきますつというのが日本の作法にあったはずだ。二人の動作を見て思い出したのだ

「二人とも、私は仕事に行ってくるが昼は作っておいたからお昼になったら二人で食べなさい。夕方までには戻るようにするから」

「はい」

「・・・仕事？」

「ああ、博麗の巫女の仕事だ。霊夢を頼むぞ・・・むう、名前が無いのはやはり不便だな。何か考えておこう」

「どうやら俺の呼び名について悩んでるようだ。霊香は俺の名を考えてくれるようだ。俺は顔を左右に振る」

「しかし、どうせ帰る場所もないんだろ？ここに住むならやはり名前が必要だ。少なからず私はもうお前を息子の様には思っている」

「・・・息子」

「子は甘えるものだ。遠慮することはないさ」

「・・・」コクツ

「それでいい。よかったな霊夢、お前にお兄ちゃんが出来たな」

「うん！」

「兄・・・か」

何やら話が飛んでいる気がするが、とにかく今の俺は霊夢と同じ様に霊香の養子になっているようだ

まあ、悪くは無い・・・

その後、朝食を終えてかたづけを手伝った後に霊香は言った通りに仕事に行き、俺は外で早速鍛練をすることにした。霊夢は俺の鍛練を神社の屋根の下でじっと見ていた

外に出ることに関しては神社から出なければ何してもいいらしい。

それとこの神社に客人が来ると霊香から聞いた

客人の名は森近霖之助、霊夢の遊び友達を連れて来るらしいから対応と友達になってやって欲しいとの事だ

どのような子供だろうか？霊夢みたいな子は勘弁して欲しいな

俺は腕立て伏せを開始した。流石に両足を浮かせての腕立て伏せはこの体ではまだ早すぎる、だが体が成長しているのは確かだ。元の姿に戻るかは今後の鍛練と成長次第と言う事だ

「おーい、霊香く遊びに来たぞ〜」

腕立て伏せ100回目に到達寸前に誰かが来た

声は女性、森近霖之助は男性だと聞いた。だが女性は霊香を知っているようだ

腕立て伏せをやめて鳥居の方向に目をやるとそこにたっていたのは黒い服装に金髪で長髪の女性だった

4話

「ん、妖怪か？しかも子供」

「あ、ルーミア！」

「よう霊夢。遊びに来たぞ」

霊夢はルーミアと言う女性の下へ走っていきギュツと抱きついた

「で、霊夢。この子供の妖怪は誰だ？悪きでもして霊香に捕まったか」

「わたしのお兄ちゃんだよ」

「お兄ちゃん？・・・妖怪を養子にしたのか霊香は？」

ルーミアは頭を掻きながら考えたあと、俺の前まで来て目線を合わせるように姿勢を引くした

「こんにちは、そしてはじめまして霊夢のお兄さん。私はルーミア、見
ての通り妖怪だ。お前の名前は？」

「・・・俺は人狼。名前はまだ、無い」

「名無しだったのか」

「・・・」コクツ

「やれやれ、久しぶりにきたら何やら賑やかだね」

「・・・？」

また誰かが来た。今度は男性の声だ

「なんだ、霖之助か。今日はどうしたんだ？霊香ならいないみたいだ
ぞ？」

「今日は魔理沙を連れてきてね。霊香が魔理沙に新しい友達になって
くれる子がいるから魔理沙に会わせてあげな、と言われたから久しぶ
りに来たんだよ・・・どうやら、君がその子供らしいね。しかも人狼
とは」

「どうやら、この男性が霊香が言っていた森近霖之助のようだ。彼の
後ろに子供が隠れている」

「ほら、魔理沙。彼が霊香が言っていた霊夢のお兄さんだよ」

「・・・ウー」

霖之助に言われて少し前に出てきた。しかし、大きな黒い帽子のせ
いで顔は見えない

「そう・・・えい！」

「みやあああ!!」

霊夢がそつと背後から近づき、魔理沙の背中をおもいつきり押す。驚いた反動のせいか帽子も取れる

そのまま俺の方に来て、倒れそうにもなったから両肩を掴んで止めた。

「・・・大丈夫、か？」

「・・・」

魔理沙が俺の声に反応して顔を上げる。帽子も頭から落ちたので素顔もよく見えた

「・・・だ、」

「？」

「だじええええ!!」

「・・・うるさい」

いきなり泣き出した魔理沙：いきなりのことで内心少しだけびつくりした

魔理沙は泣きながら霖之助の下に戻る

「あはは、いつものまりさだー」

「いや、ごめん。この子は見ての通り少し怖がりだね、初めて会う人にはいつもこんな感じなんだよ」

「・・・少し？」

「私と霊夢に初めて会った時もこんな感じで泣いてたな」
「・・・」

これはこれで霊夢と同じくらい面倒な気がするな
そんな感じで霧雨魔理沙と友達になる事となった

おまけ

「ほらほら、さわってみなよ…きもちいいよ」

「う、うん」

「・・・」

霊夢が提案した仲良くなる方法と言われて試されたのが、獣化して触れあうという事だ

魔理沙は震えながら、獣化した俺にゆっくりと触れる

「・・・どうだ？」

「ふ、ふかふか、だじえ」

どうやら少し喜んでくれたようだ

「じゃあ、つぎはもふもふを」

シュバ!!

「・・・逃げた」

「逃げたね」

もふもふだけは絶対くらわわない

あの日それを誓ったのだ

5話

数年後

博麗神社 縁側

あれから何年たっただろうか？

今の霊夢はもう10になった

気がつけば時の流れは早く、俺はこの幻想郷の生活にもなれてしまった

「・・・」ずずっ

縁側で景色を眺めながら温かい茶を飲む

この数年間、俺は様々な者に出会いそして己の鍛練も積み上げてきた

現在の身長もかつての身長くらいは伸び、力も徐々に戻って来ている。あの服も試してみたが腕や足は少し袖をおらないと出てこない

霊夢も最近は霊香から博麗の巫女としての修行もしており、実力を伸ばしている。力と技術だけなら巫女としては強いがこの幻想郷では博麗の巫女とはいわゆるバランスの用な感じだ

幻想郷を守るためには生半可な力では守れない、仮に妖怪が異変をおこし博麗の巫女が負けるような事があれば幻想郷でのパワーバランスが一気に崩れる

今の霊夢には霊香や友の魔理沙もいる。支えがいるおかげで今まで弱音を吐いた事はない、昔と違って言葉遣いは変わったが元気さはあまり変わらない

「・・・俺など居なくても、霊夢は強くなったかもな」

「兄さん♪」

「っッ」

いきなり後ろから抱きつかれ、落とした飲み終わった湯呑みを足でキヤッチした

「霊夢、危ない」

「ごめん。今日の修行は終わったんだ、兄さんは？」

「今日の鍛練、終わった」

「じゃあ、この後遊びにいきましょう二人で」

「・・・」コクッ

特にやることもない為、霊夢の案に賛成したらありがとう♪つと言われ部屋に行った霊夢

最後の二人で、という単語が強調していた用な気がしたがなんなのだろうか

とりあえず、湯呑みとお盆を持って台所に向かった

「ん？ああ『小夜（さよ）』か。洗い物か？」

「・・・」コクッ

「ありがとう、霊夢から聞いたよ出かけるんだってな。夕飯前には帰りなよ」

「分かった・・・夕飯、準備には帰る。手伝う」

「遅くても構わないよ。気をつけて行ってきな」

もう一度頷き、台所を後にする

小夜、霊香が俺に名付けてくれた名前

満月の夜、外で月を見ながら突っ立っていた俺を霊香が偶然見つけ、その姿からこの名が出たそうだと

満月の『夜』の下に立つ『小』さな子

で、小夜だそうだと

俺はかつての服に着替え、ホルダーにモーゼルM712を入れ外で待つ霊夢の下に向かった

道中

「いい天気ね」

「・・・ああ」

雲一つない空の下、俺たちはまず人里に向かっていた

霊夢は空を飛べるが俺が飛べないことを考えてか、共に出かける時は歩きが基本だ

「大丈夫か霊夢？」

「全然大丈夫よ。そこまでひ弱じゃないのは兄さんだつて知ってるでしょ？それに・・・飛ぶより歩いた方が長くいられるし」

「?・・・辛くなったら何時でも言え」

「うん♪」

最後の方が聞き取れなかったがあえて聞かない事にした

右手に掴まり寄つ掛かってくる霊夢

・・・少し、歩きにくい

人里

この幻想郷で唯一人間が集まって住んでいる里だ

「今日も賑わってるわね」

「・・・で、どうする？」

「うーん、特に決めてないけど適当にまわりましょう」

ノープランか。だが、何の目的もなくみて回るのはたまにはいい

「霊夢、貸本屋に後で寄りたい」

「貸本、ああ鈴奈庵ね。本を返しに行くのね」

とりあえず、鈴奈庵を最後に向かうとして二人は色々まわっていた

鈴奈庵 前

「あれ？あれって小鈴ちゃんと阿求じゃない？」

ほとんどの場所をまわりきり、鈴奈庵にたどり着いた二人の目の前に二人の少女が立ち話をしていた

少女たちも霊夢と小夜に気づいたのか、先に声をかけてきた

「あ！霊夢さんに小夜さん、こんにちは」

「こんにちは阿求、今日は鈴奈庵に用事？」

「はい、その後小鈴ちゃんとお話してたんです」

霊夢と阿求が話している間に小夜は小鈴に一冊の本を返す

「……ありがとう、おもしろかった」

「はい、ありがとうございます。他に借りてく本とかありますか？」

「今は無い、がまた今度くる」

この子は本居小鈴、鈴奈庵を経営している両親の手伝いと言う形で働いている少女

霊夢と話していた方が稗田阿求、人里にある大きな屋敷に住む稗田家の当主

二人と知り合ったのは一年前くらい

暇を解消するために霊香がススメた貸本屋、つまり鈴奈庵に初めて訪れた時に知り合った

最初は大きすぎる身長に二人ともおどおどしていたが、接するにつれ慣れたのか今のよう会話が出来るようになった

「また何時でも来てくださいね」

「……」コクッ

「あっ……♪」

微笑みながら言う小鈴の頭を優しく撫でる小夜

大抵の子ども等はこれで喜んでくれるため、この方法をよく使っている小夜。しかし

「む……ほら、兄さん！用事は済んだんだからいきましょー！」

ときどき、こうやって霊夢が不機嫌になることが多少ある

阿求と小鈴に手を振りながら引つ張る霊夢についていった

「えへへ♪小夜さんに撫でられちゃった」

「……いいな」

頬を少し赤く染めながら喜ぶ小鈴に対して阿求は羨ましそうに見ていた

6話

「・・・」ツーン
「・・・」

人里から離れ適当な道を歩く霊夢に付いていく
何故か鈴奈庵の後から不機嫌になってしまった。本当にどうして
しまったのだろうか

霊夢が不機嫌になりやすくなったのは博麗の巫女の修行を本格的
に始めてからだ

主に俺が霊夢以外の人里の人、小さな妖怪や妖精（性別全て女）と
話すときが多い

「・・・霊夢」

「なに、お兄さん」

「今度は、どうして怒ってる?」

「怒ってないもん」

「・・・はあ」

ここまで女という生き物が難しいと思った事はない。ミレニアム
のリップヴァーンやゾーリンはさほど難しい奴等ではなか・・・いや、
二人も色んな意味では面倒なやつらだった

「・・・」ギユ

「ひゃー!に、兄さん?／＼／＼」

「少し疲れた。あの木陰で休みたい、いいか?」

「う、うん」

霊夢の背後から腕を回し、抱きしめるような形で歩くのを止め休憩
したいと要求する

霊夢も顔が赤くなっているし無理をさせるのはよくないと判断し
た。ちなみに今の抱きしめは霊香に霊夢の機嫌を直す方法を聞いた
時に「優しく抱きしめてあげれば大丈夫だよ」と言われた為にやって
いる

効果は期待通りだ

木陰に腰を下ろし、その上に霊夢を座らせもう一度抱きしめる

「少し眠れ・・・修行の後は休まなければ、体が持たない」

「で、でも、まだ明るいと言っても妖怪が出ない訳じゃ」

「俺がいる。だから、ゆっくり休め」

「・・・うん。分かった」

霊夢は身を任せ、小夜の腕の中でゆっくりと瞼をとじ小さな寝息を立てて眠った

「・・・」スッ

小夜も目をとじ、霊夢を抱きしめたまま眠りにつく

風と木々を揺らす音だけが響くなか、木陰の下で眠る二人の姿は誰もが見ても微笑ましく思えるような景色だった

しかし、此処は幻想郷

人里と博麗神社を出た先は妖怪たちの領域

何が起こってもおかしくはない

ザッ・・・ザッ・・・ザッ・・・

「旨そうな臭いがしたから来てみれば獲物が寝てるとはな」

獣道から出てきたのは人の形をなさない、歪な姿をした異形の化物

妖怪だ

「しかし、こんな場所で昼寝とは命知らずなものだ。しかもよくみればこの女、スペルカードルールなんて余計なものを立案した博麗の巫

女じゃねえか・・・ちようどいい、 “一人だけ” のんきに寝てるのが悪いんだ」

妖怪は前足の爪を高く振り上げ、霊夢に狙いを定める

「殺されても文句はねえよな!!」

振り上げた前足を一気に降り下ろし、霊夢に無慈悲な爪が近づいていった

ザシユ!

「・・・え?」

真つ赤な鮮血が地面を紅に染め上げる

だが、その血は霊夢からのものではない

「・・・」スツ

妖怪の目の前に立つ深い緑の分厚いオーバーコートを身に纏う白髪の男性

その右手にはあらぬ方向へ曲がった妖怪の前足が握られており、血はその妖怪からのものだった

「な、なんだテメー!」

「・・・」グイツ!

ガツ!

「ぐえっ!!」

右手にもった前足を勢いよく引つ張り妖怪を自分の下へ来させ、顔面に蹴りを食らわせる

そしてそのまま曲がった脚を一気に伸ばし、折れた前足をもったまま蹴り飛ばした

ブチツ!!

勢いよくぶっ飛んだ妖怪。ふっ飛び引つ張られた圧に負けて折れた部分から前足が千切れた

「ぐおおお!!な、なんだ貴様!俺の邪魔をしやがって!!」

「邪魔?・・・お前は何をしたのか分かっているのか? 霊夢を殺そうとしただろう」

「ぐっ!この妖気、貴様も妖怪だな!ならなんで博麗の巫女に味方する!!そいつは俺たち妖怪の敵だぞ!」

「・・・霊夢はこの幻想郷の要、博麗大結界を生み出す博麗の巫女を受け継ぐ後継者。それを殺すとすればお前は幻想郷を敵にまわすぞ」

「知るか!人間の血肉と人間からの恐怖を糧とするのが妖怪だ!なのに人里の人間を喰らうなだ?!俺たち妖怪の生きる糧を堂々と奪った博麗の巫女を許せると思ってるのか!」

「ましてやスペルカードルールなんてお遊びみたいな決闘法まで生み出して、まだ俺たちを追い込む気だ!いずれ反発する妖怪はわんさか現れる!そんな博麗の巫女に味方をする貴様など妖怪の恥だ!この「博麗の犬」め!!!」

「・・・」

「ぜえぜえと妖怪は言いたい事を全て吐き出し、荒れる息を整えていた

「・・・言いたい事はそれだけか?」

「!!」

「下らん戯れ言も聞きあきた。どのみちお前は博麗の巫女を敵に回した・・・殺す事に変わりはない」

博麗の犬

「そう、今の俺はそう言われてもおかしくない。だからと言って今の俺に化け物の意地も見栄などありはしない

あるのは博麗に敵対するものをただ殺す

ヘルシングの女、インテグラルの言葉を借りるなら

『見敵必殺 (サーチ・アンド・デストロイ)』

「そう、見敵必殺 (サーチ・アンド・デストロイ) だ」

両拳を握りしめ、妖怪を冷めた眼差しで見つめる

その静かで、なお恐ろしい殺気を放つ彼の姿はかつてのミレニウム

に所属していたヴェアヴォルフ

“大尉”だった頃そのものだった

「戯れ言だと！貴様アアア!!」

もう片方の前足で“大尉”に襲いかかる妖怪

しかし、振るった爪は彼を切り裂く事もなく空を切る

確かにとられたはずの目の前の“大尉”は霧状になって姿を隠す

「な、なんだ！消えた!?まさか能力持ち・・・!」

シュ！ドシュ!!!

「ガッ!」

気づいた時には既に遅く、鋭い手刀が妖怪の脳を貫いた

「・・・終わるか」

ズルツと手を引き抜くと妖怪の頭から多量の血が流れ、妖怪の下は

赤黒い絨毯が出来上がった

「・・・」

死んだ事を確認し、霊夢の下へ戻って行った

木陰

「霊夢・・・起きろ」

「ん・・・んー、兄さんおはよう」

「ああ、もう夕方だ。帰るぞ」

「んー・・・兄さん、おんぶ」

「・・・」

まだ完全に起きていないせいか、幼い頃のような口調で両手を上げる霊夢

「……」スツ

「ん♪ありがとう……」

俺は背を低くし、霊夢を背負って歩きだす

「……霊夢」

「なに？」

「……俺の名は、なんだ」

「?……小夜兄さんでしょ？」

「……そうだったな」

「変な、兄さん……スー」

「……」

そうだ

俺はもう「大尉」ではない

俺の名は小夜

博麗小夜（はくれい さよ）

ミレニアムの「戦争犬」なのではない

霊夢と霊香を守るために戦う

「博麗の犬」なのだ

東方紅魔卿

7話

更に四年後

博麗神社

「……スー……スー……」

自室で寝息を立てながら眠っている小夜

そんな彼の部屋に向かって走る足音が響いてくる

「兄さん、おはよう！」

戸を開けて部屋に入ってきたのは霊夢だ

「……スー」

「……また座って寝てる」

少し呆れた感じで呟く霊夢

小夜は壁に背を付け、腕を組み胡座をかいたまま寝ている。服装も着れるようになってからオーバーコートのままでも日常茶飯事

小夜が1人の部屋に寝初めてからいつもこの体制で寝ているのだ
主な理由が何か起きた後、すぐ行動を起こせるからでもある

「……兄さん起きて」ゆさゆさ

「ん……霊夢か」

肩を揺すられ、目を覚ます小夜
ゆつくりと立ち上がり側に置いてある帽子を被る

「兄さん、また座って寝てたの？」

「・・・横になると、すぐに動けなくなる。朝食か？」

「うん、早く行く」

頷いて部屋を後に居間に向かう

居間

「おはよう小夜。よく寝れたか」

「・・・」コクッ

朝食を食卓に並べる霊香

メニユーは白米、味噌汁、焼き魚、漬け物とシンプルだ

「・・・多い、今日は来るのか」

「ああ、だが待たなくてもいいだろう。先に食べていよう」

三人が席につき、両手を合わせる

「いただきます」

箸を持ち、朝食を食べようとした瞬間

ドガッーーン!!

「・・・魔理沙が来たわね」

「・・・さらに妖気が2つ、迎えに行ってくる」

立ち上がり、外に向かつていった

もし、予想が当たってれば面倒な事になる

外

博麗神社前

「おい、魔理沙。最近思うが狙ってひいてるんじゃないだろうな？」

「おいおい、馬鹿言っちゃあいけないぜ。ルーミア姉”。狙ってなんかないぜ。”ちびルミ”を引かないようにルーミア姉を引いてるんだぜ」

「・・・ほう、言いたい事は分かった。一度お前にお灸をすえる必要があるな」

妖気を放ち、片手に黒い剣を作り出すルーミア

魔理沙も懐から八角の形をしたミニ八卦炉を取り出し、迎撃つ体勢にはいる

「いくぜ！」

「こい！小娘！！」

ガツンツ×2
！！

「いでえ！！」

「こ、この拳骨の痛さ・・・小夜、お前か」

「・・・面倒をかけるな。朝食は出来てる、早くこい」

勝負をしようとする魔理沙とルーミア姉に拳骨をくらわせ、とりあえず庭にクレーターができるのを阻止でき掃除量を増やす事は回避出来た

「お兄ちゃん♪久しぶりなのだー」

そういつて足に抱きついてくる小さな子供

「久しぶりだな、ルーミア」

そうこの子供の名はルーミア

たんこぶを抑えているルーミア姉と全く同じ名前の子供

その正体はルーミア姉の強い妖気から生まれたもう一人のルーミアだ

かつて昔、強い妖気を持っていたルーミア姉の種族は人食い妖怪、人間を食べなければ生きていけない種族だった

しかし、霊夢と霊香との出逢いで人間を喰らう事を止めたがそれはルーミア姉自身を滅ぼしかねない行為だ

それを知った妖怪の賢者、八雲紫が提案したのが別の器にルーミアの多量の妖気を分けること

それによってルーミア姉の力は中級妖怪ほどに弱体化してしまうが唯一助かる方法だった

常識では馬鹿げている方法だが、八雲紫が持つ能力「境界を操る程度の能力」によって存在の境界を操り、器として生み出されたルーミアを人食い妖怪という存在に変えルーミア姉の妖気を分け与えて今のように存在出来ている

後は霊香の博麗の封印術で妖気を暴走しないように処置した

同じ名前が二人いるため、俺はルーミアとルーミア姉と分けているちなみに霊夢は俺と同じ

知人の霊香と霖之助はちびルミとルーミア

魔理沙はちびルミとルーミア姉だ

今はルーミア姉の子供として一緒に暮らしているらしい

足にルーミアが引っ付いたまま、俺は居間に戻り魔理沙とルーミア姉はたんこぶを抑えながらついてきた

朝食後

「いっちそうさまだぜー」

「いっちそうさまなのだー」

「いっちそうさま」

「……ちそうさま」

「はい、お粗末さま」

朝食を終えて霊香の手伝いをしに台所に立つ

皿を洗い、霊夢が水を拭きとり、霊香がしまう流れで行われている

「そういえば霊香、博麗の巫女を引退したんだってな」

突然、居間に居たルーミア姉が霊香に話しかける

「ああ、博麗の巫女の名は霊夢が引き継いだ。だが、私と同じ事を霊夢もやるだけで私自身やることは変わらないさ」

片付けを終えてお茶を入れながら霊香は話す

そう、今年から正式に霊夢は博麗の巫女の名を霊香から引き継いだ
今後の異変などの解決や妖怪退治の依頼なども霊夢が引き受ける
事になるが、依頼が重なったり霊夢には荷が重い依頼は霊香が受けた
りするようだ

「それに霊夢には心強いお守りがついてるからな」

居間の方に視線を向け、ルーミアにお手玉を教えている小夜を見る

「で、結局分かったのか？あいつはやっぱり外来妖怪なのか？」

「……だと思う」

「思う？あのスキマ妖怪が調べたんだろ？正体も分かったんじゃないのか」

「紫は確かにただの外来妖怪だと私に話したが・・・どうしても紫が言ったあれは嘘だと思っんだ」

「あのスキマ妖怪があんたに嘘を言ったっていうの？」

「・・・あいつの事を話そうとした時、紫は僅かに躊躇っていた。なにかを私に隠しているのは確かだ。だが、深く聞くつもりはない、今のあいつは私の子で霊夢や魔理沙、ちびルミの兄なのは変わりはないさ」

お茶が入った湯飲みをお盆に乗せて、居間に運ぶ霊香

「・・・兄に変わりないっか」

そんな事を呟いた後にルーミアも居間に戻って行った

??

「準備は出来ているかしら？」

数本の蠟燭の明かりだけが暗く広い部屋の中を灯し、中心にある椅子に座る蝙蝠のような羽を背中から生やした少女

「ええ、後は貴女の命令しだいいつでも行えるわ」

その少女の回りに立つものたち

「ふふふ、いいわ。それじゃあ・・・」

少女は立ち上がり暗闇の夜に浮かぶ月に手を掲げ宣言した

「明日、幻想卿を我が物にするわ」

8話

次の日

人里

「・・・鈴奈庵を先に回って、酒から買うか」

霊香からおつかいのメモを渡され人里に買い出しへ来た

先に新しい本が入ってないか確認してから、買いにいこうと計画している

「・・・あれは」

鈴奈庵にたどり着くと三人の人影が見えた

・・・いつも思うが鈴奈庵の店前で話をしている場面をよく見るきがする

「あ、小夜さん」

先に声を掛けてきたのは小鈴

その声に反応して残りの二人もこちらに向いてきた

「こんにちは小夜さん」

「やあ、小夜くん」

「阿求、慧音・・・こんにちは」

阿求ともう一人は上白沢慧音

人里にある寺子屋の教師をしている半人半妖

ルーミアも彼女の寺子屋に通っている

「ルーミアが、世話になってる」

「ああ、ルーミアの兄変わりをしていると聞いたよ。少し頭はあれだが元気に学んでいるよ」

「別に・・・ルーミアが呼んでるだけだ」

「だが、あの子がお前の事を話す時はとても楽しそうだったぞ。呼んでるだけとは言えかなりなつかれてるんじゃないか？」

「・・・」

血の繋がりがなくとも、霊夢以外の魔理沙やルーミアは化物である俺を兄のように慕うが特別そう呼ばせるような事は今までしたことなどない

ただ、歳が少し離れているのと見た目がこれだからではないのかと思う

まあ、そんな事を考えても仕方がない。とりあえず新しい本がないか探して頼まれ事も終わらせねば

そう思い、小鈴に話を振ろうとした・・・その時だ

ゾクッ

「・・・ッ」バツ！

何かを感じとり、その気配を感じた方向に視線を向ける

「小夜？どうしたんだ？」

「ん？・・・っ、慧音さん、あれ」

小夜が向く方向を見ていた小鈴が何かに気づき、指を差して慧音に言う

その方角から赤い霧のようなものが徐々に広がるように現れたのだ

「なんだ、あの赤い霧は？あの方角は霧の湖がある方角だが」

「・・・」

小鈴の指摘に回りも気づきはじめザワつくなか小夜、彼だけは何かを感じとった

それはかつて幻想卿に来る前

ミレニウムに所属し第二次ゼーレヴェエ作戦で戦ったあの女、セラ・ヴィクトリアと同じような存在の気配を

バツ！

「あ！き、小夜さん！」

「小夜くん！何処にいくんだ！」

後から聞こえる声をも無視して、人里を出て赤い霧が現れている霧の湖の方向へ走った

「間違いない・・・即席でも紛い物でもない、純粹の吸血鬼の気配だった」

ミレニウムに属していた兵達はみな、吸血鬼製造研究の責任者であつたドクの手によって人工的に作られた吸血鬼

グールとは違い意識もあり独自で思考出来るが純粹とは呼べない

紛い物

そして、先ほど感じた気配は第二次ゼーレヴェ作戦で出会った

ヘルシング機関の鬼札（ジョーカー）

アーカード

そのアーカードの眷属にして真の吸血鬼に覚醒した女吸血鬼

セラス・ヴィクトリア

奴等と同じ、純粋な吸血鬼の気配だ

かつて、この幻想卿に出現した吸血鬼たちが起こした吸血鬼異変で奴等は幻想卿を支配しようとする戦争を仕掛けたという事例がある

もし、この妙な赤い霧を生み出している吸血鬼が幻想卿の支配を目的として行っているなら止める必要がある

霊夢が考案したスペルカードルールにも従わない輩なら俺が排除する

「……霧の湖。ここじゃない、もっと奥か」

湖にたどり着いた小夜

しかし、元凶はこの湖ではない。その先で最も赤い霧が濃く現れている方角へ歩を進めていく

「つ……結界か、存在を隠すため……当たりか」

霧を抜けるとそこには大きな洋館が建っていた

全体が赤く塗装された趣味の悪い館だ

「……」

赤い洋館に近づくとつれ、門の前に三人の影が見えてきた

そこに建っていたのは二人の女性

そしてその二人の前に立つ小さな少女こそが

「ようこそヴェアヴォルフ（人狼）、我が館へ」

吸血鬼だ

その頃

博麗神社

「兄さんが出掛けてから嫌な予感がしたけど・・・これはもう異変ね」

上を見上げ、赤い霧に覆われた空を見る霊夢

「魔理沙や兄さんも、気づいてもう動いてるはずよね。私も行かなく
ちや」

「気を付けていけよ霊夢。私も少ししたら異変解決に動く」

「博麗の巫女として母さんの手助けなしで頑張るわ。じゃあ、行って
くる」

博麗神社を後にした霊夢

正式に博麗の巫女を受け継いでから初めての異変解決に彼女は挑む

⑨話

洋館前

「・・・吸血鬼か」

「ええ、そうよ。私は吸血鬼、そしてこの霧を生み出すように仕向けた張本人よヴェアヴォルフ」

鬼 騙すでもなく、自らこの異変を起こした張本人だと主張した女吸血鬼

「まずは名乗るのが先よね。まず、後にいるこの二人は私の従者たちよ」

「初めまして、紅魔館のメイド長を勤めております十六夜咲夜と申します」

「紅魔館の門番、紅美鈴です」

後に控える従者たちが名乗った後、吸血鬼も名を名乗った

「そして私はこの紅魔館の主であり、ドラキュラ公 ツエペシユの子孫、レミリア・スカーレットよ」

・・・なに？今、この吸血鬼はなんと言った？

「ツエペシユ・・・だど？」

「そうよ。ヴェアヴォルフである貴方も聞いた事ぐらいはあるでしょっ」

「・・・」

ヴラド・ツェペシュ

かつて15世紀のワラキア公国の君主でありまたの名を

串刺し公

そう、ヴラド・ツェペシュとは串刺し公と恐れられた最強の吸血鬼
ヘルシングの鬼札、アーカードの事だ

しかし、長年ミレニアムは奴の事を調べてきたが奴には子孫が居た
とは聞いたこともない

それに俺を感じ取った吸血鬼の気配、確かに目の前にいるこの女も
そうだがもう一つ、アーカードに一番近く強大な気配がもう一ついた
はずだ

「・・・お前が串刺し公の娘？馬鹿げた事をほざくな、奴に娘が居たな
ど聞いた事もない」

「？その口振り、まるで私のお父様と認識があるかのようね」

「・・・俺は奴に会い、奴の眷属とも戦った。俺は敗北した、そしてミ
レニアムは奴を貴様の言うツェペシュを殺した」

「・・・ツ！」ギリッ！

俺の言葉に吸血鬼は苦虫を噛んだような強ばった表情になった

正解には結果はどうなったか俺は知らないが、少佐が長年の歳月を
かけて最強の吸血鬼であるアーカードを殺す手段を得た

シユレディングア少尉、対アーカードの為に作られたミレニアムの切り札

「何処にでもいて何処にもいない」存在である少尉をアーカードに取り込ませる事で何処にもいない存在にする。それが少佐が編み出したアーカードを殺す術

成功か否かは定かではないが、アーカードの『拘束制御術式 零号』を解放し自分の持っていた数百万もの命を総て解放する『死の河』を行った時点でミレニアムの勝ちが決まっていた

「戯れ言を抜かすな！ミレニアムだど!?お父様が貴様らのような奴等に負けるはずがない！貴様の言う殺したツエペシユなどどうせ偽物だ！」

「・・・アーカード」

「なに？」

「ヘルシング家の人間に使役され従う、俺が戦ったツエペシユのもう一つの名だ。・・・奴の子だと言い張りながら何も知らないのか、貴様の言うツエペシユの方が偽物なんじゃないか？」

「・・・そうか。よくわかった」

吸血鬼から溢れる強い妖力、これほどならセラス・ヴィクトリアと同等か

どうやら怒らせたようだ

「咲夜、美鈴、手出し無用よ。私自らやるわ」

「しかし、お嬢さ（スツ）ッ！咲夜さん！」

「・・・お嬢様の命よ、私達は邪魔者が現れたらそつちに対処すればいいわ」ボソッ

「・・・」コクッ

小声で話し合う従者たち

小夜の前に出たレミリアの目には、父を侮辱した目の前の人狼を殺さんとする怒気で溢れていた

「ふん、聞き分けがよければ飼ってやろうとも思ったがやめだ。お父様を侮辱したお前は絶対に許さない」

「なら、無駄だ。すでに俺は・・・博麗の犬だからな」

バツ！

両腰にあるホルダーからモーゼルM712を取り出す

バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！

銃口をレミリアに向けて容赦なく引き金を引く

しかし問題の弾は両銃に装填されているマガジン一個に十発、合わせて二十発しか無い

「ヴェアヴォルフが玩具なんて、犬にはボールの方がお似合いよ」

撃たれた4発の弾丸をレミリアは簡単に避け、彼女は弾幕で反撃を始める

彼女が放った弾幕は弾幕勝負などのように派手さを決めるような強さではない、本格的に倒そうとする威力である

「・・・」バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！

しかし、小夜も避けながらまた引き金を引きレミリアを狙い撃つ
しかし、彼は銃で狙い撃つばかりで得意である接近戦を一切行おう
としない

残り弾数 12発

「ヴェアヴォルフの癖に遠距離ばかり。臆病なのかしら、ね！」

レミリアは弾幕を放ちながら小夜に急接近し、鋭い爪を小夜の顔に
振るう、が

「・・・短気め」

スツ！

「っ！」

振るわれたレミリアの腕を飛びはねながらで避け、一回転しながら
彼女の頭に強烈な蹴りをくらわせた

レミリアの頭は血が吹き出し、そのまま地面に叩きつけられる

「(よし、ここからだ)・・・さあ、お前たちの主は消した。霧を止めろ」

レミリアの死体を背に傍観していた二人に視線を向ける小夜
そんな小夜に咲夜は賞賛する

「お見事です。吸血鬼の守護として飼われるヴェアヴォルフのその力
はさすがとしか言いようがありません、しかし、それだけですか？

“

小夜の背後にあるレミリアの死体から煙が現れ死体はゆっくりと体を起こす

「頭を潰した？脳を弾丸で撃ち抜いた？心の臓を貫いた？その程度でお嬢様が死ぬと」

閉じた瞼を開き、恍惚な笑みを見せながら真っ赤に染まった瞳で背を向けている小夜を見る

「お嬢様こそ、我ら従者が忠義を尽くして仕えるに値する、ただ一人の愛しき主君なのです」

「・・・ツ」カチャ!!

ドスッ!

気づいた時には既に遅く、レミリアの手刀が小夜の腹に突き刺さる

「・・・ぐっ」ドサツ

腕を抜いた瞬間、小夜は倒れ伏した

レミリアは爪に付いた血を舐めとった後、ペツと地面に舐めた血を吐き出す

「この程度？番犬にも使えないわね」

倒れた小夜の髪を握り、顔を上げさせる

「簡単には殺さないわ。番犬としては使えないけど貴方にはあの子の

人形として生かしてあげるわ、せいぜい泣き叫びながら死ぬといいわ・・・まつ、聞こえてないわよね」

手を放し、咲夜たちの方へ歩いていく

「お見事でしたお嬢様。汚れたお手をお拭きいたします」

「ありがとう咲夜。美鈴」

「はいお嬢様」

「まだ、生かしてあるわ。アレをあの子の部屋に運びなさい、その後はいつも通りに門番の仕事を続けなさい」

「・・・分かりました」

美鈴は倒れた小夜を背負い、レミリアと咲夜と共に紅魔館に入ってしまった

草陰

「やばいやばい！やばいよ大ちゃん！おおかみ兄ちゃんがやられちゃった!!」

草影から出てきて声をあげる青い服に氷の様な羽を持った少女
その後から羽を生やした緑髪の少女も現れる

彼女たちは霧の湖を縄張りにして遊ぶ妖精たち
青い方がチルノ、緑髪の方が大妖精こと大ちゃん

小夜とは何度か交流があり、二人も小夜を兄のように呼んでいる

「ど、どうしようチルノちゃん?」

「んー、ここはさいきょうのあたいが助けたいけどてきはおおい、多税に無税だね」

「勢だと思うよ。でも、確かにわたしたちじゃあ、お兄さんは助けられない・・・チルノちゃん、霊夢さんかルーミアのお姉さんを探そうよ」

「おお!その手があった!てきがおおいならこつちもふやせばいいんだ。よし!さっそく霊夢とルーミア姉をさがしにいくぞ!」

「ち、チルノちゃん、霊夢さんたちならきつと博麗神社だよ!まつ、待ってよー!」

小夜のピンチを救うため、二人は霊夢とルーミア姉を探しにその場を離れた

その頃

紅魔館

地下階段

蠟燭の微弱な火が暗い地下への階段を僅かに照らす中、その階段を
ゆつくりと降りていく美鈴

その背には未だに起きない小夜がいた

階段は終わり、重厚な鉄の扉の前で一度止まる美鈴

息を整えながら決心した表情になり、鉄の扉を開けて小夜を壁に寄
りかかるようにゆつくりと下ろす

「……やようならです」

小夜に別れの言葉を言い残し、部屋を後にした

部屋の中も数本の蠟燭だけで灯しているだけで薄暗く、天蓋付きの
大きなベッドが一つだけという殺風景な部屋だ

「……血の臭い、だれ？」

ベッドから聞こえてくる幼い少女の声

悪魔の妹が目を覚ました

10話

その頃

「ふう、人里の方も随分と慌ただしかったわね」

人里を訪れ、異変に関する情報を集めようとしていた霊夢

しかし、人里では赤い霧が出現してから体調を崩す者が続出しており人里の守護者である慧音は現在の状況の対応と対策の思案で忙しいようだ

しかも、この赤い霧が体調を崩す原因と知ってから外を出歩く者は誰もいない為に特に異変に関わる情報は得られなかった

「あとは、兄さんの後を追ってみようかしら」

慧音の下を去り、次の場所に行こうとしたとき慧音が霊夢にある情報を話した

『実は霧が現れる前まで小夜くんが居たんだが、霧が現れた瞬間、人里から出て霧の湖のある方角へ走って行ったんだ・・・きつと、何かあると思うんだ。君の兄さんの後を追いかけてみるといいかもしれない』

「・・・霧の湖ならあのおバカ妖精と大ちゃんが居るわよね。他に行く当てはないし行ってみようかしら」

次の行き先を決め、霊夢は霧によって真っ赤に染まった空を飛んでいく

（兄さんは一体なんで霧を見た瞬間、霧の湖に向かったのかしら?・・・なんだか嫌な予感がするわ）

自分の勘はよく当たる、先代博麗の巫女であった霊香さえも驚くほどの勘の良さを霊夢は持っている

それは良い事、悪い事どちらの意味でもよく当たってしまう
それをよく理解している霊夢は速度を上げて、霧の湖に向かう

しかし、物事は簡単には進まないのが世の常、幻想郷でも変わらな
い

ヒュヒュヒュン!!

「弾幕!?!」

突如、前方から放たれる無数の光

しかし光の飛んでくる速さはそこまででもなく軽々と避ける霊夢
光が飛んできた方向に視線を向けると多数の妖精たちが霊夢の方
に飛んできた

普段の妖精たちは人間に対して悪戯などしかしない。しかし、今回
の彼らは普段より攻撃的になっている

「邪魔するなら容赦しないわよ」

霊夢も弾幕を撃って応戦する

妖精一人一人の力はさほど強くはない、一番面倒なのは数の圧倒で
ある

「もう、こっちは急いでんのに「霊夢!」ん?この声は魔理沙、に後ろ
の二人は」

箒に跨り、飛んでやってきたのは魔理沙

その後ろからは二人の見慣れた妖精の姿もあった

「なんでチルノと大ちゃんが一緒にいるのよ魔理沙？」

「それは後だ。今は目の前のこいつらを片付けるぞ！」

「・・・分かったわ」

「おう！さいきょうのあたいがぜんぶたおす！」

「あんたはどいてなさい、流れ弾に当たってもしらないわよ？」

「なにを！さいきょうのあたいをなめるな!!」

加勢に加わった魔理沙とチルノ。大ちゃんは終わるまで後で待機していた

数分後

「うう〜」

「大丈夫チルノちゃん？」

「わりいチルノ。まさか霊夢じゃなくて私の流れ弾幕に当たるとは思わなかったぜ」

何とか妖精の大群を退いた一向

チルノは霊夢の言ったとおり、仲間の流れ弾にあたり墜落。頭から地面に強く打ち付け両手でたんこぶを押さえていた

「で？なんで魔理沙はこの二人と一緒にいるのよ？」

「ああ、そうだ！霊夢、実は小夜の兄ちゃんが」

少女説明中

「ちよ、ちよつと、それホントなの？」

霊夢はありえないという表情でいた

聞かされたのは霧の湖でチルノたちが見た小夜の戦い、そして戦いに敗れて洋館の中へ連れていかれたという話だ

無論、霊夢もその話を簡単には信じられなかった

義理とはいえ、妹として自分の兄である小夜の実力はこの中では一番自分がよく知っているのだから

53

「ほんとだよ！おおかみの兄ちゃんがなんかチビでなまいきなやつにやられちゃって、でー、なんかつれさられたんだよ！」

「本当なんです霊夢さん！信じてください！」

「チルノはともかく大ちゃんもこう言って、霊夢とルーミア姉を探してたんだ。私もあの小夜の兄ちゃんがやられたなんて考えたくもなかったけどここまで必死に言われちゃうとなあ・・・」

チルノ、大ちゃん、魔理沙の話聞き少しだけ沈黙する霊夢

しばらくしてから口を開いた

「まだ完全に信じたわけじゃないけど、その洋館のところに案内しな

さいチルノ」

「おおーまかせろー！」

チルノと大ちゃんの案内のもと、霧の湖にある洋館に向かう霊夢と魔理沙

紅魔館
門前

「・・・」

門の前に立ち、見張りをしている私、紅美鈴

しかし、今の私の脳裏には主であるレミリアお嬢様と戦った人狼の事を考えていました

（あの人の戦い方は妙に変でしたね。人狼は道具を使った戦いよりも体術での接近戦が得意の筈・・・しかも彼は獣化もせずにお嬢様と戦った、一方的にこちらが有利にしかならない。まるで手を抜いていたみ

たい・・・でも、どうして?)

少なからず、あの人狼は吸血鬼を熟知していたならば、生半可な戦いで勝てる確率など無いにも等しいと分かっているもおかしくないのに彼は本気で挑まなかった油断していたと考えれば簡単に説明はつくし皆納得する。しかし、私の中では何かが違うと考えてしまうなら、彼はなんの目的があつてここに・・・

「ん?目的?」

私はもう一度あの戦いで彼の話しした言葉を思い出す
そして一つの言葉が蘇った。それはお嬢様の攻撃を避け反撃した後に私と咲夜さんに言った言葉

『・・・さあ、お前たちの主は消した。霧を止める』

「・・・ま、まごか」

私は一つの仮説を立てた

彼の目的はお嬢様を殺すのではなく、霧を止める事

そしてあの時お嬢様は自分がこの霧を生み出すように仕向けたと言っている、だからあの時、お嬢様を倒しても私と咲夜さんに霧を止めるように要求した

そしてそうしなかった私たちをみて私たちでは止めることはできないと判断、なら止められる者は外ではなく紅魔館の中にあると判断できる

そしてわざとお嬢様に負けて中に・・・

「ま、まごか!」

私は門を離れ、紅魔館の方へ走っていく

考えすぎかもしれない。だがもしあの仮説が成立していれば彼は無駄な戦闘を避けて中に侵入できる

万が一と言うこともある、せめて咲夜さんにだけでも！

「咲夜さん！咲夜さん！」

玄関から入り広いホールで咲夜さんと呼ぶ

「うるさいわよ美鈴。何事かしら？」

ホールの階段から降りてきたレミリアと咲夜

「お嬢様！私たちは騙されたんですあの人狼に！」

「落ち着きなさい美鈴、どうしたの？」

「あの人狼の狙いは霧を止めることです！彼はわざとお嬢様に「邪魔するぜえ!!」ッ！」

ドガンツ!!

玄関の扉が勢いよくぶつ飛び、砂煙が舞う

「今度は何よ？」

「邪魔するわよ」

入口から入ってきたのは赤と白の服に身を包む巫女

そして箒を片手に黒と白の服と大きな帽子を被る魔法使い

霊夢と魔理沙であった

「美鈴、あなたが門を離れるから侵入者が入って来たじゃない」

「・・・申し訳ありません」

「まあ、いいわ。さっきの弱い人狼よりは面白そうな人間がやって来たし、暇にはならなそうね。咲夜、美鈴」

レミリアが二人の名を呼ぶと二人はレミリアの前に出て臨戦態勢に入った

「そのアンタ、今人狼とか言ってたわよね？」

「あなたは？」

「博麗霊夢、質問に答えなさいその人狼をどうしたの？」

「博麗の巫女ね、私はレミリア・スカーレット、よろしく。貴方が言ってる人狼ってもしかして凶体がでかいだけの犬のこと？」

「まあ確かにでかいから多分それだ。その兄ちゃんはどうしたんだって聞いてんだぜ？」

レミリアをにらむ霊夢の代わりに魔理沙がもう一度聞く、そしてレミリアは微笑みながら答えた

「あの犬だったら私が倒してやったわ、それと生かしてはあげたわ。最も、今頃は死んでるかもしれないけど」

「・・・そう、ならやることは決まったわ。あんたたちを早急に潰して兄さんを助けるわ。行くわよ魔理沙」

「おう！」

「倒す？なめられたものね犬だけでなく人間ごときにも」

それぞれの獲物を持ち、一触即発の中、一つの声がホールに響いた

「レミイ！」

「？」

霊夢と魔理沙は聞き覚えのない声のする方に視線を向けるとそこにはぐったりと疲れ切っている厚着の女性とそれを支えるように立つ悪魔のような羽をはやした赤髪の少女二人が居た

「パチエー！こあにここあも何があつたの！」

「ごめんなさい、妹様が逃げたわ」

「あの子が！」

ドガンツ！！

突如、ホールの床が壊れそこから一つの影が下から飛び出し、霊夢たちの前に立つ

「に、兄さん！」

「ん？・・・霊夢、魔理沙」

現れたのはやられていたと思われていた小夜本人だった

「おお！小夜の兄ちゃんやっぱり無事だったんだな！・・・で、肩に乗せてるの誰だ？」

魔理沙の指摘した小夜の肩には魔理沙と同じ金髪で背中に宝石のような羽を持つ少女が乗っていた

「どういうこと・・・なんであなたそいつといるのよ」

小夜の肩にいる少女を見て声を荒げるレミリア

「フラン!!」

少女の名を呼ぶレミリア

少女も自分の名を呼ぶレミリアに対して口を開く

「・・・お姉さま」

11話

紅魔館ホールでの出来事から数時間前

紅魔館 地下室

「……さようならです」

その言葉を最後に部屋からでた門番
ゆっくりと目を開け周りを見渡す

「……侵入は成功、上手くいったか」

体を起こし、落ちた帽子をもう一度被る

「さて、霧を生み出している奴を探す必要があるが……」スツ

自身の腹部に手を当てる

先程の吸血鬼の攻撃で服は破れ、血はなんとか止まるまで回復したがまだ完全に塞がってはいない

また、無理に動けば傷口が開くかもしれない

「……血の臭い、だれ？」

「ツ……」

すさまじい気配を感じ、後を振り向くとそこには先程まで寝ていたのか、眠そうな目をこすってこちらを見る子供がいた

そしてその子供から感じとった気配は人里で感じた吸血鬼の中でもっとも強い気配と似ていた

「あなた、だれ？」

「……小夜、博麗小夜だ。お前は何者だ？」

「わたしはフランドール・スカーレット。長いからフランでいいよ」

「……」コクツ

無言でうなづく

スカーレットつとと言うことはあのレミリアという吸血鬼の姉妹にあたるか

「ねえ、小夜はなんで此所にいるの？」

「……連れてこられた」

「ふうん……そっか、あいつが寄越した新しい人形なんだね」

あいつ？人形？

この吸血鬼は何を言っているのか分からないが、彼女から鋭い殺意に似たなにかが滲み出ている

嫌な予感しかない

「ねえ、私と遊んでくれない？」

「……」

無邪気に微笑みながら聞いてくるが、その微笑みは心さえ凍えてしまいうるやうに冷たく儂いものの様に感じる

アーカードに近いと思ったが、近いのは奴の放つ狂気じみた気配だけ。それ以外はただの無邪気で何も知らない、見た目通りの子供のよ

うだ

あのレミリアとは正反対な性格だ

「その前にいくつか質問してからでもいいか？」

「いいよ」

「フラン、と言ったな。あいつとはレミリアという吸血鬼の事か？」

「そうだよ、あいつはわたしのお姉さまなの」

「あいつと言ってから、お前の殺気が強く伝わってくるが・・・姉はお前に何をしたんだ」

「・・・」

フランはゆっくりとベッドに戻り、座ってからまた話した

「わたしね、閉じ込められてたの。495年もずっとこの暗い地下の部屋に、わたしの力は危険だからって」

「・・・」

「わたし、ずっとひとりぼっちなんだ・・・だから、ずっと寂しかったの。あいつは時々わたしに遊ぶための人形を連れてくるけど全部怖がってすぐに壊れるからつまらないの。でも小夜は違う、いつもの人形と違うから、きつとわたしを楽しませてくれると思うの。ねえ、だから遊んで小夜」

「・・・」

最後まで黙って聞いていた小夜はしばらくしてから、右手をフランに向け、クイツクイツと来いと促す

「ありがとう小夜・・・じゃあ」

ベッドから立ち上がり、不気味な微笑みを浮かべながら彼女は小夜にカタコトになりながら喋る

「カンタンニコワレナイデネ?」

急上昇し、小夜に向けて赤い弾幕を放つフラン

レミリアと同じで遊びではない、殺す気で放たれた弾幕は壁や床に小さな穴をいくつも作り上げる

「・・・」

フランの弾幕を走ったり、時には壁を蹴ってジャンプしながら避け、接近戦に持ち込もうとする小夜

しかし、フランの弾幕がそれを許そうとはしない

弾幕戦において接近戦はよほどの実力がある者でなくては挑むのは難しい

接近戦を得意とする者にとって、弾幕勝負の攻略法は

相手に速く接近する、縮地法または瞬道術をもちいるか

逆に相手が接近しなければ使えない技を使わせ、こちらにこさせるか、だ

「ふふふ、流石だねじゃあこれはどうかな?」

「禁忌『フォーオブアカインド』」

スペルカードを使用したフラン

その直後、フランが三人に増え4対1という状況を作り出した

「やらん」

「『禁忌』『レーヴァテイン』『』」

四人が同じスペルカードを使用し、彼女たちが持つ黒い杖が燃え盛る炎の大剣に変わる

「さあ、どうする?」

「逃げ場もない」

「誰も助けに来ないけど」

「マダ、コワレナイデネ?」

不気味な微笑みを見せながらそれぞれの言葉を話すフランたち

逃げ場もない、誰も助けに来ない

普通なら誰もが絶望し諦めてしまってもおかしくない状況を彼は

「・・・いいだろう」

「『?』『』」

小夜は帽子と上着のオーバーコートを脱ぎ捨て顔を上げるとある変化が彼に起きていた

彼の顔半分が白い獣毛に覆われ、顔の骨格が徐々に狼のようになっていく

「俺の本気を見せてやるフランドール・スカーレット・・・耐え抜いてみせろよ」

フツ！

「わぶっ」

突然の白い煙に驚き、四人のフランは目をつぶる

そして煙が晴れ、そこでフランたちはゆっくりと目をあける

「え？」

本物のフランが目にしたのは自分を凝視する真っ赤な瞳

そこにいたのは巨大な白狼の姿だ

「あは♪おつきな狼さんだ！」

スペルで生み出された偽者のフランが巨大な白狼となった小夜に向かっていき、レーヴァテインを振るう

バシユ！

「・・・」

「が・・・う」

しかし、レーヴァテインは白狼を斬ることは出来ず逆にその巨大な牙に仕留められてしまった

ババシユ!!

「え？・・・え？」

そして今度はもう二人が巨大な両爪で瞬く間に切り裂かれ、一気に三人は消えてしまった

「ひ、あつ、う・・・」

あれだけの巨体の筈なのに今の自分が全く追い付いていないのだ
その異常な速さに捉えきれず、震えてなにも出来ずにいた

「・・・」

「ツ！うわあ!!」

そして、自分の背後から感じる気配にフランはレーヴァテインを払うように振るう

ドンッ

「うつ・・・」

「・・・」ガシッ

首後を手刀で叩き、気絶するフラン

倒れそうな所を小夜が支えるように抱える

一分後

「・・・ん、あれ？」

「・・・起きたか」

「わたし、負けちゃったんだ」

ベッドに横たわっていたフランは体を起こし、背を向け床に座る上半身裸の小夜を見る

「フラン・・・お前は姉が嫌いか？」

「・・・嫌いじゃない、お姉さまは私のためにこうするしかないと思ってる。でも、もうここは嫌だよ。外に出たいよう・・・うう」

「そうか・・・なら、出るか？」

「え？」

オーバーコートを羽織り、フランに出たいか聞きだす

「俺はもともと、お前の姉がやっている騒動を止めるために来た。連れてこられたのはこの紅魔館で霧を生み出している奴を見つけたためにだ・・・ついだ、あの姉にお前の望みを聞き入れるように説得してやる・・・来るか？」

「どうして？なんで、私のためにそこまでしてくれるの？」

「別にお前の為じゃない。ただ、俺にも妹がいる、血も繋がってなく化け物である筈の俺を幼い頃からずっと兄と呼び慕ってくれた・・・簡単な話だ、実の妹の事も信じてやれない奴が姉を名乗るのが少々気に入らないだけだ・・・昔の俺ならそんな事も気にしなかっただろうな」

最後の所は小声で呟き、フランは最後の所を聞くことは出来なかった

「それでどうする、来るか？来ないか？」

「・・・行きたい、もうここは嫌だ。私は外に出たい！」

「・・・よし。所でフラン、この館には魔法使いとか結界とかを得意とするやつはいるか？」

「魔法使い・・・パチュリーっていう魔法使いがいるよ、いつも地下にある図書館に引きこもってるよ」

「よし、まずはそいつの所か」

霧を生み出している者は分かった

しかもこの部屋と同じで図書館は地下にある、地下階段で降りてた時、この部屋につく前にもう一つの大きな扉を見掛けた

「ちよつといいかしら？」

「ッ、もうバレたか」

出入口の扉が開き、見知らぬ三人の女性が現れた

「あ、パチエ」

「なに？」

目の前に立つ、もやしっぽそうな奴がパチユリーという魔法使いのようだ

「なにか失礼なこと考えなかった？」

「・・・」フルフル

「・・・まあいいわ。それより、さっきのレミイの説得、私達も手伝ってあげるわ」

「レミイ？・・・レミリアか、何故お前が俺に協力する？お前はレミリアに言われて霧を生み出した本人だろ？」

「私とレミイは親友だからレミイの事はよく知っているわ。あの子は自分の家族を大切にすぎる傾向があるのよ、しかもプライドも高いから自分の言うことが正しいと思いがちなの・・・まあ早い話、フランの事でも親友である私の反対の言葉にも聞かなかつたのよ。もう紅魔館の住人でレミイを説得出来る者はいない、だから貴方を頼ろうと思ったのよ」

「いいのか、親友を傷つけるかもしれないぞ」

「あの子も吸血鬼よ。大抵のことじゃ傷ついたりしないわよ」

「・・・その後の二人、お前らはどうなんだ？」

パチユリーの後ろに控える、髪と一部分以外はほとんどにている悪

魔のような二人に問う

「私達は使い魔ですから、契約を結んでいるパチュリー様に従います。私も妹さまがお嬢様とまた一緒に居られる姿を見たいと思っておりますから。あ、あと私は小悪魔で皆さんからこあと呼ばれています」

「私はここあです。こあお姉さまとは双子で私は妹の方です」

二人は使い魔で主であるパチュリーに従うだけのようだ

「で、どうするんだ？」

「私は先に霧の魔方阵を解いてから上に行つて妹さまが逃げ出したつて伝えてくるわ。貴方は10分経ったら妹さまと一緒に上に来なさい。その後は貴方たちの自由よ、じゃあ先に行つて解いてくるわ」

そう言つて部屋を出るパチュリーたち

俺は銃の弾をもう一度確認する、両銃のマガジンには弾は六発ずつ計十二発残っている

「……ねえ？」

「どうした？」

「……っ」ギユ

「？」

後ろからいきなり抱きつくフラン

小夜はどうしたのだろうかと思ひながら背中にくつつくフランを見る

「少しだけ・・・こうしていい？」

「・・・好きなだけしろ。時間になったら教えてやる」

「ありがとう」

そのまま10分経つまで背中に張り付いていた

そして俺はフランを肩にのせ、地下階段を登っている途中フランが「ここ壊したらすぐ出れるよ」っといって弾幕で穴を開けながらついに地上に出た

何故そんな事を知っているのかはあえて聞かなかった

さあ、レミリア

今度は手は抜かない

お前がいつまでもガキのような言い訳で自分の妹を縛り続けるなら、俺がお前の目を覚まさせてやる

12話

そして現在

「フラン、なぜ貴女がそいつと一緒にいるの？答えなさい」

「・・・わたしは」

広いホームで対峙する姉妹

そしてフランは決心したように姉に向かって叫ぶ

「わたしはもう、あんな部屋にずっといるなんてやだ！ずっとお姉さまの言う事を聞いてきたけどもう嫌なの！！私は外に出たい！外を見たいの！みんなと一緒に居たいの！！」

「我儘を言うんじゃない！貴女は自分の持つ力がどれだけ恐ろしく危険か分からないの？もし、外に出てまた力が暴走するような事があれば貴女が危険と見なされて殺されるかもしれない、貴女を守るにはあするしかないのよ」

「・・・うう、お姉さまの、お姉さまのバカッ！」

「フラン・・・」

うつむいて泣いてしまったフランの元に行こうとするレミリア
しかし、それを彼が阻む

「・・・」スッ

「退きなさい犬、フランは返してもらおうわ」

「・・・それは出来ない、異変を止める以外にもやる事が出来てな。わからずやの姉を説得するというな」

「何故お前がでしゃばってくる？これは私たちの問題よ、他人は口をはさまないで」

「・・・俺にも妹がいる、だからお前が血の繋がりのあるフランを大切にしたいという気持ちは俺もわかる・・・だが、お前は答えを急ぎすぎだ。もつと手段はあるはずだ」

「黙れ!!」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

スペルカードを使い、右手に現れた赤い槍を小夜に向かって投擲するレミリア

小夜の居るところに槍が直撃。轟音が鳴り響き、砂煙が舞う

「兄さん!」

「小夜の兄ちゃん!」

「弱いだけの犬が好き放題言ってくれたわね・・・何も知らない癖に、さあフラン来なさい」

ヒュン!

「ッ!」

フランに近づこうとした瞬間、砂煙の中から槍がレミリアの頬をかすった

壁に刺さった槍は先程レミリアが使ったスペル、スピア・ザ・グングニルだ

「言葉でいくら言っても無駄か・・・なら、実力で示すしかないか」

煙の中から出てきた無傷の小夜

ホルダーからモーゼルM712を引き抜き、その銃口をレミリアに向ける

「今度は本気で行く、俺が勝てばフランの望みを聞き入れてやってくれ。負ければ俺はもう口は出さない・・・どうだ、やるか？」

「・・・ピチャ、いいわ、受けてたつ。咲夜、美鈴は巫女と魔法使いが邪魔しないように相手してあげなさい」

「かしこまりました、お嬢様」

「・・・分かりました」

頬から垂れる自分の血を舐め、小夜の申し出を受けるレミリア

そしてレミリアの命令で霊夢と魔理紗の前に立ちほだかる咲夜と

美鈴

「霊夢、魔理紗・・・」

「任せて、あいつらの相手は私たちがやるわ」

「それに、霧を止めるために来たんだ。どちらにしてもやらないとな」

四人はホームから外の方へと戦いながら出る

ホームに残されているのはレミリアと小夜、そして二人を見守るフランとパチュリーたちだけ

「さあ、やろうかしらヴェアヴォルフ」

「……その前に、一つ言っておく」

「？」

「お前の父親を偽者などと発言した事は撤回しよう……すまなかった」

「ツ……どうゆう気の変わりようかしら？」

「……誰も、親を否定されれば嫌なものだ。たったそれだけだ」

「……ふん、まあいいわ。こっちも一つ言っておくは……貴方は私に絶対に勝てない」

「……」

レミリアの言葉に動じることもなく、小夜は構える

「天罰『スターオブダビデ』」

先攻を取り、スペルカードを使う

レーザーを展開しつつ、丸弾とリング状の弾幕を発射する

小夜は避けながらレーザーと弾幕の中を突っ走っていった

このスペルはまだ序の口、本当の実力を計るために放つたに過ぎない

「……」ブン！

「ふんツ」ガッ！

弾幕を避けきり、近距離まで接近出来た小夜は左手のモーゼルM7

12の長い銃身を振るいレミリアはガードに入る

ゴツツ・・・バンツ!

「ぐっ!」

バキツ!

「がッ!」

ガードに入り隙を見せたレミリアの額に右手に持つ方の銃口を押し付け引き金を引き、弾丸は頭を貫通。追撃に蹴りをくらわせレミリアを壁に叩きつける

動く隙を与えぬように両銃の弾丸全てをレミリアに撃ち込み、弾が終わった瞬間に突き刺す様な蹴りを放った

「・・・?」

しかし、違和感に気づいた

蹴りは確かに刺さったが肉体を貫いた感触がない

「あら残念、外れてしまったわね」

「ツ・・・」

壁に突き刺さった脚の上に屈みながら小夜の顔を覗くレミリア

そのまま、爪を顔に向けて振るうが間一髪で両銃で防ぎ、後へ下が
る

しかし、防ぐ時にモーゼルM712の通常よりも長い銃身が通常の
長さまで切り裂かれてしまった

「……愛銃が」

銃を見ながら妙に残念がる表情になった小夜

「だいじょうぶ?」

「……問題ない」

フランに心配され、問題ないと言って銃をホルダーに戻すがシヨツクは残っているようだ

「……レミィ、別に心まで傷つけなくてもいいんじゃないかしら?」

「そうですよ、誰だつて気に入ってる物を壊されると落ち込んでしまいますよ」

(……でも、あそこまで長くなくてもいいとおもうんだけどな)

「……」ジト—

「……(—ω—)」

「ちよ、ちよつと何よ!なんでまるで私が悪いみたいな空気になつてんの?!」

フランから冷たい視線を向けられ、パチユリーとここあからは好き放題言われ、小夜はまだ落ち込んでいた

仕切り直し

(・・・なぜ、攻撃が当たらなかった?)

蹴り飛ばした後、残りの弾丸全てを撃ちつくして逃げられないようにした。そこにとどめをさすつもりで放った蹴りは何故か避けられた

個体や種族によるが吸血鬼のような心臓や頭を潰されても死なない化物でも脳を破壊され、再生しても思考が働くのには時間がかかる簡単に説明すれば睡眠状態からいきなり起こされた時と同じようなものだ

レミリアの再生力が異常に高いのであればまだ納得出来るが一度戦った時の事を考えればそこまで再生力が高いとは言えない

・・・やはり、あの魔法使いが言ったレミリアの力なのか

『行く前に助言をしておくわ。貴女がこれから戦おうとしているレミイにはある能力がある、「運命を操る程度の能力」よ』

『運命を操る?』

『つまり、他者のこれから先に起こる出来事を見ることが出来たり、運命を操って結末や出来事を変えることも出来る』

『・・・つまりやると思えば、いつでも俺を殺せる運命に変えられると』
『それは定めた相手によるわ。レミィよりも上位の存在に対してはノイズ混じりに見えたり見えなかったりするし、運命を変える事が出来ない・・・ようはあなたしだいね』

地上に出る前にパチュリーが話したレミリアの持つ力

もし、それで逃れられるなら頭に銃を撃つ時だって来ることはわかっていたはずだ

まだ、手を抜いているのか？それとも今ので能力を使うに値されたのか

どちらにせよ・・・早く決着をつけるか

「・・・そろそろ、試してみるか」

「ふっ、玩具も失って次は何をするのかしら？」

「・・・レミリア、運命は逃れられないと思うか？」

「なに？」

構えを解き、ゆっくりと呼吸をしながらレミリアを見て言い放った

「運命とは従うものでも他人が、ましてや運命を操れるお前が決めるものじゃない・・・己が決めるものだ」

その瞬間、小夜から白い霧が出現した

13話

「霧?・・・姿を隠して不意打ちでもする気かしら?」

白い霧が出現し、姿を隠す小夜

しかし、レミリアは動揺することもなく腕を組んで立っていた

先程と同じように能力を使い、どこから攻めてくるか運命を見るレミリア

だが、ある異変にレミリアはすぐに気づいた

「なに・・・見えない?どういう事、なんで奴の運命が見えないの!」

バツ!

「ッ!、ぐっ!」

側面の霧の中から突然現れた褐色肌の握り拳

レミリアはギリギリガードしたが力に負け、吹っ飛ばされる

バキッ!

「がはッ!」

吹っ飛ばされた途端、今度は背後から脚が現れレミリアの背を蹴る
その次は顔に正拳、左腹に肘打ち、脚にローキックと連続で打ちのめされるレミリア

霧の中から突如現れる両腕、両脚は全て小夜の物

しかし、問題なのはその突如現れる腕や脚はバラバラの所からでできてくるのだ

「くそー舐めるな！」

「運命『ミゼラブルフェイト』」

新たなスペルカードを使う

レミリアの回りから鎖の形をしたオーラが大量に出現する

「・・・どうして、なぜ飛んでいかない！奴は確かにこのホールに居る！なのになんで追尾しない!!」

しかし、レミリアが使った鎖型のオーラはレミリアの回りには出現しただけで何も起きない

運命『ミゼラブルフェイト』は定めた敵に追尾して飛んでいく、広域制圧型の射撃技

しかし、そのスペルが出現しただけでレミリアが定めた小夜に向かって飛んでいかなのは小夜は紅魔館のホールには「居ない」と判断しているのだ

ガシッ！

「ぐっ!?!」

頭を捕まれ、地面に押し付けられるように倒れるレミリア

回りには出現したスペルも霧散する

「・・・やはりそうだ。お前の能力も追尾型の弾幕も相手を定められねば効果を果たさない・・・霊夢と霊香の言った通り、これが俺の「新しくなった特殊能力」か」

「なに！貴様の能力は霧に体の構造を変えるだけの筈だ！追尾型の弾

幕はともかく、私の能力からは逃れられない筈だ！」

「そうだ・・・霧になるのは元から俺の持つ特殊能力。霧になるよう体の構造を変えるだけで自分の存在を視覚的に隠すだけ・・・だが、幻想卿に來た事によって俺の特殊能力は変わった・・・いや、進化と言ふべきか。その進化した能力、それが」

霧になる程度の能力

そう、この能力が俺の特殊能力が程度の能力に変わって手にいれた新しい力

名を聞くだけでは以前と何も変わらない、だがこの幻想卿の程度の能力はただなるだけでなく応用も可能なのだ

例を挙げるなら霊夢の「空を飛ぶ程度の能力」

霊夢の能力は空を飛ぶこと、つまり「無重力」

無重力とはつまり地球の重力を受け付けない。そしてそれは如何なる重圧も、力による脅しも、この能力の前には全く意味が無い

相手がどんなに強大だとしても、霊夢の前では意味をなさない

名前だけでは大した能力には聞こえないが意味を理解していけばこれほど強力な能力は中々無い

故に霊夢の能力の前では俺でさえ、脅威にはならないのだ

そして、俺の能力

霧とは視界を遮るものと同時に対象の姿を隠す

隠すとは物や人をその場から見えなくし、その存在をあるようで無い、曖昧な状態を生み出す

つまり、俺が霧になっている状態はその場所から自分という存在を曖昧にする

だからこそ、レミリアの能力で俺という存在の運命を見ようとして

も居るようで居ない曖昧な存在の運命を見ることなどできない

「つまり、霧になった事で私の能力の対象から逃れたというわけか……随分と厄介な能力だ」

「そうでもない……存在を曖昧にただけで俺の体は霧として存在はしている、ただの攻撃では意味はなさないが霧も飛ばすほどの広範囲の波動、または爆発系の技を受ければ俺にもダメージは入る……さて、どうする？まだやるか？」

地面に押し付けたまま、レミリアに続きをやるかどうかを聞き出す
そんな質問に対してレミリアは意外な答えを返す

「……ふっ、引き際も肝心とはこのことね。いいわ、フランの件、認めてあげるわ」

「つまり敗けを認めるか」

「いいえ、フランの事は認めると言ったけど貴方との勝負はまだよ。私は吸血鬼、種族としても私としても大きなプライド、誇りを持っているの。最後の決着をつけましょう、小夜」

「……」スツ

小夜はレミリアが離しその場から少し離れる

レミリアは立ち上がって埃を払うように服を叩く

「もう能力も何もなし、純粋に私の力を貴方にぶつけるわ」

「……来い」グッ

拳を握りしめ迎え撃つ体勢に入る

「必殺『ハートブレイク』！」

「・・・ッ！」

赤い槍、スピア・ザ・グングニルに似た巨大な光の槍を持ち、突撃してくるレミリアに妖気を集中させた右拳を振りかざした

ピチューン!!

次の日

「・・・」カンツ！カンツ！カンツ！

紅魔館のホールにて妖精メイドと共に壊れた箇所の修理作業に入っていた

いくら、異変を起こした本拠地とは言え此処は今亡き彼女の家族たちが住む場所だ

壊した俺にも責任があるため、修理の手伝いをしているのだ

「兄さーん」

「?・・・霊夢。もう昼か」

ホールに入ってきたのは昼の弁当を持ってきた霊夢
修理の手伝いを始めてから、昼食を持ってくるとはりきっていた

「はい、兄さん」

「・・・ありがとう」

「お兄様♪」

「ツ・・・フラン、危ない」

「妹様、はしたないですよ」

弁当を受けとるとフランが抱きつくように飛び付いてきた

その後から同じく修理作業をしていた咲夜と美鈴もやってきた

あの、戦いの後フランは外に出れるようになり自室も地下から通常の部屋に変わった

霧の湖でチルノたちとも友達になり、ときおり一緒に遊んでいる

「えっと、小夜さん。じゃあ、あの部屋へ行つて来てください」

「・・・ああ」

「……ぐすつ」

「もう、咲夜。泣いたら綺麗なお顔が台無しだよ？」

「申し訳ありません、妹様……。まだ、立ち直れなくて」

「重い空気ね。まあ、分からなくはないけど」

美鈴に言われた通り、俺はホールを後にしとある部屋へ向かった

そこは他の部屋より少しだけ装飾が凝った位の高い者が使いそうな部屋

そう、かつて俺と戦った一人の吸血鬼の当主が使っていた部屋だ

俺は部屋に入り、彼女の名を呟く

「……レミリア」

「お兄様♪」ギユ！

「……」

「今日のお仕事はおわったの〜？」

「いや……休憩、だから話に来た」

「やった、レミリアもお兄様とお話ししたかったんだ。うー☆早く早く」

・・・この目の前にいる甘えん坊のような小さい子が、かつて異変を止める為に戦った敵

そう、レミリア・スカーレット本人だ

色々あってなぜか思考が幼児退化してしまい、かつての当主としてのカリスマ性は消えてしまった

かつてのレミリアは死に、今日の前にいるのは新生レミリアだ

「・・・」

アーカード、もしこのレミリアが本当にお前の子だったなら言わせてくれ

・・・なんかごめん

これがヴェアヴォルフの大尉

現在名、博麗小夜が初めて体験した異変

紅霧異変である

設定と紹介

博麗 小夜（大尉）

第二次ゼーレヴェ作戦でセラス・ヴィクトリアに倒され幻想郷へ種族は人狼、能力は一つを除いてそのままが幻想入り時に体が幼子化、弱点の銀も変わらない

先代博麗の巫女、博麗霊香の養子となり博麗の性と名を貰う

一部の妖怪・妖精とも仲がよく、化物だが博麗の巫女の関係者という事もあり人里の人間からも多少の信頼は得られている

人狼故に狼になつかれるし好きだがシユレディンガー准尉と一緒に居ることが多かったので猫も好き

特長

銀髪、赤い目、褐色肌などかつての姿とは特に変わりは無し

服装

幼少時は子供の和服

成長後はオーバーコートと規格帽姿がほとんど

たまに霊香がくれた甚平を着る、主な理由がオーバーコートが洗いにさらされたら

哨戒白狼天狗の衣装、特に着る理由は無し

（日常編1 23話以降から追加）

甚平姿

武装

オーバーコートのベルトにあるホルダーに入っていた愛銃モーゼルM712

現在は弾切れと紅霧異変で銃身が切られた為に使用不可

哨戒白狼天狗の剣と紅葉が描かれた円盾

(日常編1 23話以降から追加)

能力

ミレニアム時代に使っていた獣化は変わっていないが「霧に体の構造を変える」特殊能力が幻想入りしてから「霧になる程度の能力」に変わり、霧になるだけでなく自信の存在を曖昧にする事が出来る

霧の状態は自身を定めて使う能力や技から逃れられ、腕や脚といった一部分だけを元に戻す事も出来る

存在を消すのではなく曖昧にするという判断は霧になった体に対してただの打撃や斬撃は通用しないが霧も消し飛ばすほどの広範囲の技に対して当たり判定があり、肉体の存在を消せている訳では無いため曖昧ということになっている

好きなもの

霊夢、霊香、友人、甘味物、料理

嫌いなもの

銀、玉ねぎ、チョコ、博麗に敵対する者(種族関係なく)

一言

「……よろしく」

幻想郷住人紹介と小夜の事で一言

博麗 霊夢

現博麗の巫女で小夜の義妹

小夜以外の前では少しそっけない態度だが、小夜と二人っきりの時は甘えん坊になる

「兄さんは誰にも渡さないわ!」

博麗 靈香

先代博麗の巫女

靈夢と小夜の母親だが二人とも養子ゆえ独身

妖怪退治は靈夢と違い、体術を主体にしていたため小夜の鍛練にもよく付き合っていた

「少し無愛想に見えるが可愛い息子だよ」

ルーミア（EX）

人食い妖怪

かつては上級妖怪ほどの力があつたが現在は中級妖怪ほどに弱体化、能力は健在

今の小夜にギリギリだが勝つことは出来る

「息子というより弟分かな」

霧雨 魔理紗

普通の魔法使いで小夜の義妹（二人目）

靈夢の友人で幼い頃からよく世話になっていた小夜の事を兄のように慕っている

現在、とある店主に片思い中

「いい兄さんだぜ。靈夢の兄さん好きにはほどほど困ってるがな」

森近 霖之助

半人半妖で靈香の友人の一人

魔法の森入口辺りで香霖堂という店の店主をしている、幼少時代の魔理紗の世話をよくしていた

人里でも女性に人気があるが色恋ごとには疎い

「礼儀正しく落ち着いた青年だよ。人狼というのは幻想卿でも珍しい種族なんだ」

ルーミア

人食い妖怪、ルーミア（EX）の娘で小夜の義妹（三人目）
ルーミア（EX）の妖力から生まれたもう一人のルーミア、能力も
同じだが実力は下級妖怪程度しかない
「お兄ちゃんはやさしくてつよいのだー」

チルノ

氷の妖精で小夜の義妹（四人目）

霧の湖を縄張りしている⑨な妖精

初めて小夜に出会った時勝負を挑むが惨敗、その後は小夜の強さに
憧れ（勝手に）弟子入り

力の前に頭脳もなんとかしろと言われ、現在は大妖精と一緒に慧音
の寺子屋に通っている

剣術に多少の才あり

「おおかみ兄ちゃんの弟子になるなら一番弟子のあたいを倒してから
だ！」

大妖精

チルノの親友で愛称は大ちゃん、小夜の義妹（五人目）

チルノの師である小夜を最初は怖がっていたが、小夜の優しさに惹
かれ兄と呼び慕う

頑張っているチルノと小夜の為に何か出来ないが考えている

「お兄さんは優しくして私は大好きです。あっ！好きと言ってもそう言
う好きではなくて、えっと・・・あう／＼／」

日常編 1

14話

夜

紅魔館

異変が終わり、現在壊れたホールの修理に泊まり込みで働いている今日の作業が終了して夕食を食べていた

「……」ムシヤムシヤ

「はいお兄様、あーん♪」

「お兄様、フランのもあーん♪」

(……食べにくい)

右脚にレミリア、左脚にフランが乗って俺に咲夜の作った料理を食べさせようとしてくる

「レミリア、フラン、自分の席について食べた方がいい」

「うー☆お兄様のお膝の上で食べたいの」

「フランも。お姉さまだけじゃないもん」

「……おい、咲夜。メイドだろ、何とかしてくれ」

後に静かに控えている咲夜に何とかしてもらおうと声を掛ける

「私はお嬢様の従者です。お嬢様が望むことを否定する立場ではありません」

「・・・はあ」

「まあいいじゃない。嫌われてるよりはましでしょ」

パチュリーの言葉に少し納得してしまう

どうしてレミアがこの様に変貌してしまったのか

原因はあの時の勝負でレミアのスペルを打ち破り、レミアに力を込めた正拳を放った時だ

当たり所が悪く、額をしかも粉碎するほどの力は込めてない為、再生をするほどのダメージは与えてない故に脳に変な負担を与えてしまった性でこうなってしまった

・・・と美鈴から説明された

美鈴いわく、普通に生活を続けていれば時間が解決してくれると言われた

「・・・まあいい。二人とも、トイレに行きたい退いてくれ」

「はーい」

食堂を後にし、トイレに向かった

「・・・ふー。甘えるっていうのもなかなか難しいわね」

小夜が飲んでいた水を飲み一息つけるレミア

その様は先程までの変貌とは違い、いつものレミアになっていた

「あの一お嬢様。言われた通りに小夜さんには適当にお嬢様の変貌を説明しましたが・・・なんなんですかこれ？」

元に戻ったレミリアに対して美鈴が質問をする

「これはフランの為にもなって、私の為にもなる作戦よ」

「私のためって？」

「・・・だいたい理解したわ」

「どういうことパチュリー？」

「妹様は小夜の事は好きよね？」

「うん！お兄様は大好きだよ」

「だけど、小夜は博麗の関係者。だから今は紅魔館の修理の為に泊まってはいるけどいずれは博麗神社に帰るわ」

「・・・うん」

パチュリーの言葉にフランは少しがっかりする

「だけどフラン、小夜を私たちで此処を気に入らせればもしかしたら此処に住んでくれるかもしれないわよ？」

「そっか、だからお姉さまはいつもより変なことしてたんだ」

「変て言わない！貴女の為にもやってるのよ！」

「・・・でもお嬢様。妹様の為というのは分かりますがお嬢様の為というのはいったい？」

「もう、こあお姉さま。お嬢様も妹様と同じように小夜さんを気に入ったんですよ」

こあの疑問をここあが答えるとレミリアはほくそ笑みながら答える

「フラン、安心しなさい。今の私なら完璧に小夜を落とせるわ」

「本当に？」

「疑っているようね、なら証拠を見せてあげるわフラン。これから見せるのはかつてお母様がお父様に実際にやってみせた必勝の策、これを使ったお母様をお父様は即落ちたそうだわ」

((((・・・不安しかない)))

「へえー」

「あら？戻ってくるわ。フラン、よく見ておくのよ」

レミリアはゆっくりと深呼吸しながら先程の状態に戻る

「・・・ただいま」

「お帰りお兄様♪」ポフッ

「・・・んっ」

飛んで抱きついてくるレミリアの頭を撫でる小夜

「お兄様、レミリアね」

「ん？」

「大きくなったらお兄様のお嫁さんになるの♪」

「！！！！！！」

レミリアの発言に小夜以外の皆が驚く

咲（な、なるほど、これは）

美（今のお嬢様なら一番効果がある！）

パ（色んな本でこういう妹キャラではテンプレの台詞だけど）

こあ（可愛い妹からこう呼ばれたら）

ここあ（落ちないはずがない！）

フ（お母さま、あんな告白したんだ）

「・・・レミリア」

「なーに？（フツ、決まったわ）」

勝ちを確信したレミリア、そして小夜は口を開く

「・・・吸血鬼はもう成長しないだろ？」

「・・・」パリーン！

レミリアの中で何かが砕けて一瞬フリーズする

咲（な、なんとという返し）

美・こあ・ここあ（あわわわわ（；。ㇿ）

パ（これは・・・完全に想定外ね）

吸血鬼は時間に囚われる事はなくなり成長という概念も消えてしま
まう

それ故に住む場所が無い放浪の吸血鬼は一つの町や村に長くは留
まることが出来ない

それを逃れる為に吸血鬼が持つ能力の一つ鼠や蝙蝠に姿を変える
といった変化の力で自身の容姿を変えたり出来る

吸血鬼と戦った事のある小夜にとっては常識的な吸血鬼の知識で
ある

「お兄様のバカーーーー！！」

「・・・どうしたんだ？」

泣き叫んで食堂を後にしたレミリア
小夜は首を傾げて走り去るレミリアを見送る

「……お姉さまの策、使えないな」

(……しかし、今の言葉懐かしいな。小さい頃の霊夢にも言われた事があったな)

「まだよ！まだいくらでも策はあるわ！」

自室のベットで横になりながら叫ぶレミリア

15話

泊まり込み作業 三日目 夕方

「……ふう」

それなりのホールも元に戻っていき、明日か明後日には修理は完了するだろう

霊香には霊夢を通して伝えてあるが速く帰ってやらないといけな
い

今日の霊夢の弁当、旨かったな

「小夜さん、お疲れさまです」

「咲夜か……この調子なら明日か明後日には終わる」

「そうですか。小夜さん、一つよろしいでしょうか」

「なんだ？」

タオルで汗を拭き取り、置いてあった水の入ったコップを口にする

「これが終わったら、博麗神社に帰ってしまうのですよね？」

「……ふう。ああ」

「……どうか、紅魔館に残っていただく事は出来ないのでしょうか？」

「……」

咲夜の言葉に沈黙する小夜

そんな小夜に構わず咲夜は続ける

「貴方のおかげで妹様は外に出られ、他者に触れあう事で孤独という悲しみから救い、能力の制御にも力を貸して頂いて今の紅魔館は昔よりも明るくなりました・・・ですが、それは逆に妹様が貴方という存在も必要になってきている。どうか、留まる事は出来ないのでしょうか？妹様の為にも」

「・・・無理だ」

「ッ」

「博麗の姓を貰い、名もくれた博麗の巫女たちは俺にとって恩人。そしてなにより、博麗の巫女の為に生きると俺は“奴に”誓った・・・何も無い俺に色んなものをくれたこの幻想郷で生きるために」

(奴?)

「・・・だが、心配はするな。関わった以上、フランを見捨てるつもりは一切ない」

「そう、それが聞けて安心です。では私はこれで」

「・・・質問をしていいか？」

「なんですか？」

ホールを後にしようとした咲夜を呼び止める小夜

「お前が持っている銀のナイフ・・・そしてナイフから僅かに感じる祝福儀礼の術式に近い力・・・お前は吸血鬼ハンターなのか？」

「だとしたらどうしますっ?」

「・・・いや。だが、吸血鬼を狩る者がなぜ吸血鬼に従うのか少し気になった」

「そうですか・・・申し訳ありませんが私の事は詳しくは話せませんが、これだけは覚えてください」

咲夜は振り返り自身の胸に手を当てて口を開いた

「私は十六夜咲夜。我が主、レミリア・スカーレットに牙を向くものにはこのナイフで全て斬り捨てる、それがどの様な存在であつてもです」

「・・・そうか」

咲夜から感じる威圧はその言葉に嘘偽りの無いことを語らせる主であるレミリアの為なら命を捨てる事も出来ると強く伝わってきた

「・・・そんな大切な主をあんな風にしてしまつて悪かつた」ペコツ

「えーと、その事でしたら大丈夫ですから」

とりあえず、これだけは言っておかないといけな思つたので謝つた

「おーい! おおかみ兄ちゃん!」

「・・・チルノたちか?」

外の方から聞こえてきたチルノの声
俺と咲夜は外に出て門の方に向かう

「ただいま咲夜！お兄様！」

「お帰りなさいませ妹様。おやおや、今日は随分とお汚れになって」

「えへへ、ちよつとはしやぎすぎちゃった」

咲夜に顔を拭いて貰っているフランを後にし、俺はフランと一緒にいたチルノたちの元に向かう

「二人とも・・・いつもすまない」

「おう、フランは強くない奴だからな！あたいは気に入ってるぞ！」

「それにお兄さんのお知り合いなら私たちにとっても友だちです」

「ミスティア、リグル、久しぶり」

「はい、お久しぶりですお兄さん。屋台とかこの前の霧とかで大変だったからなかなか会えませんでしたね」

「僕も虫たちの事で色々あったけど、久しぶりに兄さんに会えてよかったよ」

チルノと大妖精以外の二人の妖怪

一人はミスティア・ローレライで夜雀という妖怪

もう一人はリグル・ナイトバグで蛍の妖怪、決してGではない

この二人もチルノの親友

チルノ、大妖精、ルーミア、ミステイア、リグル、そして最近友達になったフランとこの六人でよく遊んでいる

「・・・ルーミアは帰ったのか？」

「うん。ルーミア姉と一緒に帰ったよ」

「そうか」

「それよりおおかみ兄ちゃん、修行はいつになったらさいかいできる？」

「弟子にした覚えはない・・・もうすぐ仕事も終わる、しばらくしてから神社に来い」

「分かった！しばらくしてから行くぞ！」

「じゃあ、フランちゃんも送ったし私たちも今日は解散しようか」

「大ちゃんの言う通りだね。じゃあお兄さん、いつでも屋台に来てくださいね」

「またね兄さん」

「また明日、行こうチルノちゃん」

「おう！じゃあねフラン」

「うん！また明日！」

帰っていくチルノたちに手を振るフラン

「さあ、妹様。すぐお風呂に入りましょう」

「はい」

「小夜さんも後で入ってくださいね」

「ああ」

「……あつ！そうだ！ねえねえお兄様、一緒にお風呂入ろう」

「妹様、小夜さんを困らせては「いいぞ」「いけま……え？」

小夜の答えに少し沈黙してしまった咲夜

「……頭ぐらい洗ってやる」

「わーい！やったー！」

(こ、断るかと思った……い、一応の為に同行した方がいいかしら?)

話も終わり三人は紅魔館の中に入る

ちなみに門にいた美鈴は頭にナイフが刺さった状態で横たわっている姿を発見していた小夜だがあえて無視した

16話

浴場

「・・・ふう」

夕食前に汗を流す為に紅魔館の広い浴場で頭と体を洗っている
フランはまだ来ていない

「・・・しかし、本当に広いな」

紅魔館の浴場は本当に広い、数十人が一緒に入ったとしてもまだまだ
余裕がある

博麗神社の風呂場は小さい、いや小さいのは浴槽だ

まだ体が小さい頃は霊香と霊夢、俺の三人が一緒に入っても問題は
なかった

俺が元の身長に戻ってから狭くなったから一緒に入るというのも
無くなった

まあ、仕方ないことだろう

「お兄様、来たよう」

どうやら、来たようだ

フラン以外にももう二人・・・レミリアと咲夜か？

「・・・遅かったな」

「ごめんなさいお兄様。お姉さまと咲夜も入るっていうから遅くなっ
ちやっただ」

タオルを体に巻いて入ってきたフラン

その後からも同じ姿のレミリアと咲夜もやって来た

「お兄様♪レミリアも一緒に入りたくてき……」

「すみません小夜さん。お嬢様が妹様のお話を聞いてご一緒したいと……ッ！／＼／＼」

「……レミリア？咲夜？」

「お姉さま？咲夜もどうしたの？」

突然、止まったレミリアと顔を赤くして顔を両手で隠す咲夜
どうしたというのか？

「ぎ、小夜さん！な、なぜタオルを巻いていないのですか！！／＼／＼」

「……？」

首を傾げる小夜

小夜は咲夜の言う通り下半身にタオルを巻いていない、完全な裸体状態だ

そもそも戦いの中で生きて彼に体を見られる事に対しての羞恥心など無い

（お、おち、落ち着くのよレミリア。誇り高き吸血鬼の私がかが男性の体を見て取り乱すなんてあつてはならないわ！……お、お父さまより大きい、かも／＼／＼）

「ほらお姉さま。早くお兄様に頭を洗ってもらおう」

「え、ええ、そうね「お嬢様！」ッ！っん。そうねフラン、早くお兄様

に洗って貰いましょう♪」

「ふう……しかし、あそこまで大胆というか、羞恥心が無いのかしら？妖怪でも男性なのよね？……なぜかしら、少しだけ女性として傷ついたような」

「(……赤くなったと思えば次は落ち込んでいる、本当にどうしたのだろうか?)……じゃあ、フランからな」

「はい♪」

とりあえず、先にフランの頭を洗うことにした

「うーん。お兄様、上手だね」

「……霊夢からも昔よく言われたが髪を洗うのに上手い下手があるのか?」

「分かんない。でも、フランは上手だと思ってるよ」

「……そうか。じゃあ流すぞ、目は閉じろ」

「はい♪」

シャワーで頭を流し終えてブンブンと頭を振るフラン

「じゃあ妹様、次はお体を洗いましょう。お背中を洗います」

「……次はレミリア」

「よ、よろしくねお兄様」

「・・・」コクッ

目の前に座ったレミリアの頭を濡らし、髪を洗い始める
フランと同じように強すぎず弱めで揉むように髪を洗う

「・・・痛くないか？」

「ん、大丈夫・・・ねえお兄様」

「なんだ？」

「お兄様は仕事終わったら、本当に帰っちゃうの？」

「・・・」

「・・・妹様、お先に入っていましたよう」

「うん」

レミリアの話声が聞こえたのか、フランと一緒に湯に入りに行った
咲夜

「ああ、俺には帰る家がある。ずっと帰らないままだと霊香と霊夢に
心配させる、させた分だけ二人の夢想封印を受ける羽目にもなるから
な」

「（心配させた分だけ夢想封印?!）そ、そうなんだ・・・じゃあ、やつ
ぱり一緒に住めないんだね」

「別れじゃないさ、暇な時には遊びに行くさ」

「…うん！（やっぱり、小細工は無理そうよね。なら今度は正々堂々と私たちの物にして見せるわ。見ていなさい霊夢！」

「さあ、終わったぞ」

「ありがとうお兄様」

その後は咲夜がレミリアの体を洗い、少しだけ湯船に浸かってから浴場を出た

博麗神社

「ん…なんか紅魔館から兄さんに関して宣戦布告された気がするからちよつと行ってくる」

「やめなさい」

「むう…早くお兄さん分を補充したい」

「なんだそれは（呆）」

兄がおらず少しふてくされてる霊夢とそれを呆れるように見る霊
香だった

17話

さらに二日後

「・・・やっと帰れた」

長い階段を三段飛ばしをしながら頂上に辿り着いた

ようやく修理が終わり、家に帰ってこれた

帰るときにフランが泣きそうな顔をしたがまた遊びに来ると約束して泣き止んでくれた

ちなみにレミリアは昨日回復していつもの性格に戻った

だが、やたらとくつついて来るのに変わりはない、帰るときに霊夢に伝言も頼まれたがあれはどういう意味なんだろうか？

まあ、それは霊夢に話す事だ俺には関係はない。さつさと二人の下に行・・・

「兄さーん♪」

「ツ・・・ただいま霊夢」ナデナデ

飛び付いてきた霊夢の頭を軽く撫で、暫くしてから離れた

「もう、ずっと居なかったから寂しかったわ兄さん」

「・・・毎日、昼に会えてたが？」

「それはそれ、今は今なの！」

「まあまあ霊夢、帰ってきたんだそれくらいにしてやれ。お帰り小夜」

「……ただいま霊香」

「歩いて帰ってきたから疲れただろう？今日は部屋でゆっくりするといい」

「……」コクツ

霊香に言われた通り、部屋に戻って本でも読みながら今日はゆっくりと休むとしよう

小夜の部屋

「……」

「♪」

部屋で壁を背に座りながら本を読んでいる
そんな俺の空いている左腕に霊夢が抱きつく様に寄りかかってくる

霊夢は今日のやる事を全て終わらせてやることなく、暇だからと俺の部屋に来た

来たとしても特に何かしてくれと言ってくる訳でもなく、ただ寄り添ってくるだけだ

「ねえ、兄さん。紅魔館ではどうだった？」

「どうだったとは？」

「ほら、あの紅魔館って家と全然違うでしょ？不便だったとか……あ

の吸血鬼とかに何かされたとか」

「・・・別に不便は無かったな。変貌したレミリアも霊夢が俺に甘えるのとあまり変わらない、修理以外はフランと遊んだり、手伝いをしたくらいだな・・・料理や、風呂の掃除と一緒に入って頭を洗ってやつたり」

「え？お風呂に、一緒？」

「・・・ああ」

それを聞いて急に静かになった霊夢

俺は読書を一旦止め、霊夢の方を見ると僅かにプルプルと震えていた

「どうし」「どうして兄さん！」「・・・うるさい」

いきなり耳元で叫び声を上げ左耳を押さえる

「なんで!?小さい頃は毎日一緒に入ったけど最近は全然一緒に入らなかったのに紅魔館の奴らと一緒に入ったの!?!」

「・・・いや、俺が大きいから浴槽が狭いとやだと思って」

「兄さんと一緒に入れるなら狭くたっていいもん!もういいだ!これからお風呂も兄さんと一緒に入るから!」

「・・・別に構わないが」

「やったー!ふんっ、紅魔館の奴らに兄さんはやらないもん」

「……」ポンポン、ナデナデ

別に一緒に入ろうが構わないが狭いって後で文句言っても俺は知らない

「霊夢、小夜、ちよつといいか？」

「お母さん？」

「……どうした？」

部屋に入ってきた霊香

何の用だろうか

「この間の異変を解決した祝いに宴会をやろうと思っているんだ」

「ああ、異変解決でよくやる恒例の宴会ね」

「……別に何をやろうが俺は構わない」

「今から三日後に開こうと思ってる。二人には宴会に参加するか知り合いのみんなに聞いてみてくれ、大体聞き終えたら宴会の準備を手伝ってくれ」

「分かったわお母さん」

「……」コクッ

「まあ、準備は明後日からだ。その間は自由にしてくれ」

今度の宴会の事を話終え、部屋を後にした霊香

明後日から色々大変そうだ

18話

次の日

博麗神社

「おーい！おおかみ兄ちゃん！」

朝早くから大声を上げて俺を呼ぶチルノの声
普段の服に着替え外に出る

「・・・来たか、早かったな」

「おーよ！さいきょうになるためにもおおかみ兄ちゃんとのしゅぎよ
うはぜったいだからね！」

「お邪魔します、お兄さん」

「・・・いらっしやい」

「朝早くから誰かと思ったらチルノに大ちゃんか」

声を聞きつけて霊夢も出てきた

「お！おはよう霊夢！」

「おはようございます霊夢さん」

「はい、二人ともおはよう」

「よし！じゃあ、さっそくしゅぎようだ！で、なにするの！」

キラキラと期待に満ちた目で見てくるチルノ
とりあえず、まずは……

「……実戦訓練だ」

「弹幕勝負か！よーし！」

空中に浮き、構えるチルノ

俺も迎撃態勢をとった

実際今のチルノには肉体的訓練はあまり必要ではない。どちらか
と言えば実戦による経験から、新しい戦い方を見出す方が必要だ

「最初からぜんりよくだ！」

「氷符『アイシクルフォール』」

氷で出来た弹幕が放たれ、徐々に迫ってくる

俺は一気に駆け抜け、近接に移る

(やつぱり来た！おおかみ兄ちゃんの前には教えてくれた通りならば
あたいの真正面に来る！このスペカの弱点はあたいのすぐ正面が安
地、そこへ誘い込むようにしてげいげきする！)

チルノは左手に弹幕を生み出し、小夜が接近してくるのを待つ

そして真正面に辿り着いた小夜に左手の弹幕を放った

「もらった！」

「……」バツ！

「あれ？」

しかし、小夜はその場から一気に飛び上がりチルノの弾幕を避ける
そのまま、チルノの背後に着地した

「さ、さすがあたいの師匠！誘い込みをみきつた！」

(・・・手段を教えただ。分からない訳がない)

1人勝手に盛り上がるチルノに対し小夜は予測出来て当然のこと
だと心の中で呟く

あの時にもう決めても良かったが、早く終わると駄々をこねるから
な

「へえ、チルノにしては考えたじゃない」

「はい。ただ教えたのはお兄さんですから当たる筈は無いと思ってま
した」

(まあでしょうね・・・それとあたいの師匠って、なんだか小夜兄さん
があんたのもの発言っぽくてちよつとイラツとするわね)

観戦組で勝手に内心お怒りの霊夢と2人が怪我しないか心配する
大ちゃん

「よーし！これくらい師匠によけられるのはけいさんずみだ！次はあ
たいの新必殺技を見せてやる！」

「冷符『アイスロード』」

「？」

突如、聞いた事のないスペカ宣言をするチルノ
その瞬間、小夜を中心に複雑に伸びる氷の道が出来上がる

「これは・・・ッ」

小夜に放たれる氷の弾幕

しかし、その弾幕は様々な方向から飛んできて一瞬混乱する小夜だがどうなっているのかすぐ理解できた

「おりゃおりゃ！さすがのおおかみ兄ちゃんでもいろんな所から狙われた手出し出来ないだろう！」

飛んでくる弾幕はチルノが宣言したスペカからではなく、たった今チルノが放っているものだ

なぜただの弾幕が様々な方向から放っているのか、答えは簡単

チルノ自身がスペカによって作り出した複雑な氷の道の上を滑りながら弾幕を放っているからだ

チルノの靴の裏には氷で出来たブレードのような物を作り出し、それを使って氷の上をスムーズに滑りながら移動し弾幕を放って攻撃をする

しかも氷の道はチルノが通った後は溶けて消え、また新しいルートを作り出すため、また同じ方向から来るとは限らない

飛んで移動しながら弾幕を撃つよりもこちらの方が確実に相手を翻弄出来る

(・・・これは、多少認識を改める必要があるか?)

ガードしながらそんな事を考えている小夜

(よしーこれならいくらおおかみ兄ちゃんでも動けない、このままー

気に攻める！)

更に弾幕を放ち、攻撃を強めるチルノ

もはや彼女の中では勝利が見えたと思っていた

だが、数多の戦いを生き抜いて来た小夜にとってはこれくらいでは不利にならない

小夜はガードしながら、あらゆる方向を見る

そして、小夜は飛び出しチルノのスペカによって作られた氷の道を蹴り碎いた

その場所は今まさにチルノが通ろうとした道だ

「ぴぎやー！」ピチューン！

チルノは氷の道から落ち、地面に顔面から落ちてピチュツた

「ち、チルノちゃん、大丈夫？」

「うん、顔面打っただけ……」

「……」

あのスペカはチルノが渡った後は消え、また新しく道が出来上がる
だがその道を作るのはチルノのいる位置から約500から1000
0mの先からと滑るまで間が空いているため、そこを狙えば簡単にチ
ルノが通る寸前に道を壊し、道から落とすことは出来る

だが、なかなか面白い方法だった

やり方と本人の思考によっては強力な攻撃手段だ

「チルノ……」

「むー、やっぱりおおかみ兄ちゃんには勝てないか」

「・・・」

ポフッ

「んッ」

「さっきのはなかなか良かった・・・俺も少し油断をした。お前は確実に少しづつだが強くなってる、自信を持って」ナデナデ

「・・・うん！」

小夜の言葉に元気を出し、その後も小夜と共に修行に励んだ

「・・・意外にやるじゃない。本当に」

オマケ

「寺子屋の方はどうだ？慧音からテストを近頃やるといつていたが」

「うっ、ば、ばっちりだよ。あたいは頭もさいきょうだもん！」

「ちなみにテストは全部9点でした」

「だ、大ちゃん！ばらさないですよ！」

「・・・」

顔を抱えてどうしたものかと考える小夜

「だ、だって慧音先生の授業、長くてよくわかんないし！きいてるとねむくなるし！ねたらすっごく痛い頭突きしてくるんだよ!! あんな授業はあたいには無理だよ！」

そんないい訳をするチルノ

だが、それ自体に俺はなにも言えない

俺もかつて幼少時に霊夢と共に慧音の行う授業は受けたが、ハツキリ言うがつまらない

歴史を学ぶのに楽しさなど望むものではないが、慧音の場合は長い文章をひたすら読み上げるだけでなく、特に覚える必要の無い部分まで事細かく教える

その頃の俺は幻想郷の知識が欲しかった故に何とも思わなかったが幼い頃の霊夢が授業中に居眠りをしてしまい、後はチルノの言った通りの事が起きた

あの時は泣き止まずのに随分苦労した

ちなみに今の霊夢曰く「あれのお陰で勘が冴えるようになった気がするわ」と言っている

19話

昼頃

「293、294、295、296・・・」

「11!12!13!14!」ブンブン

片手で腕立て伏せをする小夜と木刀で素振りをするチルノ
実戦訓練を終えてそれぞれの自主練メニューを実行中

「よくやるなあ小夜の兄ちゃん、私がある日にはほぼ鍛錬しか見てないぜ?」

「兄さんは弾幕なんかより体術を主体に戦うから体を誂らせる訳にはいかないそうよ」

2人の鍛錬姿を見学しながら茶を啜る霊夢と魔理沙

魔理沙は先ほど遊びに来たが特にやることも無いので霊夢と同じように見学中だ

大ちゃんは小夜が鈴奈庵で借りた本を居間で読書中

「でも、前まで弾幕打ち出す絡繰みたいなもの使ってたろ?あれでやればいいのに」

「それが弾丸つてのが無くなったから使用出来ないそうよ。あとなかじゆうしんつていうのが短くなっちゃったから使う気になれないんだって」

「もしかして、あの無駄に長い筒みたいな部分か?あんなの逆に邪魔だと思っぜ?」

「でも、兄さんが言ってたんだから何かしらこだわりがあったのよきつと」

「どんなこだわりだよ」

そんな雑談をする霊夢と魔理沙

「霊夢、お昼だ。小夜とチルノちゃんを呼んで」

「はい」

「魔理沙、大ちゃん、すまないけど運ぶのを手伝ってくれない？」

「りよーかい」

「はい」

霊香の指示に従い魔理沙と大ちゃんは料理の運びを、霊夢は鍛錬中の2人を呼ぶ

小夜とチルノは一旦鍛錬を中止し、小夜はタオルで軽く全身の汗を拭いてから家にあがる

「じゃあ、いただきます」

「」「」「いただきます」「」「」

今日は魔理沙とチルノ、大ちゃんの3人も加わり昼食を食べる博麗一家

「あの、ありがとうございます霊香さん。っご昼食、ごちそうになってし

まっつて」

「構わないさ。食事は多い方がいいからな」

「あ、そうだ。そろそろ宴会に参加するかどうか他の人に聞きに行かないとね」

「ズズズ・・・そうだな」

味噌汁を飲みながら霊夢の言葉に答える小夜

「そう言えば小夜の兄ちゃんは何処から聞きに行くんだぜ？」

「・・・紅魔館から霧の湖、竹林、妖怪の山から人里に行く予定だ」

「あれ？竹林と山に知り合っていたっけ？」

「竹林に1人、山にも1人、あと湖にも1人いる」

「・・・知ってたか霊夢？」

「初耳よ」

小夜の言葉にいち早く反応した霊夢は魔理沙の問に答えてから考え込む

「おおかみ兄ちゃん、あたいと大ちゃんも友達に参加しないか聞くの手伝うよ！」

「助かる」

「人里は買い物ついでに私が聞きに行こう。と言っても誘えるのは慧音くらいだろうがな」

（阿求は家の名もあって使いが止める、小鈴は親が心配しそうだ・・・あまり人里の知り合いも少ない、霊香に任せよう）

「・・・ねえ、兄さん。その私たちも知らない兄さんの知り合いって誰？」

「それは私も気になるんだぜ。誰なんだ？」

「ああ、妖怪の山には昔あるてん・・・ッ」

「む、この妖気はあいつか」

何かに反応した小夜と霊香

そんな2人に？を思い浮かべる4人

「おじやましまーす！清くて正しいがもつとうの文々。新聞記者、射命丸文です！博麗の皆さんに取材を申し込みに来ました！」

そう言っぺペンと手帳を持った射命丸文という女性が空から庭に降りてきた

「・・・」スー・・・トンッ

黙ったまま立ち上がり襖を静かに閉める小夜

「さて、食べ終わったら台所の所まで運んでくれ」

「「「はーん」」」

「……」コクッ

「いやいやいや！無視しないでくださいよ！」バンツ！

「襖が壊れる。静かに開けろ文」

「あ、いや、それは申し訳ありませんが、無視は酷いじゃないですか霊香さん」

「誰かと思ったら文かよ、もしかして小夜の兄ちゃんが言った知り合いつて文か？」

「……」フルフル

「え？違うのか？」

「あやや？何の話ですか？」

魔理沙と小夜のやり取りにくいついてきた文は魔理沙に質問する

「いや、今度宴会をするから参加するかどうか知り合いの所へ回ろうって話してたんだけど小夜の兄ちゃんに妖怪の山に知り合いが居るって初耳だったからさ。その知り合いが文じゃねえのかって」

「……あのく小夜くん。ちなみに私の事も声かけてくれようとしてくれるんですよね？」

「……いや、無い」

「酷い！私と小夜くんはそんな知らない仲じゃあ無かったじゃないで

すか！私とは遊びだったのですか!？」

「・・・誘拐犯が何を言う」

「うぐつ！で、ですからあの時はちゃんと謝って「ちよつと文」あやツ!?」ゾクツ

肩を掴まれ、殺気に近い反応にガクガクと震えながら後を振り向く
そこにはお札を片手に持つ霊夢が居た

「その話、詳しく聞かして貰おうかしら？」

「ちよ、霊夢さん！なんか凄く怖いって、いだだだッ!!ちよ、ちよつと、肩が肩が!」

「最近、母さんから霊力を身体能力向上に変える術を教えて貰ってるから逃げられるとは思わないことね」

「あれ？じゃあ霊夢って結構強くなってるんじゃないか？」

「いや、力は上がっても霊夢は体術面は弱い。もしもの為にと教えたそっだ」

「ふーん・・・長くなりそうだし先に紅魔館に行こうぜ。私もちよつと用事あるし」

「・・・分かった。霊香、行ってくる」

「ああ、気をつけてな」

「兄さん、私はこの天狗とOHANASIしてから追いかけるわ」

「・・・分かった」

帽子を被り、魔理沙と共に神社を後にする小夜

「あ、ちよ！待って小夜くん！私を見捨てないでー！ー！！」

それが射命丸文の（今日の）最後の言葉だった

20話

博麗神社を後にし紅魔館へと向かう小夜と魔理沙

飛ぶ手段が無い小夜は当然歩き、そんな魔理沙は小夜に話をするために低空飛行で隣に並んでいた

「なあ、小夜の兄ちゃんと言つて結局どう言う関係なんだ？誘拐とか聞く限りあまり良い関係じゃないのは分かるぜ」

魔理沙が切り出した話は小夜と射命丸文という烏天狗の妖怪との関係だ

「・・・幼少の頃に1度だけ、神社を出て辺りを探索していた事があった。その時に文と会ったのだが俺を妖怪の山から出た白狼天狗の子供だと勘違いしてそのまま持つて帰られた」

「うわあ、傍から見たら確かに誘拐だな。まあ、小夜の兄ちゃんの狼の姿から考えてもまさに白狼だから間違えられるのは有り得なくは無いけど・・・けど、あの文が間違えるか？」

「そして1日だけ妖怪の山で過ごしていた訳だが、文は新聞の編集で忙しいと言つて俺を自分の部下である白狼天狗に預けてな。それが妖怪の山にいる知り合いだ」

「持ち去った上に世話は押し付けたのかよ」

小夜の話聞き、魔理沙の射命丸文に対する評価がどんどん下がっていった

魔理沙にとっては捏造した新聞なんて書いてる射命丸文に対しては最初から好印象など持ち合わせて居なかったが

「霧の湖・・・もうすぐか」

小話をしていたら、もう湖にたどり着いた2人

「あ、そうだ。確か霧の湖にも知り合いいるって言ってたし先に誘って来たらどうだ。私が紅魔館に行つて伝えておくぜ？もう紅魔館に行かずに別の所に回れるし」

「それは嬉しい。だが、顔を見せようとも思っていたから寄るつもりではない」

「（・・・く、ダメか）分かった。じゃあ先に行つてるぜ」

「ああ、頼んだ」

そう言つて魔理沙は飛んで真つ直ぐ紅魔館を目指し、小夜は知り合いを探するために歩きだす

（ちつ、小夜の兄ちゃんを少しだけ退ける事は出来たが時間は多くない。さっさと終わらせないとな）

にししつと悪巧みをするような笑いをした後、急ぎ紅魔館へと向かう魔理沙

そんな魔理沙の企みも知らず小夜は湖の周りを歩く

暫く湖を見渡しながら歩く事数分後

「・・・居た」

「あれ？小夜くんじゃない。久しぶり」

そこには上半身には緑の和服に身を包み、下半身は魚の尾の様な姿をした妖怪

彼女は人魚でありこの霧の湖に住まうわかさぎ姫

その隣には長いストレートの黒髪に狼の耳を生やしたこの幻想郷で最も仲間に近い狼女の今泉影狼

「小夜、最近顔を出さなかったから心配したわ。草の根妖怪ネットワークの集まりにもなかなか来ないし」

「鍛練や異変解決もあってな・・・悪かった」

「べ、別に謝らなくてもいいわよ！その、暇があったらでいいんだし」

「ふふふ、それで今日はどうしたの小夜くん？」

「今度、異変解決の祝いに宴会をやる。2人も来ないか？」

「宴会？異変って前の紅い霧の件よね。別に何もしてない私達が参加していいの？」

「霊香、知り合いなら誰でも呼んで構わないと言った。だから誘った・・・で、どうだ？」

小夜の誘いに少し悩む影狼たちだがすぐに答えを出した

「まあ、偶にはいいかなそういうのも。わかさぎ姫は私が連れて来るし」

「でも私は人魚だからちょっと大変かもしれないよ」

「わかさぎ姫が来ても大丈夫。大丈夫な様に準備はした」

「って言ってるし、小夜を信じて参加してみる？」

「・・・じゃあ、行ってみようかな」

「そうか・・・嬉しい」

オマケ

「影狼」

「ん？なんだい？」

話を終えてわかさぎ姫が少し湖の中へ潜って行ってから影狼に話を振る小夜

「また＼いいか？」

「あ、ああ、あれね・・・まあいいわよ」

「ありがとう」

感謝をした後、影狼の目の前に立ち顔を近づける小夜
途中で小夜の鼻に人差し指を当てて止めた影狼は頬を赤く染めな
がら言った

「あ、あまり長くはしないでよ／＼／＼」

「・・・」コクツ

頷いた後、指をどけて更に近づく小夜

そして、影狼の首元近くでスンスンと鼻を鳴らしながら匂いを嗅ぎ
はじめた

小夜はただ匂いを嗅いでいる

それはまるで影狼という存在が居るという事を確認するかのよう
に・・・自分と同じヴェアヴォルフが居ると確かめるように

彼が元居た世界、まだ名が無かった世界には彼以外にヴェアヴォル
フは存在しなかった

彼は孤独だった

かつてこそ少佐に拾われミレニウムという共に戦った仲間が居た

それでも彼には「同じ種族と言う仲間」は居なかった

この幻想郷にやって来て自分と同じヴェアヴォルフに近い狼女の
今泉影狼という存在は小夜にとっては大きな存在の一人だ

彼はただ嬉しいのだ。例え違ったとしても自分と同じ存在が居る
事に・・・しかし

（ああ、小夜の匂い…嬉しいオスの匂いが……ちよ、ちよつとく
らい……だ、駄目よ！我慢よ我慢！！下手に手出したらあの怖

い博麗の巫女に何をされるか！……あゝ、でもお……）

嗅がれている方はメスとしての本能を抑えるのに必死であった

21話

数分後

「・・・／＼／＼」

「・・・大丈夫か？」

「え、ええ。大丈夫と言えば大丈夫・・・かな」

未だに頬を赤く染めながらも妙に疲れきった様な表情でいる影狼
ただ匂いを嗅いだけで何故影狼が疲れているかは小夜には全く
分かっていないが、とりあえず自分の責任だと解釈し頭を下げて謝っ
た

謝られ大丈夫だからと小夜にいい聞かせる影狼

少し甘いようにも思えるが彼女自身もこの広い幻想郷で自身と同
じ様な妖怪に近い小夜と出会えて言葉では言わないが内心嬉しいの
だ

「ごめんなさい。遅くなっちゃって・・・どうしたの影狼？顔が赤いわ」

「だ、大丈夫！何でもないから！」

「そ、そう？ならいいけど。じゃあ小夜くん、私たちも参加するって事
になったけど宴会を開く日は何日？」

「明後日だ。早く来ても構わないが本格的になるのは多分夜だ」

2人に宴会が開く日を教えて次の目的地である紅魔館へと向かお
うとした時だ

バーンツ!

「ツ……」

いきなりの轟音が鳴り響き、音のする方角に向く

「な、なに?」

「あの方角は確か異変を起こした紅魔館のはずだけど、誰かが弾幕勝負でもしてるのかしら?」

「……じゃあ、俺は行く」

「ええ、気をつけてね」

影狼とわかさぎ姫の下を後にし、とりあえず紅魔館へ走って行った

「……一体誰が、まさかフランが……急がないと」

頭の中に浮かぶ悪い予想はフランが暴走したのでは無いかという事

確かに出会ってからまだ幾日も経っていない為、心がまだ不安定かも知れない

それはともかくとして今紅魔館には魔理沙が向かっている、何かあつては大変だと小夜は速く走る

門前にたどり着くがいつも此処に居る筈の美鈴はここから玄関まで伸びる道の真ん中に大の字で倒れていた

「……美鈴、大丈夫か?」

「さ、小夜さん・・・ぞ、賊が地下図書、に・・・か、変わりに排除をお願いしま・・・ガクツ」

それだけをいい残して意識を失った美鈴

「・・・仇は取る」

とりあえず美鈴を玄関にまで連れてって横にさせてから小夜は紅魔館の中に入り地下図書館へ向かった

「・・・あ、別に死んでは無いですからね」

地下図書館

「へっへっ、てなわけで弾幕勝負で勝ったからここの本を借りてくぜ。死ぬまでな!」

「ふざけないで、それは借りるんじゃないで、ゴホツゴホツ!盗んでんのよ、ゴホツ!」

「人聞きの悪い事言うなあ。盗んでんじゃないで死んでまで借りてくぜ」

「それを盗むって言うてるのよ泥棒、ゴホッ！（もう、こんな時に発症ささえしなければ負けなかったのに）」

「まあ、勝ちも勝ちだからな！じゃあな（ガシッ）・・・へ？」

箒に跨り今まさに飛ぼうとした魔理沙だったがその瞬間、背後から帽子ごと頭を掴まれる感触が伝わった

「・・・ま、まさか」

ゆつくりと首を動かして後に振り向く

「・・・」

「・・・さ、小夜の兄ちゃん」

「・・・」
「ジー」

「えっと、あの・・・」

「・・・」
「ジーーーー」

「な、何か言ってくれると嬉しいんだぜ」

「・・・」
「ジーーーー」

（あ、これ駄目かも）

何も喋っていないが、小夜の冷たく自分を見下ろすその威圧感の半端無いものだった

「・・・魔理沙」

「はい！」

「歯を食いしばれ」

ドガッ!!

「みやあ!!」

強烈なゲンコツを受けて頭を両手で押さえながら涙目で悶える魔理沙

さすがの魔理沙も小夜の本気に近い拳には耐えきれないようだ

「・・・大丈夫か？」

「ええ、ありがとうゴホツゴホツ！今、喘息の性で上手く喋れゲホゲホ、無いけど。」

「・・・何があつたかは入口辺りで聞こえていた。後でよく言っておく」

「んっ・・・何とか治まった。ええ、そうしてくれると助かるわ、何せいきなりやって来て本を持ち出そうとしたのだからね」

「コイツは連れていく・・・手助けはいるか？」

「大丈夫。気絶してるこあとここあを起こして片付けさせるから」

「・・・」コクッ

分かったと頷いて魔理沙と箒を持って図書館を後にした小夜
魔理沙は引きずられながらまだ頭を押さえていた

レミリアの部屋

「ようこそお兄さま。顔を出してくれて嬉しいわ・・・で、大体は能力で知ってるけど敢えて聞くわ。その白黒魔法使いはどうしたの？」

「悪さした・・・お仕置きのゲンコツ」

「うゝ・・・まだ痛むぜ」

「自業自得でしょ。それに泥棒紛いな行為を働いた罰としては安いものじゃない？」

「お前は小夜の兄ちゃんとのゲンコツを受けたことが無いからそう言えるんだ。こうりん何かとは比べ物にならないくらいだぞ」

「・・・霊香は俺より痛いぞ」

「いや、霊香さんはもう規格外だぜ。女性が出すような拳じゃあねえよ」

そんな雑談を終えた後、小夜は本来の目的に移る

「ふーん宴会ね。異変を起こした張本人である私達が参加するのもおかしい話だけど、フランも喜ぶだろうし是非参加させてもらおうわ。ところで霊夢への伝言を伝えてくれたかしら？」

「……ッ、すまない。まだ言っていない」

帰って来てから霊夢に構われたりしてその対応や毎日行う鍛練などで小夜の頭の中からほとんどその話が抜けていた

「あらあら、お兄さまもぬけている部分があるのね。まあいいわ、宴会時に伝えればいい事だし」

「なあ、伝言ってなんだレミリア？」

「ああ、ただの挨拶みたいなものよ。これからよろしく」ってね」

「お、おう。そうか（なんか随分強調してるようない方だったな）」

「……そろそろ行かないと。フランによろしくと言っておいてくれ」

「ええ、分かったわ」

「じゃ、じゃあ、私もお暇（ガシッ！）ぬぐっ！」

「誘いを伝え終えたら……説教だ」

「だよなあ……」

逃げ出そうとした魔理沙の頭を鷲掴みして逃がさないようにしながら紅魔館を後にし、次は妖怪の山へと向かっていった

その頃

「お願いします〜勘弁してくださいよ〜霊夢さん（泣）」

両手両足を縛り逆さまで木に吊るされた状態で泣きながら許しを
こう射命丸

「ふーん、山から出た白狼天狗だと間違えて攫ったと」

「ですから攫ったんじゃないんですってば〜」

「・・・まあいいわ。あんたが兄さんに気がある訳ではないのも分かつたし、下ろしてあげるわよ」

「・・・霊夢さん。一ついいですか」

「何よ、改まって?」

「霊夢さんのお兄さん、小夜さんは外来の妖怪、しかも人狼なんですよね」

「ええそうよ。それがどうしたのよ?」

「人狼という種族は確かに強い部類の妖怪に入ります。中には吸血鬼を殺せるなんて輩も居たという程です・・・小夜さんは本当に何者なんでしょう」

「はあ？言っている意味が分からないわよ、簡潔にいいなさいよ」

先ほどまで泣きわめいていたハズの射命丸の表情は真剣そのものだった

「小夜さんはその時に1度だけ成人の白狼天狗の男性と模擬戦をした事があるんですが、彼は勝ったんです。しかもその時に見せた動きは通常子供が出来ような動きじゃなかったんですよ・・・まるで幼少の頃から戦い方を熟知していたかのような」

「ふーん、あつそう」

「あつそうってこちらは真面目に聞いているのに!？」

「異常に見えるからなに？兄さんは今も昔も変わらない私の大切な家族よ。これはこの先も一生変わらない事実よ」

「・・・ふう、兄さん思いな人ですね。分かりました、これ以上は何も聞きませんよ、という訳で早く下ろしてくれませんか？」

「はいはい・・・ところでその模擬戦後は何かあった？」

「まあ、白狼天狗の子供達からかなり人気はありましたね。好意を持った女の子たちもそれはたくさん・・・ハッ！」

今更になってから気づく射命丸だが時は既に遅く目の前には怒気を放つ霊夢の姿があった

「へえー、それは知らない話ね。ちよつとその辺の話も聞かせてもらおうかしら？」

「あやー！(やぶへびでした!!)」

「ズズズ・・・お茶が旨い」

泣きわめく鳥と自分の娘の姿を見ながらのんびり茶を啜る霊香
だった

22話

紅魔館を後にし、次は妖怪の山へと向かう小夜

魔理沙は箒を没収された挙句、簀巻状態にされ小夜に担がれる形で連行されていた

「なあ、もう逃げないからさくせめて簀巻だけは止めてくれだぜ」

「だめ」

「即答かよ〜」

魔理沙の要望を即座に却下される始末

こんな格好で始めていく妖怪の山でどんな第一印象を持たれるか不安にもなるだろうが魔理沙が今よりもっと恐れているのは霖之助だけでなく霊香からまで説教されるのではないかという心配だ

「・・・着いた」

山の入口付近にまでたどり着き、魔理沙を降ろして簀巻状態からは開放した

「いやー、もしかしたらあのままの状態で山の中に入って行くんじゃないのかとも思ったが安心したんだぜ」

「・・・じゃあ、行く」

「おう！って訳で箒返してくれないか？ほら、私はいつも箒に乗って
i 「箒は返さない、お前も歩いて行く」・・・マジか」

仮に箒を渡して逃げ出されたら追跡は可能だが追いかけるのに自分の速さでは逃げ切れる可能性が高いと見ている

獣化すれば話は別なのかも知れないが悪さをして逃げて行く奴を追いかけるだけに体力を消費する獣化をそんなポンポン使つてられない

入口から動き出し、歩を進める小夜と魔理沙

すぐにバテるんじゃないかと思っただがやはり霊夢と同じ異変解決に挑んでいるだけはあつて体力はそこそこはある様だ

「なあ、そう言えば妖怪の山つて人間が踏み込むのつて禁止されてるんだよな？今更だけど登つてていいのか私？」

「・・・博麗の者だけは天魔の命によつて許可はされているし、同行者も特別に許される。俺は烏天狗の領域である頂上付近まで行かねば特に問題はないし、同行者も心配はない」

「ふーん。そう言えばさ、人狼と白狼天狗つて違うのか？小夜の兄ちゃんは肌こそ褐色だけど狼時はまさに白狼つて感じだけど仲間つて言うか同種族なんじゃないのか？呼び方が違うつてだけで」

「知らん。匂いはともかくとして疑問が一つだけある」

「それは？」

「・・・俺は彼らの獣化を見た事がない。しないだけなのか、出来ないのか、分からない」

「・・・ああ」

阿求が書いている幻想郷縁起で白狼天狗を知ったが、本には彼らの獣化については何も書かれてはいなかった

ちなみに影狼は満月時に毛が伸びる位しかなく狼になれる様な話は聞いたことは無い

俺が生きていた頃から同種族とは誰一人とも会つた事がない

その為に何が人狼の当たり前なのかはあまり知らない、自分というものさしでしか見る事が出来ない

獣化出来るか出来ないかで仲間かどうかなんて決まらないが・・・

「・・・っ」

「どうした？」

「この匂いは「小夜！」ぬっ」

「うおっ!?何かが小夜の兄ちゃんに飛びついた！」

「・・・権か」

抱きついてきた人物の名を口に出す小夜
名を呼ばれた人物はハッ！と我に返り、離れて服装の乱れを整えて
からもう一度こちらに振り向く

「ゴホンツ、久しぶりですね小夜。元気にしていましたか？」

「・・・」コクツ

「大きくなりましたね、時の流れというのは早いものです。そちらは貴
方の知人ですか？」

「・・・義妹」

「まあ、単に幼い頃から世話になってるから兄ちゃんって呼んでるん
だけだな。私は霧雨魔理沙ってんだよろしくな」

「私は白狼天狗の犬走権と申します。小夜とは1日だけですが妖怪の
山に来た時に世話をしていました」

「じゃあ、あんたが文の部下って奴か」

「先輩に会ったのですか？確か赤い霧の異変について博麗神社へ取材
に行くと言っていました」

「文は・・・良い奴、では無かったけど今頃は焼き鳥になってんじやな
いかな」

「何があつたかはだいたい察しました」

魔理沙の言葉に呆れる様な表情で返す権

小夜はとりあえず目的の人物に会えたので話を進める

「権に話があつて今日は来た」

「私にですか？此処で立ち話もなんだし私の家で聞こう」

「・・・」コクツ

別に今日は急いでいる訳でも無いので権の提案に乗ることにした
妖怪の山に住んでいる妖怪たちは身分制度をひいており、山の頂上

近くは烏天狗が山の根本あたりには白狼天狗やその他の妖怪たちが住んでいる

まあ、俺は白狼天狗では無い。彼らの制度など知った事ではないが面倒ないざごぎになっても困るため烏天狗の領地に近づかないし、行くとも思わない

白狼天狗達の住処にたどり着いた3人

「隊長、お疲れ様です」

「お疲れ様。私は少し休憩に入る」

「はい。ところで後の方々は？1人は人間のようですが」

「彼は博麗小夜、博麗神社の関係者でもう1人はその知人だ」

「・・・」ペコッ

「おつす」

「博麗の関係者でしたか。どうぞお入り下さい」

頭を下げ、3人を通す若い白狼天狗の女性

椀と同じ武具を持っている所を見るに警戒白狼天狗のようだ。立

ち姿からまだ入隊して間もないように見える

椀と魔理沙が行き、俺も中へと入って行く

「あ、あの小夜さま」

「・・・？」

先程の新米に声を掛けられ立ち止まると顔は赤く、オドオドしながらこちらを見ている

何だろう、体調でも崩したのだろうか？

「あ、あの、ああ、握手をお願い出来ますか！」

「・・・」コクッ

何だ、そんな事かと思いい右手を差し出すと両手で自分の手を掴む

尾は嬉しそうに振り、耳も僅かにぴこぴこ動いていた

「光栄です！小夜さまは私の憧れです！で、では仕事がありますのでこれで！」

「……」

元気がいいな。あれほど元気があれば警備の仕事など簡単なものだろう

さて、待たせる訳にはいかないと思っていたのだが

「小夜さんですよね!!貴方の幼少時の模擬戦を見ていた者ですが自分は感動しました!どのような鍛錬をすればあの頃から強くなれたのですか!？」

「わ、私にも是非ご教授をお願いします！」

「あの模擬戦の時より貴方に魅入られました!私とも戦ってはもらえないでしょうか!」

「どうか弟子にしてください！」

男女構わず小夜に言い寄ってくる様は凄まじく、どうしたらいいか混乱する小夜

「うわあ〜・・・兄ちゃんスゲー人気だな〜」

「幼少時の模擬戦時に成人の白狼天狗を倒してしまった、なんて人狼は小夜が初めてで烏天狗の新聞記事にも大きく記載されましたからね。彼らは成人したばかりの見習いたち、つまりあの頃の小夜と同年代か少し下くらいの子達ばかりよ」

「へえ、こう見ると白狼天狗って男性少ないな」

「まあ、やはり女性が多いというのはありますね・・・さて、助け舟を出しましょう」

権は見習い達の下に行き、手を叩いてこちらに注目させるようにす

る

「はいはい皆さん、思う事はありますが博麗の者の邪魔をしてはいけません。各々の持ち場に戻りなさい」

見習い達は『はい』と返事をし、小夜から離れ、それぞれ持ち場に戻っていった

「・・・ありがとう」

「迷惑を掛けてごめんなさい」

「大丈夫、少し驚いただけ・・・迷惑では無い」

「そうですか？ならいいのですが、では行きましょう」

とりあえずなんとか解放され、権の家に向かう事にした

23話

権宅

「宴会ですか・・・たぶん無理ですね」

「・・・」

「どうしてだ？別に妖怪や妖精だって構わず参加してるんだから問題ないぜ」

本題である宴会の誘いを話した小夜たち

権から返ってきたのは参加出来ないという答えだ

「私たち白狼天狗はこの妖怪の山を長である天魔様の命で守る立場にあります。しかも、私は隊を率いる隊長も務めています、仕事を放置する訳にはいきません」

「なるほど、そっちの問題かあ。兄ちゃん、こればかりはしょうがないと思うぜ」

「・・・」

「ごめんね小夜。その変わりでは無いけどいつでも遊びに来て構わないから」

「・・・」コクッ

特に何も言わずに頷くだけの小夜

彼自身はただ知り合いに参加しないか誘いに来ただけである為、無理をしてまで来てもらいたいとは考えてはいない

「さて、兄ちゃんの知り合いはこれで全部回ったけどこれからどうするんだ？」

「・・・しばらくしたら香霖堂に言って霖之助に宴会とお前の事を話す」

「うグッ、もう諦めてるぜ」

「何があつたかはあえて聞かないでおきます。あっ！そうだ。小夜、

貴方に渡す物がありました」

そう言つて居間を後にする椀

2人は首を傾げながらなんだろうかと考えた

しばらくしてから両手で何かを抱えながら入つて来た椀、その両手には服らしき物と剣と盾がある

「これは哨戒白狼天狗が山を警備する時に使う男性用の衣服と道具です。大きくなつたらあげる約束でしたからね」

「良かったじゃん兄ちゃん。戦う時に使える道具が手に入つて」

「・・・」チャキ

服と道具を受け取り、鞆に納められた剣を引き抜く

剣と言つても両刃ではなく片刃のためどちらかといえば日本の侍が使つたと言われる斬るのに特化した接近武装の刀という表現が近いだろう。しかし、資料で見た事ある実物は刀身が細く長いがこれは妖怪はともかく人間が振るうには少し大きすぎる

今の小夜には銃はあつても、撃ち出すための弾丸が無いため拳だけの戦いになるかと思つていたがこれらの武装があれば戦いでの手段が増やせるだろう

「なあ、兄ちゃん。せっかくだしその服来てみたらどうだ？きつと似やつてるぜ？」

「そうですね。せっかくだすし着てみたらどうですか？1人では無理なら私が手伝いますよ」

「・・・頼む」チャキ

武器を納めて魔理沙の提案に乗る小夜

とりあえず、せっかく貰つた物だ。着方が分からずにとしまつたままというのはくれた相手に悪い

「此処では狭いので隣の部屋で着替えましょう。魔理沙さんはこちらで待つていただけませんか？」

「おう。楽しみにしてるぜ」

「・・・逃げるな」

「だ、だから逃げないってば」

とりあえずもう一度魔理沙に釘を刺して置いて隣の部屋に移る権と小夜

オーバーコートを脱ぎ、権の指示と手助けを借りて白狼天狗の衣服を着始める

「しかし、子供の頃から見違えるくらい立派になりましたね。背も私を追い越してしまいましたし、言われた通り大きめに作ったかいはあつたみたいですね」

「・・・たまたまだ」

「たまたまでこれだけぴったりの大きさを頼んだなら貴方の幼い頃の勘は鋭いものだったでしょうね」

「・・・」

また元の姿に戻れるという確証はなかった。あの頃は体が幼くなった事に疑問をいくつも抱いてはいた

しかし、歳を重ねるにつれ身長も徐々に伸びていき肉体の鍛錬を重ねなんとかかかつての姿に戻れる様になった。少しでも生活を変えていたら今の姿とは少しだけでも変化があつたかもしれない

「さあ、あとはこれを頭に被せて・・・はい、出来ました」

最後に山伏風の帽子を被り着替えを終えた

「・・・ありがとう。着方は覚えた」

「この程度でお礼はいりません。早速、魔理沙さんに見せに行きま

しょう」

「・・・」コクッ

着替えを終えて隣の部屋で待つ魔理沙に早速お披露目となった
魔理沙は啞然としながらもよく似合っていると言われた

オマケ

山での用事も済ませ下山していった小夜と魔理沙

「・・・ふう、最初はびっくりしましたがあそこまで立派になっていた
とは思いませんでした。義姉として嬉しい限りです」

2人を見送り、住まいに戻って任務に戻る準備をする権
その時にふと目をやると床に見覚えのある服が置かれていた

「あっ・・・小夜、服を忘れて行ってしまった。仕方ありません、後で
持って行ってあげましょう・・・・・・チラッ」

準備を終え、後で持っていこうと決めた時にまたオーバーコートに
視線を向ける権

「・・・・・・・・・・少しだけ、大丈夫ですよね」

オーバーコートの上着を拾い、それを服の上から羽織り腕を通して
みる

身長の高い小夜が着てぴったりな程の大きい服は、当然椀が着ても
ぶかぶかで腕も袖から出てこれずプラプラと袖が揺れる

「本当に大きいですねこの服。それに少しだけ重い、よく小夜は着れ
ますね・・・・・・・・・・」スツ

腕を上げ、服の腕を通す部分を自身の鼻の近くまで持つていき彼女は
はゆつくりと匂いを嗅ぎ始める

「すツー・・・・・・・・小夜の匂い、雄の、匂い・・・・・・・・ふあ／＼・・・・・・・・「あや
やや、大変な目にありましたよ。椀います、か・・・・・・・・」ふあ？／＼

「・・・・・・・・」

パシヤ！

「（。ㇿ。）アヤツ！手が勝手に!!」

ザンツ!!

「・・・・・・・・え？（汗）」

後を振り向くと剣が壁に突き刺さっており、髪が二、三本切れて床
に落ちた

「みましたね？文先輩」

「ご、ごめんなさい！勝手に入ったのも悪かったし、衝動的に写真も撮りましたけど！す、すぐ消すから」

「見敵必殺、見敵必殺、見敵必殺」

「そんな物騒な言葉をどこで覚えたんですか貴女は?!」

「クリーク！クリーク！クリーク！」

「あややや！権がおかしくなっちゃいました！こ、こうなったら三十六計「逃がしません！」あやー！」

終

24話

青年、少女下山後

「……」

「どうした小夜の兄ちゃん？」

「……鳥の鳴き声が聞こえた気がした」

「そうか？私は何も聞こえなかったぜ」

「……気のせいかな」

「まあ、もうすぐ夕方になるし鳥の鳴き声の一つや二つ聞こえてもおかしくはないんだぜ……そういえばその服装見て思ったけどいつもの服は？」

「いつも……ッ」

「あちやー」

「後で取りに行く」

いつものオーバーコートと規格帽を持ってき忘れてしまった小夜とりあえず、明日はいつもの甚平で過ごす事になるだろうと思いなから魔法の森の入口にある霖之助が経営する香霖堂にたどり着く

「あー、ついに来ちゃった」

「……」ガラガラ

「いやあ、いらっしや……もしかして小夜くんかい？」

眼鏡をかけ直し、小夜かどうかを聞く

いつものオーバーコートか甚平の姿しか見た事の無い彼にとつて一瞬白狼天狗がやって来たのではないかと勘違いしつつあった

「……」コクッ

「驚いたよ。しかし、どうしたんだいその姿……もしかして博麗神社を出て妖怪の山に移り住むのかな？」

「・・・」フルフル

「こうりん、仮にそんな事になったら霊夢が泣き出すかもだぜ」
「そうだね、ありえなくは（ガラッ！）いらっしや・・・おや」
「・・・？」

後から聞こえた勢いよく扉が開く音に気が付き振り向くと見なれた脇出しの赤白巫女服を来た少女がやって来た

3人は彼女が霊夢であると一瞬で分かった

「・・・霊夢？」

入って来たがその後、無言で小夜に下を向いたまま近づく霊夢
様子がおかしく思った小夜は屈んで霊夢に視線を合わせた

「・・・お兄ちゃん」グスツ

「ツ、れ、霊夢？」

「出てっちゃうの？私とお母さんを置いて行っちゃうの？」

「・・・」フルフル！フルフル！

完全に勘違いしてしまっているのを認識し、全力で否定する小夜

「小夜の兄ちゃんが黙ってあんな首を左右に振って否定する姿は初めて見た」

「まさか、来てるとは思わなかったな。霊夢、先程のは冗談だよ、小夜くんはちゃんとし否定してたから」

「本当に？」

「・・・」コクツ！コクツ！コクツ！

「そう、なら良かった！」ケロツ

「切り替えはええよ」

先程まで涙目だった筈の霊夢はケロツといつもの笑顔を見せる

小夜は分かってもええ、笑顔に戻ってもらった事に少し安堵する

「で、文とのOHANASIは終わったのか霊夢？」

「ええ、まあ違うって事は分かったし離してやったわ。その後は兄さんの妖気を追って来たけど、そつちはもう終わっちゃったのかしら？」

「ああ、とりあえずな」

「大変だね、お兄ちゃんっ子の妹を持つのは」

「・・・」

確かにシュレディンガー以上にあそこまで懐かれた事は初めてだ

だが、今の霊夢と霊香の傍に居るからこそ今の俺がいる。かつてまで闘争に身を置いてきた俺がこうして居られるのも一番の理由が霊夢が傍に居たからこそだろう

・・・しかし、未だに自身の中で疼く闘争心は消える事はない。こればかりはどれだけ時が経とうと忘れる事は無いだろう

本音を言えば、今の環境に居続けるのは良い事なのだろうか？幻想郷に来てしまった理由はともかくとして俺が今もこの幻想郷に留まっているのは霊香から帰る場所も無い俺に居場所と名をくれた大きな恩があるからこそだ

俺は・・・2人が居なくなった後の幻想郷に留まる理由があるのだろうか？

「・・・霊夢、帰ろう」

「うん」

「・・・宴会、来るか？」

「当日は店内の整理が終えてから行くから少し遅くなるかもね」

「分かった・・・魔理沙、次はないからな」

「ツ、ありがとう兄ちゃん！」

香霖堂を出て霊夢と二人で帰る事にした

霊夢はいつもどおりに腕に抱きつく形で並んで歩く

「へえ、つまりその椀って白狼天狗から服を貰う約束があったんだ」

「実の所・・・言われるまでわすれていた」

「クスツ、兄さんって以外と抜けてるね」

「・・・そうだな、気をつけよう」

こうしてただ霊夢や他の皆と話すだけであの頃を一瞬忘れてしま
う

ミレニアムの兵、ただ少佐の命令に従い戦い続け、敗れて死に、た
どり着いた先はヴァルハラでは無く幻想郷

ただ、過去を忘れ生きたい様に生きれば良いのならなぜ過去の記憶
は無くならずそのままなのか

今更ながらこの世界は俺になにを望むのだろうか？

25話 前

宴会 当日
夕方

日も沈み掛け、もうそろそろ暗くなってくる時間帯には既に多くの参加者がやって来ている

参加者の中には宴会用の為に食材を持ってきてくれる者もいた

霊香や霊夢、俺は台所で宴会の料理を作り続けている

参加者である慧音や咲夜といった料理の得意な者たちの手を借りてやっとなの所は維持できている

「さて、これぐらいでいいだろう」

「ふう、ここまで来ると作る量が半端ないわ」

「・・・」

「あとは私がやるから2人は行ってきなさい。慧音たちも」

「はい」「・・・」コクツ

「いや、まだまだ大丈夫だ。教師としてあまり飲むつもりも無いし」

「私もまだまだやれますが？」

「・・・とは言っても本当にあまり無いからな。片付ける時にまた手伝ってくれれば構わない」

「そうか・・・では言葉に甘えるところでしょう」

「そう言うのでしたら、分かりました」

とりあえず、霊香を残し料理組も宴会に参加する事にした

俺は料理と言ってもせいぜい食材を切ったり洗ったり、手伝い程度の事しかやっていない

今後の為に誰かに習っておいた方がいいのかもしれない

「おう、きたきた！霊夢に兄ちゃん、遅いんだぜ！」

「もう顔が赤いわよ魔理沙」

「・・・楽しそうだな」
「本当ね」

既に出来上がっている魔理沙をはじめ既に酒を飲み、潰れている者も多々いる

妖怪や妖精と言ってもその個々の種族は酒に強かったり弱かったりと様々だ。なにより日本の主に飲まれている清酒というのはアルコール度数が思ったより高く慣れていない者はすぐに酔いつぶれるだろう

とりあえず、宴会の席に加わり料理を口にする

「・・・」モグモグ

「どう？その料理、私が作ったんだけど美味しい？」

「・・・」(ㄔ) 「コクツコクツ」

「良かった。頑張った甲斐があったわ」

「おい兄ちゃん！食べるばかりじゃなくて酒も飲もうぜ！」

「ちよつと魔理沙、兄さんは料理の手伝いで疲れてるんだから無理強いはやめなさいよ」

「なんだよ、せっかくの宴会なんながらこまけえことは無しだぜ」

「お兄様ー♪」

「・・・フランか」モグモグ

懐に飛び込んで来たのはフランだ

この前は会っていなかったから少し久しく感じる

「えへへ、お兄様の膝の上もーらい♪」

「ちよ、ちよつとふりゃん！なにをにやってるの！」

更にやって来たのはレミリアだが、顔が赤くうまく喋れていない
どうやら既に酔っているようだ

「なにつて、お兄様の膝の上に乗ってる」

「見りや分かりゆ！わたしにゆずりやしやい！」

「やーだ。此処はフランのお席だもん」

「いつからそうりやったのよ！」

姉妹の言いあいには他のもの者たちも反応しだす

「ちよつとまったー！おおかみ兄ちゃんの膝の上はあたいと大ちゃんのとくとうせきだー！ねえ大ちゃん！」

「ええ!?え、えつと、その、わ、わたしは／／／」

「お兄ちゃんの膝の上にすわるのかー？ルーミアに本を読んでもらうときによく座るのかー」

「なぬ！初耳だぞルーミア！」

「いいな私やリグルもまだそういうのした事ないわね。いい機会だしリグルもどう一緒にお兄さんなら許してくれるよ？」

「うーん、僕はいい、かな。ひどい目に合いそうだし」

ぎゃあぎゃああと騒ぎ出す中、小夜はフランを乗せたまま我構わず料理を口に行っている

「おい小夜、お前の事だぞ。なに呑気に飯を食ってる」

「・・・？」クイツ

「いや、その「へっ？」って疑問に思うように首を傾げるな」

「ルーミア姉、兄ちゃんには理解させるのはむずいと思うぜ？！しようがねえな、私が何とかしてやるか」

そう言つて騒ぐ奴らの下に向かう魔理沙

手を叩いて注目を向けさせる

「はいはい、皆思う事はまあ分かるんだぜ。だったら話は簡単、此処は勝負して兄ちゃんの膝の上という特等席を勝ち取ればいんだぜ」

「おう！弾幕勝負ならこの最強のあたいがうけてたつぞ！」

「いやいや、宴会時はそう言った勝負方法は禁止だ。だから弾幕勝負以外の方法で勝負しなきゃあならない、だから「話はすべて聞かせていただきました！」ん？」

「ネタあるところに我はあり！清く正しい文々。新聞記者射命丸文！ふっかー（ぐキツ！）あだだだだ！」

突然やってきたのはほとんどが包帯に巻かれミイラ男ならぬミイラ天狗がやって来た

「やれやれ、傷だらけなんだから無理をするんじゃないよ」

「くっ、最後がかっこよく決められなかった」

「また文に霖之助さんか。なんで2人が一緒に？」

「たまたまだよ階段辺りでばったり会ったんだけど、階段を必死によじ登りながら、ネタが待っているとかなんとか」

「ふふふ、例え四肢が傷つき絶対安静と言われようともネタある限りどこまでも」

「しつつかし、霊夢やりすぎじゃないか？いくらOHANASIだからってよ」

「あんな傷だらけなんて私は知らないわ。そこまでやってないわよ」

「へ？じゃあどうしたんだよ文？」

「えーまあ、ちよつと狼にやられましたねー」

「？」

「ま、まあそれはともかく話はだいたい理解しました。宴の席に弾幕勝負などと血なまぐさい戦いは言語道断「血なまぐさい争いをしない様にスペルカードルールを作ったのよ」ゴホンッ！宴にはやはり酒！というわけで小夜くんの膝の上を掛けて酒飲み対決でどうでしょう！」

ルールはいたって簡単

1. 制限時間は30分
2. 参加人数は自由、途中参加は認めない
3. 最も酒を飲んだ選手が勝者

「ちよつと！私はすでに結構飲んでるのに不利じゃない！」

「おやく？吸血鬼ともあろう方がその程度の量で不利とか言っちゃうんですか？やはり幼女体型にはこの勝負は辛いですかねー」

「ブチッ！・・・舐められたものね。いいわ、吸血鬼の力を見せてやろうじゃない受けてたつわ!!」

「完全にのせられたな文に。優勝品はともかく勝負事なら負けられないぜー！当然霊夢も参加するだろ？」

「え？しないけど」

「あれ？意外だなー、霊夢が兄ちゃん関連に首つつこまないなんて」

意外な返答に啞然する魔理沙に霊夢が更に答える

「その程度なら頼めばいつでもしてくれるし」

「・・・ああ」

た　　そういえばそうだなつと霊夢の答えに納得してしまう魔理沙だった

「・・・」モグモグ

た　　そして優勝商品は何も気にせず、騒ぐ皆を見ながら料理を食っていた

25話 中

「第1回小夜くんの膝の上争奪！酒飲み対決ー!!」

という事で小夜の膝の上という特等席を賭けた酒飲み対決が始まった

参加者は以下の通り

霧雨魔理沙

チルノ

ミステイア・ローラレイ

リグル・ナイトバグ

レミリア・スカーレット

紅美鈴

ここあ

射命丸文

「ちよつと待て！なんで対決考案者が参加してるんだぜ?!」

「ふふふ、この勝負に勝って小夜くんのお膝の上に座れるという権利を権に渡せばなんとか許して貰えるはず（出来たら今度の記事の候補と保存用に1枚ずつ撮らねば）」

「貴女が参加するのも珍しいわね美鈴」

「いえ、妹様から代わりを頼まれたので仕方なく。それよりここあさんは何故に?」

「面白そうというのがありますが、間近で小夜さんを見て触れてみたいと思ってきましたからいい機会かと」

「大ちゃん！必ず勝つから見ててねー!」

「む、無理はしないでねチルノちゃん」

「た、対決で勝って座れたなら文句は言われないよね？やっぱりやめた方がよかったかな」

「大丈夫、勝てば誰も文句言わないって。こんな対決を霊夢が許したんだから」

それぞれの思惑を胸に今戦いが始まる

・・・そんな盛り上がりを見せる中、外野の方では

「小夜くん、言われた通り持ってきたよ」

霖之助が少し大きめの袋を持って、それを小夜に渡した

「・・・ありがとう」

「霖之助、それは一体なんだ？」

「・・・」ガサゴソ

「これはビニールプールと言って、水を貯めて水浴びをする、折り畳みが可能だから何処でも持ち運べる。やり方によつては雨水を溜めるといった使い方も出来るんだ」

「しかし、なんで小夜くんがそんな物を？」

「何でもこの宴会に参加する妖怪に人魚の類が来るそうだから、水に浸かっていられる物が欲しかったらしいんだ。そこで大人1人が入って多少余裕のある大きさをこれを店の奥から出して来たのさ」

「だから兄さん、今日は霧の湖に行つては水を汲んでんだ」

「・・・フー」

ビニールプールを広げ、空気を入れて膨らませる作業に入る小夜

「・・・実際やつてる事は地味だけど何故か小夜くんがやっているの微笑んでしまうのは何故だろうか」

「まあ、慧音の言うことは分かる。あの無表情のままただ空気を入れているだけの絵図らだからな」

「まあ、あの背の高さで霊夢の2歳上、つまり彼は16歳の筈だ。本当ならまだわがままの一つくらいは言ってもおかしくないんだけどね。本当にしつかりしているよ」

慧音とルーミア姉、霖之助は成長していく子供の様子を見る親みたいな視線で小夜を見ていた

「おい！こつちも少しは見てくれだぜ！」

「ん？ああ、もう対決は終わったか？」

「済まないこつちは眺めるのに忙しくてな」

「なんかこつちの扱い酷くありません!？」

既に始まっていた酒飲み対決もほとんどがそつちのけで一生懸命空気を送る小夜の姿を眺めていた大人の方々

「もういつその事中断して普通に楽しんだら？」

「それじゃあせつかく無理して来た私の立場が無いじゃないですか!？」

ちよつと小夜くん！この妹さんになんか言っちゃってください！」

「フー………出来た」

「無視ですか?!」

騒ぐ文を無視して膨らませ終わったビニールプールに水を入れ始める小夜

ちなみに対決の方は魔理沙と文、美鈴しか残っていない。後の全員はリタイアしていた

ちなみに一番早くリタイアしたのはレミリアだ

「へっ、無視される程度なら諦めちまえ文」

「なんの、こんな私ですが烏天狗として誇りくらい持ち合わせています。人間の魔理沙さんに負けませんよ！」

(これ、普通に呑んでいれば勝ちちゃうんじゃないかな?)

対決はもう少しだけ続くようだ

「よつと、遅くなったわね小夜」

「影狼、わかさぎ姫」

「こんばんは小夜くん、約束通り来たわ」

「・・・じゃあ、ここに」

「そこに入ればいいのね」

お姫様抱っこ形でわかさぎ姫を連れてきた影狼はゆっくりとわかさぎ姫をビニールプールの中に下ろす

「すごい。泳ぐことは出来ないけど、体を伸ばせる大きさを水を溜めておける道具があるなんて。ありがとう小夜くん」

「・・・」フルフル

「こら、小夜くん。相手からの感謝は素直を受け取るべきだ」

「・・・」コクツ

「それでよし」

「で、あそこで潰れてる集団はなに？」

影狼が指さす方向には美鈴を残して倒れる集団の跡があった

「ああ、あれは兄さんの膝の上に座る権利を賭けて対決してたのよ。勝ったのは美鈴だったみたいだけど」

「いやあ、普通に呑んでたら30分前には皆さん倒れていきますから、特に何もやってないんですけどね」

「ひ、膝の上って・・・ちよ、ちよつと、私も参加して」

「残念だけど途中参加は禁止らしいよ」

「そ、そんなく・・・」ガクツ

「あははは、すいません。では、約束通り妹様に」

「え、いいよ。長くお兄様の上に座れてたから」

「ええ!?で、では私が参加した意味って・・・」

「なら、貴女が座つたらいいじゃない美鈴。一応、勝者なんだから」
「さ、咲夜さん!?!ですが」

「小夜さん。貴方はどうでしょうか?何か異論はありますか?」

「・・・別に」

「という訳だから、早くいつてらっしゃい」

「もう、なにがなんだが・・・そ、それでは失礼して」

とりあえず、勝者の特権として小夜の膝の上に腰を下ろす美鈴

(う、うわあ。男性の上に乗るなんて初めてです)

「どうどう美鈴?お兄様のお膝の上、座り心地いいでしょう?」

「ええ、まあ・・・」

「うう、もつと早く来れば・・・」

「まあまあ影狼、次があるわ」

とりあえず、変な対決は終わりましたいつも通りの宴会を楽しんでいた

「・・・」スツ

しかし、小夜は1人宴会の場から離れ博麗神社の裏に周り木々が生い茂る森の中に足を踏み入れた

「・・・出てこい」

誰も居ないはずの森の中で言葉を放つ小夜

その瞬間、背後から穴が現れ中から1人の女性が姿を現した

「気づいていたの?さすがはヴェアヴォルフ、少佐の側近にしてミレニアムの最高戦力」

大尉

だった男ね」

彼女こそがこの幻想郷の創設者である妖怪の賢者
八雲紫だ

25話 後

「どうかしら大尉さん、幻想郷での生活はなれたかしら? いや、今は博麗小夜だったわね」

「・・・」

目を細め微笑むように話す八雲

表情は笑えど彼女は決して心を許してなどいない

俺がミレニアムの者だとわかっていているからだ

「今までの貴方の生活の一部も見させてもらったわ。私の言うとおりに霊香と霊夢を守ってくれているようね、貴方ほど番犬に似合う人狼は居ないわ。そう思わない戦争犬?」

番犬や戦争犬など嫌味にしか聞こえない八雲の言葉に対して小夜は表情を変えることも無くただ沈黙している

それらの言葉も大尉からすれば否定することも無い事実だからだ

「・・・」

「黙ってばかりではつまらないわ。貴方からも話したい事があれば何でも聞いても構わないのよ?」

「・・・それだけか?」

「・・・なに?」

沈黙を破り、八雲にそれだけかと問いかける小夜

先ほどまで笑みの表情だった筈が次は鋭く睨む様になった

「妖気を俺だけに向け、此処に来させて話はそれだけか?・・・なら、俺は戻る」

「・・・確認をとらせてもらおうわ。貴方に与えた役目は?」

「・・・博麗の巫女を守る、どのような状況でも命を掛けて・・・忘れ

てなどいない」

「よろしい、その役目を違えない限り私は何もしないわ。でも、少しでもその役目を放棄するような事があれば貴方を幻想郷から追放するか、殺すわ」

「・・・」

八雲の忠告を聞き、その場から立ち去った

八雲紫はこの幻想郷内で唯一、小夜の正体をミレニウムという組織を知る人物

ミレニウムという組織にいた大尉を幻想郷にやって来た日から今日この時まで警戒を解いた事は無く、そしてこの先も無いだろう

どのような存在だろうが受け入れるのが幻想郷だが、その幻想郷に仇なす存在は当然生かしてはおけない

特に大尉が属していたミレニウムという『最後の大隊(ラスト・バタリオン)』を率いた指揮官である少佐は戦争に対する狂気に満ちた男

その人物の側近であり最後までミレニアムの兵士として戦った大尉を八雲紫が信じるはずもないのは当たり前だ。またあの時の様に戦争を望んでいるのではと疑っているのだ

そこで彼女が彼に約束させたのが幻想郷に住まう代わりに博麗の巫女を守るという役目だ

それはどのような状況、たとえ自身が死ぬ可能性があっても守れ。それが八雲紫が大尉に与えた条件だ

当然これは霊香や霊夢、他の誰にも話していない事だ

ただ、これに関する事を紅魔館のメイド長である十六夜咲夜に少し口をすべらしてしまったが気づかれる事は無いだろう

「・・・」

例えこんな条件をのまずとも、恩がある霊夢たちを守る事は決めていた

しかし、いずれ霊香も霊夢も消え誰かが博麗の巫女を継いだ後、俺はその時も博麗の巫女を守ろうと思うだろうか？

「兄さーん、遅かったけど大丈夫？」

「・・・」

俺の顔を見上げながら覗き込み、大丈夫かどうか心配する霊夢

「・・・フツ」

「え？わぷツ!?」ワシワシ

霊夢の頭を少しだけ力を込めて撫でながら通り過ぎた

・・・今はただ、霊夢を霊香たちを守る為に生きるしかない
その先の事を考えるのはもう少し後からでも良いだろう

「・・・え、あつ！ちよ、兄さん！さ、さっきの！さっきの顔をもう一回見せて！」

この時、霊夢は確かに見たのだ

自分を見ていた彼が、今まで1度も表情を崩したことの無い兄が

微笑んでいたのだ、と

??

「……」

そこは異様な空間だ

上下左右、360。何処を見渡せど目玉の様な物が存在し、そこからあらゆる場所を移したスキマが点々と開かれている

ここは言わばスキマの世界、スキマ妖怪の八雲紫のみが出入りが可能な特殊な空間。そのスキマから見える景色はすべて幻想郷に存在するあらゆる場所を映しており、彼女はそのスキマを渡ってその映し出された場所へ行く事が出来る

彼女が見ているのは先ほど博麗神社でひらかれている宴会の様子、そして博麗の巫女とその傍にいる男を見ていた

「紫さま」

「あら藍、どうかした？」

「ご夕食の用意ができましたのでお声を掛けに……まだ、見ていたのですか？」

「……ええ」

スキマの世界に突如現れたのは八雲紫の式神にして傾国の美女とも謳われた大妖怪

九尾の狐、八雲藍

八雲紫の式神として、彼女は八雲紫が使うスキマの力を僅かに扱う事が出来る。しかし、それも幻想郷内で移動する程度でしかないが

「紫さま、お言葉ですが……そこまで危険の可能性があるのであれば今すぐ対処するべきです。何かがあつてからでは」

「……」

藍の言葉を聞いてから紫の脳内にはある男の記憶を思い出し

た

数十年前
飛行船内

ㄣ

諸君 私は戦争が好きだ

諸君 私は戦争が好きだ

諸君 私は戦争が大好きだ

殲滅戦が好きだ

電撃戦が好きだ

打撃戦が好きだ

防衛戦が好きだ

包囲戦が好きだ

突破戦が好きだ

退却戦が好きだ

掃討戦が好きだ

撤退戦が好きだ

平原で 街道で

塹壕で 草原で

凍土で 砂漠で

海上で 空中で

泥中で 湿原で

この地上で行われる ありとあらゆる戦争行動が大好きだ

戦列をならべた砲兵の一斉発射が 轟音と共に敵陣を吹き飛ばすのが好きだ

空中高く放り上げられた敵兵が 効力射でばらばらになった時など心がおどる

戦車兵の操るティーゲルの88mm「アハトアハト」が 敵戦車を

撃破するのが好きだ悲鳴を上げて 燃えさかる戦車から飛び出してきた敵兵を

MGでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

銃剣先をそろえた歩兵の横隊が 敵の戦列を蹂躪するのが好きだ 恐慌状態の新兵が 既に息絶えた敵兵を 何度も何度も刺突している様など感動すら覚える

敗北主義の逃亡兵達を街灯上に吊るし上げていく様などはもうたまらない

泣き叫ぶ虜兵達が 私の降り下ろした手の平とともに

金切り声を上げるシュマイザーに ばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

哀れな抵抗者「レジスタンス」達が 雑多な小火器で健気にも立ち上がってきたのを80cm列車「ドーラ」砲の4.8t榴爆弾が 都市区画ごと木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

露助の機甲師団に滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に守るはずだった村々が蹂躪され 女子供が犯され殺されていく様は とてもとても悲しいものだ

英米の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ

ヤーボ英米攻撃機 に追いまわされ 害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君 私は戦争を 地獄の様な戦争を望んでいる

諸君 私に付き従う大隊戦友諸君

君達は一切 何を望んでいる？

更なる戦争を望むか？

情け容赦のない 糞の様な戦争を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし 三千世界の鴉を殺す 嵐の様な闘争を

望むか？

』

『クリーク!!クリーク!!クリーク!! (戦争!!戦争!!戦争!!)』

『 よろしい ならば戦争だ

我々は満身の力をこめて今まさに振り下ろさんとする握り拳だ
だがこの暗い闇の底で半世紀の間 堪え続けてきた我々に た
だの戦争では もはや足りない!!

大戦争を!! 一心不乱の大戦争を!!

我らはわずかに一個大隊 千人に満たぬ敗残兵にすぎない

ふるつわものだが諸君は 一騎当千の古強者だと私は信仰してい
るならば我らは 諸君と私で総兵力100万と1人の軍集団となる

我々を忘却の彼方へと追いやり 眠りこけている連中を叩き起こ
そう

まなこ髪の毛をつかんで引きずり降ろし 眼を開けさせ思い出さ
せよう連中に恐怖の味を思い出させてやる

連中に我々の軍靴の音を思い出させてやる

天と地のはざまには 奴らの哲学では思いもよらない事があるこ
とを思い出させてやる

カンパグルッペ一千人の吸血鬼の戦闘団で世界を燃やし尽くして
やる

最後の大隊 大隊指揮官より全空中艦隊へ

第二次ゼーレヴェ「あしか」作戦 状況を開始せよ

征くぞ 諸君

』

『・・・』

かつて見た男の演説の光景

戦争に対する狂気じみたその一つ一つの言葉は八雲紫が男に対す
る印象を狂人と思わせるなど簡単だった

そして最後の最後に彼は、彼が率いたミレニアムは敗北し、同時に
勝ったのだ

『楽しい戦争だった』

それが敗北し勝者になった狂人の最後の言葉だ

「駄目よ藍、今はまだ様子を見続けるわ」

紫が人間という種族の中で最も恐れを覚えた男の元にいた大尉の監視を続けることを話す

「しかし・・・」

「大丈夫よ、今の彼は博麗の巫女を守る役目を違えたりはしないわ。何かあればすべて私が終らせるから・・・それに」

スキマを通して見える1人の親友とその娘を見る八雲紫

「出来れば親友の悲しい顔を“もう二度と”見たくはないわ」

スキマを閉じ、紫と藍は別のスキマを通って姿を消した

26話

ザツザツザツ

「・・・」

シャベルを持ちいつものオーバーコートで雪を屋根から降ろす小夜

オーバーコートは宴会後日に文が持って来てくれた。置いてきた時より随分綺麗になっていた、僅かに椀の匂いがするのは彼女が洗ってくれたからだろう

前回の紅霧異変から早数ヶ月

4月下旬に差し掛かった頃、幻想郷は白い雪に覆われていた

小夜は人里にて屋根の上の除雪作業に取り掛かっていた、慧音から頼まれた仕事だ

4月になつてからも雪は溶ける事は無く、今も多少ながら降り続けている

それもあり博麗神社に参拝に来てくれる者達が少ない為、少し金銭面で問題がある。だから、こうして仕事を探しに人里に来たのだ

「おい小夜くん！そろそろ休憩にしよう」

「・・・」バツ

慧音の声を聞き、屋根から飛び降り着地する小夜

今やっている場所は慧音が勤めている寺子屋だ、雪の日であっても寺子屋に通っている里の子供やチルノや大ちゃんの様な妖怪の子供は元気に雪合戦をして遊んでいた

その中にはフランの姿もあった

まだ力のコントロールは完全では無いが1人で外に出ても大丈夫な程には改善され、宴会の時に慧音から寺子屋に通ってみないかとフランに提案した。レミリアからの許しも得てこの4月の始まりから

チルノたちと共に通いはじめた

「・・・楽しそうだ」

「そうだな。最初は不安がっていたがフランも最近はやっと寺子屋の皆と打ち解ける様になったよ」

「・・・雪は、未だに止む気配はなしか」

「ああ、確かにもうすぐ春になってもおかしく時期だが雪が止む気配はない。だが、別に珍しい事でもない。本当にたまにだが、4月に入って雪が降っていたという前例はあるからな・・・霊夢と霊香の方はどうだ？」

「同じだ。まだ異変だと断定しづらいらしい・・・様子を見ると言っていた、霊香は全て霊夢に任せるそうだ」

「そうか。まあ、里の者たちも特に不審がつてはいないし、子供たちはまだ雪遊びが出来るとはしゃいでいたしな」

「・・・」

「おーい！おおかみ兄ちゃん！一緒に遊ぼうよう！」

チルノから誘いの声が掛かり、他の子供たちも小夜を呼ぶ

だが、途中の仕事を放っておく訳にもいかない為、首を左右に振った

「いいよ小夜くん。もうほとんど終わっているから子供達の相手をしてあげて欲しい、それも立派な仕事だ」

「・・・分かった。慧音もどうだ？」

「私か？うーん・・・そうだな、たまには童心にかえるのも悪くないな」

結局、2人も混ざり皆で雪合戦をする事になった

数時間後

「楽しかったあ〜」

「そうか・・・良かったな」

あの後には慧音と俺対子どもたちという対決で雪合戦をやった
まあ能力を使い楽に避けながら相手していた
その為、卑怯だぞと言われたりしたが俺は知らない

「おおかみ兄ちゃんの能力は卑怯だよ本当に」

「・・・当たりたくはないからな。フラン、もう慣れたか？」

「うん。ルーミアやチルノ達も居たから大丈夫」

「他の皆も私達の知り合いだからと言ったすぐに仲良くなれましたよ」

「そうか・・・ありがとうな2人とも」

「フランは友達だからな。これくらい最強のあたいに掛かれば楽勝！」

そんなたわいも無い話をしながらフラン、チルノ、大ちゃんの3人と共に人里内を少し探索しながら帰宅していた

フランは何時もなら咲夜の迎えが来ていたのだが、今日は紅魔館の仕事が多忙で来れないために俺に任せられた

人里の探索はフランの希望で行っており、チルノと大ちゃんは帰るまで一緒だからという事で共にいる

そんな時だ。目の前にふわふわと白い塊の様な物が四人の方に向かって来た

「なんだなんだ？変わった雪だな」

「これも雪なの？全然地面に落ちないよ？」

「雪じゃないよこれ・・・魂魄じゃないかな」

「魂魄・・・？」

「はい。靈魂とも呼びますがけどつまり死者の魂です」

初めて見る死者の魂

いくら幻想郷でもそうそう魂魄が漂っていることは無いらしいが、
ならばなぜこの魂魄は人里に居るのか

遂に小夜の目の前にまで来た魂魄を右手で掴んでみる

魂など言うから触れない物かと思ったが普通に捕まえられた、感触
は柔らかく例えるなら出来たての餅の様なモチモチとした感じか

「お餅みたい。食べられるかな？あゝ」

「だ、ダメですよ！食べられない物ですよ！」

小夜の隣に飛びながら近づき、魂魄をフニフニと触りながら口に入
れようとするフランを大ちゃん在必死に止めた

ミョーン！

「……ん？今何か聞こえなかった？」

「え？」

「……」

チルノの言葉にフランと大ちゃんは耳をすませてみる

一方の小夜は人狼、つまり犬と同じように人間より何倍の聴力を
持っており先ほどチルノが聞こえたであろう謎の音をしっかりと聞き
とっていた

確かにみよーんつと聞いたことの無い鳴き声が聞こえたのだ

「あ、またなんか来る」

「「？」」

フランの言葉にまた前を向く一同

前方からやって来たのは白髪のオカッパ頭に腰に刀を帯刀した少
女がキョロキョロと周りを見渡しながら走っていた

「い、今誰かに半霊を触られたみよん！い、一体どこにいるのー！」
「・・・どうやら、これを探しているようだ。おい」

小夜の声に反応し、少女は急停止する

「な、なんですかみよん！こ、こっちは今大切な「・・・魂魄」半霊を探し、え？」

片手に持つ魂魄を少女の目の前に差し出すと少女は目を一瞬丸くして魂魄を抱きしめる

「よ、良かった！やっと見つかったみよん！・・・はッ！ん、ゲフン。え、えーと、これを見つけていただきありがとうございます」

やっとこちらに気づき、我に返った少女は咳払いをしてから丁寧な言葉使いでお礼をいった

先ほどのみよんは何だったのだろうか？

「自己紹介が遅れました。私は魂魄妖夢と申します」

「・・・博麗小夜」

「あたいはチルノだ！よろしくな！」

「はじめまして、大妖精といいます。皆からは大ちゃんって呼ばれます」

「フランはフランドール・スカーレット。長いからフランでいいよ、所でそれは妖夢の何なの？」

「これは魂魄と言って私の半霊なんです。私は半分人間ですが、半分幽霊でもあるんです」

「・・・？」

妖夢の説明を聞いても理解が少し出来ない

幽霊とはつまり死者であるが、この少女は半分生きていて、半分死んでいるとも言えるのか？

「ところで、小夜さんと申しましたね」

「・・・」コクッ

「つかぬ事をお聞きしますが、小夜さんは剣士なのでしょうか？」

「・・・これか」

自身の背中にある獲物を見て、妖夢の質問に納得した

今背負っているのは椀から受け取った白狼天狗が使用している剣

愛銃であるモーゼルM712の変わりの武装として持ち歩いている

「剣士じゃない・・・これは仲間、いや、知人から貰った物だ。剣の腕は素人だ」

「そ、そうなのですか？とても屈強な男性に見えたのでつきり腕の立つ剣士なのかと」

「おっと！おおかみ兄ちゃんの弟子になるならまずはあたいと戦ってからだ！」

「え？弟子？」

「おおかみ兄ちゃんをくつきようだと見抜いて弟子入りしようと思ってるだろ！だけど弟子にふさわしいかまずは1番弟子のあたいが見てやる！」

「・・・やめろ」

「ふみゃー！」

頭を掴んで向かおうとするチルノを止める

「むう、剣の腕は素人と言いますがこんな妖精が弟子入りするほどの小夜さんは強いのか？確かに妖気はその辺の妖怪たちよりも強い。うーむ、見てくれでは判断出来ないしやはり祖父が言った通り

斬ってみれば分かるかな」

ぶつぶつと独り言を始めだした

最後辺りに物騒な事を言っていたような気がするが聞かなかった事にしよう

「・・・あっ！そうでした、用事があるのですぐに行かなくては！では、私はこれで。お礼はいづれさせていただきますので」

そう言っただけでその場を離れていった妖夢

お礼はいらないと言えなかつたな

「意外と面白そうな奴だな。あたいの部下にいられてやってもいいかも」

「それはやめとこうチルノちゃん」

「・・・？、雪が強くなったな。早く帰ろう」

「えー、まだ探索終わってないのに」

「また次だ・・・行こう」

「むー、はい」

雪の降りが強くなったのを感じ、探索を切り上げて人里を離れた四人

フランを紅魔館に返した後、チルノと大ちゃんとも別れ1人博麗神社に帰宅する小夜

強く吹雪く空を1度見上げ本当に止むのだろうかと思いつたがら自宅に入ってしまった

設定と紹介 2

幻想郷住人紹介と小夜の事で一言 part 2

レミリア・スカーレット

紅魔館の主で小夜の義妹（六人目）

串刺し公ヴラド・ツェペシユの子孫だと言われているがアーカードの子では無い

カリスマ性のある吸血鬼に見えるが小夜絡みになるとカリスマもゴミ箱に捨てる勢いでくっつかかる

「いずれは紅魔館の使用人に引き入れて見せるわ」

フランドール・スカーレット

レミリアの妹で小夜の義妹（七人目）

自身の持つ力が強すぎる為、495年地下の部屋で生きていた吸血鬼

小夜の助力もあり地下から解放され力のコントロールを学びながら生活をしている。現在は人里の寺子屋に通いはじめた
「お兄様のお膝の上はすごく落ち着くんだ♪」

十六夜 咲夜

紅魔館のメイド長

かつて吸血鬼ハンターではないかと小夜は疑問を抱いていたが詳細は不明

「使用人として雇われた時は厳しく指導します・・・仕事以外で教えなければならぬ事の方が多そうです」

紅 美鈴

紅魔館の門番

昼寝してはナイフが頭に刺さる駄目門番

紅霧異変後からはフランのお相手（遊びや弾幕勝負など）を務める事が多くなつた

「1度だけでもいいので弾幕勝負ではなく、本気の試合をしてみたいですね」

パチュリー・ノーレッジ

地下図書館の管理者

動かない大図書館と呼ばれるほど地下からあまり出たこともなく、あらゆる本から様々な知識を得ている魔法使い

魔法使いでありながら喘息持ちという致命的な病状を患っている

「特に言う事は無いわね。魔理沙の件ではとても助かったけど」

小悪魔（こあ）

パチュリーの使い魔1

悪魔にしては大人しく真面目な性格で契約者であるパチュリーを尊敬していたりする

そんな性格な為か、時折関係無い事に巻き込まれたりと気苦労が絶えない事もある

「無口で無表情ですけど心配してくれたりお仕事を手伝ってくれたり優しいお方です」

ここあ

パチュリーの使い魔2

こあの双子の妹。姉と違い悪戯好きだったり他人をからかったりしたりと悪魔らしい所がある

「小夜さんのおかげでお嬢様をからかう機会が増えました」

ミスティア・ローレライ

夜雀の妖怪で小夜の義妹（八人目）

歌が好きで寺子屋の生徒だったり自分の屋台を持つ女将だったりする

チルノたちとはよく遊ぶ仲。彼女の屋台に小夜もたまに顔を出したりしている

「小夜のお兄さんは焼鳥食べないって言ってくれた優しい人狼妖怪よ」

リグル・ナイトバグ

蛍の妖蟲で小夜の義妹（九人目）

あらゆる蟲と意思疎通が出来、会話もする

頭部に生えた虫の触角と後姿からGだと間違われたり、見た目と一人称が僕と言う事もあり男の子だと間違われたりする事が多い

「兄さん、蟲の事をあまり知らないらしいから蟲について色々教えたから黙って聞いてくれたのが嬉しかったな」

射命丸 文

妖怪の山に住まう烏天狗の1人

文々。新聞の記者でネタあるところなら嵐の中も突っ込むほどのパパラッチ

小夜を山から出た白狼天狗の子供だと勘違いし、誘拐したあげく世話は部下の権に押し付けたりとかなり自由な性格。そんな性格もあってか不幸な目にあう確率が高い

「現在は小夜くんの女性関連のネタを探っております」

犬走 椀

妖怪の山に住む白狼天狗で小夜の義姉

幼き小夜を一時期世話をした事もあり、まだ小さかった小夜を弟の様に接していた。今現在でも扱いは変わっていないようだが・・・？

成長した小夜に哨戒白狼天狗の男性衣装と武器を与えた

「弟みたいなものですよ・・・ええ、弟です」

今泉 影狼

竹林に住む狼女

小夜と同じ人狼の種族、小夜の方から会いに行く人物で1番多い相手だ

わかさぎ姫と小夜と共に草の根妖怪ネットワークを立ち上げたが主な活動は決まっていない

満月になつても毛が伸びない小夜を少し羨ましく思ってる

「白狼天狗以外で人狼の種族は小夜くらいだから、話が合う時もあるよ。なんで博麗の養子になのかは知らないけど」

わかさぎ姫

霧の湖に住まう人魚

チルノたちとも交友があり、影狼とは草の根妖怪ネットワーク仲間
小夜とは湖でわかさぎ釣りの時に釣りすぎない様に注意したのが
出会いの始まり、影狼に小夜を紹介したのも彼女

「小夜くんなら影狼のいい相手だと思うけど博麗の巫女が1番の障害ね」

上白沢慧音

人里に住まう半人半妖

寺子屋で教師もしているがその授業内容はつまらないと幼かった小夜以外の子供達から不評を受けてる

霊夢曰く勘の鋭さは慧音の放つ仕置きの頭突きが原因じゃないかと語る

「唯一私の授業をつまらなくないと思ってくれる優しい子だったよ（嬉し泣き）」

稗田 阿求

人里の名家「稗田家」の9代目当主で小夜の義妹（十人目）

幻想郷の妖怪を記した書物「幻想郷縁起」を編纂するため、千年以上前から転生を繰り返している

名家であろうが関係なく1人の子として接する小夜を兄の様に慕う

幻想郷縁起にはまだ小夜の事は記していない

「小夜さんの事を幻想郷縁起に書こうか悩んでいます」

本居小鈴

人里の貸本屋「鈴奈庵」店主の娘で小夜の義妹（十一人目）

妖魔本という妖怪たちが書いたとされる書物を集め読むことが日課になっており、幻想郷一の妖魔本コレクターである

妖魔本は大半が読むことが困難な文字で書かれているが、彼女はそれを「読む」能力を持っているらしい

「主に学び書の書物ばかり借りています。それを面白かったと言うから小夜さんにはよほどの知識欲があるのかも」

東方妖々夢

27話

四月が終わり五月に入った

しかし未だに雪は止まず今も降り積もっている。そして今日も神社の屋根の上の除雪作業が始まる。霊夢と霊香も今回の冬の長さは異常だと判断し異変として原因を探しに早くから出ている

俺も付いていく筈だったが前回の異変の解決をほとんど俺がしてしまった故に霊夢が今回は自分の力で解決できるようにする為、俺は今回は休むように言われた

そう言われたが俺には八雲紫からの約束がある、調べるまでは協力無しでもいいだろうが原因が分かった時は例え来ては駄目だと言われても向かわなければならぬ

「兄さん」

「?、霊夢か」

除雪作業を一旦止め、屋根から降りる

「お疲れさま兄さん、またちよつと出掛けて来るね。昼食は作って置いたから」

「もう昼だったか、ありがとう・・・どうだ、何か分かったか?」

「まだ何も。異変なのは確かだけど誰がどうやって起こしてるのか見当がつかない、でも母さんも動いてるし必ず突き止めて見せるわ」

「無理するな・・・必要な時は、頼れ」パツパツ

「うん。ありがとう兄さん、行ってきます」

「・・・コクツ」

服や髪に付いた雪を払ってあげて、出掛けて行った霊夢を見送った後昼食を食べる事にした

とりあえず、昼食を食べた後は人里に向かつてみよう。当然待つだけなどするつもりはない、こちらはこちらで出来る限りの事をするまでだ

人里

ほとんどが雪によって真っ白な光景が広がり、子供たちは元気に雪遊びをしていた

外に出ている大人たちはたぶん子供たちの親だろう、見守りながら話し合っていた内容は冬の異常な長さについてだった。流石に不信感を抱き始めているようだ

たどり着いたのは稗田家の屋敷

千年もの間、転生を繰り返して記憶も引き継がれる阿求ならなにかしら力になるかもしれないと判断したからだ

「・・・」ガンガンガン

「はい。どちら様でしょうか？」

「・・・稗田阿求に博麗小夜が来たと伝えてくれ」

「分かりました。少々お待ちください」

稗田家に仕える給仕の女性はドアを締め、俺はとりあえず待つことにした

稗田家は古くから続く名家、そうそう他人を屋敷に招き入れる事はない。あっても当主が許可を出した者だけだ

「お待ちせしました。当主様から許可がありましたのでどうぞお入りください」

「・・・邪魔する」

中に入り、給仕の者に案内され阿求のいる部屋にたどり着く

「失礼します阿求さま。博麗小夜さまをお連れ致しました」

「どうぞ、入って下さい」

襖を開け、中に入り阿求の前に出された座布団の上に座る

「ようこそ小夜さん。お元気そうでなによりです」

「ああ・・・」

「もう下がって良いですよ。それと私が良いと言うまでこの部屋に近づかないよう皆さんに伝えてください」

「分かりました。失礼致します」

給仕の者は部屋を出て今この場には俺と阿求のみとなった

「あ、あの小夜さん。よろしければなんですけどもう少しお近くに行っても良いですか?」

「・・・構わない」

「で、では失礼します」

立ち上がり俺の隣に座り、その身を預けるように体を俺の方に倒しくつつく

「すいません。こんな事をお願いしてしまって」

「甘えたければそうしろ・・・俺は、問題ない」

「ふふ、やはり優しいですね小夜さんは」

稗田家に生まれる子は一子のみ、転生時に男子が女子かどちらに生まれるかは本人でも分からない

その為阿求には兄弟姉妹などは誰もおらず密かにそういった存在に憧れを抱いていたのだ。当主という肩書きが彼女に甘えを許してはくれなかったようだ

「それで今日はどのようなご用事で来たのですか？」

「異変の調査・・・阿求の知恵を借りたい」

「異変、この長い冬の事です。残念ですがたぶん私では力になれません。確かに少し遅めの春の到来はありましたが今回の件は前例がないんです」

「春が来ない理由はいい・・・何か春、もしくは冬に関連する妖怪か妖精を知らないか」

「春か冬に関連する・・・居ます。春告精という妖精が」

「春告精・・・？」

「はい、リリーホワイトといってその名の通り春を告げる妖精で春が訪れた日には必ず人里や他の場所にも春の訪れを報せに現れるのですが・・・今年はまだ誰も見てはいません。しかし、リリーホワイトはあくまで春を告げるだけで春を運んでくる妖精ではありません。今回の異変とは無関係だと思えます」

「・・・」

その後も阿求から情報と幻想郷縁起を調べた後、稗田家を後にした阿求からは「今度訪れた時はゆっくりしていつてくださいね」と言われた。異変の調査もあつて長居は出来ないが異変が終わり、遊びに行った時はそうすると答えた

人里から出て神社に戻る道中、調べて分かった事を脳内でまとめていた

春告精以外に冬にのみ現れる妖怪、レティ・ホワイトロックという存在

冬の時期のみ外に出てくるがそれ以外は何処かの日影に隠れて暮らしている。彼女もただ冬に現れるだけというだけで冬を長引かせるような力等はない

だが、この異変に関してこの妖精と妖怪は何かしらの鍵を握っていると判断している。あくまで予想だが出来れば接触はしておきたい

きやー

「？」

突如聞こえた女の悲鳴

人里から外に誰かが出た話はなかった筈だが、もし人里の人間ならば助けねばならない

悲鳴が聞こえる方向へ走るが雪の性でそこまで速く走れない。霊夢たちの様に飛べるようになれたらいいのだがな

そう思っていると前方から見慣れない少女が誰かから逃げるように飛んできた

そして俺を見つけた途端、急速して飛び込んできた所を片手で抱きとめた

「た、助けてください！」

「・・・落ち着け、何があった？」

涙目で助けを求める少女。どうやら人間では無く妖精のようだ。金色の髪に白い服ととんがり帽子を被り、背中には透明な羽が付いている

握られた手には白い光の様な物があり、何故か光から温かさを感じた

「・・・ッ」チャキ

「き、きた」

いち早く反応した小夜は剣の柄を掴み握りしめる。妖精も自身の追手に気付き小夜の背中に隠れた

「まさか、このような所で再開するとは思いませんでしたよ小夜さん」
「・・・お前は」

姿を現した妖精の追手に見覚えがあった

白髪のおカツパ頭に腰に2本の刀、そして彼女の隣に存在する霊魂
小夜は確信して彼女の名を呼ぶ

「魂魄妖夢」

28話

カンッ！キンッ！

ガンッ！！キリキリキリッ

「やりますね。素人と言っていましたでしたがそんな事は無い、充分本物とやれる実力はあるようです」

「・・・」

雪が降りしきる白銀世界の中、刀と剣がぶつかり合い赤い火花が飛び散る

刀を振るう彼女は魂魄妖夢、出会ったのはつい最近でそこまで親しい関係でもない

だが、何故か妖夢は後で様子を見る1人の妖精を追っていた。庇い始めたと同時に妖夢は刀を抜刀し斬り掛かってきたのだ

「なぜ・・・あんな妖精を狙う？彼女は無害だ」

「確かにただの妖精でしたら狙う必要はないでしょう。ですが、春告精であるならば放って置くわけにはいかないのです」

「・・・なに？」

春告精。だとすれば、あの子がリリーホワイトなのか
それでもまだ分からない事がある

「なぜ、お前が春告精を狙う？」

「正確には春告精が持っているものが本来の目的ですが、邪魔されても面倒なので捕まえるだけです。ふんッ！」

ギンッ！！

小夜の剣を弾き、即座に後へ後退し構えを解く腕力では負けないだろうが技術面では相手の方が勝っているようだ

「小夜さん。貴方は私にとって恩人の方です、今すぐ春告精をこちらに渡して下さるなら手は出しませんし春告精にも手荒なマネは致しません。ですが、もし断るならば・・・貴方を斬ります」

刀の切っ先を向けて交換条件を提案する妖夢

渡せば見逃す、断れば倒して連れていく。なんとも分かりやすい提案だ

「・・・お、お願い。助けて」クイツ

涙目で見上げながら左腕の裾を掴み助けを願うリリーホワイト

答えは既に決まっている

リリーホワイトの頭を軽く撫でた後、前に出て剣を持ち直し構える

「それが答えですか。では・・・」バツ！

その刹那、小夜の眼前にまで一気に詰めてきた妖夢

速い。並大抵の者でこれだけ速く接近出来るものはなかなかいない

ゼーレヴエ作戦で乱入してきたヴァチカン特務局第13課イスカリオテに所属していた刀を使う女の信者と良い勝負が出来るかもしれない

だが・・・

「ツーン!?!」

この場にいる誰よりも、終わったと思っていた妖夢が突如驚愕の声

を上げる

確かに捉えたと思っていた筈の刃は小夜には届いておらず、握っていた刀は後方に突き刺さっていた。変わりに自身の首元には小夜の剣が向けられている

何が起きたのか、単純明快な事

小夜は妖夢が接近してきた瞬間、刀を振るうよりも更に速く脚で妖夢の刀を上空へ蹴り飛ばした。ただ、それだけだ

「・・・」

妖夢を見下ろす小夜の目はお前では勝てないと伝える様にとても冷たい視線だった

妖夢は冷汗を流しながら数秒固った後、突如靈魂から弾幕が撃ち出された

「ッ・・・」

弾幕は周りの地面の雪に放たれ、降り積もっていた雪が跳ね上がり後退する小夜

弾幕で雪を跳ね上がらせ雪幕にして視界を妨げたようだ

雪幕がおさまった頃には既に妖夢の姿は無く、蹴り飛ばした刀も消えていた

「退いたか・・・捕える事は出来なかったが、まあいい」

剣を鞘に納め、リリーホワイトの元に向かう小夜

彼女と目線を合わせるように身を低くする

「・・・大丈夫か？」

「うん・・・あ、ありがとう。私はリリーホワイトです、貴方は？」

「博麗小夜」

「博麗？もしかして博麗の巫女の関係者ですか？」

「まあ・・・そうだな。外は危険だ、博麗神社に行くぞ」

「い、いいんですか？」

「春告精のお前に聞きたいこともある。それにどれくらい外に居たかは知らないが寒かっただろう・・・神社なら安全だし、暖もとれる」

「・・・分かりました。お願いしま、す・・・うーん」フラツ

「・・・」スツ

長い間追われていたのか、それとも別の事かどうかは知らないが随分疲れていたようだ

安心して気が緩み今までの疲労が一気に現れたみたいだ。体に負担が掛かり過ぎて気を失った

とりあえず彼女を抱えて神社に戻る事にした

雪の寒さは未だに衰えは知らないがリリーホワイトが持っている光が唯一暖かさを放っていた

妖夢が本来の目的で狙っているこの光は一体なんなのだろうか？

29話

博麗神社 居間

日は傾き、外は暗くなり始めていた

未だにしまうことのない炬燵に入り、その近くに部屋から持ってきた布団一式を敷いてリリーホワイトを横にさせている

彼女が持つていた光はとりあえず小瓶に入れて蓋をしておき、炬燵の上に置いてある蜜柑の隣に置いて観察している

見る限りは何の変哲もない小さな光の塊。明かりに利用出来るしほのかな暖かさは寒い日に携帯しておけば出歩く先でも暖がとれる便利な物だ

妖夢は何かしらの理由でこれを集めている。もしかしたらこれが今回の異変の原因の1つなのかもしれないが今はなんとも言えない状況だ

「ん……あれ、ここ」

「……起きたか」

リリーホワイトが目を覚まし、まだ眠たそうな目をゆっくりこする意識がはつきりし始め、小夜が目に入ると少し驚いた表情で口を開く

「あ、あれ、小夜さん？……ここは博麗神社？」

「ああ……あの後、気を失った」

「そ、そうだった。すいません、助けていただいたのに」

「……」フルフル

首を左右に振り、気にするなと促す

とりあえず落ち着いた後本題に入った

「お前を追っていた妖夢・・・これを狙っていた、これは何だ？」

光の入った小瓶をリリーホワイトの前に差し出すと彼女は両手で小瓶を持ちそれをギュツと抱きしめながら答えた

「これは『春の光』です。春になるとこの光が幻想郷を包み込んで春になるんです。でも、今年の幻想郷でこの光が見当たらなくなってしまうたので色んな所を周りながらやっと1つ見つけたんですが、その時に刀を持ったあの人に出会って・・・グスツ」

「・・・」 ナデナデ

「す、すいません」

その時の怖さを思い出してしまったのかまた泣き出してしまい、頭を撫でて落ち着かせようとする

しかし、この光が幻想郷を包み込んで春がやってくるとはまたよく分からない仕組みだ

まあ、今はそんな仕組みを理解する意味はない。重要なのはこれがなくなっている事によって春が来なくなり冬が長く続いている事は分かった

落ち着いて泣き止んだあと、リリーホワイトは続きを話した

「あの人が春の光を渡すように言った後に私が春告精だと気づいた瞬間一緒に来るように言われたんですが、怖かったので逃げ出したらいきなり襲いかかって来たんです」

「そうか・・・妖夢がそれを狙う理由、何か知らないか？」

「すいません、その事に関しては何も言いませんでした。ただ白玉楼と一緒に来てもらうって言われたのでその白玉楼に何かあると思います。きっと他の春の光もそこにあると思うんです」

「・・・白玉楼」

聞いた事の無い名だがどうやら無関係ではなさそうだ

後は春の光を集めて何をしようとしているのかさえ分かれば対処も考えやすい

単純な理由なら春を来なくさせ、幻想郷を滅ぼすくらいだろう。春が来なければ植物も動物も寒さに死に絶えて人間の食べ物も暖をとるための薪も手に入らず最悪人里は餓死して滅ぶ

そうなれば人間を糧にする妖怪の大半も全滅する

例え違ったとしても最悪はこうなってしまう。時間にまだ猶予はあるが早めに解決しなければやばいだろう

「ただいまー、うう、寒かった」

「・・・お帰り霊夢」

「ただいま兄さん。あれ、お客さん？」

「お、お邪魔しています」

霊夢が帰ってきたのを気に彼女の事と今回の異変について分かった事を全て話した

「・・・もう、兄さんは休んでて良いって言ったのに結局私より色々調べて帰って来ちゃった」

呆れた様な表情でため息を吐く霊夢

「どうやら、思ったよりも前回の異変解決での事を気にしているようだ」

「・・・すまない」

「ああ、ごめんなさい。私とお母さんの為に調べてくれたのに嫌味みたいに言っちゃって、兄さんは何も謝ることなんか無いのに」

「霊夢と霊香は恩人、家族・・・だから力になりたい」

「うん、ありがとう兄さん。それにしても妖夢が関わってるなんて思ってもみなかった」

「・・・知り合いか？」

「いえ、あんまり知り合いつてほどの仲じゃないわ。人里でちよつと見かける程度だし。魂魄妖夢の家系は冥界に存在する白玉楼に代々仕える護衛兼庭師つてくらいは知ってる。細かい事はお母さんに聞かないとわからないわ」

「冥界・・・死後魂が向かうというヴァルハラか？」

「冥界は死後、閻魔から転生や成仏を命じられた幽霊が駐留する場所。その何とかはらつていうのは知らないけど死んだ後の魂が向かう場所っていう意味ではあつてるかもしれないわね。その冥界は結界によつて守られて生者の往来も認知も出来ないし、正確な場所も分かつていないけど魂魄家や一部の者だけは通る事は出来る。異変を起すにはかなり最適な場所でしょうね」

なんとという事だ。博麗の巫女でさえ教えられない場所に異変の元凶が存在するのか

猶予はあるなどと言つたが、全くの逆だ。分からない場所を永遠と探し続けていたら間に合わない

どうしたものかと考え込む小夜

「あ、あの、お願いします！どうか春を、みんなの春を取り戻してくださいー！」

突然頭を下げて俺と霊夢に懇願するリリーホワイト

「私は春を告げる事しか出来ない妖精です、何の力もありません。ですからお願いします、私の代わりに春を取り戻してくださいー！」

「・・・」

「分かつてるわ。元々異変を解決するのは博麗の巫女の仕事よ、私に任せなさい」

「あ、ありがとうございますー！」

「ほらほら、分かったなら泣くんじやないの。可愛い顔が台無しでしょ」

「……」

どちらにせよ、やらなければ幻想郷は終わりだ。霊夢と霊香が守るこの幻想郷を救わなければならない

俺は博麗の巫女じゃないが博麗の姓を持っている。例え希望が薄かろうが何もしなければ前になど進まない

「リリーホワイト」

「は、はい」

「必ず、春を取り戻す……約束だ」

「……はい！」

「霊夢、リリーホワイトを泊まらせる……いいか？」

「全然大丈夫。お母さんはまだ帰って来ないけどとりあえず夕食の準備しましよ」

「……」コクツ

「あ、あの！私も手伝います！」

「そう？じゃあ、運ぶ時に呼ぶからそれまでは待つてて」

とりあえず夕食の準備に取り掛かる小夜と霊夢

結局、その後から霊香は帰ってこず夕食と風呂を済ませて寝る事になったのだが……

「今日も寒いし、リリーホワイトもいるから兄さんの部屋で皆一緒に寝ることにしたわ」

「……霊夢の部屋で良かったんじゃないか？」

「それもいいけど、寒さはどうにもならないじゃない？なら1つの部屋で皆一緒に寝れば少しは温かいでしょ」

「……」

とりあえず俺を真ん中に3組の布団が敷かれ、寝る体勢に入った

霊夢のおやすみーという一言で寝に入った数分後

「さ、小夜さん……もう寝てますか？」ボソッ
「……何だ？」

小さな声で俺に話し掛けてきたリリーホワイト
霊夢を起こさないように俺も小声で聞き返す

「あ、あの、その……そっちの布団に入ってもいいですか？」
「……寒いのか？」
「え、えっと……はい」
「……」

少し黙った後、掛け布団を捲る

「し、失礼します」

ゴソゴソと俺の布団の中に入って来るリリーホワイト
枕も隣に置きほぼ顔の真横に彼女の顔があつた

「……どうだ？」

「ありがとうございます、温かいです……すみません、助けてもらっ
ておきながらこんな事まで」

「別に……頼りたければ頼りリリーホワイト」

「ありがとうございます。あの、私の事はリリーって読んでください。
リリーホワイトだと長いですから……それとよろしければですけど、
お、お兄さんと呼んでもいいですか？」

「好きにしろ……リリー」
「ッ……はい♪」

そんな事がありながら寒い夜がまた過ぎ去っていった

30話

次の日

「……ッ、朝……腕が重い」

朝早く寒い中、目を覚ますが両腕が重い

右腕は分からなくは無。昨日の夜にリリーが寒いという事で俺の布団に入れてやった為、腕に抱きついているんだろが左側は覚えが無い

「……」スッ

「すーすー……うう、ん……」

顔を左側に向けると小さく寝息をたてて無邪気な寝顔で眠る霊夢がすぐ傍にいた

腕を離さないと言わんばかりに強く抱きしめ、寝間着越しではあるが霊夢の柔肌の感触や体温が左腕を通して感じられた

「……起きろ霊夢」ユサユサ

「んー、おはよう兄さん」

左腕を動かして霊夢を起こす。眠たそうな目をこすりこちらを見ながら起きた

「……霊夢も寒かったのか？」

「まあ、寒かったのもそうだけど……リリーだけずるいし（ボソツ）」

「……そうか」

最後の方は若干聞こえなかったがリリーと同じ理由だと納得する。別になにも言わずに入り込んで来たことに何か思ったことは無い、た

だ霊夢がそうしたかったなら別に構わない

その後、リリーも起こしとりあえず朝食を食べその後の事を話し合った

結果、リリーをとりあえず紅魔館に匿ってもらい霊夢の勘頼りに冥界を見つけないという手筈になった

紅魔館を選んだ理由は主にルーミア姉が近くに住んでいる場所にもっとも近いのと相当な実力者が揃う紅魔館なら安全だと判断したからだ

しかし、匿ってもらえるかはどうかは館主であるレミリアの許可が下りればの話だ

ダメならルーミア姉に任せるしかない

「うう、今日も寒いわね」

「・・・大丈夫か？」

「うん。これくらいなら全然、クシユン！」

「霊夢さん、やつぱり寒いんじゃないか？」

「その春の光は大切な物なんですよ？あんたが持つてなくてどうするのよ」

口を押さえ、小さくくしゃみをする霊夢

仕方ない事だ、こんな寒空の下では毎日異変解決の為に出払っていたんだ。下手をすれば風邪ぐらいひいてもおかしくなどない

「・・・」ファサ

「え、ちよつと兄さん!？」

「だ、駄目ですよ！こんな雪の日に上着脱いだら風邪ひきますよ！」

「・・・ッ」ミキツメキツ

上着を霊夢に渡した後、骨格が動き出した様に鈍い音を立てていき、白い獣毛が小夜を覆っていく。獣化を始めたのだ

数秒も経たぬうちに大きな白狼となった小夜は身を低くし、首を自

身の背中へ促す様に動かす

「乗れって事?」

『……』コクツ

「……分かったわ。ほら、リリーも」

「は、はい」

2人を背中に乗せ、身を起こし歩き始めた

上着のオーバーコートはせめての雪よけに使うように渡した

「さっきまで兄さんが着てたから少し温かいわね」

「はい、白い獣毛もふさふさしてて少しくすぐったいですけど温かいです」

『……』

何も言わずに歩を進めて行き、数分後には紅魔館の門が見えてきた
そんな門前に数人の人影があった。人数は5人、小さい影はチル
ノ、大妖精、フランの3人。残りは紅美鈴ともう一人は見知らぬ女性
だった

先にこちらに気づいたフランがいち早く小夜たちの元に向かって
きた

「お兄様♪いらっしやい」

『……』スリスリ

「あはは、くすぐったいよ」

まだ2人が降りていないため、獣化を解くわけにはいかないので頭
をフランにすりつけるようにしてこたえた

「おお！おおかみ兄ちゃんがおつきい白おおかみになってる」

「ほらほら、元に戻れないからあんた達離れなさいよ」

「えー、霊夢と、おつりりーじゃん。久しぶり！」

「うん、久しぶりチルノちゃん大ちゃん」

「今年は全然姿が見えなかったら皆心配してたんですよ」

「ありがとう。でも、この通り大丈夫だよ」

「おう！大丈夫なら安心した！そんでりりーと霊夢だけ乗ってずるいぞ！あたいにも乗らせろー！」

「フランもー」

チルノとフランに乗りたいとせがまれる中、見知らぬ女性が声を掛けてきた

「ふふふ、チルノたちが言っていたおおかみ兄ちゃんの博麗小夜くんは君ね。はじめまして私はレティ・ホワイトロックよ」

『……』スツ

「あらあら、頭を下げることなんてないのに。喋れないのかしら？」

「兄さんはこの状態は絶対喋らないわ。鳴いて返事する事はたまにあるけど」

「あら、霊夢ちゃんにりりーちゃんも久しぶり」

「ええ久しぶりレティ」

この女性がレティ・ホワイトロック

冬にのみ姿を現す寒気を操る程度の能力を持つ雪の妖怪。雪女と言えば分かりやすいだろう

「ちよつと門番、レミリアは今起きてるかしら？」

「はい。先程まで妹様の様子を見にいましたけど、少し前に中へお戻りになりました」

「そう、じゃあちよつとお邪魔するわね」

「ねえ、霊夢ちゃんたちは今日は何しに来たの？もしかして冬が長引いてるのに関係があるのかな」

変わりなくにごやかな表情のまま話を振ったレティに対して霊夢はいつも通り答えた

「ええ、冬が長引いた原因が分かったからその元凶の場所に行く前にリリーを匿ってもらえるか聞きにきたのよ」

「ふーん、そうなんだ・・・じゃあ、見過ごす訳にはいかないわね」

バツ！

嫌な予感を感じ、白狼のままの小夜と霊夢がその場から離れる
そして突如、彼らの周りに猛吹雪が発生した

「ちよ！レティ！」

「レティさん何を!？」

チルノや大ちゃんたちが驚く表情になるが霊夢は逆に「やっぱり」と呟いた

まあ当然と言えば当然だ。冬にしか己の本領を発揮出来ないならば今の様に冬が続いて欲しいと願うものだ

「異変解決の邪魔をするからには覚悟はいいでしょうねレティ？」

「そんな怖い顔しないで。せっかくの異変なんだから楽しまなくっちゃ」

「異変を楽しむ趣味なんてないし、寒いのは個人的に苦手なのよ」
『グルルウウウ・・・』

牙を晒し、唸り声をあげる小夜

どの様な理由であろうが博麗の巫女の敵は打ち倒すのみだ

「待って兄さん。レティの相手は私がするわ」

『・・・』

「大丈夫。いつまでも兄さんに守られる訳にはいかないわ、私もお母さんから博麗の巫女の名を受け継いだんだから」

「大切なのは分かるけど過保護はいけないわよお兄ちゃん」

それだけを言い残し、一気に空へ飛んでいった2人

霊夢が先手をとり、札を取り出してレティに向かって投げる。レティも負けじと弾幕を放ち迎撃する

チルノや大ちゃん、リリーなどは様子を見守るしかなく、フランは交ざりたそうに見ているのを美鈴が止めていた

小夜も獣化を解き、霊夢の戦いを見守っていた

「早速行くわよ霊夢ちゃん！」

「寒符『リンガリングゴールド』」

レティの周りから霊夢に向けて白い空気が放たれた。寒気だ

その寒気の中から青い弾幕が現れ霊夢を取り囲み、さらに大きな弾と小さな弾をいくつも放つ

「ッ、弾幕がいつもより濃い。この真冬の環境の性で妖力が上がってる」

「そっ♪甘く見てると痛い目にあうわよ霊夢ちゃん」

「ご忠告どうも！」

どうやら普段よりも弾幕の力が上がっていることに多少驚いているようだがそれでもレティの放つ弾幕を札で相殺したり、見事な回避術で避けたりと確かに腕を上げている

実際に小夜自身も霊夢の特訓に付き合う事はあるが真剣勝負を挑んだ事は無い、霊香も同じだ

俺が知らない間に既にいくつも妖怪退治を経験しているそうだがその時の様子をしっかりと見た事も無い、今回が初めてと言える

「これで終わりよ」

「霊符『無双封印・集』」

弾幕勝負は霊夢がスペルカードを決めて勝ち星を得た

「あいたたた。やっぱりちよつと強くなったただけじゃあ霊夢ちゃんに勝てないか」

「この程度で負けてたら博麗の巫女は名乗れないわ。残念だったわね」

「そうね。特にお兄さんにいい所を見せる事が出来て嬉しいものね」
クスクス

「・・・うるさい」スタスタ

「レティ！大丈夫!?!」

「ええ、大丈夫よチルノ」

弾幕勝負を終えて、座り込むレティの元にチルノが駆け寄り心配そうにしていた

大ちゃんに聞いた話だがまだチルノが氷の力を上手く操れなかった頃に同じ特性を持つレティから力のコントロールを教わっていたそうだ。今の俺がフランにやっているのと同じだ

そのおかげで無闇矢鱈に凍らせる事がなくなり他の妖精とも遊ぶ事が出来たらしい

チルノにとってレティという存在はとても大切な存在のようだ

「どう兄さん？私だって強くなってるのよ」

自慢げに言ってくる霊夢

確かに見事ではあった『弾幕勝負』という壇場ではだ

本当の戦場では回避術や弾幕の扱いは多少役に立つだろうが相手を完膚なきまでに倒すという覚悟と非情さが無ければきっと霊夢は生き延びれないだろう

・・・いや、やめよう

此処は幻想郷だ、戦場では無い。元の世界の戦争のルールなんて物は無い、弾幕勝負というルールがこの世界の戦いの規則だ

「ああ、見事だった・・・綺麗だったぞ霊夢（札や霊気の弾幕が）」
「き、きれツい?!・・・あ、ありがとう／＼／＼」

そのままの感想を言ったら赤くなったまま俯いてしまった。レ
テイの寒気にやられたか？

まあこんな寒い中であんなに動けば身体が冷えるのは必然だ。少し紅魔館で休むことにしよう、まだ日は登っている最中だ沈むまで時間はまだある

とゆう訳で早く紅魔館へ入る事にしたが何故か美鈴やレテイはニヤニヤと笑い、大ちゃん、リリー、フランは羨ましそうな目線でこちらを見る

ちなみチルノは霊夢の顔の紅潮に対して指摘したら霊夢の容赦ない弾幕によつて散った

おまけ

「ねえ、小夜くん」

「？」

チルノが霊夢の弾幕にやられている所に突如声を掛けてきたレ

テイ

「霊夢ちゃんの実力も分かったでしょ？あんまり過保護に扱っちゃあ駄目よ」

「・・・そうだな。だが、霊夢は家族・・・守る事に変わりには、無い」
「随分心配症なのね・・・それとも霊夢ちゃんを守らないといけない理由があるのかな？」

「・・・」ピタッ

「貴方は確かに霊夢ちゃんを守りたいっていう気持ちは本物なんだろうけど、それは本心から？それとも霊香ちゃんか・・・紫ちゃんに言われたから？」

「・・・」

「君は表情を表に出さないから仮に嘘を言っても疑われる可能性は低いでしょうね。で、貴方の言っていた言葉は本心？それとも嘘？怒らないし霊夢ちゃんにも喋らないからお姉さんに聞かせて」

「・・・同じ嘘を言うお前に、話す義理は無い」

「あれ？私、何か嘘ついたっけ？」

首を傾げて思い出すような素振りを見せるレイティに対して小夜は続けた

「何が異変を楽しめ、だ・・・冬が続く望みなど最初から抱いていないだろう」

「ありやりや、バレちゃった？」

レイティは確かに冬にのみ力が発揮する妖怪だ。しかし、彼女自身は四季の訪れが壊される事を本心では望んでいない

春が来れば夏が来て秋が来れば冬が来る、その四季のめぐりは自然の摂理だからだと

「・・・嘘つきに話すことはない」

「ふふふ、今日は私の負けね。でも約束して、霊夢ちゃんの為に死んでも守るような事は絶対にしないでね」

「・・・」スタスタ

最後の約束事に対し何も答えずに小夜はその場から離れた

31話

紅魔館 大広間

玄関前で雪を払い、大広間に入る小夜たち
チルノやレティたちもフランの許可で中に入ってきた

「あいも変わらず、趣味が悪いわねこの館の内装も」
「め、目が痛くなりそうです」

初めて見る紅魔館の赤い色の内装景色にリリーは少し啞然として
いた

確かにあまり目に良くないのは確かだ

「ようこそ紅魔館へ、小夜様、霊夢さん、リリーホワイトさん」
「ちよつと咲夜、兄さんだけ様呼びつてどういふことよ」

突如、何も無い場所から姿を見せる咲夜

当然初対面であるリリーは驚き、レティは少し驚く程度ですぐいつ
もの表情に戻った

「あの、何故私の名前を？」

「お嬢様から全てお聞きしております。自己紹介が遅れました、紅魔
館のメイド長、十六夜咲夜と申しますお見知りおきを」

「咲夜ちゃんかー、私はレティ・ホワイトロック。よろしくね」

「ちゃ・・・私の事は咲夜と呼び捨てでも構いませんので」

「えー、咲夜ちゃんの方が可愛いのに。ねえ、フランちゃん、小夜くん」
「うん♪フランもいいと思う」

「・・・？」クイツ

何故、俺に聞いた？と思わせるように首を傾げる

「だって、今この場にいる男の子は小夜くんだけでしょ？男の子からの意見も聞きたいじゃない」

「・・・咲夜は、呼び捨てが良いと言っているが」

「もう、そんなんじやあ女の子の心を掴めないわよ？」

「・・・」

もはや何を言いたいのか分からず沈黙になった

「やれやれ、騒々しいものね」

「これはお嬢様」

「客人のお出迎えご苦労さま咲夜」

大広間の二階に続く階段から下りてくるレミリア

そのまま霊夢と小夜の前まで来て挨拶をする

「ようこそ我が紅魔館へ。それと外の騒ぎと何をしに来たかは分かっているわ」

「そう。じゃあその辺はどうなのかしら？」

「もちろん許可するわ。部屋はたくさん余っているし多少人数が増えた所で苦にはならないわ」

「・・・すまないレミリア」

「ふふ、この程度どうという事はないわ。フラン、せっかくだしこの子を部屋に案内してあげなさい」

「はい。じゃあ行こうリリー」

「は、はい。ありがとうございますレミリアさん」

「よっしゃ！よく分かんないけどリリーはあたいたちに任せろ！」

「ま、待ってチルノちゃん！」

「リリーちゃんたちは私が見ててあげるわ。頑張つてね」

リリーを部屋に案内するフランに続きチルノと大ちゃん、レティも大広間から離れた

「さて、リリーの件も何とかなったし冥界を探しに行きますか」

「・・・休まなくて大丈夫か？」

「大丈夫。せつかく異変の原因がだいたい分かったんだから早く解決したいもの」

「・・・分かった。レミリア、リリーを頼む」

「ええ、任せてちょうだい」

リリーをレミリアたちに任せ、冥界を探すために2人は紅魔館を後にする

2人が出たあと、レミリアが咲夜を呼び出した

「いかがいたしましたかお嬢様」

「咲夜、貴女に命令するわ。2人について行って異変解決に協力してきなさい」

「はっ？い、いえ、命令であるならば構いませんが何故私を？」

「さつきまで暖炉の薪と食料の方も尽きかけてると言ってたでしょう？これ以上長引けば危険なのは一目瞭然。早々に異変を解決する必要があるわ。実力のある者が同行すれば彼らにとっても益はあるはずよ・・・とにかく行ってくれるかしら？」

「・・・分かりました。早々に解決し、すぐにお戻りします。では」フツ

咲夜が目の前から消えた後、数少ない窓から外を見るレミリアはそこから見える小夜の姿を見て呟いた

「何故、貴方の運命が急に見えなくなってしまったの・・・悪い予感がするわ。お願い咲夜、小夜を死なせてはいけないわ。フランの為にも必ず誰一人失わずに帰って来なさい」

門前

「で、レミリアの命令で付いて来るのね」

「はい。早々に解決する為にお力添えをするようにとの命です」

「・・・まあ、早めに解決したいのは確かね」

「損はさせません。必ずお二方の力になる事を誓いましょう」

「分かったわ。兄さんもいいわよね？」

「ああ・・・じゃあ、行こう」

咲夜を同行させ、冥界を探すために3人は歩を進めた

「で、どこから探すつもりなの？」

「まあ、勘頼りとか言ってたけど流石にそれじゃあ時間が掛かるから
慧音か文あたりでも捕まえて何か方法がないか聞き出すわ」

「・・・大丈夫かしら」

「なんとかするさ」

と言うわけで人里へ向かう3人

しかし、その道中で先に違和感を感じたのは小夜だった

「・・・空気が、変わった？・・・なんだ、此処は？」

そこには人里には無い大きな屋敷が目の前にあった

その大きさは稗田家の屋敷より遥かに大きい

しかも、先程まで一緒だったはずの霊夢と咲夜の姿も無かった

「・・・近くに霊夢と咲夜の匂いが無い・・・罨か？」

先程まで一緒だったはずの2人の匂いも辿れないのはおかしかった。何者かによる罨にはまり2人から引き離された可能性がある。そしてその罨を張った者はこの屋敷内の何処かにいるはず。とにかく待っていても始まらないため、屋敷の入口のドアを開き、ゆっくりと中へ入っていった

その頃

「・・・」

やっと人里についた2人は入口辺りで振り返り、この場にいない人物を口にする

「兄さんはどこ？」

「小夜様は何処に？」

32話

屋敷内

明かりは無く、ほとんど薄暗いが埃などはなく清掃は行き届いてはいた

誰か居ないか声を出しても誰も現れず返事はない、人は誰も居ないようだ

「人は」だが

「・・・獣の匂い、猫が数匹・・・一匹に妖気あり、もう一人は猫じゃない・・・これは、狐か。妖気が凄まじい、何者だ？」

鋭い嗅覚と感覚を研ぎ澄ませ、屋敷内にいる者たちを感じとる

妖怪が2人に何故か猫の気配が複数。しかも一人はこちらに強い妖気を放ちここへ来いと八雲紫が使った方法で呼んでいる、しかし殺気は感じられない

靴を脱ぎ、放たれる妖気の下へ向かっていき一つの襖を開けて中に入った

「よく来ましたね」

「・・・」

そこに居たのは金髪のショートボブに金色の瞳を持ち、その頭には角のように二本の尖がりを持つ帽子を被っている

そして何より特徴的なのがその背後に存在する9本の尾、幻想郷縁起で見た人物と特徴が一致している。この女が八雲紫の式神

最強の妖獣・八雲藍

「貴方の事は紫様から聞いているぞ博麗小夜・・・いや、大尉」

「・・・」

かつての階級を口にする。どうやら俺の事を紫から聞いているようだ

「・・・八雲の式神が、俺に何の用だ？」

「そうだな、強いて言うなら・・・お前という存在がどういう者か確かめに来た」

「・・・なんだと？」

なんだ今の答えは？

紫から聞いていると言っておきながら俺がどういう存在か確かめるだど・・・まるで名前だけしか教えられていないような、まさか本当にかつての階級の呼び名しか教えられていないのか

だとしてもなぜだ？なぜ八雲紫は俺の事を知っていないながら誰一人にも俺の詳細を話そうとしない、自分の式神にすら何も教えないとは何を考えているんだ

「・・・俺の事は聞いたんだろ？」

「いや、紫様から聞かされたのはお前のかつての呼び名のみだ。だが、紫様がお前に対してあれほど警戒しているのは初めてだった。だからこそ、お前が危険かそうじゃないか確かめる為にお前をこのマヨヒガに連れてきた」

「・・・」

マヨヒガ

何処にあるのかは誰も分からない隠れ里のような場所

そこに迷い込んだ旅人が日用品を持って行ったら幸福が持たされたと言う話があるが、実際に迷い込んだ者はおらずただの噂話程度しか語られていない

「さて、話を戻すでしょう。君はただの外来妖怪なのか？君が覚えて

いる自分の事、全てを話してもらおうぞ」
「・・・」

特に話してはいけない理由などは無い
俺は全てを話した、ミレニアムの事もそこに居た俺の事も全てを、
この八雲藍が望んだから

「・・・なるほど、紫様がお前を警戒する訳だ。人工的に作り出したき
吸血鬼の軍、外の人間にそこまでイカレた奴らがいるのか」

「・・・全てを話した。全てを知ったお前は俺をどうする？」

「そうだな、危険分子は出来る限り早く排除する必要があるだろうが
私はかつてのお前を知ったが、まだ今のお前を知った訳ではない・・・
博麗小夜、私と弾幕ごっこをしろ」

「・・・なぜだ？」

「お前は人間ではないが博麗を名乗り、巫女を守る立場にいるのは
知っている。お前が巫女の守護者としての力量と自覚があるかを私
が見てやる・・・もし、認めさせる事が出来たらこれをお前にやる」

懐から取り出したのは小さなコンパスのような物だった

「異変を解決する為に冥界を探しているのだろうか？この羅針盤は幻想
郷の何処かにある冥界の入口に向かって針を示す代物だ。私がお前
を認めたらこれをやろう、当然駄目ならばこれはやれん」

「・・・そうか」グッ！

拳を握りしめ、八雲藍に対して戦闘の体勢を取る

「では、いくぞ。出し惜しみは無しだ、全力でかかってこい。でなけれ
ばすぐにやられるぞ」

険しく、鋭い目で小夜を見る藍の周りに多数の弾幕が現れる。屋内

故に数こそ今は少ないが、弾幕の密度、一つ一つに込められた妖力はレミアやレティたち等と比べものにならないほど強力だと感じさせられる

一方の小夜の方は周りに霧が現れ、顔から徐々に獣化を初める。彼が八雲藍に対しては何も感じないし、目的もどうでもいい。だが、異変を解決するためにはあの羅針盤が必要不可欠、彼はなんとしても手に入れなければならない

「・・・」バツ！

右拳を握りしめ、その場から一瞬にして藍の目の前に接近し、拳を容赦無く彼女に振るった

中庭

「藍さまに言われたから猫たちと一緒に入口近くから離れて中庭に来たけど・・・藍さま、どうしたんだろう」

中庭で無数の猫たちと共に心配そうな表情をする少女が一人

赤い服に胸元に結ばれている黄のリボン

緑の大きめの帽子からはみ出る猫耳は垂れ、2本の尾がゆつくりと揺れる

「まあまあ、心配してたって何にも始まらないしのんびり待とうよ」

「え?!・・・あつー！居なくなっただと思っただらまた突然帰ってきて！君は橙の部下なんだから勝手にどっか行かないでよー！」

「無理無理、君だつて猫なら分かるでしょう？猫は気まぐれで自由なんだよ。それに僕は、どこにでもいるし、どこにもいない」突然消えたり現れたりとは当たり前なんだから早く慣れてねー」

「また分からない事言つて橙をバカにする！シユレ君のバカー！」

中庭にある葉を枯らした1本の木の木の太い枝の上で横になりながら彼は突然そこに現れた

シユレ君と呼ばれる猫耳を生やした少年が橙を適当に構っていた

「ん？この気配・・・面白くなってきたかも♪」

何かを感じとり、少年はニヤリツと口を歪ませた

33話

屋内

先手を取り、右拳を振るう小夜だが

「速いな、流石人狼だ・・・私から見たら少し速い程度だがな」

「・・・ッ」ガンッ！

弾幕を使い、小夜の拳を防ぐ

弾幕を破壊し後に下がりビリビリと震える右手を押さえる。恐怖しているのではない弾幕に込められた妖気があまりに強く硬さが尋常でない

数が制限されているが故に一つの弾幕に込める妖気の量を増やせ、破壊力を高められる

あんな物が直撃すれば人間を殺す事も出来るし、如何に人狼である小夜でもひとたまりもない。力の出し惜しみは即敗北に繋がる、八雲藍の言う通りだ

「どうした？どこから来ても構わないぞ？」

自らまだ攻めないのはそれだけ負けたくないという自信があるのか、それとも実力を見るためにあえて攻撃に出ないのか、仮に自信があつたとしてもこの八雲藍からは油断も無く常にこちらに集中している

強い力を持つ者は心の奥に余裕が持てる、そしていつしかそれが油断となる。かつての経験から言えばそんな輩は何度も見てきたがこの女は確実に違う

強い力を持ったとしても余裕を持たせず、油断を作ろうとは絶対にしない戦いに慣れた「本物」だ

「・・・・・・・・」

「来ないなら、次はこちらの番だ」

「式神『前鬼後鬼の守護』」

スペルカードを宣言し、左右に黄色と緑の大弾の弾幕が打ち出された

小夜は軌道を読み、弾幕を避けるがそれぞれの弾幕からさらに小弾の弾幕をばら撒き始め小弾はそれぞれ時間差を置いてから小夜に向かって追尾し始めた

小夜が持つ弾幕を防ぐ手は哨戒白狼天狗の剣で弾くか盾で防ぐか、確実に回避出来る霧になる方法がある

体を霧に変え、追尾する弾幕を回避しそのまま八雲藍を囲み一気に叩く手にでた

「これが君の能力か。弾幕はすり抜けるし追尾型は君を見失ってしまう厄介な能力だ」スツ

「ツ……」

視線を動かすどころか、死角を狙ったにも関わらず放った拳を簡単に回避された

その後も様々な角度から腕や脚を戻しては攻撃を繰り返すがその全てを回避されてしてしまう

「体の一部を戻した時に一瞬ではあるが君の妖気がわずかに伝わり次に何処から来るかが分かる。ですが、それだけ高い妖気を持っていて戻した時に感じる妖気の小ささはよく抑え込んでいると感心します……しかし、まだまだ未熟です」

バキッ！

「ッ！……かッ」

上半身を戻し、両拳を放つが反撃の弾幕をもちろ腹部に当たり襖を破って行きながら吹っ飛ばされ中庭に叩き出される

「私で無くとも古参の妖怪ならばこれくらいの妖気の探知は当たり前に出来る。私の事を稗田家の当主は最強の妖獣などと語るが、私如きが最強を名乗るなど恐れ多い」

「・・・ペツ」

血を吐き出し、口元を手で拭う

強い。今まで出会った敵の中でアーカード程とはいかないにしてもその強さは本物だ

きっと、銀など使わずともかつての俺を簡単に殺していたかもしれない

さて、どうする？能力を使っても次の手は先読みされる、八雲藍自身はそこまで接近戦が得意ではなさそうだが弾幕を的確に当てて相殺してくる

完全な獣化をしたところで勝てるかどうかもわからない

「おやおや、いくら大尉であっても倒すのは難しいみたいですわね」

「ッ!!」

首を左右に振り、声の本人を探し出す小夜

彼はその声の人物をよく知っていた。かつて同じミレニアムに所属し、対アーカードの最終兵器として創り出されたヴェアヴォルフの一人

シュレディンガー准尉の声だと確信したのだ

「大尉、上ですよー。上、上」

「・・・シュレディンガー・・・准尉」

見上げると木の枝から自分を見下ろすシュレディンガー准尉がい

た

なぜ彼が此処にいるのか、アーカードに取り込まれる任務はどうなったのか、尽きぬ疑問ばかりが浮かぶが今はそんな事はどうでもよかった

「博麗小夜の知り合いか？その服装を見る限り外来人・・・いや、ミレニウムにいる者はほとんどが人工吸血鬼ならばまさか彼も？」

「さっすが八雲藍さん。傾国の美女とか言われる九尾の狐に憑いた式神だけあつて頭の回転も速い速い、その通り僕もミレニアムの幹部『ヴェアヴォルフ』の一人シュレインガー准尉です。猫耳についてるけど立派な特殊能力を持った人工吸血鬼です♪」

いつも通りのお気楽な喋り方で自身の紹介をするシュレインガーは木の上から飛び降りる

「大尉！キャッチ！」

「・・・」スツ ドサツ

「よっと、ありがとうございます大尉」ビシッ

落ちてきたシュレインガーを受け止め、腕から離れ俺に向かって感謝の言葉と敬礼をする

「それでミレニアムの者がどうやってマヨヒガに入ってきた？結界がある限り見つける事も入ることも出来ない筈だ」

「いや、普通に入って来たよ」

「・・・まあいい。では別の質問をしよう、私の前に立ちはだかりどうする気だ？」

「それはもう戦友の大尉が危ない目にあつてるんだから助けなきや駄目でしょう。常識的に？」

「やめておけ、彼ならともかくとして君では勝負にならない」

「やってみなくちゃわからないじゃん」パシッ

懐から大振りのナイフを取り出し、藍に向かって突撃する

「どうなつて知らんぞー!」

弾幕を放ち迎え撃つが、シユレディンガーは避ける動作もせず突っ込んでいき、そして……

グシヤ!

「なっ!?!」

「……」ドサツ

小夜に対して放っていた弾幕と同じ妖気を込められた物を頭からもろに喰らい、口から上が消し飛び血の池が出来上がる

あまりに酷い光景だ

「しまった!私とした事が力加減を間違えて先程までの弾幕を……くツ」

自ら犯してしまった失敗に悔いるように、彼の死体を見る八雲藍
そんな時だ

「……シユレ君?」

複数の猫たちと共に現れたのは前までシユレディンガーと一緒にいた橙だ

「ツ、橙!駄目だ、お前は見ちゃ」

「藍様が殺したの、シユレ君を……」

「なに?どういう事だ橙?」

「う、うう……ら、らんしやまが、う、うわああん!!」

「あーちえ、橙、泣かないで。その彼の事は……本当にすまない」

泣き出してしまった橙を泣き止ませようとする。まさかの出来事に彼女は混乱してしまっている

「はい、ハンカチ」

「ああ、すまない。ほら橙、これで涙を拭いて……ん？」

突然背後から渡されたハンカチに八雲藍は一瞬だけ思考停止したが、すぐに状況を整理した

博麗小夜は今も木の下で立ち尽くしてこちらを見ている。そして目の前には橙がいる、では誰がこのハンカチを渡したのか

彼女はゆっくりと背後を振り返るとそこにはありえない人物が立っていた

「どうも♪」

「な?!き、貴様どうして!?!」

そこにはピンピンとしているシュレディンガー准尉の姿があった

「シュ、シュレ君?あれ?でもさっき」

「またまた引っ掛かったー。どう?びっくりした?まさか僕が君の主人さまに殺されちゃったと思った?ねえねえ今どんな気持ち? W W W」
「……」プルプル

自分は騙されたのだと気づいた橙はプルプルと震えながらシュレディンガーの前にまで歩く、そして

「シュレ君のバカーー!!!」ブンツ!

「おぶっ!!」バチツーン!!

強烈な平手を喰らうシユレディンガー、橙はその後屋敷奥に泣きながら走って行ってしまった

「酷いよね。ちよつとからかっただけでこんな仕打ち」

倒れたまま自業自得だと思わせる台詞をほざくシユレディンガー

そしてゆつくりと立ち上がり雪を払った後、ニヤリと笑みを見せながら八雲藍を見る

「・・・どういうわけだ？確かにあの時、私はお前を殺してしまったのだぞ」

「うん、死んだよ確かに。でも僕は気分屋だから死にたいときは自分で決めるから死なないんだ。さて、大尉この人倒すの手伝うけどいいかな」

「・・・」

大尉は何も答えず八雲藍を見る

そもそもこの戦いを起こしたのは彼女だ。2対1の戦いを許すかは彼女が決める事だ

「・・・いいだろう（奴の言っていた特殊能力、それが死んだはずなのに生き返った理由に関するならその能力の正体も把握しておきたい。あと橙が来れないように結界を張っておくか）」

許可が出された後、シユレディンガーは大尉の下に行き、またナイフを手に持つ

「大尉、僕が隙作りますんで1発で決めちゃってくださいね」

「・・・ああ」

2人は一気に駆け出し、八雲藍の下へ向かう

「1人増えたところで勝てると思うなよ！」

弾幕を放ち応戦する。量はシュレディングーの方が多く、小夜の方は少なめだった

シュレディングーは当然避ける事が出来ず、弾幕の餌食になり小夜は藍の懐に入り蹴りを放つが当然避けられる

「どーん！」

「ツ！チツ！」

避けた後、不意に背後からシュレディングーが現れナイフを刺そうとするが弾幕に撃たれたまたやられる

そしてまた小夜の攻撃が始まり、また死角からシュレディングーが現れ不意打ちをする

「くツ、こしやくな。ならばこれでどうだ！」

「行符『八千万枚護摩』」

2枚目のスペルカード宣告

高密度の札状の弾を180度以上の開きを持つ扇型に射出された。

そして同時に全方位へまばらに光弾も発射される

広範囲殲滅型のスペルカードのようだ

しかも扇の型が徐々に徐々にと大きくなり始め、衰えは一切感じられない。このままでは2人は追い詰められるだけだがシュレディングーも小夜も顔色を一切変えずに居た

「ふーん、広範囲の技だね。でも、それは失敗じゃないかな？」

また札弾の中突っ込みやられるシュレディングーだが、一気に背

後に回り込みナイフを逆手に持ち替え向かっていく

「貴様のやり方は既に見切ってる！」

通常の弾幕を作り出し、背後へ振り返り放とうとしたが

「だと、思うじゃーん」バシユ！

「ツ！目、目に何か?!」

藍に向けられたと思われたナイフは自らの首の動脈を切り裂き、吹き出した血が藍の目に入り視界を塞いだ

「今ですよ大尉」

「……」バツ！

「くッ！」

霧になり弾幕を抜け、手刀の構えをとり藍に向かってはなたれた。藍は突然の視界封じによって混乱しておりうまく妖気を探知出来ず、ただ腕をクロスして防御に入った

「……?」

しかし、一向に何もこぞ疑問に思った藍は目に付いた血を拭いゆつくりと開く

最初にみえたのはまっすぐ自分に向けられた手刀、そして表情を変えずに自分を見る小夜の姿が見えた

「あーあ、大尉。せっかくのチャンスだったのにどうしたんですか?」
「……俺は……お前に勝つ為に倒す為に、挑んだんじゃない……お前を認めさせて、羅針盤を手に入れ霊夢たちと異変を終わらす……何より霊香の友人、紫の身内でもあるお前を傷つけたく

ない……霊香たちが悲しむ」

「なっ……」

八雲藍は驚愕した。あれだけ容赦のない攻撃を何度も行った相手に対して最初から勝つ気も倒す気も無くただ認めさせたいだけと小夜が告げた事に

藍自身も小夜の実力をずっと見定めていた。だが彼がそんな思いで挑んでいた事は全く知らなかったのだ

「大尉、変わりましたね。喋ったのもそうですがかつてより甘くなり
ましたね？」

「……」

シユレディングーは知っていた。かつての彼が自身より実力の無い者に対する慈悲の心を僅かながら持っていることを、ゼーレヴァ作戦でもイスカリオテの2丁銃使いに対して発砲はしておきながら殺しはしなかった

そして幻想郷に来てからもできる限りの不殺を貫いてきた。約束でもあり、それがこの世界でのルールだからだ

「……行くぞ」

「行くって何処に？」

「……やる事がある……お前の力を借りたい」

「いいですけど、此処から出るの大尉では無理ですよ。なんかバリバリする壁が張られていますから」

「……」

手を口元に置き、どうするかを考慮する小夜

「……私が出してやる。それと小夜くん、これを君に渡すよ」

小夜の手のひらに羅針盤を置く藍。小夜は疑問に思い首を傾げた、なぜこれを渡してくれたのか

「確かに私の様な古参の妖怪と渡り合うには君の今の實力ではまだまだだ。だが、君の異変を早期に解決したいとゆう思いに負けたよ。それだけこの幻想郷を思ってくれているのだろうか？」

「・・・俺の居場所・・・霊夢、霊香の故郷・・・壊させは、しない」「そうか、ありがとう小夜くん。では、一時的に結界を解く、外に向かつて歩いて行けば此処に来る前に君が居た場所に出るだろ」

「・・・ありがとう」コクッ
「・・・ああ」

小夜は羅針盤を懐にしまいシユレディングーと共にマヨヒガから出た

そんな彼らを見送る藍。姿が見えなくなってからふと自身の胸に手を添えながら先程の小夜の言葉が蘇る

『何より霊香の友人、紫の身内でもある “お前を傷つけない”』
「ッ・・・どうしてしまったのだろうか」

自身を指す言葉が何より強調して聞こえて来るのを感じ、頬をほのかに赤く染めていた

外は未だに寒いと言うのに今の自分の内側から春を越えて夏と思わせるくらいに熱い胸の高鳴りを感じていた

34話

八雲藍から羅針盤を受け取りマヨヒガから抜け出した2人はとりあえず、霊夢と咲夜と合流するために2人の後を追っていた

「いやーしかし驚きましたよ。まさか大尉がこの幻想郷に居るなんて思ってもいませんでしたから」

「・・・なぜ、お前が？」

1番に思ったのがなぜ彼が此処にいるのか

ミレニウムが対アーカーダの兵器として作り出されたシュレディンガーは自分自身が認識できる限りどこにでも存在出来る特殊能力を持つ、故に半ば不死に近い存在でもある

ドクがシュレディンガーの猫という科学的思考実験をヒントに作りだした為、そのままシュレディンガーを名前として名付けたらしい
「任務は確かに成功したんですけどね。取り込まれてからあの吸血鬼、取り込んだ命全部殺し続けて30年くらいの月日に遂に見つかったらちやうと殺されて追い出されちゃったんですよ、もうミレニウムも無いし少佐たちも全員死んじゃったみたいだからもう生きる理由も無いって事で自害したんですけど気付いたら此処にいたんですよ。だいたい2日前です」

「・・・そうか」

だとすればリリースと出会う日の前日、一昨日くらいにやって来たのか

しかし、俺がこの幻想郷に来たのが約10年前。あの戦いから30年経った日に自害してシュレディンガーはやって来た。日数が噛み合わない、通常シュレディンガーが来るとするならあと20年後ではないのか？

この幻想郷と元の世界との時間の流れに差があるのだろうか？こ

の幻想郷での一日は向こうでは三日経過している計算になるが・・・

「そうゆう大尉もなんですか博麗小夜って？あの橙ちゃんの主様が言っていましたけど」

「・・・実は」

シユレディングーにこの幻想郷に来てからの事を全て話した

俺を養子として育ててくれた霊香に義妹の霊夢、そして幻想郷に来てから見た事起こった事全てだ

「へー変わってますねー。化け物を養子にする人間が居るなんて」

「・・・そうだな」

「でも、話してる時の大尉はなんか楽しそうでしたね」

「・・・そうか？」

「はい♪これでも大尉の事はよく見てたんですからちよつとした雰囲気の違いはよく分かりますよ」

「・・・」

確かに何かとかがまって来ることはあったが、そこまで見られた事があつただろうか

とりあえず、互いの状況も分かり2人を追って魔法の森を歩いているが妖精たちの姿が見当たらないのもまた不思議な感じだった

紅霧異変の時は妖精たちも暴走していたと聞いたが、今回の異変は他の妖精や妖怪に何かしら影響を与えるわけではないようだ

そんな事を考えていると前方からふわふわと何かが近づいてきた
前の魂魄とは違い、近づいて来たのは小さいがちゃんと人の形をしたものだ

徐々に高度が下がり、落下しそうな所を片手でキャッチした

「なんですかねこの子？大尉が言っていた妖精ですか？」

「・・・いや・・・匂いが、無い」

例え妖精だとしても生きているものには個々に匂いは存在する
しかし、この妖精のような子には匂いも無ければ肉体の感触もまる
で硬い。まるで人の形をした無機物、人形を持っているようだった
しかし、僅かではあるが震える様に動いている所を見る限り生きて
いるのは間違いないようだ

「どうしますか？さすがに僕達じゃあどうしようも出来ませんよ？」
「・・・連れていく・・・僅かだが、触れた時に付いた誰かの匂いがま
だ残ってる・・・それに、遠くはなさそうだ」

とりあえず人形の様な小さい子に雪が掛からない様に待ち、歩みを
進める

??

「ふう、また吹雪いて来たから丁度良かったわアリス」
「今日は客人がよく来る日ね」

体に付いた雪を払い、建物の中へと入る霊夢と咲夜。そんな2人に
タオルを手渡す女性と飲み物の用意をしている小さな子たちがいた

「ありがとうございます。私は紅魔館のメイド長、十六夜咲夜と申し

ます。お気軽に咲夜とお呼び下さい、お見知りおき」

「ご丁寧にどうも。私はアリス・マーガトロイドよ、私もアリスでいいわ。此処にいる子達は私が作った人形よ」

「まあ、これだけの人形を貴女が？」

「ええ」

魔理沙や霖之助と同じ魔法の森に住まうアリス・マーガトロイドは魔法使いでもあり人形使いでもある

約1体を除いて動いている人形すべては彼女が操り動かしているのだ

「ところで霊夢はなぜ紅魔館のメイドと一緒に？」

「まあ、色々あってね。咲夜にも異変解決を手伝ってもらってるの」

「ふーん。てつきり貴女のお兄さんと一緒かと思っただけど」

「一緒だったわよ。途中で行方不明になったけどね」

人形達に用意された紅茶を飲みながら話す霊夢。そんな彼女にも気になる事があった

「ところでなんで魔理沙もいるのよ？」

「まあ、色々あってアリスの家に邪魔してるんだよ」

白黒の大きめの帽子を抱えている魔理沙

わずかに寒さで震えてもいた

「異変解決の途中で吹雪いて来たから休ませてくれて頼まれたから入れてあげたのよ。前に何があったのか盗んでいった本も全部返してくれたし」

「・・・あなた、アリスからも盗んでたのね」

「いや、盗んだんじゃないかって借り死ぬまで借りるのは盗むと一緒にですよ?」・・・まあ、前に小夜の兄ちゃんの件もあったからさ、これで返

さずに兄ちゃんにバレたらどうなるか考えると恐ろしくてなあ」

前回の地下図書館での件から一切死ぬまで借りる事はやめると誓った魔理沙

それだけ彼女の中では小夜を怒らせることを恐れているのだ

「ところで霊夢に咲夜、道中で私の人形見なかったかしら。喋る人形なんだけど」

「喋る人形？咲夜見た？」

「残念ですが見てませんね。どうかなさったのですか？」

「ええ、上海人形って言うんだけどこの蓬莱人形と同じで私が作った術式を込めて私の魔力を供給する事によって独自に動ける人形なの」「ホラーイ」

「まあ、可愛い」

「ふーん。で、見てないかって事は居なくなっちゃったの？」

「さつきまで外に居ただけで、強風で飛ばされてしまつて私の魔力供給も絶たれていると思うからもうすぐ動かなくなってしまうの。探しに行こうにもこの雪の中じゃあ探しに行けないし」

「大切な人形ならなおさら厄介ね。探してあげたいけどこつちも異変解決もあるし……」

どうしたものかと悩み出す霊夢たち、そんな時

ガンガンガンガン

「あら？また、お客さん。はい」

ノックに答え、扉を開けるアリス。顔を出し誰が来たかを確認める

「すいませーん。此処に霊夢さんって方います？」

扉の前に立つのは長身で褐色肌の男性と雪の中でありながら半袖半パンというなんとも寒そうな格好でいる少年が立っていた

「え？ええ、居るけど貴方たちは・・・ッ！貴方、その人形!？」

「・・・道中、見つけた・・・お前のか？」

「そうよ、ありがとう。さあ、中に上がってちようだい、お茶も出すわ」

ぐったりとしている上海人形を抱えてに中に戻るアリスに続き小夜とシュレディンガーも中に入る

「あっ！兄さん！」

最初に小夜に反応した霊夢が真っ先に彼に抱きついた

小夜はいつも通りの対応で霊夢を軽く抱きしめ右手で頭を撫でてあげる

数分後、アリスが奥から戻ってきて先程まで弱っていた上海人形が元気に動いていた。外傷はほとんど無く魔力供給が尽きかけていただけだった為、すぐに供給して動くようにした

「本当にありがとう。上海人形を見つけてくれて」

「シャンハイ」

「まあ、たまたまだったからね。見つけて連れてこようって決めたのも大尉だし」

「・・・わずかにお前の匂いが人形にあった・・・何とか辿って、此処に着いた」

「そうだったの。私はアリス・マーガトロイド、よろしく」

「・・・博麗小夜だ」

「シュレディンガーって言います。よろしくお願いしますね」

「あの、小夜様。そちらのシュレディンガーという方はご友人ですか？」

「確かに見たことないなお前。その頭に生えてるのは猫耳か？」

「まあ、大尉の友人と言ったらまあ友人かな」

「ふーん（大尉ってなに？聞く限りでは兄さんの事を言ってるようだけど・・・）まあ今は良いわ、兄さんが無事に見つかったんだし、でもいきなりはぐれるなんて何があったの？」

「・・・マヨヒガに居た」

「え?!兄ちゃん、あのマヨヒガに行ったのか?!」

「ああ・・・その住人からコレをくれた」

霊夢に羅針盤を差し出す小夜

これが冥界の入口を見つけてくれるただ1つの代物である事も告げた

「まあ、なんとも良い朗報でしょう」

「これが冥界の入口を・・・ありがとう兄さん。こうなったらぐずぐずしていられないわ。早速向かいましょう」

「もう行くの？もう少し休んで行ってもいいのよ」

「ただでさえ異変の元凶を突き止めるのに長く掛かったし、時間もあまり無い。すぐに行くわ、お茶ありがとね」

「よし！霊夢たちも行くなら私も行くぜ」

魔理沙も立ち上がり、帽子をかぶり直して箒を手を取った

「・・・そう、分かったわ。私はついて行く事はできないけど貴方たちの無事を祈っているわ」

支度を終えて、アリスの家を後にする5人は羅針盤の針が指し示す方角へと向かっていった

冥界への到着は目前だ

スキマ

「言ったはずよ霊香。あの人狼はただの外来妖怪だと」

「ああ、外から来た事ぐらい私にも分かる。だが全てを話してはいないはずだ」

スキマの世界にて対峙する博麗霊香と八雲紫

どちらも互いに譲らない妖気と霊気のぶつかり合い、霊香が紫の下にきたのは真実を問いただすためだ

博麗小夜、もとい大尉の正体を知るために

「教えてくれ紫、アイツは小夜は何者なのか。少しでもいい、アイツの事を知りたい。でなければ、今後義母としてどう接していったらいいか……」

「ならば聞かずにいつも通りに接した方がマシよ。霊夢にとってもね」

「つまり、それだけアイツを危険視する程の理由があるのだな？」

「……」

「沈黙は肯定、でいいんだな」

霊香の言葉にも何も返事をせず、口元を隠していた扇をパチンツと閉じた後、背を向ける紫

「……はあ、分かった。今日は諦めよう、だが異変については厄介な

事が分かっている・・・幽々子がこの異変を起こしている」

「・・・いつかはやるんじゃないかと思ってたけど。霊夢とあの人狼が居るなら問題は無いし、冥界への入口を示す羅針盤は藍に霊夢へ渡す様に言っている。解決も時間の問題よ」

「実は、そうでもないかもしれないぞ」

「どういうこと？」

「・・・桜が、目覚めているかもしれない」

「ツ！無理よ！咲かせたならともかく、封印してある状態で奴が出てこれる訳が・・・まさか」

「まだ仮定に過ぎないがもし、奴が幽々子の『体』に乗り移って居たとしたら『魂』でしかない彼女を・・・とにかく私は霊夢たちの下に向かう。じゃあな」

スキマから消え、1人立ち尽くす紫の拳は握り締められ口を歪ませ歯を食いしばる

「まだ、あの子を、幽々子を苦しませようと言うの・・・西行妖」

35話

アリスの家にて合流した小夜たちは魔理沙を加えてようやく白玉楼に向かっていた

しかし、途中で問題があることが発覚した。どうやら冥界の入口とやらは上空にあるらしい、小夜は飛ぶ事が出来ないしシュレディンガーも同様、どうするか悩んだ結果

「おい2人とも早くしろよ〜」

「ちよつと待ちなさいよ。こっちは兄さん連れてるんだから」

「どうです大尉。上空でぶら下がってる状態の感想はー？」

「・・・」

魔理沙の箒にはシュレディンガーを乗せ、一方の大尉は霊夢と咲夜に腕を持つて貰いシュレディンガーが言うようにぶら下がっている状態だった

「大尉、ノーコメントはやめてくださいよ〜」

「・・・重くないか？」

「うん。大丈夫」

「1人では無理でしょうが、2人ならば問題はありません」

「無視もしないでくださいーい」

「・・・本当に兄ちゃんの友人かよ、コイツは」

そんな雑談をしているうちに5人は羅針盤が示す先の雲を越えた
その瞬間、奇妙な感覚が5人に伝わる

「これは・・・結界ね。私がここまで近づかないと気づかないなんて、かなり強力なものだわ」

「どうする霊夢、やっちゃっていいならマスパ撃つけど」

「これだけ強力だとただ撃つだけじゃあ壊れないわ。何度も撃つか、一番弱い部分を見つけてそこを叩くしかないわ・・・魔理沙、ちよつと代わって」

「いや、代わってってこつち箒にのってるんだぜ？」

「じゃあ僕が持ちますよ。魔理沙さん、もうちよつと寄ってください」
「はいよ」

霊夢に代わり後に座っていたシユレディンガーが箒に跨った状態で大尉の手を取る

霊夢は結界に近づき、意識を集中して結界の一番弱い部分を探す

「・・・ッ、あつた。魔理沙、札を目印にするからそこを思いっきりぶつぱなしなさい」

「よっしゃー！任せておくんだぜー！」

「恋符『マスタースパーク』」

八卦炉を取り出し、霊夢が出した札に向かって最大火力のマスタースパークを放った

結界にマスタースパークが直撃し、穴が開いた

「私が先行するから、後についてきて」

先に霊夢が結界内に入り、その後から魔理沙たちも結界の中へと入っていった

「・・・結界が破られて冥界の亡霊たちが騒ぎだした。どうやら、やってきたみたいね。妖夢、行ってきてくれるかしら」

「はい、幽々子様。今度こそ勝ち、残りの春も集めてみせます」

「焦る必要は無いわ妖夢、ゆつくりとでも構わないわよ。それと博麗の巫女だけは通す様にしてくれないかしら？彼女とは話さないとならない事があるの」

「博麗の巫女を、ですか・・・分かりました。それ以外は排除すればよろしいですか？」

「ええ、いいわよ」

「承知しました」

立ち上がり、その場から離れていった妖夢

「・・・もうすぐ封印は解かれる。そして、博麗の巫女、スキマ妖怪、私の邪魔をする者達は全て・・・滅ぼしてみせるわ」

その頃

結界を抜け、ようやく小夜とシユレディンガーが着地で奥へと進む5人

門らしき物を抜けた瞬間、人魂の猛攻に直面していた

「くそつ、量だけは多すぎる。幽霊は墓で眠ってるよ」

「毒づいても仕方ないわ魔理沙。この冥界は幽霊たちの領域みたいなもの、私たちがみたいなの生者が来ること事態が珍しいのよ彼らにとつて」

「だからって集まりすぎだろう。攻撃だつてしなくていいじゃん！」

「誰かが私たちを追い払う様に命じているんじゃないかしら？」

「それが一番有り得るでしょうね」

「・・・」

確かに幽霊、死者の魂からしたら死後の世界に生者である俺達が居る事は物珍しく見えるかもしれない

だが、そのほとんどの幽霊がここまで好戦的とは思えない。咲夜の言う通り俺達を排除するために何者かが命令を出したか

俺は弾幕などは撃てない為、殴り蹴り、剣を振るって応戦しているがキリがない

「あの少佐なら、幽霊に宣戦布告されても戦争しますかね。ドクだったら除霊銃とか作ってくれるかな？ははは♪」

「おい！お前も見てねえでやれよ！」

「いやー、僕大尉みたいに戦えないから観戦してるしかないんだよねー」

「それじゃあただのお荷物じゃねえか！」

シユレディンガーの言う通り、彼は対アーカードの為にだけに作られた存在。戦う術を持たない為、いても特に戦力にならない

だが、所有する能力は有能だ。戦えずともその場その場で使い道を見いだせれば強力な武器になる

「集められた春はあの奥にあるみたいね。わずかに温かい空気が流れてきてる」

「あの桜色に光ってる場所か。だけどこの数じゃあ進めねえぜ、ここ

は強行突破するか?」

「そうね。じゃあ魔理沙もう一回・・・っ?」

強行突破を仕掛けようとした瞬間、突如幽霊たちがその場から全員消えた

まるで誰かに下がれと命令されたかの様に

「・・・来たか」

視線を移し、奥からやってくる2本の刀を持つ少女を見る

魂魄妖夢だ

「ここから先は誰1人通しはしません。西行寺家に仕える魂魄家の名に掛けて」

「それでも行かせてもらおうわ。異変を止めるためにもね」

「・・・我が主、西行寺幽々子様から博麗の巫女のみ通せと命令されています。どうぞ、博麗の巫女のみお進み下さい」

「なんですって?」

突然妖夢から出た言葉に魔理沙と咲夜のみが驚いている

なぜ博麗の巫女のみ通すと命令したのかが分からない、下手をすればやられ異変を防がれる可能性があるというのに

「・・・」

何か嫌な予感がする。今までその様な事は1度も思った事は無い。異変の首謀者である西行寺幽々子がどのような存在かは分からない。だが、1つだけはつきりと感じるものがある。絶対に霊夢だけを行かせてはいけない

「・・・俺がやる。全員、先にいけ」チャキ

「に、兄さん！」

剣を持ち直し、妖夢の前に出る

霊夢と魔理沙は驚き、咲夜とシュレディンガーは無表情だった

「兄ちゃん！流石に1人はやばいって！」

「そうよ！私が行ってすぐに解決すればすぐ終わるわ!!」

「駄目だ・・・霊夢、魔理沙たちと一緒に向け」

「で、でも・・・」

「・・・必ず・・・追いつく」

不安に思う霊夢を励ます様に約束する小夜

霊夢は少し黙った後、小夜を自分の兄を信じて答えた

「分かった。ここをお願い兄さん」

「・・・シュレディンガー」

「はいはい」

「・・・居ない間、皆を頼む」

「うわあ、重大な任務を渡して来ますね。まあ、何とかしましょう」

シュレディンガーに代わりを頼み、霊夢たちは小夜を残し奥へと向かう

「通って良いのは博麗の巫女のみ！それ以外は通さない！」

霊夢以外の魔理沙達に刀を振ろうとする妖夢に小夜が目の前に現れ、首元を掴む

「ぐっー！」

「・・・」ブンッ！

そしてそのまま後へと投げ飛ばし霊夢達から距離を離れた

「……」

「くっ！またしても貴方が立ちはだかりますか……今度こそ、貴方を倒してみせる！」

起き上がり、構えを取る妖夢

これは弾幕勝負ではない、真っ向の真剣勝負。遊びの弾幕勝負とは違い妖夢は小夜を本気で打ち倒そうとしている

だが、妖夢は何も知らない。知るはずもない。彼が今までどれほどの戦いを生き抜き、どれほどの命を過去に奪って来たか

「……」

「参る！」

瞬時に懐に入り込み、刀を横薙ぎに振るう。そして刃は小夜の左腕に難なく決まった

(入った？なぜ防御も反撃もしない？)

妖夢は不審に思いながら小夜を見上げる

「……」

「ひっ！」

妖夢が見たのは見るもの全てを凍てつかせんとするほどの眼で自分を睨み下ろす敵の姿だった

腕に刃が入っているにも関わらず苦痛に顔を歪ませる事もなく無表情の様は更に妖夢の恐怖心を高めていた

刀を腕から抜き、後に下がる妖夢は荒れる呼吸を整えようと深呼吸をして落ち着かせる

「・・・それが本気か？」

「な、なに？」

「それが本気かと聞いた・・・手を抜いているのか？」

「ツ！私はいつだって本気だ！！手を抜くなんて相手に対して無礼だ！」

「なら・・・なぜ殺す気で来ない？」

「なっ、こ、殺す？・・・私が受けた命は博麗の巫女以外の者を追い返すか足止めすること。殺すなどと命令されていない！」

「・・・なおさらだ。追い返すなら、殺すつもりでやらなければ相手は恐怖しない、逃げようとしなない・・・それだけの武器を持って、腕に浅い斬り傷を与えただけ。やろうと思えば、切り落とせるはず・・・お前は戦いに向かない」

「黙って聞いていれば、なんという侮辱！許さん！！」

「人符『現世斬』」

スペルを発動し、まっすぐ突進して刀を力一杯振り抜く

「・・・」ガシツ！

「ツ！！」

しかし、振るわれた刀は小夜の手に掴まれていとも簡単に止められる。手から血が流れ、刀を伝って鏢から垂れ落ちる

「お前にないのは、躊躇わぬ覚悟・・・対人の経験・・・それだけでも、お前は俺に勝てない」

「く、ぐう・・・ハアアアア！！」

もう一方の刀を振るうが混乱と動揺によって、その振り様は単調的

で素人でも見切れるほどだ

小夜は見逃しはしない、そして彼の中に戦いの中で容赦などない
倒す敵は殺す気で完膚なきまでに叩き潰す。例え相手が女である
うと

ギンツ!!

「・・・」ブンツッ!バキツ!

「ぐツ・・・」

刀を蹴り飛ばし、剣の柄の部分腹部に打ち込んだ

妖夢は気絶しそのまま倒れる所を腕で支える

「・・・」

妖夢を木に寄り添う様に降ろし、刀も鞘に納める

半人半霊が風邪を引くかは知らないし、春を集めたことによって僅
かに温かいが上着を脱ぎ、眠っている妖夢に羽織らせた

「・・・甘くなった、か・・・ツッ!」バツ

強大な力を感じ霊夢たちが向かって行った方向を見る

まだ弱かった桜色の光が強くなっており、そこから強大で禍々しい
妖気を感じ取った

急ぎ、霊夢たちの下に向かおうと小夜は走っていった

36話

その頃

小夜を置いて冥界の奥へと進む霊夢たち

山のような長い階段を飛び上がっていき、目指す階段の先に門がありその向こうの空に桜色の光が輝いていた

「なあ霊夢、兄ちゃん置いて来て本当に良かったのか？最後に振り返って見た時の妖夢は弾幕ごっこよりマジな勝負を仕掛けようとしてた様に見えたぜ？」

「なら、兄さんの方が有利なるわ。兄さんは弾幕勝負よりも本気の戦いの方が一番戦い慣れているし」

「でもよ、下手したら大怪我どころか殺しちゃうかもだし」

「心配無用ですよ魔理沙さん、大尉は自分より弱すぎる相手は殺さないくらい慈悲深いですから」

「え、いや・・・うん？」

シユレデインガールの言葉に魔理沙は納得するべきなのか、疑うべきなのか分からず、とりあえず返事を返した

「シユレデインガーさん、でしたよね？貴方は小夜様のご友人らしいですがどれほどのお付き合いの仲ですか？」

「うーん。言っちゃっていいのかなあ、大尉の話だとなあ、随分複雑らしいし」

「その話は後にしましょう。今は異変解決が先」

「・・・そうね。その時はお嬢様も一緒に聞くとしましょう」

「・・・確かに、私知っているのは幼い頃に神社の賽銭箱の前に幼い頃の兄さんが倒れていて、外から来た妖怪ってだけ。外に居た時の兄さんなんて何も知らない、あんなに小さい頃からなんで幻想入りしたのかさえも」

そんな考え事をしながらついに長い階段を終えて、門を通り遂に白玉楼へとたどり着いた

辺りを見渡すと奥に大きな桜の木が目に入った

遠くから見ても分かるくらいに大きく立派な木だった

「おい霊夢！あれ！」

「どうしたのよ魔理沙？いきなりそんな驚いて・・・え？」

魔理沙が指を指す場所に見えたものに霊夢は目を疑った

桜の木の下で扇を持ち舞い踊る女性に拳を構えながらも息を荒らげる見なれた巫女服の女性が対峙していた

「お母さん！」

その場から走りだし女性の下に向かう霊夢。巫女服の女性は間違はなく霊夢の母親である博麗霊香だ

対峙している女性こそが妖夢の主であり今回の異変を起こした張本人、西行寺幽々子

「そ、それだけじゃないぜ。なんで八雲紫が霊香さんの後で倒れてるんだよ？」

魔理沙の言う通り、霊香の後にはぐったりと倒れふすスキマ妖怪、八雲紫とその式である八雲藍が居た

「霊夢、か・・・出来れば来ない事を願っていたんだがな」

「大丈夫さん！」

「ああ、まだ大丈夫・・・と、言いたいが後の2人守りながらだったから少し辛いかな」

「・・・何なのこの凄まじい妖気、あの人からじゃない。後の桜の木から感じる」

「あら？見るのは初めて？綺麗でしょうこの西行妖。幻想郷中の春と紫たち妖力を吸い取ってようやくここまで咲かせられたのよ・・・でも、まだまだ足りないわ」

扇を振るった瞬間、弾幕が放たれた。しかもそれはただの弾幕ではない

「ッ！、魔理沙！咲夜！シユレディングー！避けて!!」

「ッ！」 バッ！

「へ？なに、ごふうー!!」

放たれた弾幕は霊夢と霊香だけでなく後にいる魔理沙たちの方にも放たれ魔理沙と咲夜は避けられたがシユレディングーは避けられず直撃する

「シユレディングー！「え？なに？」て、あれ?!」

直撃した筈のシユレディングーがいきなり背後から現れたのに驚愕する魔理沙

魔理沙たちが居た場所は弾幕だけで地面が抉れ、幾つものクレターが出来ていた

「今の放った弾幕・・・私たちを殺す気で放ったわね」

「ああ、嫌でも分かるぜ」

「・・・どういうつもり？貴方は幻想郷に長いんでしょう。弾幕ごっこを知らない筈ないわよね？」

「ええ、知っているわよ。うふふつ、今のはお気に召さなかったよね。なら、これはどうかしら？」

今度は小さなレーザーのような弾幕。これも霊夢たちを殺す気ではなされた

「魔理沙！咲夜！」

「ああ！」

「お任せを」

霊夢が幽々子を引き付けて、魔理沙と咲夜が援護をする。紫と藍は霊香に拾われ後方に下がらせた

「君！2人を見ててくれ！」

「あ、はい」

シユレディンガーに2人を任せて霊香も霊夢たちの下に向った

「一気に行くわ」

陰陽玉を取り出し周囲に浮かせて、御札を構える霊夢

相手が殺しに来ている以上、容赦も手加減はしない。しかし博麗の巫女にとってはそれはいつもの事だ

「うふふつ、何分持つかしら？」

幽々子が扇を振う度に赤と紫の弾幕が放たれる

紫の弾幕は進路を塞ぐ壁になり、赤の弾幕が追尾弾の様に霊夢を追いかけていく

回避しつつ、御札を投げついたり陰陽玉から弾幕を撃っているがすべて紫の弾幕に防がれている

「奇術『ミスディレクション』」

「魔符『スターダストレヴァリエ』」

咲夜と魔理沙の放ったスペル

咲夜の周りからナイフの魔理沙からは星形の弾幕が放たれるがそ

れらも全て弾幕によって防がれた

(よし、今。時よ、止まれ)

2人のスペルを放った瞬間、咲夜は自身の能力である時間を操る程度の能力で時間を停止させ、幽々子の背後に周りナイフを投げつける

(そして時は動き出す)

時間が動き出し、投擲されたナイフは幽々子へと再び動き出した
だが・・・

「あら、それは卑怯じゃない?」
「な!?!」

振り返り、扇だけでナイフを防いで見せた幽々子

「咲夜! 離れて!」
「霊符『夢想封印』」

霊夢が放った本気の夢想封印
並の妖怪ではまず耐えきれず、中級以上の妖怪でもそうとう効く威力

「それっ♪」

・・・のはずが幽々子は陽気な掛け声と共に扇を一振りするだけで、
夢想封印をかき消してしまい霊夢に向かって弾幕が迫る

「霊夢!」
「うわっ!!」

直撃寸前に霊香によつて避ける事が出来た霊夢

「危なかつた」

「そんな、本気で放つた夢想封印が・・・」

「あー、そういうえば貴女最近博麗の巫女を継いだって言ってた子よね。自己紹介がおくれたわ、私は白玉楼の主、西行寺幽々子。ここ冥界の管理を任されているの。ここであなたが死んだら私の配下に加えてあげるわ。だから安心して・・・逝きなさい」

「黙りなさいー!」

叫び声のする方をみると、先ほどまで倒れていた紫と藍が息も絶え絶えに幽々子を睨んでいた

「ちよつとーあんまり無理しなーい」

「あら、紫。まだ生きていたの。あれだけ妖力を吸い取つたのに」

「その、姿でその声で・・・それ以上、幽々子のフリをするのは、やめなさい。西行妖!」

紫の叫びに、幽々子の口が裂けそうなくらいに広がり、邪な笑みを浮かべた

「紫、どういう事? 最初から説明しなさい」

紫は肩で息をしながらもフラフラと立ちあがって、幽々子を睨んでいた

藍は紫よりも衰弱しておりシユレディングーの手を借りてやつと立っている状態だ

「私が話そう・・・この異変、最初は確かに幽々子が自分の意思で始めた事。けれど、少しずつ幽々子は封印の溶けかけた西行妖に意識を

乗っ取られていった。妖夢も紫も、それに気付く事なくな」

「おいおい、話が全く見えないぜ。大体西行妖って何なんだよ」

紫の代わりに説明していた霊香に魔理沙が尋ねるとしばらく黙った後、話し始めた

「簡単に話そう。西行妖、あれは人間の生気を吸って妖怪化した桜の木、紫ですら手を出せないほどに強大な妖怪樹だ・・・紫」

「・・・いいわ、話して」

霊香の言葉に紫は僅かに躊躇う様な表情で黙っていたがしばらくして承諾した

基本的に話をはぐらかしたりする事が多い紫だが、今回はいつもより様子が違うと霊夢や魔理沙は感じていた

「幽々子が自分の亡骸を使って封印して以来、春になっても花を多少付ける事はあっても満開になる事はなかった。幽々子が亡霊となり、冥界の管理者として任されるようになったのはそれから。今も西行妖の下には幽々子の亡骸が眠っていて、封印を守っている」

「じゃあ、幽々子は自分で自分の封印を解こうとしたのかよ！」

「幽々子は生前の記憶を全て失った、亡骸を封印に使ったせいでもあるが。紫は彼女が西行妖の事も忘れるはずだと思っていたらしいが・・・春を集めて西行妖の花を咲かせる事が出来れば、自分の記憶が戻ると思ったのだろう。勿論、その下に自分の亡骸がある事も知らずにな」

生前の記憶を戻す為に幽々子は春を集めていた、それがこの異変を起こした理由だ

「で、あんたは一体今頃何をしようとしたのよ？」

「・・・私は最初幽々子の好きにさせるつもりで放って置いたわ、監視はしていたけれどね。例えば幻想郷中の春を集めても、西行妖が満開になる事はないし、それより先に霊夢が解決すると思っただのよ・・・でも、予想は外れたわ。西行妖の封印は徐々に解けていき、そればかりか埋められた亡骸を通じて幽々子の意識を乗っ取って行ったの。私も気付かなかった・・・気付いた時にはもう手遅れに近かったわ。だから妖夢が離れた隙に、私と藍で再度封印しようとしたんだけど、逆に妖力を奪われ封印を解く手伝いをしてしまった・・・その後を追いついた霊香に助けられたわけよ」

「西行妖は封印される前よりもずっと強大になっている。まだかろうじて封印の力が残っているがあと少しでも春が集まれば封印は解かれる」

「もし、封印が解けたらどうなるのよ?」

「勘のいいお前なら大抵は想像できるだろう。幽々子は亡骸ごと消滅して、西行妖は幻想郷中の妖怪や人間、妖精、ありとあらゆる生者の力をたやすく奪う。幻想郷は冥界に、いや、西行妖に吞まれるだろう」

「そ、そんな、ウソだろ?!」

「あの木に・・・それほどの力が」

魔理沙が冷や汗を流している。霊香の表情からは決して冗談でも大げさに言っているわけでもない事を物語っていた

「今の西行妖なら出来るわ。でも今ならまだ、間に合うわ。私も藍も妖力がほとんどない、それに妖力じゃ吸収されてしまうの。だから、霊力や魔力で幽々子を・・・西行妖を倒して、再度封印するのよ」

かつてのレミリアのように幻想郷を支配するわけではない。幻想郷の崩壊、今までなかった最大の異変となった

「・・・魔理沙、咲夜」

「ああ、幻想郷滅亡の危機、こりゃ本気でやらなきゃな」

「お嬢様たちにも危害が及ぶなら退くわけには参りません」

霊夢は2人を見ながら呼んだ

咲夜は表情こそいつもの凜とした表情だが内心では不安がついついでいる

魔理沙は軽口を言いつて強がっているが、その表情は霊夢が今まで見た事ないほど固い

「お前達だけに任せたりしないさ。私も共に行こう」

「ありがとう母さん」

「へへっ、霊香さんが加わるなら百人力だぜ」

「それで・・・話は終わったか？」

幽々子の、いや西行妖の声が変わった

さきほどまでは上品な女性の事だったのに、今は邪悪でおぞましい声に変わる

もはや幽々子の演技はする必要なくなったと判断したのだろう

「ええ、博麗の巫女として、お前を封印する！」

「普通の魔法使いとしても、放つてはおけないぜ！」

「お嬢様の敵は例えどんな存在であろうと全て斬りふせてみせる！」

彼等は左右に散らばり、同時に弾幕を・・・否、攻撃を開始した

「食らいなさい！」

「それ！」

「はあ！」

魅せる為の弾幕ではなく、倒す為だけの弾幕を放つ3人

「弱いな。そこの妖獣の方がまだ強い攻撃だったぞ？」

「なにいく!? 全然効いてない!？」

霊夢の御札と霊力弾、魔理沙の魔力レーザー、咲夜のナイフ、どれ一つも西行妖には効かなかった

まるで見えない壁に阻まれたかのように、当たる直前で消えてしま
う

「私と藍の力を吸い取ったせいで、耐性がついてしまったのね」

「3人とも、生半可では駄目だ！本気でやれ！」

霊香に言われ再度霊力を溜める霊夢

しかし、西行妖も黙ってされるがままになる訳では無い。扇を振う
度に妖力の波動が全員に襲いかかってくる

とつさに霊香と霊夢で防御結界を張るが、簡単に破られて弾き飛ば
されてしまう

「西行妖の攻撃は必ず避けなさい！あなた達でも防ぎきれないわ。そ
れに今のアイツは幽々子の能力を少しずつ使えるようになってい
わ！」

「幽々子の能力って何よ!？」

「死を操る程度の能力。文字通り簡単に相手を殺せる、動作も何も必
要ない」

「いいく!?それは反則だぜー！」

「妹様と同じくらい反則ね」

フランは破壊の目を自分の手に生み出し、それを握りつぶす事で能
力を発動させるありとあらゆるものを破壊する程度の能力

しかし、幽々子は何も動作もいらならしい

「そんなの反則どころか無敵じゃない!？」

「でもまだ完全に使えるわけではないの。死に誘われやすくなる程度
だけど、まともに攻撃を受ければ、タダでは済まないわ」

「(どつちにしてもまともに攻撃を受ければまずい。急がないと妖夢を足止めしている兄さんが来てしまう!妖怪である兄さんには西行妖は相性が悪すぎる!) 魔理沙、あんたがやりなさい!」

「霊符『夢想封印・集』」

力を籠める隙がない以上、低威力でも広範囲攻撃で相手の隙を作るしかない判断し、その間に魔理沙が強力な一撃を放てば良いと判断する霊夢

「効かぬわ!」

案の定、西行妖は扇を振りかき消していく

「はあ!!」

「幻符『殺人ドール』!」

「ええい!こしやくな!!」

隙を突き、正拳を繰り出す霊香とスペルを放つ咲夜、そして追撃に夢想封印を仕掛ける霊夢

「よし、行くぜ!!」

「恋符『マスタースパーク』!」

「何っ?」

魔理沙が狙ったのは西行妖の本体である桜

巨大な木であるが為的は大きく、動けないのであれば幽々子の姿をした西行妖より良い的となるだろうと考えたからだ・・・しかし、現実にはそう甘くはなかった

「ウソだろ!?!」

またしても見えない障壁に阻まれ、マスタースパークは通らなかつ

た

「ふっふっふっ……」

「っ!? 危ない、逃げなさい!」

紫が叫ぶと同時に西行妖の巨大樹が眩い光を放ち、霊夢たち四人は見動きが取れなくなってしまふ

「か、体が……」

「……くっ、動かない?」

「ハッハッハ! 甘いものだなあ! その程度で我は倒せん! ……さて」

「ッ! 逃げる霊夢!」

「もう手遅れだ。まずは現からだ。死して我が従僕となれ!! 博麗の巫女!」

「くっ!」

西行妖から巨大な桜色の弾が霊夢に向けて放たれた

「わあー! ちよつと大尉! ぐべらっ!!」

「なに?」

弾幕は霊夢に当たらず、突然やって来たシュレディングーによって防がれた

ブンッ! バシユ!

「がつ! な、なに!?!」

西行妖に1本の剣が突き刺さり苦しみます

「あ、あの剣……ま、まさか!」

カツツ、カツツ、カツツ、カツツ

背後から聞こえて来る足音

霊夢が最も恐れていた事が起きた、来てしまったのだ。彼が

「・・・霊夢」

「に、兄さん・・・」

「・・・間に合ったか」

「ちよつと大尉！酷いじゃないですかー！いきなり頭掴んで投げ飛ばして！！痛かったんですよー！」

「・・・すまない」

怒りながら近づいてきたシュレディンガーに謝る小夜

しかし、皆は何一つ喜ばなかった。紫は小夜を睨みながら話しかけた

「何をしにきたの？」

「・・・異変、解決？」

「そんな事を聞いてるんじゃないわ！この異変は貴方が来ても西行妖の封出来るものじゃないわ！しかも妖怪である貴方が来ても西行妖の封印を解く手助けになるだけよ！」

「・・・変な事を言う・・・死んでも霊夢たちを守れ、そう言ったのは貴様だ・・・俺はただ、霊夢たちの敵を排除する」

「ちよつとまって、さつき死んでも私たちを守れって「貴様アアアアア！！」ッ！」

剣を引き抜き、叫びだす西行妖

小夜は何も言わず西行妖に向かって行く

「ダメ！兄さん！！妖怪じゃあ西行妖は倒せない！むしろ妖力を吸い取

られて封印が解けちゃう！」

「……それでも、やる……霊香」

「……まさか」

「……」バツ！

小夜を見て何かを察した霊香

そして小夜は西行妖に向かって行く

ただ、博麗の巫女に敵対する者を【排除】するため

37話

桜色に輝きを放つ巨大な妖怪樹の下で1人の化け物が白玉楼の主、西行寺幽々子に取り憑いた西行妖に近づいて行く

「貴様も妖怪か。貴様も八雲紫の様に妖力を奪って我が封印を解く糧にしてくれる！」

「・・・」ピキツメキツ

西行妖の言葉に何も答えず鈍い音を立てながらただゆっくりと近づく小夜

「ふっふっふ、我が妖気を見て言葉も出ないか？恐れてなを向かってくる度胸は認め・・・」

ブンツ！バキツ！

「ツーンッ!?!」

「・・・」

瞬時に近づき、獣人化した小夜の強烈な右ストレートが腹部に入る

ブンツ！ガシツ！ドゴツ！バキツ！ガツ！

「がっーき、きき、ぶっーばっー！」

「・・・」

話など聞く気も無くただひたすらに殴り、蹴り、掴み、叩きを繰り返す小夜

彼からすれば何を戯言を話しているのかと思うばかりだ。殺す気で霊夢たちと戦っているながらこんな攻撃の好機（チャンス）を与えて

くれるとは愚かとしか言いようが無い

むしろ、西行妖自身が弾幕ごっこという決闘法を放棄したのだ。殺しに掛かってくるぐらい分かっているはずだ

博麗の巫女を殺す寸前まで行った事によりたかが妖怪1人だという油断がここまで攻撃を許している

「調子に乗るなあ!! 貴様如き、妖力を奪ってすぐに・・・ッ?」

「・・・」ブンツ!

「ごぼッ!」

何か不審に思いまた隙を見せた西行妖、今度は裏拳が顔面に入る

「な、何故だ?! なぜ妖力が吸収出来ない!?!」

「・・・」

八雲紫や八雲藍、2人の大妖怪の妖力を吸収出来た筈なのに何故か小夜の妖力を吸収出来ずに叫び出す西行妖

敵に語る口も無い為、また殴り倒す

「おい、今西行妖の奴、小夜の兄ちゃんの妖力が吸収出来ないって言っ
てなかったか?」

「確かに聞いたわ。でも何故?」

「・・・そうか。能力を」

「どういう事、お母さん?」

「小夜をよく見てみる。何が見える?」

霊香の言葉に従うように皆じつと小夜を見る

攻撃の最中である為、じつくりとは見えないが小夜の全身を白い靄の様なものが覆っていた

「何か白っぽい、靄か?」

「・・・そうか。能力で」

「ああ、自身の存在を曖昧にする霧になる程度の能力。小夜は肉体的存在には無く妖力の存在を霧にして曖昧にしているんだ。しかも、小夜の場合は妖力よりも自身の肉体の鍛錬によつてあそこまで高い力を出せる、肉体の存在を霧に変えてない分物理的な力はいつの方が上だ」

「しかし、曖昧にしているだけで完全に隠せていないのでは吸収される可能性はあるのでは？」

「だからこそ、奴は攻撃し続けているんだ。確かに西行妖なら今の状態でも吸収できるだろうがその為には常に小夜の妖力に集中しなければならぬ・・・霊夢、攻撃の準備をしろ」

「え？」

体の呪縛から何とか開放されゆつくりと立ち上がる霊香

霊夢も母の手を借りながら起き上がる

「あいつは自分では西行妖を倒せないことは分かっているんだ。あいつがやっているのは困であり西行妖を疲弊させる事、今のうちに私たちが霊力を高め、強力な一撃を与えようとする為の時間稼ぎをしているんだ・・・霊夢、お前は万が一私ので倒せなかった事を考えて無想天生の準備をしている」

「・・・分かった」

無想天生

博麗の巫女のみが持つ最後の切り札

どのような妖怪であろうと構わず倒すことの出来るスペルだが、その使用に使う霊力の消費は半端なく1度使えば戦闘に加わる事は出来ないだろう

霊香もそのスペルを持っているが既にかかなりの霊力を消費しており、打つても夢想封印が限度だ

霊夢は意識を集中しもしもの為にと霊力を溜め始める

「ッ!？」

急に振り返り、扇を振るって多量の弾幕が小夜に直撃した

「いぶッ……」

吐血し、右肩、左脚、アバラの骨が砕ける感覚が小夜を襲う

そして止めを刺そうと霊夢に放とうとした桜色の巨大な弾幕を放とうする

「ふははは！死ねえ！」

「……ヴウ！」クワッ！

「な、なに!? く、クソ犬がー!」

弾幕を放つ前に鋭く生えた牙で西行妖の肩に噛み付く小夜

弾幕を放ち、引き離そうと試みる。避ける事もせず全て直撃し身体中から血が吹きだそうとも決して離そうとはしない

「……よし。行くか」

霊力を溜め終え右拳を握り締める霊香

「ッ!?クソ！離せ！離せー！！」

「……」

霊香から感じる霊力に危機を感じ、早く小夜を引き離そうと躍起になるがもはや遅い

「これで終わりにするぞ西行妖……霊符」

「ま、待て！これが見えないか!?今それを放てばこの人狼も！」

「『夢想封印・突』!」

靈力を右拳に集中し、放たれた一撃が西行妖へと放たれる。このまま行けば小夜ともどもやられると思っていた西行妖だったが彼は小夜の能力が何か結局分かっていない

「・・・」フワツ

自身を霧に変える力。それはいかなる打撃や斬撃も回避出来る

バキツ!!

「~~~~~!!!」

「はあああああ!!」

拳が直撃し、声にならない叫び声を上げながら後の西行妖本体である桜の木へとぶつ飛んでいった

「カ・・・ツ・・・」ドサツ!

木に背中を強打し、そのまま落下して倒れた

「・・・はあ、はあ、はあ」

「や、やったぜ・・・勝ったぜー!!」

魔理沙の言葉から皆が安堵し、靈香は息を荒らげながら座り込むように崩れた

西行妖から放たれた強い妖力は感じられず、完全に倒した事を告げていた

「まだ、喜んでいられないわ・・・靈夢」

「分かっているわ。春も解放して博麗の巫女としてすぐに封印するわ」

紫の言葉に従って西行妖の下へと向かい春の解放と封印の準備を始める霊夢

「・・・」

「いやー大尉。お疲れ様です」

「・・・」

「良かったですね。これで寒い冬は終わって春が戻って全部解決ですねー」

「・・・」

「どうしました大尉？嬉しくないんですかー？」

「・・・」フルフル

首を左右に振り否定する小夜

確かにこれで異変は終わるのだろうと喜ぶべきなのだろうが何故か喜ぶ事が出来ないでいた

別に自分の力のみで解決出来なかったとか、そんな単純な事ではない
終わったにも関わらず胸騒ぎが止まらないのだ

(さて、回収された春を全て解放したから後は勝手に幻想郷中に行くでしょう。後はコイツを)

「・・・は」ピクッ

「ッ?!」

「はぐれえいのみいいいごおおお!!!」

「し、しまっ!!」

誰もが倒したと思われた西行妖が僅かに残った最後の力を振り絞り、霊夢へと牙を向く

全員気が緩み、油断していた。助けに行こうにも、もう間に合わない

い

「じいいいねええええ!!」

(だ、だめ・・・よけきれ、ない・・・)

恐怖のあまり目を瞑る霊夢、西行妖の放った手刀が霊夢に振り下ろされた

バシユ!

肉を貫き、赤い鮮血が辺りに飛び散りやったと確信した西行妖は二ヤつく様に口を歪ませ、霊夢を見ようと顔を上げる

「・・・ツ?あれ?」

しかし、西行妖が見た霊夢はどこにも傷は無く、巫女服に少々血がついているだけで平然としている

では、辺りに飛び散った血は誰の物なのか?腕に刺さった人物を西行妖は見た

「・・・」ポタツポタツ

「あ・・・・・・ああ・・・・・・」

口から血が更に流れ、腹は手刀によって完全に貫かれていながらも表情変えることなく自分を見下ろす人狼の姿

「に・・・兄さ、ん?」

小夜は何とか霊夢の元へとたどり着いたが体中がボロボロの状態で西行妖の攻撃を止めることが出来ず、自らを盾として霊夢を守ったのだ

「・・・Ende」グツ！バキツ！

「ツ・・・」ブツンツ

最後の拳を放ち、腹から手が抜けて吹っ飛ぶ西行妖。そしてついに幽々子の霊体から意識を手離した

幽々子からは完全に西行妖の妖気が消えた

「・・・」ドサツ

「兄さん！」

地面に背を付け仰向けで倒れた小夜

貫かれた腹や口から更に血が流れ出て、出血が止まらない

ああ・・・地面が冷たい

あの時と同じ様にあの吸血鬼、セラス・ヴィクトリアにやられた時間も仰向けで天を見上げるように倒れた時を思い出す

今回は船では無く、冥界の何も無いが僅かに明るく綺麗な夜空を見上げている

「兄さん！イヤツイヤツ！死なないで！！誰か！誰かー！！」

必死に泣き叫びながら誰かを呼ぶ霊夢の声が聞こえた様な気がした

血を失い過ぎたのか、目を開いていても景色が徐々に暗くなり始めているようだった。目を細めても見えない

あの子がいらない・・・あの子が見えない・・・泣き叫んでいたようだった guard 守れていなかったのだろうか？

分からない・・・あの子は無事なのだろうか？

小夜は左腕を動かして手探りで霊夢がいるであろう場所に手を伸ばし、彼女の頬に手を添えるように触れた

「ツ！・・・！」

居た・・・声まで聞こえないが確かにそこにいる

何度も触れた事のある髪と柔肌の頬、そして目から零れ落ちる涙の
感触

そして、生きているのだと実感させる体温の温かさと呼吸の息

ああ、守れた・・・あの子は、生きているんだ

ただ、それだけが分かっただけでも内心からあの時の様に嬉しかったという感情が湧き出てきて、口が自然に笑みを浮かべる

そしてそのままゆっくりと言葉を霊夢に告げた

よかった・・・ぶじで

38話

異変から3日後

「春ですよー」

冥界での異変が解決され、幻想郷の冬が終わり遂に春がやって来た
そんな幻想郷の空を飛び、博麗神社へと真っ先に飛んでいく1人の
女性の姿があった

「すいませーん！清くて正しい文々。新聞記者射命丸文です。今回の
異変については是非取材を！……あや？」

博麗神社に辿りつき取材を願い出るが誰も反応しない事に不思議
そうな表情をする文

神社の外には誰も居らず、中にも誰も居なかった

「あややや？おかしいですね、この時間帯なら小夜君が外で鍛錬して
るか、縁側で霊夢さんがお茶でも飲んでるはずなんですけどね？」

「霊夢たちなら今いないぞ文」

「おや、ルーミアさんにちびルミちゃんもお久しぶりです」

「久しぶりなのかー」

文に続いて現れたのは宵闇の妖怪親子だ

「霊夢と霊香は永遠亭の方だ」

「あの竹林の奥にある永遠亭ですか？分かりました！では早速！」

「取材目的だったら行かない方がいいぞ」

「あや？何故ですか？」

ルーミアは少し沈黙してから溜息を吐いて答えた

「小夜が今回の異変で意識不明の重傷を負ったそうさ。今も永遠亭に入院しているらしいが未だに目を覚ましてないそうさ」
「意識不明って、あ、あの小夜君がですか!? 今回の異変ってそんなにやばかったんですか?!」

「今回の異変の詳細は私に聞くな。知りたいなら紫か式の藍にでも聞けよ・・・さて、迷惑天狗に忠告はしたし行くとするか」
「お兄ちゃんのお見舞いにいくのかー」

文を1人残し永遠亭へと博麗神社をあとにした親子、文は少し考え事をしたあと、妖怪の山へと1度帰っていった

3日前

博麗神社の一室、小夜の部屋にて巨大な魔法陣の真ん中に瀕死状態の小夜をパチュリー、アリス、美鈴が回復させていた

辺りには真っ赤な血がちりばめられ、赤く染まっている

魔法陣には回復促進の力が込められておりパチュリーとアリスは魔法陣に魔力を流し続け、美鈴が気を小夜に流し込み生命力を高めようと試みているが状況は未だに良くはならない

「アリス、魔力の残量は？」

「まだ大丈夫。だけど何か拒むように治癒の魔力に抵抗してる」

「原因を追求している暇はないわ、今は続けて。美鈴、そっちはどう？」

「おかしいですよ！小夜さんの元々の生命力は高い筈なのにまるで奪われる様に徐々に生命力が低下してるんです！」

「・・・今はやるしかない。なんとしても一命を取り留めるのよ」

「・・・ごぼっ！」

「ま、また血が!!」

吐血し、小夜の周りに新しい血の絨毯が広がる

西行妖の攻撃には幽々子の能力である死を操る程度の能力が込められてあつたらしく、完全に操る事は出来なかつたが死にやすい状態になっており生命力の低下、治癒魔法の抵抗等は全て能力による影響によるものだ

吐血だけでなく体中の傷も開き始める。魔法陣によって傷の開きを防いでいるが少しでも魔力が緩めば体中の傷が開き始めるのだ

「薬の追加をお願い！傷が開き始めたわ！」

「はいはい！薬の追加だよ、傷は僕が塗るから君たちは続けて！」

奥から調合し終えた塗り薬を持って入ってきた霖之助は開き始めた傷口に薬を塗り込む

「薬草はまだあるの？」

「そろそろ予備もなくなりそうだ。尽きる前に何とかなる事を願うしかない」

（お願いです小夜さん！お嬢様たちの為にも戻って来てください!!）
（まだ上海のお礼だっしてないのよ。死なせるわけにはいかないわ）

冥界で西行妖の封印を施した後、紫のスキマによって博麗神社に戻

り霊香と霊夢で血止めの作業を行い、その間に咲夜が紅魔館に戻りレミアに全てを話しパチュリーと美鈴を寄越した

アリスはパチュリーからもう一人魔法使いが欲しいと言われ、魔理沙が急いで連れて来たのだ

その頃、小夜の部屋から離れた居間には多くの者たちが集まっていた

八雲紫と式の藍と橙を始め、霊香、魔理沙、ルーミア、レミア、咲夜、慧音、シユレディングー等、この場に居ない霊夢を抜いてほとんど小夜と交流のある者達ばかりだ

ちなみにフランヤリリーホワイトはレティとチルノたちと共に紅魔館に待たせている

「さて、紫。此処に来させた理由はわかってるな？」

「ええ・・・分かってるつもりよ、彼の事でしょ？」

「死んでも博麗の巫女を守れというふざけた約束をさせたらしいじゃないスキマ妖怪？」

「・・・そうよ、私が彼に幻想郷に居られる為の条件として約束させたのよ」

「幻想郷に居られる為だと？小夜君が一体何をしたと言うんだ賢者殿！」

慧音が問いだし、紫が溜息を吐きながら答えた

「まずは彼が何者か、から話すべきね」

「何者も何も、兄ちゃんは外来妖怪なんだろう？こうりんの話じゃあ幼少の頃に博麗神社に現れたって」

「違うわ。彼は今くらいの状態で元の世界から“死んで”幻想入りを果たしたのよ」

「今くらいの状態って・・・まさか身長的意味で言ってるのか？」

「何なら僕が話せばようか？僕が1番よく知ってるし」

「・・・そうね。同じミレニアムだった貴方なら分かりやすかもしれないわね」

自ら名乗り出たシュレディングーは八雲紫の変わりに元の世界での小夜が大尉だった頃の話をする

ミレニアムという組織の詳細や所属していた事、目的など事細かく。全てだ

「・・・なるほど、紫にとってはそのミレニアムの指揮官とやらの側近に居たからこそアイツを警戒していたというわけだ」

「た、確かに正気の沙汰じゃない。人工的に作り出された吸血鬼の軍隊なんて・・・」

「そうね。吸血鬼としては許せないわね」

シュレディングーの話にそれぞれ思うことを口にする

「これで分かったでしょう？そんな者達の下に居た彼をこの幻想郷に置いておくのは危険なのよ、でも彼は霊香の子として生き現博麗の巫女である霊夢も彼を慕っているから下手に排除出来なかったのよ」

「は、排除って・・・そこまでやらなくたっていいんじゃない」

「だからこそ、条件を出したのよ。まあ、もし何か起こしたとしてもすぐに排除できるよう監視はしていたけどね」

紫の言葉に皆が黙り込む、シュレディングーは話終えて疲れたからと横になって寝始めた

戦友である大尉が危険な状態であつてもお気楽な性格は変わらな
い

「それで、お前はこれからアイツとどう接していくんだ？」

「どういう事、霊香？」

「事情はともかくとして、アイツはお前の約束に従い霊夢を自分の命

を掛けて守って見せた。完全に信用しろとは言わないが認めてやつてもいいんじゃないか？」

「……」

「紫様、私からもお願いできないでしょうか」

「藍、貴女まで」

「私は紫様の命に背き、1度博麗小夜の真意を確かめるべくお預かりしていた羅針盤を利用して彼と戦いました……まだ完全に真意を知った訳ではありませんが小夜の幻想郷を守りたいという気持ちは確かでした。お願いです、命に背いた罰はいくらでも受けます」

かつて昔にも何度か命令を背く事はあったが今では紫の命令に忠実に従う優秀な式だ。そんな藍からも小夜を認めて欲しいと願われ、内心戸惑う紫

「緊迫している所悪いけどいいかしら？」

「パチエー！小夜はどうなの!？」

パチュリーたちが今に入って来てレミリアが即座にパチュリーにどうなったかを聞く

「とりあえず一命はとりとめたわ。でも、彼がいつ目覚めるかどうかは分からないし、この先は医者にも診てもらおうしかないわ」

「そうかー、アリスとこうりんもありがとな」

「礼はいらないわ。彼には上海の事もあるもの」

「僕も出来れば彼を失ってほしくはないからね。どこの誰かと違っつけにせず、ちゃんとお代を払ってくれる良識的なお客さんだからね」

「うぐつ……と、とりあえず霊夢に伝えておくぜ」

「ああ、もう霊夢さんは小夜さんのお部屋に行きましたよ」

「そう……じゃあ、邪魔は出来ないわね。咲夜、帰ってフランに報告しに行きましょ」

「はい、お嬢様」

先に紅魔館に戻るため博麗神社を後にしたレミリアたち

「では、私達もそろそろ戻るとしよう」

「霖之助って言ったかしら？途中まで送ってあげましょうか？服に付いた血の臭いに妖怪たちが寄ってくるかもしれないわ」

「そうかい？じゃあ、お言葉に甘えさせて」

「あー！待った待った！こうりんは私が送るんだぜ！」

「いいのかい魔理沙、霊夢の事も気になるんじゃないか？」

「いや、今の霊夢に私じゃあなんにもしてやらない。そつとしてやるしか出来ないんだぜ・・・ほ、ほら！帰るんだったら早く帰るんだぜ！日が暮れちまう」

「分かった分かった。じゃあ霊香くん、また何か必要になったら来てくれ。微力ながら力になろう」

「ああ。今日は皆、済まなかった」

魔理沙、アリス、慧音、霖之助らも帰り、ルーミアもちびルミの迎えに帰っていった

「・・・藍、貴女は橙と共に私の代わりに小夜とシユレインガールの監視を任せるわ」

「はい。紫様は？」

「私はしばらく休むわ。妖力の回復と幽々子の元にも行かなきゃだから・・・霊香」

「なんだ？」

「・・・もし彼が目覚めたなら言うておいて。博麗の巫女の守護者として認めるって」

「それぐらい自分で言え、お前が事の発端なんだからな」
「・・・」

スキマの中へと入り姿を消す紫

「ではしばらくの間、お世話になります」

「お、お世話になります」

「そうかしこまるな。自分の家だと思ってゆつくりしていけ」

「ズー・・・ズー・・・むにやむにや」

「コイツほどとは言わないがな」

その頃

小夜の部屋

「・・・」

未だに目を覚まさない小夜の横に座りながら見つめる霊夢

彼女の心の中には後悔で一杯だった

もし、あの時油断せずにいれば

もし、来る前に自分たちで何とかしていれば

もし・・・もつと早く異変に気付き解決していれば、こんなことにはならなかったとずっと考えていた

だが、そんな事を考えていてももう遅い。起きてしまった事はもうどうにもならないと理解しているつもりではいた

だが、母と共に血止めの時に手にこびり付いた血を洗い流せても、血の臭いは今も強く残っており少しでもその血生臭い匂いが鼻に入るとあの時の光景を思い出し、後悔が蘇ってくる

「結局・・・私は兄さんが居ないと何も出来ない。強くなかなかつた・・・うっ」

小夜の手を握り、涙目になりながらも霊夢は目覚める事を祈りながら誓った

「すぐじゃなくても、いい……絶対に、強くなつて……兄さんを、皆を守る巫女になる、ひぐつ……母さんに並べるようにづよぐなる……
だから、がえつてきて……ううう」

声を上げずに布団に顔を埋めながら泣く霊夢

その誓いの言葉が眠っている小夜に届く事を信じて

??

「……」

どこかも分からない場所に彼は居た

何をするでも無く、ただただそこに突っ立っていた

目の前には大きく広がる川が流れており、周りは特に変わった物もない殺風景な場所

いや、その何も無さが逆に変わった所と言えるのかもしれない

「おやおや、このような場所に迷子ですか？」
「……」

突然声を掛けられ振り向くとそこには1人の若い青年が立っていた

金髪に紫のグラデーションがかかった短髪に服装は寺の住職の様な姿だった

39話

1人何もすること無くただ突っ立っていた所に突如現れ、声を掛けてきた青年は頭を下げながら言った

「申し訳ありません、自己紹介がまだでしたね。私は是非曲直庁に勤める閻魔様の補佐官を勤めております聖命蓮と申します」

是非曲直庁とは聞いたことは無いが閻魔というのは聞いたことがある。日本に伝わる地獄の裁判官だとか

死者が犯した罪の重さによつて様々な地獄に落とされ、罪を悔い改めさせると聞く

とりあえず、こちらも自己紹介をする事にした

「・・・博麗小夜」

「博麗・・・まさか博麗の巫女の関係者ですか？」

やはり、博麗という姓が出れば誰もが博麗の巫女の関係者なのかと聞いてくる

まあ、巫女という字に女という文字がある通り博麗の巫女は女性であるという認識は当たり前。男である俺が博麗の姓を出せば当然の反応なのだろう

「・・・前巫女に拾われ、名前を貰った・・・現巫女の義兄だ」

「そうでしたか。しかし、このような場所に居て大丈夫なのですか？」

「・・・分からない。此処が何処か、どう帰るのか」

白玉楼にて霊夢を庇い、気を失った後に目覚めたら此処に居た

帰ろうにも帰り道が分からないのだ

「なるほど・・・所でこの辺で小野塚小町という女性を見ませんでしたか？赤い髪に大きな鎌を持った女性です」

「・・・いや、誰も見てない」

「そうですか。はあ、一体どこでサボっているのやら。また閻魔様に叱られたらもう庇えないですよ」

「・・・大変だな」

「ええ、大変ですよ。補佐官には暇はありませんからね・・・少しだけお話を聞かせてもらってもよろしいですか、貴方の事やご家族の事とか」

「いいのか？・・・その小町とやら、見つけなくて」

「いいですよ。どう説教されても彼女のサボり癖は治りませんから」

どうやらその小町とやらは相当のサボり魔のようだ

どちらにしても帰る方法が分からない以上、自分ではどうする事も出来ない

座りながら、この命蓮という男に話をする事にした

幻想郷に初めてやって来た時から話した

幼い霊夢にモフモフの恐ろしさを味あわされたり

何故か霊香に殴られたり

博麗の養子になったり

魔理沙という少し面倒な義妹が出来たり

白狼天狗に間違われ射命丸に連れ去られ犬走権という義姉が出来たり

と、とりあえず色々な事を話した。今思えば来てから変な事ばかりが起きたものだ

結局振り返っても何故突然霊香に殴られ、次の日には謝れたのか理由は全くわかっていない

「ははは！白狼天狗に間違われて、つ、連れ去られるなんてし、失礼、ふふ」

「・・・あの時の俺は何がなんだか、全く分からなかった」

「ふふふ、ふー…久しぶりに大笑いした気がするよ。しかし、やっぱり妹さんの事を話すのか多かった。それだけ大切にしているんですね」

「…家族だから」

「そうだね。家族は大切ですよね…実は僕にも姉さんが居たんです」
「姉？」

「はい。聖白蓮って言うんですが綺麗で優しい人で共に僧として修行に励んでいたのですが…僕は生きていた頃はかなりの病弱でした。修行途中に倒れてしまう事もあってよく心配させてしまっていました…そして遂に病死したんです、ずっと心配掛けて何もしてあげられずに」

「…」

先程より落ち込んだ表情になった命蓮

やはり此処はまだ冥界のようだ

病死して居ながら元気な姿で命蓮はとなりに存在している

だが、白玉楼からこの川しかない場所に突然いるという事は俺も…

「もうお気づきかもしれないけど、此処は冥界の三途の川。今小夜さんが見ている川の長さは貴方の罪の多さを示し、この川を越えたら貴方はもう現世には戻れない…でも大丈夫です、貴方はまだ死んではいません」

「死んで、ない？」

「今貴方の状態は肉体から魂のみが離れた状態だと思います。貴方の魂からはまだ生気が満ちているんです、肉体がまだ無事であれば貴方はまだ戻れます。つまり幽体離脱つというやつです」

「…どうやって戻る？」

「今は待つ事しか出来ないでしょう。いずれは気がついた頃には戻っていると思います」

「…」

今は待つしかない、そう言つて命蓮はゆつくり立ち上がる

「さて、そろそろ探しに戻るとしましょう。楽しいお話、ありがとうございます
ございます小夜さん・・・それと一つ頼みたい事があるのですが」
「？」

「もしですよ？もし、姉さんに会うような事があつたら私の事は伝え
ないでください」

「・・・なぜ？」

「私が死にこの冥界に来てから既に何百年もの時が経っています、
人間である姉さんは未だに冥界に来ません。きっと私の死が理由で
何かあつたのだと思います。一体何があつたのかは知りませんが1
人残して逝つたこの愚弟に会つては更に悲しませるだけでしよう」

「・・・悲しませたと自覚があるなら・・・会つて謝るべきだ」

「・・・ですが」

「・・・あの時、霊夢は泣いてた・・・俺も、霊夢を悲しませた・・・
だから、謝る・・・お前も、悲しませたと思うなら・・・会つて謝れ」
「自覚があるなら・・・ですか」

先程まで哀愁漂う悲しみに満ちた表情から少しだけ笑みになりな
がら頭を下げた後、命蓮はその場を後にした

俺は座りながら目を閉じ眠りについた

いずれは戻れると言つた命蓮の言葉を信じて

40話

「・・・」スツ

ふととして目が覚めた。体はあの川にいた時より重さを感じ、座って眠っていたのにいつの間にか横になって布団の中に居た

天井が見える

しかし、見覚えのある天井とは違う。此処は博麗神社ではないようだ

体を起こし、ブーツとする脳を徐々に覚醒させ意識をはっきりさせながら布団から立ち上がり襖を開けて外に出ようとした

「ほれほれ、鈴仙こっちだよー、って危ないな！アンタいきなり出てくんじゃないよ・・・あれ？アンタちよつと前に運ばれて来た・・・」

「待ちなさいてゐ！今日という今日は許さ、きやあ！」

「・・・ツ」ガシツ

いきなり耳を生やした小さい子供が通りかかったり、今度は女性が倒れて来たから支えてやった

ヒュン！

「あ」

「・・・ツ」ゴツ！ ベチャ！！

次に来たのは早く飛んでくる球体の様な何か

すぐに反応は出来たため、手で掴み取ろうとしたが体が思い通りに動けず手を避けて、球体は額に直撃

直撃と同時に球体が割れた様な音と共に顔中にぬめりのある液体が付着した

一瞬、時でも止まったかのように静寂が訪れ少ししてから顔に付着した液体を手で拭いて見てみると透明と黄色が混ざりあっている様な感じ

これはどうやら卵のようだ

「あーあ、せつかくの鈴仙への罊が台無しだ〜」

「てるーあんたわ〜！だ、大丈夫ですか!？」

「鈴仙、てる。騒々しかつたけど何があったの？患者の様子はどうだった……」

「あっ」

更に数人現れ、場はまた静かになる

青と赤が合わさった服装の見知らぬ女性の後には見慣れた者たちも一緒にいた

霊夢、霊香、シユレディングー、そして八雲紫の式である藍にその式の橙

場はまた静まり返ってから妙に温度が低くなっていく様な感覚がする。とりあえず誰でもいいから今欲しい物を言った

「……タオルをくれ」

診察室

「・・・ふむ、心身共々異常は無いけど様子を見たいからもう1日此処に入院して何も無ければ明日には無事退院よ」

「・・・」コクッ

先程現れた3人目の見知らぬ女に診察され、一応の問題無しの結果を言い渡された

彼女は八意永琳

影狼が住処にしている迷いの竹林の奥に存在する永遠亭に住まう医者だ

「それにしても目覚めてから災難だったわね。2人には私からよく言っておくから許してあげてね・・・と言っても、もう酷い目にあってるのでしようけど」

苦笑いしながら朝の出来事を話す永琳

あの後、藍からハンカチ程度の布で顔を拭かれ、耳を生やした子供と女は霊夢と悪ノリで行ったシュレディンガーに連れ去られ、シュレディンガーを止めに橙も向っていった。1人は関係無い様に思えるが

診察室から出た後、待っていた霊香が話し掛けてきた

「どうだった永琳？」

「問題は無かったわ。後1日だけ様子を見てそれでも何も無ければ晴れて退院出来るわ」

「そうか。とりあえず無事でなによりだ」

「・・・霊香」

「おっと。お前に関しての事は退院して家に帰ってからだ、それまではゆっくり休め」

「・・・」コクッ

とりあえず、霊香の言うとおりにし俺はまた先程の部屋に案内されて布団の上で横になった

話によれば、此処に連れてこられてから既に2日、3日は眠っていたようだ。その性で体に訛りが生じて先程の卵の飛来時に反応は出来ても体はついてこれなかった

まあ、明日までに何も問題が見つから無ければ退院出来る。その後にもまた鍛錬をしながら整えればいい

「失礼しまーす」

「・・・霊夢か」

「うん。どう、具合とか？」

「・・・特に・・・悪くはない」

「そうなんだ、良かった」

「・・・」

「・・・」ソワソワ

特に話す事も無くなってしまい、互いに黙ったままになってしまった

霊夢は何か言いたそうではあるが躊躇っているようにソワソワしている

「・・・霊夢・・・あの女、西行妖はどうなった？」

「え、ああ・・・西行妖は封印したわ。ちなみに西行妖は後にあつた大きな桜が本体で亡霊の方は乗っ取られてただけなの。あの西行妖はとても危険な存在であるの白玉楼の主、西行寺幽々子が自らの亡骸を使って封印したんだけどその時に生前の記憶を全て失ったの、西行妖の事だけを除いて。何を思って封印を解こうとしたかは分からないけどね」

「・・・」

結局、あの女が異変を起こした事には変わりはないが予想範囲

外だったイレギュラーが起こったというわけだ

「・・・何事も無く、異変は終わった・・・か」

「何事、も？」

「?・・・冬は終わった、春もすぐ終わってしまうかもしれないが・・・異変は終わらせた・・・誰も問題無くな」

「・・・どうして」

「・・・霊夢？」

「どうして、そんな事言えるの？兄さんは、死にかけてたんだよ？」

「・・・」

「母さんや私だけじゃないよ。魔理沙に咲夜、治療を手伝いに来てくれたパチュリーや美鈴、アリス、霖之助さんやレミリア、ルーミア、慧音、みんな、みんな心配してたんだよ。なのになんで・・・自分の事を他人の様に扱えるの？」ポロポロ

「・・・」

「母さんから聞いた。紫から私と母さんを守る様に言われたって、そうしないと幻想郷に居られないって・・・会えなくなるのは嫌だよ。でも、もつと嫌なのは私の性で兄さんが死んじゃう事だよ・・・結界の外で兄さんが何したかなんてどうだっていい。私も守れるようにもつと強くなるから・・・だから、もうどこにもいがないで！」

泣きながら、胸に抱きついて来た霊夢

何も言えない。何も言うことが出来ない

結界の外という言葉から察するにどうやら俺がミレニアムに居た事を知ったのかもしれない。それはまだいい、だが分からないのは何故そこまで俺の為に涙を流すのかが分からない

家族というものはそこまで信頼しあえるものなのか？生まれた種族も、流れる血さえ違おうと言うのに霊夢は俺が死ねば悲しみながら泣くのか

家族という者もいなければ同じ存在の仲間という者もいなかった俺には分からない

戦争では必ず誰かが死ぬ。その死に対しても俺は悲しみなどという感情は無かった

ただ命令に従い、戦い、そして最後には敗北という形で俺の戦いの幕を閉じた事に満足しながら死ねた

しかし、それらも全て過去の話だ。俺は今此処に居て、この幻想郷に住み、霊香と霊夢という家族を得て生きている

今更ながらレティ・ホワイトロックのあの言葉を思い出す

『霊夢ちゃんの為に死んでも守るような事は絶対にしないでね』

何を考えているか分からない掴み所のない奴だが何が言いたかったのかやつと分かった

例え、白玉楼でならずともいずればこうなる事を見抜いてレティは言ったのだと本当に今更だ

「……」ギョツ

「兄さん……」

「……心配を掛けた……本当に、済まなかった」

「……うん、うんッ！」

優しく抱きしめ、謝る小夜

霊夢が死ぬ事を望まないならば、生きよう

今の俺が霊夢に出来るのはそれくらいなのだろう

数時間後

泣きつかれて少しだけ眠っていた霊夢も起き、いつの間にか眠っていた俺も目を覚ました

日は既に沈みはじめ、夕方になりつつあった

「じゃあ、そろそろ帰るね。明日また母さんと一緒に来るから」
「……」コクッ

「んですかね？」
「放っておけ。年頃なのさ」

日常編2

41話

次の日

朝早く目を覚まし朝食を済ませた後、永琳の診察室にて最後のチェックが行われた

「……ふむ、問題は無し。これなら退院出来るわ」
「……そうか」

問題無しと診断され、ようやく退院出来るようだ

「うどんげ」
「はい」

永琳の呼びかけに応え、小さな袋の様な物を持ってくる

ちなみに彼女は昨日の廊下での出来事で出会った兔の耳を生やした女で名は鈴仙・優曇華院・イナバ

長い名の為、鈴仙と呼ばせて貰っている。永琳の弟子だそうだ

「これは痛み止めの薬よ、肉体の傷は消えたけどまだ完全とは言えないわ。突然痛み出す可能性もあるから耐え難かったら服用してね」
「……」コクッ

診察が終わり、また先程の部屋に戻り霊香が昨日持って来てくれたいつもの甚平に着替える

オーバーコートは下はともかく上を妖夢に預けっぱなしだ。あとで取りに行かないと……今回は異変解決として冥界に行ったが私用でまた訪れるのは問題ないのだろうか？

「小夜さん。お迎えが来たみたいですよ」

「……」スツ

鈴仙からの知らせを聞き、部屋を出て迎えに来た霊香と霊夢の元に
向かう

「……世話になった」

「また怪我や病気になったらいつでもいらっしやい。薬が必要だった
ら人里へ鈴仙に薬売りをさせてるから風邪薬程度ならすぐ手に入る
から。お大事に」

玄関口で患者であつた俺を見送りに来た永琳に礼をして永遠亭を
後にした

「よう、もういいんだな？」

「ああ、用事は済ませた。帰りの案内を頼むよ妹紅」

「ああ、分かった……あんたが小夜か？」

「……」コクツ

「そうか。あんたの話は慧音や同じ竹林に住んでる影狼から聞いてる
よ」

「へえ。主にどんな話？」

霊夢が聞くと妹紅はそうだなーつと顎に指を添えて思い出す様に
答える

「慧音の授業をつまらないと言わなかったとてもいい子だったとか、
同じ人狼の種族だから話が合うだとか……そんな感じか？」

「ふーん。確かにあの授業をつまらないと言ったことは無かったわ
ね、兄さん」

「……」

そんな雑談をしながら迷いの竹林を案内する妹紅の後をついていく俺達

竹林を出た後はすぐに自宅へ帰った。眠っていた分の鍛錬をし体の状態を戻す為に・・・と、思っていたのだが

博麗神社

「却下」

「・・・」

自宅につき、早速体を動かそうと準備しようとしたら2人に捕まり家の中に引つ張られ鍛錬をすることを却下されてしまった

「調子を戻したいとゆう気持ちは分かる。少しでも鍛錬を怠るとかつての感覚を取り戻すのは非常に難しい、だが小夜、お前は1度死にかけていた、目覚めたのも奇跡に近いんだ。しばらくはお前には休息が必要だ。しばらく私が良しというまで鍛錬や修行は一切禁止とする」

「・・・だが」

「紫との約束も分かる。お前がそんな約束程度で霊夢を守っていたんじゃないともな・・・だが、お前は私たちの家族だ。これ以上、母親と妹を心配させるんじゃない」

「・・・」

まいった。完全に反論が出来なくなった

・・・仕方ない、言う事を聞くしかないようだ。それに万が一逆らったら何されるか分からない

「・・・分かった」

「物わかりが良くてよろしい。まあ、体を動かす事は駄目だと言ったが出掛けるだけなら許そう、ただし私か霊夢を必ず同行させる事だ」

「・・・」コクッ

「よし、じゃあ私は準備があるから。霊夢、小夜の見張りを頼むぞ」
「はい」

そう言つて俺の部屋を後にした霊香

準備とは何の事だろうか？

「じゃあ、布団敷くからちよつと待っててね」

押入れから布団を取り出し、床に敷く霊夢

敷かれた後、俺は横になりながら眠ること無く天井をずっと見つめていた

「♪」

霊夢は俺が何処かに行かぬよう見張っているが、こうも抱きつかれているともう冬ではないので少し暑く感じる

それに見張りなら見るだけでいいんじゃないか？と聞いた所返ってきたのは

「こうやって抱きついてたら下手に動こうなんて思わないでしょ？」

と、言われた

・・・間違っているような、いないような

とにかくどうせ何もできないのだから明日あたり、鈴奈庵に行つて本を借りるか、紅魔館に行つて読書でもさせて貰おうかと考えながら抱きつく霊夢の頭を撫でていた

42話

次の日

外からの暖かい日差しで目が覚める

春の暖かな日の暖かさと風がなんとも心地いい

「ツ・・・？」

体を起こそうと両腕を動かそうとしたが体が重く起き上がる事が出来ない

決まってこういう時は霊夢が片腕に抱きついていてるかなのだが今回は片腕だけじゃない体全体が重い

首だけを動かして体を見るとチルノと大ちゃんが懐に、腹の上でルーミアが寝ている

「・・・なんだ？」

何故3人も俺の布団と一緒に寝ているのだろうか？昨日の夜は確かに1人で寝た筈なのだが

しかも、ルーミアの口から微妙に唾液が垂れて服を通り越して肌に到達しており少し不快だ

「やあ大尉。やっと起きましたね」

視線を天井に戻すと俺を見下ろす様につっ立っているシュレディンガーがいた

「・・・この状況はなんだ？なぜ、ルーミアたちがいる？」

「大尉が目を覚ました事を知ったから遊びに来たようですよ。まあ、大尉はまだ寝てたから少しの間僕が遊び相手にされましたけどね・・・それとあの氷精はなんですか、気に入られたのはいいですけど部下に

してやるとか勝手極まりないですよねー本当に」
「・・・遊びに・・・やっど?」

今更ながら最初のシユレディンガーの言葉に疑問があった。〃
やっど起きましたね〃という言葉に

それに朝にしては気温が異様に高く感じた。いくら春になったとは言え朝からここまで暖かい事は無い筈

「・・・もう、昼?」

「はい、いわゆる寝過ぎしですね。もう霊夢さんたちが昼食の支度をしてもうすぐ大尉とこの3人を起こしに藍さんが来るんじゃないですかね?」

・・・しまった。まさか寝過ぎすとは思わなかった

どうやら昨日の晩飯を食べて寝た後から今までずっと眠ってしまっていたようだ

別に遅くまで起きていた訳ではない。いつも通りの就寝時間には寝た筈なのに昼まで寝ていたという事は体に蓄積された疲労が回復しきっていないのかもしれない

チルノたちはシユレディンガーと遊んだ後、様子見に俺の部屋に来ていたがたぶん疲れたんで寝てしまったのだろうとシユレディンガーが言う

「いやーしかし大尉も隅に置けないですよね。シヨタ好きかと思いましたが実はロリコンなんですかね?」

「・・・?」

「あつ、やっぱり大尉だから自覚無しか。つと、誰か来ましたね」

「失礼するぞ。む、小夜くんは起きているのか・・・しかし、すごい事になってるな」

シユレディンガーが意味不明の会話をした後に襖を開けて藍が

入って来た

藍はしばらくの間、妖力回復の為に休んでいる八雲紫の代わりに俺の監視として博麗神社に式の橙と共にいるらしい

しかし、監視にしては随分と助けてもらったりしている。昨日の夕食をわざわざ部屋まで持ってきてくれたり、食わせてもらったりなど

「……起こしてくれても……良かった」

「いや、霊香からは寝ているなら昼まではゆっくり寝かせてやった方がいいと言われてね。その子達も遊んでいた時は少し静かにしていたよ君の事を思ってたね」

「……そうか」

「藍、兄さん起きた？」

と、そこに霊夢がやって来た

「すまない霊夢……寝過ごした」

「ううん。今の兄さんに必要なのは休む事なんだから気にしなくても大丈夫よ」

「その代わり僕をこき使ってますけどね」

「あんたは居候なんだからちゃんと働いてもらうのは当然でしょう？そろそろ昼食の準備出来るから来なさい」

「はいはい」

そう言つてシュレディングーと共に部屋を後にする霊夢

昼食であるならそろそろ布団から出ようと試みる

「ん？ああ、3人がいるから起きれないのか。待つてくれすぐ起こして……いい。大丈夫だ」しかしどうやって？」

「……」フツ

力を込めて体を霧状にして布団から抜け出す

ルーミアは落下し「むぐっ……」と言った後も眠っていた

「なるほど霧になって抜け出したのか。しかし、ちびルミは起きなかったか」

「……着替えるか」

服が収納されてある引き出しから白狼天狗の服を取り出し、藍がいるのにも関わらず寝間着を脱ぎ始めた

「な?! さ、小夜くん!」

「……なんだ?」

「あ、いや、その……何でもない、止めてすまない／＼／＼」
「?……分かった」

呼ばれたと思ったら顔を両手で隠し、後に振り返りながらなんでもないと言われたので着替えを再開した

(シユレデインガーくんが言っただけ……ま、まさかここまで無関心とは、これはこれで色々心配だな……チラツ)

着替え終えるまで背を向けていた藍はそつと視線を振り返りながら着替えている小夜を見る

無駄な筋肉の無い鍛えられた肉体に藍は少しクギ付けになっていた

「……よし」

着替え終えて座ろうかと思った時、大ちゃんがゆつくりと起き上がった。チルノとルーミアはまだ起きる気配は無い

「んー……ふあ? おはようございませう、小夜ちゃん……ふう」

「……まだ眠いか?」

「んー、小夜しゃん・・・だっこ・・・」ポフツ

起きたがまだ意識が完全に覚めておらず、少し幼声になりながら近くに来た小夜に両腕を伸ばしたまま倒れ込み、支えた所でまた寝てしまった

小夜はあぐらをかいて膝の上に大ちゃんを座らせ、頭をゆつくりと撫でる

「手慣れているね」

「・・・小さい頃、霊夢と一緒によく昼寝した・・・膝の上で寝る事が多かった・・・頭を撫でると、喜ぶ」

「うーん、そうか（最後のは君だからだと思うけど）」

「お待たせ兄さん」

襖が開きお盆を持った霊夢が入ってきた。どうやら昼飯を持ってきてくれたようだ

部屋にある小さなちゃぶ台にお盆を乗せ、大妖精を布団に戻し早速昼食を食べようとする

「・・・霊夢、箸」

お盆には無く、何故か霊夢が持っておりその箸には煮物がつままれておりそれを俺に向ける

「はい、あーん」

「霊夢・・・自分で食べる」

「えー、だって昨日藍に食べさせて貰ったんでしょ?」

そう言いながら藍の方へ視線をむける

「い、いや、それはだな・・・た、確かに私も一回同じ理由で断られた

けど今回の異変で迷惑をかけてしまったから何かしてあげたいとゆう善意であつて、別にやりたかったからではなくて……ブツブツ」
「まあ、やった事には変わらないんだしいいわよね？」

何がいいのかは分からないが、とりあえず受けることにした

「……」パクツ

「美味しい？」

「……」コクツ

そんな感じで昼食を食べ終えた

「いやあ、とりあえず目が覚めて良かったぜ兄ちゃん」

「……ああ」ズズズ

昼食に食べ終えた後、縁側で外を眺めていたら魔理沙とアリス、ちびルミを迎えに来たルーミアがやって来て今は霊香の方にいる

本当なら人里へ行くか紅魔館に行こうと思っていたが昼まで寝過ぎした後ではあまり長く居られないため明日にすることにした

そして今、茶菓子の煎餅を食べながら緑茶を啜っている

「でも、最初は驚いたわ。いきなり魔理沙に連れられて何事かと思つたらまさか貴方が死にかけてて治療を手伝えですものね」

「……全部、霊香から聞いた……すまなかつた」

「私は魔法陣に魔力を送つただけよ。まあ、上海の件もあるしこれでおあいこって事で」

「……おあいこではすまない」

実際、俺がアリスにしてやった事は彼女の人形を届けた事

それに比べて俺はアリス、そして紅魔館のパチュリーと美鈴に命を助けられた

どう見ても彼女への恩の方が大きい

「まあまあ、そんな暗くなる話はもうやめようぜ。それに近々に異変解決と兄ちゃんの退院祝いの花見の宴会やるんだからな」

そう、それが霊香が昨日言っていた準備とやらの事だ

せつかく春が戻ったのに花見をしないなんて勿体無いという考えの下で魔理沙の言う通り、花見が行われるそうだ

何かあればすぐに騒ぎなくなる。この幻想郷の住人たちの習性？には慣れたつもりだったが今になってもバカ騒ぎの中に居ることだけは慣れない。そもそもそれ事態が無縁の中で生きてきたのだから尚更だ

「よう小夜。退院おめでどう」

「・・・ルーミア姉」

「何度か娘と見舞いには行ってたんだがな。目、覚ました頃に会いに行けなくて悪かったな」

「・・・」フルフル

「ははは、相変わらずだな。さて、私は娘連れてそろそろ・・・ん？」

言葉を途中で止めて、階段のある方へ視線をむけるルーミア姉

それに釣られて俺と魔理沙、アリスも同じ方に視線をむけるとそこに見慣れたおかつば頭のアイツがいた

「お、お久しぶりです小夜さん」

「・・・妖夢？」

冬の異変に2度も戦った西行寺幽々子の従者、魂魄妖夢だった

43話

居間

「・・・お茶」

「あ、ありがとうございます」

お盆に乗せた緑茶が入った湯呑みを妖夢の前に置き、俺も新しく緑茶を入れた湯呑みを持って座る

「で、今日は何のようであつたのよ」

隣に座る霊夢が威圧的に妖夢に問いかける

仕方が無い

いくら西行妖に操られていたとはいえ今回の異変は西行寺幽々子が自ら行つた異変であり、その従者である妖夢を警戒するなというのも無理な話だ

ちなみに妖夢は西行寺幽々子が西行妖に操らていた事は最後まで気づいていなかったそうだ

だからと言って簡単に許される事では無いだろう、結局は異変に加担していたのだから

「この度は、今回の異変によつて皆さんにご迷惑をお掛けした事を謝罪するために参りました。幽々子様はあの異変解決から2日後にお目覚めになりましたが、ご体調がまだ動けるほど治癒されていないので今回謝罪には来れません」

「じゃあ貴方は来れない主さんの代わりに謝罪をしに来たつてこと？」

「・・・私はそれほどまでは言えませんが、長く幽々子様の従者として西行寺家に仕えて来ました。それなのに今回の異変で幽々子様の変貌に気づけず西行妖のいい駒として使われた事を紫様からお知

えられ深く後悔しました」

膝の上に乗せた握り拳を更に強く握りしめ体を震わせる

「主の代わりとして謝りに来たわけではありません、この度は従者である私個人として謝りに来ました！本当に申し訳あります（ガシツ！）みよん！」

頭を下げて謝罪しようとする前に右腕を霧にして妖夢の方へ飛ばし、頭を鷲掴みして止めた小夜

「・・・謝るなら、先に謝る奴がいる・・・」

「は、はい？」

「・・・リリー・ホワイト」

「ッ」

「・・・お前個人で謝罪に来たなら、先に謝るべき相手は俺達じゃない・・・お前が最初に襲ったリリーだ」

西行寺幽々子と共に来たなら何も言わなかったが妖夢個人の事で謝罪をするならば一番最初に被害を受けたリリーに謝る方が先だ

「・・・霊夢はどうだ？」

「まあ、そうね。異変起こした本人が一緒じゃないしあんたが言いたいこともよくわかった、私たちへの謝罪だったら別にいいからまずは他に迷惑を掛けたほうに謝りに行くべきね」

「は、はあ・・・しかし」

「まあ、いちいちいろんな所へ行つて謝るのも大変だろうし近いうちに花見やるからその時にすればいいんじゃない」

「兄ちゃんはともかく霊夢は今回はあっさり許したな」

「起きた事、過ぎ去った事をいちいち考えてたってきりが無いわよ。私だつてまだ・・・」

途中で話すのをやめた霊夢

あんなことを言ってはいるがまだ内心では複雑な状況なようだ

「あつ、そうでした。小夜さんにお返しするものがありました。えつと、あの時の上着お返します」

そう言つて妖夢が取り出したのは冥界で妖夢を倒した時に掛けてやったオーバーコートだ

これでまたいつもの服装に戻る

「・・・すまない・・・取りに行こうとは思っていた」

「いえ、敵であつた筈の私にこのような心遣いをしていただいてありがとうございます」

「・・・なんだ？」ズズズ

右腕を戻し、茶を飲む

「その・・・ぜひとも私を弟子にして欲しいのです！」

「・・・？」

茶を飲む手を止めて首を傾げる小夜

何故いきなり弟子にして欲しいなどと言われたのかが理解出来ないからだ

「小夜さんに敗れ、目を覚ましてから数日ずつと考えていました。今よりももつと強くなつて幽々子さまのお役に立ちたいと・・・そこで一体私に何が足りないか戦いの中で教えてくださった小夜さんの下で学ばばきつと強くなれると確信したのです！」

「・・・俺は「そのはなしちよつとまったー！」・・・」

襖を力一杯開きながら現れたのは俺の部屋で寝てた筈のチルノだった

嫌な予感しかない

「おおかみ兄ちゃんの弟子になりたいならまずはいちばん弟子のあたりを倒してからにしてもらおうか！」

「ち、チルノちゃん！お兄さんはまだ退院したばかりなんだから騒いじゃだめだよー！」

妖夢に向かって騒ぐチルノを追って大ちゃんもやって来た
もう起きたのか

「そ、そういうえば貴方は人里でも言っていましたがおおかみ兄ちゃんの弟子でしたね・・・なるほど、弟子になりたければまずはあなたと戦い力を示せばいいのですね！」

「・・・いや「おう！でもなめるなよ！あたいだっておおかみ兄ちゃんに鍛えられて昔よりさいきょうなんだぞ！」・・・はなし「分かりました！では早速表にて一勝負しましょう！」・・・」

小夜の言葉も遮られ、2人は外へ向かって行った

「大変ね。あなたも」

「・・・」

「お兄さん！本当にすいません！」ペコツペコツ

チルノの代わりに必死に謝る大ちゃん

小夜は頭を抱えている

「庭荒らしたら直させるから大丈夫よ兄さん」

「いや、兄ちゃんが悩んでるのはそんな事じゃ・・・」

「・・・そうだな」

「え!?!マジでそっちで悩んでたの!?!」

その後、結局チルノは敗れ妖夢は小夜の弟子入りを果たした

「これからよろしくお願いします師匠!!」

「・・・」コクッ

目をキラキラと輝かせる妖夢

そして早速荒らした庭をチルノと共に直させました

44話

妖夢の弟子入りが決まった次の日の人里にて

「それはまた大変でしたね」

「・・・ああ」

いつもの貸本屋である鈴奈庵にて借りる本を見ている途中で小鈴と昨日の出来事を話していた。隣には霊夢が居る

結局、チルノと妖夢だけでは今日中に終わらないという事で霊夢や大ちゃん、ルーミア姉、八雲藍にも手伝ってもらってやっと庭の修復が終わった

一体あの短い間でどれだけ暴れたのかと不思議に思うくらいにボロボロだった

妖夢はまだ完治しきっていない幽々子の身の回りの世話をしなくてはいけないため、鍛錬にやってくるのはまだ先の話になる

「で、今日はなに借りるの兄さん？」

「・・・霊と妖怪樹関連の物がいい・・・今回の異変で知らない事が増えた」

「霊や妖怪樹関連ですか・・・此処には主に香霖堂から仕入れた外から流れ着いた物がほとんどですから」

「あまり無いかもしれないのね」

「そうですね。他にあるとしたらやはり稗田家にある書物とかですかね」

「どうする？兄さんなら阿求に頼めば見せて貰えるんじゃない」

本を探すのを中断して考える

確かに頼めば望む関連の書物を見せてはくれるだろう。まあ、すぐ欲しいというわけでも無いしまた今度に見してみよう

「・・・すぐ欲しい訳じゃない・・・また今度にしよう。他にはあるか？」

「えっと、少し前に新しいのが入りましたけどお気に召すかはどうか」

「なんでもいい・・・暇を潰せれば」

「分かりました。ではちよつと取ってきますね」

奥に行つて新しく仕入れた書物を数冊持つて帰つてきた小鈴

今回はこれらを借りて鈴奈庵を後にした2人

「次は確か、紅魔館に行くんだっけ？」

「・・・顔を出すのと咲夜に礼が言いたい」

「そつか。咲夜、あの後すぐ戻つたしレミリアたちが見舞いに行つた時は兄さんずつと眠つてたものね」

永遠亭で眠っていた3日間、レミリアたちやルーミア姉、霖之助や慧音たちが見舞いに来てくれていたらしい

知らないとはいえ、俺なんかの見舞いに足を運んでくれた彼らに礼くらいはしないとイケないだろう。それに咲夜は今回の異変解決に協力してくれた恩もある

「おや、小夜くん」

「よお」

「・・・慧音、妹紅」

人里内を歩いていたら慧音が声を掛けてきた

その隣には前に竹林で帰る道を案内してくれた妹紅もいた

「退院していたと霊香から聞いていたが、怪我の具合はもういいのかい？」

「・・・」コクッ

「相変わらず愛想が無い感じだなお前」

「妹紅、彼は昔からこんな感じさ。それを言ったら妹紅も昔は無愛想だったじゃないか」

「どつかのお人好しの性でこれくらい他人と話せるようになったからな。そういえばちゃんとした自己紹介はまだだったな。私は藤原妹紅、迷いの竹林に住んでるよ」

「・・・博麗小夜」

互いにちゃんと自己紹介を済ませる小夜と妹紅

「ところで霊夢は小夜くんの付き添い？」

「母さんが自分の間は鍛錬禁止って兄さんに言って、外に出る時も私か母さんと一緒に出掛ける様になって言われてる」

「そうか。いや、当然の事かもしれないね。なにせあんなに酷い状態だったのだからね」

「・・・もう、治ったんだがな」

実の所、本当に傷は完治している

特に痛みも発症していないし、いつもどおりに動いても問題無し。やろうと思えば今この場で宙返りもやって見せることも出来る

「兄さん、まだダメだよ」

「・・・」

目を少し険しくしながら俺を見る霊夢

どうやら先ほどの発言に対して怒っているようだ

「はあ、家族に対して過保護だな博麗の巫女は。こいつ人間じゃなくて妖怪なんだろう？だったらそんなに心配はいらないだろ」

「それはそうかもしれないけど・・・」

「まあ、霊香の事だ。すぐに許しをだしてくれるさ」

「・・・ああ」

そんな他愛もない話をしながらそろそろ紅魔館に向かおうとその場を後にしようとする小夜と霊夢

慧音も寺子屋に戻ろうとし妹紅はまだ用事があるのか慧音について行った

「あー、おい。博麗霊夢」

「なによ?」

小夜と慧音がどんどん先に行く中、霊夢に声を掛ける妹紅

「まあ、私がどうこう言う資格はないしどうでもいいけど言っとく。あんたがあいつと今後どういう関係になるかは自由だけど、それなりに覚悟をしておくんだね」

「・・・どういう事よ?」

「妖怪と人間の生きる時間はあまりに差がある。いや、妖怪もその時の出来事によつては早く消える事もある・・・言いたい事はもう分かるか?」

「余計なお世話よ」

霊夢は振り返り、走って小夜の元に行く

妹紅は追いついて並んで歩く2人を見ながら頭を掻きながら呟いた

「あの妖怪くんは気づいて無いようだね。博麗の巫女、アイツは小夜の事を・・・全く、私が知ったことじゃ無いはずなのに。慧音のお人好しが移ったかな」

そう言って彼女も先に行ってしまった慧音の後を追いかけて行った

45話

人里を後にし紅魔館へと向かう博麗兄妹

異変解決によってもう雪は止み、ほとんどの雪は溶けきったが木の根本や日の当たらない影にはちらほらと雪が残ってはいた

「・・・暖かいな」

「冬が終わって遅い春の到来だから暖かいのは納得だけどなんだか実感がわかない時があるのよね。あと少ししたらもう夏だし」

「・・・西瓜」

「チルノを呼んでまた西瓜冷やしてもらおうか。兄さんなら言う事聞くし」

「・・・」コクツ

そんな話をしながら紅魔館の門が見え始め、もうすぐかと思った時、小夜の耳に聞きなれない音が入ってきた

音の正体は分からないがそれぞれの音のリズムが合わさって音楽が奏でられている。その音楽は紅魔館から聞こえて来るようだ

「どうしたの兄さん？」

「霊夢・・・音、聞こえないか？」

「音？・・・なんにも聞こえないけど」

「そうか・・・」

聞こえる方向は紅魔館に間違いないが、門が見え始めたこの場所から霊夢が聞こえないとなると外ではなく紅魔館の中の何処かで演奏しているのだろうか

とりあえずこれは一旦置いておき、俺たちは門に近づいて行った。

案の定、門番は昼寝の最中だった

気にせず勝手に門を通っていった2人は玄関のドアも勝手に開けて中に入る

「あれ？音楽が聞こえる。誰か演奏でもしてるのかしら？」

「・・・時々途切れて、また同じリズム・・・？」

「お嬢様と妹様が講師をお呼びして楽器の練習をなさっているのですよ」

「もう慣れたけど、いきなり後に現れるのは止めない？」

背後から突然会話に入ってきた咲夜。いつも通り能力で現れたよ
うだ

門の方から美鈴の叫び声が聞こえたのは気にしない事にした

「ようこそ紅魔館へ。特に小夜様はご退院おめでとうございます」

「咲夜も・・・元気そうでなによりだ」

「ありがとうございます。ですがそれはこちらの台詞です、あれだけの重傷を負うほどに小夜様は戦っていたのに。とうの私は何も出来
ませんでした」

「それは私や魔理沙も同じ事だったじゃない咲夜。それにあんたはレ
ミリアの為について来たんだからそこまで気にすることも無いで
しょう」

「そう言われてしまったてはそこで終わってしまいますが・・・まあ、い
いでしよう。今日はどのようなご用事で？」

「・・・レミリアたちに会いに来た。見舞いの礼に」

「分かりました。では、ご案内致します」

先頭を歩く咲夜について行く2人

着いたのは一つの部屋の前

先に咲夜が中に入りレミリアと話してから廊下で待っている2人
に入る事を許可され中に入っていた

「ようこそ二人とも、歓迎するわ」

「お兄さまー」ガバッ

「とっ……フラン」

中に入った瞬間、フランが飛び込んで来たので受け止めた

「よかった、お見舞いに行ってもお兄さま全然起きなかつたからすごく心配したんだよ。ぐすつ」

「そうか……すまなかつた、心配を掛けた」ナデナデ

「えっと、レミリアさんこの人は？」

聞きなれない声が聞こえ、視線を向けるとそれぞれ黒・白・赤とそれぞれ違った色の服を着た3人の少女がいた

見た目は確かな違いがあるが何処か雰囲気似た様な3人だ

「紹介するわ。彼は隣にいる博麗霊夢の兄、博麗小夜よ。お兄さま、彼女達は紅魔館の近くにある廃墟に住まう騒霊でプリズムリバー三姉妹よ」

「黒のお方が長女のルナサ・プリズムリバー様、白のお方が次女のメルラン・プリズムリバー様、最後の赤のお方が末妹のリリカ・プリズムリバー様です。時々、この紅魔館に呼び出しライブやお嬢様や妹様の音楽の講師などをお願いしていただいております」

「ちよつと咲夜！せつかくの私の役割取らないですよ！」

「申し訳ありません。お嬢様のご負担を減らそうと思ひまして」

咲夜とレミリアのやり取りを見送りながら霊夢と小夜はプリズムリバー三姉妹と挨拶を交わしていた

「咲夜さんが紹介していたけど、私が長女のルナサ・プリズムリバー。よろしく」

「次女のメルラン・プリズムリバーです」

「三女のリリカ・プリズムリバーよ、よろしくね」

「知ってるだろうけど博麗の巫女の博麗霊夢よ、こっちもよろしく」

「・・・博麗小夜。さつきまで聞こえた音・・・お前達か？」

「これも咲夜さんが言つてたけど私達は紅魔館の近くにある廃墟を拠点にしてて、そこを中心に幻想郷中でライブとかしてる。今日はレミリアさんの妹さんであるフランに色んな音楽や楽器をメルランとリリカが教えてた」

どうやら紅魔館から聞こえた音はフランの音楽の練習で聞こえた楽器の音だったようだ

「見て見て、お兄さま！今日フランね、リコーダーの練習してたんだよ！聞いて聞いて！」

そう言つてリコーダーという笛の形状をした楽器を持ってその場で吹いてみせた

あまり音楽という文化などに触れた事は無いがフランが奏でる音のリズムは無駄が無く透き通つて聞こえた

「ど、どうだった？」

「・・・上手かった、とても」

「ホント！やったー！」

褒められて大きさに喜ぶフランの表情はとても嬉しそうだ

「あつ、そうだ！ねえお兄さま、霊夢。一緒に楽器の練習しようよ」

「楽器・・・俺達と？」

「うん！皆でやったらきつと楽しいよ」

「まあ、今日は兄さんの付き添いだから付き合えるけど、どうする？」

今日は地下図書館に行って霊と妖怪樹関連を探そうと思つていたが・・・まあ、鈴奈庵で本は借りられた

たまにはこういう物に触れてみるのもいいのかもしれない

「・・・いいぞ」

「やったー!」

「と言っても私、和楽器を少し触れた程度だしこの紅魔館にあるの知らないのばかりよ」

「・・・触れた事も無い」

「ちようど3人ずついるし、私達で教えられる事は教えてあげるから」

こうして予定を急遽変更して紅魔館にて小夜と霊夢も加わり音楽教室が始まった

46話

博麗神社

小夜の自室

「……」

壁を背に鈴奈庵で貸りた本を読みながら過ごす小夜

外に視線を向ければ皆が花見の準備をしている姿が見えた。桜の木々には蕾が付き開きかけており、明日くらいには満開に咲くようだ。宴会を兼ねた花見でもあるため、明日の昼から夜にかけて騒がしくなるだろう

「……」パタンツ

本を閉じ、部屋を後にした小夜はそのまま台所に向かって行った。喉が乾き、小腹も空いたのでお茶煎れるついでに何か茶菓子がなか探す

「おや？どうした小夜」

「……藍」

背後から声を掛けられ振り向くと藍の姿があつた。先程まで皆と一緒に居たと思つたが

「そろそろ準備も終わるから皆にお茶を煎れようかと思つてな。君も同じ感じかな？」

「……喉が乾いたから湯を沸かしてた。あと茶菓子」

「茶菓子か。そういえば煎餅があつたのだが、シユレディンガー君が残りを全て食べてしまったからもう無いと靈香が言っていたな」

「……買いに行くか。だが、2人は忙しい……邪魔したくない」

いくら霊香が言つとはいえ、何もせずにいる自分の都合で同行してもらうのは気が引ける

今、2人以外に外に居るのは魔理沙に橙、木の上でサボっているシュレディンガー、後は隣にいる藍

シュレディンガーは信頼は出来るが戦えないだけでなくまだ幻想郷を把握しきっていない

魔理沙も橙も準備の手伝いで暇ではなさそうだがとすればやはり・・・

「藍・・・人里まで付いてきてくれるか？」

「む、私か？・・・まあ、私は構わないが」

「そうか・・・霊香に良いか聞いてくる」

とりあえず藍自身は大丈夫だという事は確認できたのでそれでいいか霊香に聞いてみる事にした

「まあいいんじゃないか？藍なら信頼出来るしな」

「・・・」コクッ

あつさり許可をもらい藍と共に人里に向かう事になった
ついでに何か欲しい物が無いか皆に聞いておいた

「んー、特には無いわね」

「人里かー。じゃあ特にないんだぜ」

「あ、大尉。茶菓子なら甘味とかお願ひしまーす」

「シュレくん！サボってないで手伝って！」

「やだ♪」

とりあえず、シュレディンガーのみ甘味物が欲しいと以外は特に無い事を確認し人里へと出掛ける小夜と藍

道中

「しかし、こうやって歩くのも久しいな」

「・・・久しい？」

「ああ、私は紫様の程度の能力であるスキマを少しだが扱う事が出来る。と言っても幻想郷内にある場所のみ繋げられるだけで紫様の様に幻想郷の外へは私だけでは無理なんだ。つまり、スキマがあるからこうやって歩いて向かう移動手段は私には必要ないのさ」

「そうか・・・八雲紫、どうだ？」

「心配はいらない。奪われた妖力は徐々に取り戻し、もうすぐでいつもどおりに戻られる」

「・・・そうか」

「・・・憎んでいるか紫様を？」

「・・・？」

突然の質問に小夜は立ち止まり藍の方を見ながら首を傾げた

「幻想郷はどのような存在をも受け入れる理想郷。だが、幻想郷に仇なす存在は当然放つて置くことは出来ない。あの時の私はただ紫様のお言葉に従って一方的に君が幻想郷に仇なす存在なのではないかを見てきた。だが、君と戦い、話して、私は君が少なからず幻想郷の脅威になる妖怪では無いと思った」

「だが、紫様は未だに君を疑っている。それに『博麗の巫女を命を掛けて守れ。出来なければ幻想郷から追放』という一方的な条件を結ばせて君の自由を奪った、普通なら人間だけでなく妖怪だって不満に思うだろう。君は・・・今の自分の立場に不満はあるか？紫様を恨んでいるか？」

「・・・」

藍の話聞き終えた小夜は変わらぬ無表情のままただ黙っていた

小夜は大尉だった頃と同じように表情も変えることなく無表情のまま今まで生きてきた

だからこそ彼が何を思い何を考えているのか、家族である霊香や霊夢でもはつきりとは分かってはいない。だから藍は今の小夜の気持ちを知りたくこんな話を切り出したのだ

「・・・ない」

「え？」

「不満はない・・・憎んでもいない」

「な、なぜそう言えるんだ？」

「・・・2人は家族、恩がある、だから守る・・・八雲紫は霊香の親友、ルーミア姉を助けた・・・憎む事は何もない」

「・・・そうか、君の気持ちは分かった。長く付き合わせてしまつて悪かった、さあ早く行つて済ませてしまおう」

「・・・」コクッ

話を終えて再び人里へと歩を進める2人

その頃

博麗神社

「くあく・・・良い昼寝日和だよー本当に」

結局手伝いなど何もせずずっと木の上で寝ているシユレディンガー

居候の身でありながらこの自由さは人工吸血鬼でありながらまさしく猫と変わりようがない

「もう、結局何もしなかった」

下でそんなシユレディンガーを見ながら橙は呟く

「随分あいつに食いつくよなお前も」

「お前じゃないです。橙です」

「ああ、悪かったんだぜ。そんでなんでそこまであいつに食いつくんだ？」

「それは橙の部下だからですよ」

「・・・全然従ってる様には見えないけどな」

「うっ・・・」

魔理沙の言葉に反論出来ず黙ってしまった橙

「うう、なんで部下の猫さんたちもシユレ君も全然橙の言う事聞いてくれないだろう」

「まあ、猫は知らないけどさあのシユレディンガーって兄ちゃんの部下みたいなもんなんじゃね？兄ちゃんの言うことは聞いてるみたいだし」

「まあ、君じゃあ僕の上官なんて勤まらないさ橙ちゃん」

木から飛び降りて魔理沙と橙の前に立つシユレディンガー

「せめて大尉くらい強くならなきゃ僕の上官になんて認められません

なく」

「むくッ何よ！雪の中に埋もれてた所を助けてあげて藍さまに内緒でマヨヒガに住ませてあげたのは誰だと思ってるのー!!」

「僕は助けてくれなんて言っていないもん」

「むぐぐぐッ！もう怒った！こうなったらどっちが偉いか弾幕で教えやるー！」

「あ、やべえ。逃げろー」

「待てーー!!」

「・・・喧嘩するほど仲がいい。いや、この場合は全然違うな」

弾幕を放つ橙に対して逃げるシュレディンガー

(そういえば鳥居の柱から見てるあの子供誰かな？大尉の知り合いかな?)

「くらえー！」

「ぐっはあー！」

『・・・♪』

同時刻

人里

「この店の油揚げは絶品だな。もし油揚げをかうのであれば此処が

お勧めだ」

「油揚げ・・・たまに味噌汁に入ってる」

「なに？君はもしかして稲荷寿司を食べた事はないのかい？」

「・・・何度か、ある」

「そうか。稲荷寿司という絶品の料理を食べた事が無いんじゃないかと一瞬焦ってしまった」

「・・・甘い油揚げの中に酸っぱい白米・・・変わってるが旨い」

「そうかそうか。君も分かる妖怪だな・・・ああ、もし良かったら花見の料理に私が稲荷寿司を作ってあげようか？」

「・・・ありがとう、嬉しい（食い物が増えるという意味で）」

「ツ！／／あ、ああ、ま、任せてくれ。君の為に旨い稲荷寿司を作ってあげるよ／／／／店主、油揚げをください！」

「はい毎度！」

顔を真っ赤にしながら油揚げを買う藍を見ながら待つ小夜はしばらくして青空を見上げる

（・・・甘味は団子、あと海苔煎餅、くらいか）

47話

花見当日

「ようしみんな、グラスは持ったな！待ちに待った念願の花見だ！飲んで騒ぐぜ！」

「「おおー!!」」

満開の桜が咲き誇る博麗神社にて大勢の妖怪、妖精が集まり魔理沙の掛け声にて皆思い思いに騒ぎだす

今回の花見にはプリズムリバー三姉妹も来ており彼女たちの演奏によつて更に賑やかになった

演奏自体初めて聞く自分とは違い、皆の盛り上がりようから見ても名度があるのは確かなようだ

しかし、こうも騒がしいと何時もの宴会と変わりようが無い。そもそも花見とは主に桜の花を鑑賞し、春の訪れを寿ぐ日本古来の風習であると学んだ

梅や桃の花でも行われるという

「はい兄さん。料理をとつてきたわ」

「・・・すまない」

1本の桜の木の下で腰を下ろし、騒ぐ皆を遠くから見ている俺に霊夢が料理を持ってきてくれた

皿に盛られた料理を口にし、特に自分から話す事も無く無言の咀嚼をしながら桜を眺める

「なんだよ、兄ちゃんはまだ食うだけか？花見なんだから酒も飲もうぜ！」

グラスを持ってこっちにやって来た魔理沙、既に酔いが回っている

ようだ

「飲むか飲まないかは兄さんが決めることよ。無理強いはやめなさいよ魔理沙」

「なんだよいいじゃないか」

「全くあんたは」

「・・・」

魔理沙を止めながら清酒を飲む霊夢

別に酒が飲めないというわけでは無いし弱いわけでもない。しかし、何かが起きた時に酒で酔っていて何も出来ないという状況は避けたいのだ

「でも大尉、せっかくの大尉の退院祝いでもあるんですから1口位は飲んだ方がいいでしょう」

「・・・」

シュレインガーの言う通り、この花見は俺が退院した祝いも含まれている

俺なんかのためにも用意をしてくれた皆の為に1口位はとシュレインガーは言うてくる。まあ、本当に1口位なら問題はないだろう

「・・・霊夢、少し飲ませてくれ」

「分かった、じゃあちよつと新しいのを」

「・・・それでいい」

「え、こ、これ？」

霊夢が今手に持っている赤い盃を指さす

どうせ1口だけなら、新しいのを出すよりも誰かから貰った方が早いし、洗い物を増やさずに済むと考えた小夜

「・・・ダメか？」

「う、ううん、大丈夫。はい」

盃を手渡し、小夜は霊夢が口をつけていた所とは反対の場所に口を付けて酒を飲む

口に含んだ瞬間、酒のアルコールが全身に巡るかのように暖かくなつていくのを感じた。ワインなどとは違いアルコールの度数が高い清酒はたった一口だけで体が火照ってしまう、これ以上飲むのはやばいだろう

「・・・ありがとう霊夢」

「う、うん（兄さんが口を付けた所・・・ゴクツ）」

盃を返してからやたらに俺が口を付けた部分を凝視する霊夢
どうしたのだろうか？歯型でもついてしまったのだろうか？

「霊夢って大胆なんだか、恥ずかしがりなんだがわかんねえよ」

「乙女って複雑ですねー」

「・・・」スツ

霊夢たちから離れ、皿を持ちながら花見の場で一番端の方にいる最近見なれた2人組の元に向かった

「あ、師匠！」

「・・・いいか？」

「はい！どうぞ！」

近くに座り妖夢とその主である冬の異変を起こした西行寺幽々子と対面する小夜

「貴方とは初めまして、かしら。私が白玉楼の主、西行寺幽々子と申します。貴方の事は妖夢から全て聞いていますわ博麗小夜くん」
「……」

特に喋るでもなく西行寺幽々子を見る小夜

あの異変時に感じた禍々しい気配は微塵も感じない、それが分かってから口を開く

「……怪我は？」

「はい。ご覧の通り問題はありませんわ……この度は私の不注意によりご迷惑かけた事を謝罪します、特に貴方には生死の境をさまよう目にあわせてしまいました。誠に申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げ、謝罪を述べた西行寺幽々子、それに続くように妖夢も頭を下げる

ちなみに霊香と霊夢、博麗の巫女である2人には既に謝罪を終えている

「……俺に謝罪はいらない……2人に言ったなら充分」

「しかし、私の意思ではないとはいえ貴方を」

「……俺は可能ならお前ごと西行妖を殺す気だった……博麗の巫女の敵を殺すのが、俺の役目だ……だから謝罪なんていらぬ」

「……そうですか、分かりました」

「……俺は今のお前を殺す気は無い……お前が博麗に敵対しないかぎりはな」

「ふふふ、肝に銘じておきますわ」

「……花見、楽しんでくれ」

「あ、師匠！よければ一緒にしませんか！」

「……」

立ち上がろうとした瞬間、妖夢に声を掛けられ止められた

「そうね、話をしながらお互いを知るのは大切な事ね。どうかしら？
私は貴方の事をもう少し知りたいわ」

「・・・酒は飲まない」

立ち上がるのをやめて、もう少しだけ幽々子と妖夢と話す事にした

48話

花見が始まって数時間

まだ太陽は沈んではいないが傾いて来て少し暗くなってきた

しかし、皆の活気は未だに衰える事は無くこのまま夜まで騒ぎ続ける勢いだ

幽々子と妖夢との話を終え、2人の居た所から離れて一本の桜の木の下で腰を下ろし騒ぐ皆を眺めていた

「どうした小夜、もうへばったか？」

「・・・いや」

そんな小夜に盃を手にした霊香が声を掛けた

「・・・料理は、終わった？」

「ああ、あれだけ作って置けばそうそうは無くならないだろう。幽々子もまだ本調子では無いしな」

「・・・？」

「そう言えば言っつてなかったな。ああ見えて幽々子は結構食べるぞ。今回作った花見の料理、幽々子が本調子なら1人で全て食べきる」

「・・・」

無表情ではあるが内心では驚いていた

これだけの花見に参加している人数分の料理をあの幽々子1人が全て平らげてしまうなどと聞けば誰でも驚くだろう

あの細身の体に一体どんな胃袋を所持していると言うのだろうか。そもそも死んだ人間に空腹という概念があるのか？

「まあ、幽々子が万全の状態になるまでまだ掛かるだろうな・・・隣、座るぞ」

「・・・」 スッ

少しだけ動き、その隣に霊香も座る

「・・・八雲紫は来れないのか？」

「いや、正確には来ないだろうな。だが妖力はだいぶ回復しているよ。そろそろ藍たちも紫の所に戻るだろうさ・・・なあ小夜、お前には親が居るか？」

「・・・霊香」

「いやあ違う違う。お前がかつていた外の世界でだ」

「・・・」フルフル

顔を左右に振って答える

そもそも彼自身も幼き頃の記憶は曖昧なのだ。しかし、一つだけハッキリしていることは彼が大尉になるまでの過去に家族という身分、仲間（同種族）という存分など無かった

ある意味彼は元の世界では天涯孤独のような存在だ

ヘルシングの吸血鬼、アーカードも言っていたとおり大尉のようなヴェアヴォルフという種族は大昔に滅んでいた

故にアーカードも滅んだはずのヴェアヴォルフである大尉を見て驚いたのだ

何故、自分以外のヴェアヴォルフは消えてしまったのか。そもそもなぜ自分だけは生き残る事が出来たのか。かつての大尉ならそんな事を微塵も思わなかっただろうが今さらになってそんな疑問を幻想郷に来てから抱いた時期もあった

「そうか・・・実はな私も本当の両親の事なんかこれっぽっちも知らないんだ」

「・・・？」

「霊夢と同じなんだよ。先代の博麗の巫女・・・つまり、お前と霊夢にとってお婆ちゃんなんだが、私も幼い頃に拾われて育ったんだ。だが霊夢と違って私は捨て子だったらしい」

「捨て子・・・」

「霊夢は昔起きた妖怪たちの異変によって両親を亡くして私が引き取ったが私は草むらの中にぽいと置かれていたらしい、先代と紫の話によればな・・・だが先代はそんな私を本当の娘の様に接して育ててくれた。血が繋がっていなくても私にとっては母親に変わりなかった」

「・・・なぜ「こんな話をしたか、だろ?」・・・」コクツ

「小夜。お前が元の世界でどんな奴だと知っても私は霊夢と同じ様に気になどしない。血や種族が違ってもお前は霊夢と同じ、私の大切な息子、家族だ。紫の条件とやらは私が何とかしよう、だからまた命を捨ててまで私と霊夢を守ろうなんて事はするな・・・いいな?」

「・・・」

霊香の言葉には少し、永遠亭の時に泣きながらも俺に居なくならないでと懇願した霊夢の言葉と同じものを感じた

霊夢からは生きて欲しいと言われ、霊香からも同じような事を言われた

だが、その願いが霊香の望みなら霊夢と同じように俺はその望みに従うまでだ

「・・・分かった」

「ふっ、本当に分かっているかは知らないが信じてやろう。それと明日から鍛錬を許可してやる、相手ぐらいはなってるぞ」

「・・・ありがとう」

「いいき。ほら、こんな所で1人花見はつまらないだろう?皆の所に行くぞ」

「・・・」コクツ

霊香に言われ、立ち上がり皆の所へ戻った

東方萃夢想

49話

博麗神社

花見が終わった次の日

「ふんッ！」

「ぐッ……」ガッ！

鍛錬場で霊香と組手をしていた

ここは主に霊夢が博麗の巫女の修行で使われる場所

基本は外での鍛錬がほとんどだが霊香との組手の時だけ此処を使っている

勝負は完全にこちらが負けている

霊香の動きは組手を行う事に何度も見て、覚えている……だが、長い間体を動かす事を禁じられていた故にかつてよりも動きが遅く分かっていても体が思考している動きについていけない

「……」ブンッ！

「ハッ！」

「ッ……」ドサッ！

右拳を放ち攻勢にでも少ない動作で拳撃を受け流し、道着の裾と襟を掴まれ投げられる

組手故に俺も霊香も本気を出してはいない。だが、それでも化け物である俺は人間の霊香に負けている。この事実はどうあっても覆す事は出来ない

「ふむ、昨日の今日ではやはりこれぐらいが妥当か。本気では無いとはいえ力が落ちているな」

「・・・」スツ

「なに、心配するな。かつての力に戻れるよう私も全力で協力してやる、原因は私にあるんだからな」ギユツ

横たわり仰向けから上体だけを起こした大尉を背から包み込むように抱きしめる霊香

手から感じる暖かい体温、後頭部に当たる霊香の丰满な胸の感触。通常の男性ならばこれだけでも赤面する場面だろうが大尉は表情一つ動かさず霊香の言葉を聞いていた

「だが、すぐ戻す事は無理だ。妖怪、人外が存在でも必ず個々に限界というものは必ずある、その限界を無視し体を酷使すれば戻る所か更に弱体する。焦らずゆっくりだ、無理して体を酷使するんじゃないぞ分かったか?」

「・・・ああ」

「よろしい。じゃあ、休憩だ」

「・・・」コクツ

鍛錬場を後にし、道着の上を脱いで離れにある井戸に向かった

ロープを引っ張り桶を引き上げて汲み上げられた水を少し口にす
る

渴いた喉に冷たい水が通っていく感覚は、心地よく喉を潤してくれ
る

残りの桶に入った水で持ってきた布を濡らし体の汗を拭き取った

「・・・ふう」

空を見上げ立ち尽くす小夜

結局、昨日の花見に八雲紫は姿を現す事は無かった

藍と橙は紫が通常まで妖力を回復したという事で監視の任を解かれ紫の元に帰った。今日の朝での出来事だ

シユレディングーはいつも通り博麗神社で居候するらしいが橙の部下という立場は変わっておらず、今日はマヨヒガにて橙とその部下の猫たちと集会をするらしくシユレディングーを連れて行った
「いつ帰れるかは分からないけどご心配なく」と言い残して行ったがシユレディングーに対して特に心配する要素が見つからない

「あややや、鍛錬後のお姿も凛々しいですね〜小夜くん」パシヤ！
「・・・文か」

カメラ音と共に空から降りて来たのは射命丸文だった
そう言えば、あの異変から昨日の花見まで一切姿を見せなかったな。新聞のネタ探しに必死な烏天狗が全く姿を見せないとは珍しい事もあるものだ

「お話はルーミアさんから聞きましたよ。今回の異変で意識不明の重態になっていたとか」

「・・・ああ」

「流石にそんな状態の小夜くんを置いて巫女の皆さんに取材なんて出来ないのです、しばらくはずっと異変に関しての情報集めをしておりますよ。そして意識を取り戻したと噂で聞いた後、昨日の花見では取材をと思ったのですが・・・あのスキマ妖怪に会いましてね。今回の異変の記事を書く事を止められましたよ」

「・・・そうか」

不機嫌そうにため息を吐く文

あの紫が自ら出てきて今回の異変を伝える事を止める。親友である西行寺幽々子の為なのだろうな

「まあ、もっと大変だったのは権ですよ」

「・・・なにかあったのか？」

「それはありますよ。小夜くんが意識不明の重態なんて聞いたらそ

りやあ心配するでしょう、一体どれほどの質問をされた事か」

「・・・そうか」

「まあ、権には妖怪の山を守る哨戒白狼天狗の任もありますし、隊長として若い白狼天狗の見本にならなければならぬとかで小夜くんの見舞いには行きませんでしたけどね。全く、上のお固い方々は」

「・・・なら、久しぶりに行くか」

「妖怪の山にですか？」

「・・・」コクッ

頷いて肯定した小夜

権からはいつでもきていいと言われているから問題はないだろう

「あややや！それはいいですね！権も喜びますよ！じゃあ、私はネタを探しに行きますのでそれではー！」バツ

「・・・」

言いたい事を言っただけで飛んで行った文

あの自由奔放な性格はいつになっても変わる事は無いのだろう

そう言えば妖怪の山には烏天狗と白狼天狗以外に河童もいるらしいがまだ会った事が無いな

「兄さーん」

「？」

後から聞こえた霊夢の声に反応して振り返ると手を上げて左右に大きく振る霊夢の姿があった

「昼食の用意が出来たよー」

「・・・」コクッ

頷きながら手を軽く上げて了解したと伝える

井戸に蓋をして霊夢の所に向かって行った

その頃

妖怪の山 哨戒白狼天狗拠点

「ハアッ！」

「踏み込みが・・・甘い！」

「ぐあッ！」

「次！」

「せいッ！」

「攻めが弱い！もつと力を込めなさい！」

「は、はい！」

新米の哨戒白狼天狗の部下たちと手合わせをする犬走椀

既に数十人の相手をしているが疲れの表情を一つも出さずに最後の1人まで打ち倒してみせた

「今日の手合わせはここまで、この後は各々の任務または鍛錬に勤しむように。なにかあれば私かその他の隊長に報告するように、解散！」

「「ハッ！」」

「・・・ふう」

部下たちがその場から離れ各々の場所に向かって行くの見送った

後、剣を鞘に納め一息つける

「よう、今日は一段と厳しくしごいたな鬼隊長」

「その鬼隊長はやめてと言ったでしよ、迅（はやて）」

「ははは！悪かったって、ほら水だ」

「ありがとう」

迅と名乗る男の白狼天狗は水が入った竹製の水筒を権に投げ渡した

顔立ちはそこそこで髪は短髪でツンツン頭。額に横に一線の切り傷の跡がある

受け取った権は水筒に入った水を全て飲みほした

「あ、おま！何全部飲んでんだよ!？」

「迅のだから別にいいかなと思って。ふう」

「良くねえよ！せめて少しは残せよ!・・・たくつ、また後で汲みに行かねえと」

「ふふ、散々な目にあったわね迅くん」

「あら？菊。あなたもなんて珍しいわね」

新たに現れた菊という名の女性の白狼天狗

おっとりとした顔立ちで長髪、右眼が黒で左目が青のオッドアイ

権の言葉に小さく微笑みながら答えた

「休憩時だったから権ちゃんに会いに行こうと思って。迅くんが居たのは予想外だけど」

「まあ、俺も休憩だが暇つぶしで来たんだがな。しかし、こうして俺達が集まるのも久しぶりだな」

「そうね。懐かしい」

権、迅、菊は幼い頃から共に遊んだりした幼なじみ

哨戒白狼天狗になり所属する部隊でも一緒だったが各々が隊長として部下を持つようになってからはこうして話す機会も少なくなつた

「そう言えば、小夜の奴は来てねえのか？」

「ん、ああ。小夜も小夜で博麗の巫女の守護として忙しいのだろう」

「懐かしいなー。もうあれから10年以上会ってないもんね、もう立派な男の子になってるかな」

（そう言えば2人には言つてなかつたな）

そんな雑談をしている3人にもう一人の白狼天狗が割り込んで来た

「けつ、余所者の話で盛り上がりやがってこれだから若造共は」

「・・・夜宵（やよい）」

権の口から出た夜宵という名

彼も白狼天狗であり権達と同じ隊長格の1人。気性は荒いが、自分の上司たる烏天狗たちには従順である

「なんだよ夜宵！俺達の話に勝手に首突っ込んできてその言い草わよ!?」

「黙れ迅！隊長だろうがお前は俺より下だ、舐めた口を叩くんじやねえ」

「なんだと！」

「迅くん！駄目！」

一触即発の状況の中、迅を止めようとする菊
そんな彼らの中に割り込み、権は言い放った

「迅。同族であれ上の者には敬意を持って接するべき、その口調は控

えるべきだ・・・申し訳ありませんでした夜宵第二部隊隊長」

「権！おまツ?!」

「ハッ、無能よりよく分かつてるな第八部隊隊長犬走権「しかし」・・・あ?」

「部下の見本となるべき隊長がそのような態度はいただけません。彼も間違っています。が貴方も間違いは正すべきです」

「・・・へっ、いいねえその目。ゾクゾクするぜ」

権の鋭い眼光で睨まれてもニヤけた面を平然とする夜宵

「やっぱりお前はいい白狼天狗の女だ。絶対に俺の物にしてやる」

「・・・私は貴方に興味などありませんので」

そう言った後、高笑いをしながらその場を後にした夜宵

権は夜宵の方を振り返ることもせず、奴が立ち去るのを待った

権達の下から立ち去った夜宵は森の中で歩みを止めてまたニヤけ
だした

「ああ、いいねえ。あの反抗的な態度、手に入れがいがあってもんだ・・・そう姉弟だからか少しだがよく似てるなーあのガキに・・・博麗 小夜」

脳裏に思い浮かんだのは自分よりも小さく、褐色の肌白い髪、赤い瞳で無表情のまま自分を見下ろす少年の姿

「小夜、小夜・・・小夜、小夜、小夜、小夜!!小夜!!あの人狼のガキッ~~~~!!」

木に拳を何度も打ち込み、怒気のこもった奇声を上げる夜宵

「殺してやる！あのガキだけは！！俺に恥をかかせたあのガキだけは絶
対にこゝろ”して”やる！！！！」

50話

誰かが言った

—花が咲いているうちに花見だ!、と・・・

確かに今回の異変で桜の花が咲くのが異様に遅かった為にまた花見をしたいという意見を出す者がいてもおかしくないだろう

そう言う事で前の花見の宴会から3日後にまた昼から花見が開かれた

「まあ、ほとんどは花見を口実に酒を飲みたいだけだろうがな」

「・・・」モグモグ

そう言つて盃に満たされた酒を口にする霊香。彼女も花見をすること自体は反対ではないようだ

それに宴会では霊夢と霊香以外にも慧音、咲夜、妖夢、ミスティアなど料理が得意または経験のある者たちが作る料理が食える

同じ品でも作る者によつて味は多少違う。そういった味の違いを楽しみながら料理がたらふく食えるというのはある意味贅沢だろう

騒ぐのは苦手だがこういった楽しみがある故に俺も宴会自体に反対はしなかった

それに今回は前の花見には来なかった霖之助や文、ルーミア姉に宴会に初参加の妹紅も居た

「僕は店の窓から桜の花が見ればそれで良かったんだけど魔理沙に強引に誘われてね。ルーミア、君は？」

「私も桜くらいは静かに見れば宴会もどうでも良かったんだが、珍しく娘と一緒に行くこうと強く懇願してきてな。さすがに断り続けるに泣きだしそうになるかもしれないから来たんだ」

「へー、それは珍しいね」

霖之助は1人花見の所を拉致され、ルーミア姉はルーミアの要望に

こたえて来たようだ

確かにいつもの宴会や前の花見でも基本ルーミアはチルノ達と一緒に来る事が多くルーミア姉はほとんど暇だからついていく程度でルーミアが誘っているわけではないらしい

あと文は異変の記事が書けなかった為に異変以外のネタを探すため参加してきた

「君が参加とは珍しいな妹紅。基本は他人と交流を避ける君が」

「まあ、どつかのお人好しと昔の異変でアンタに説教という名の鉄拳制裁のおかげかもね」

「ああ懐かしいな。まだ霊夢が赤ん坊の頃だったな」

「・・・」

「あ、そうか。小夜には話したことが無かったな、お前がまだ幻想郷に来ていないある日に月が隠されるっていう異変があつてな、その首謀者の1人とこの妹紅が犬猿の仲でな。異変解決時に暴れてたから私が妹紅とそのもう一人に説教(物理)してやった。私の話がかつてくれて無愛想だった妹紅もこうやって他人と話せるようになったのさ」

しみじみとした表情で昔を語る霊香

宴会時でもいつもなら凜とした振る舞いを見せる霊香が今日に限っていつもと違う雰囲気を持ただよわせていた

「霊香の奴、まさかも酔ったのか？らしくないな」

「・・・」コクッ

妹紅の言葉に頷いて同感を示す小夜

「さてさて、役者も揃って来ましたね。さあさあ、小夜くんもこちらにどうぞ」

「・・・？」

いきなり現れた文から呼ばれ何事かと思いい向かってみる
呼ばれた場所には前にも見た事あるような面子がいた

「ふっふっふ。宴と言えば早飲み大会！」

「「イエエーイ！」」

「ツ……」

魔理沙の一声でみんなが叫び声を上げる

そして思い出した。俺と魔理沙以外にもこの場にいる皆は前の宴会に酒飲み対決とやらに参加していた面子が殆どだ

つまり俺は文に嵌められたのだ

「待て……俺はやらない」

「師匠諦めてください。私も諦めました……」

そう言う妖夢の瞳には光が無く、いつもの活気は微塵も感じられなかった

「あ、大尉も参加するんですか？なら負けませんよ」

参加者の中にはシユレディングも入っており、それ以外には魔理沙、チルノ、美鈴がおり初参加で妖夢がいる

だが俺はそれよりも何とか抜ける事は出来ないか文に聞いた

「いやー、紅魔館に白玉楼、妖精、外来妖怪ですからここはやはり博麗の関係者もいた方がいいかと思ひまして」

「……」 チラッ

助けを求めるように霊夢と霊香、2人の方へ振り向くが

「頑張れー小夜ー、博麗の意地を見せてやれー」
「うーん、兄しゃんの毛並みふわふわく……ZZZZ／／／」

盃を持って酔いながら応援する霊香にその霊香の膝枕をされながら頬をほんのり赤く染ながら寝言を言う霊夢

先ほどから姿が見えなかったが既に酔いつぶれていたのか霊夢はどうやら助けは見込めないらしい。後退が無いなら仕方ない、突き進むまでと小夜は決心した

「それではただいまより、幻想郷早飲み大会を行います！ルールは簡単！白玉楼が主、西行寺幽々子さんお手製の日本酒一升瓶5本、一番早く飲み終えた方が勝利です！」

ん、西行寺幽々子のお手製？幽霊が酒を作ったと言うのか？

「幽々子さまは白玉楼の主であり管理者でもありますが、特に何かやれという仕事は無いんです。ですからほとんどの時間は暇つぶしに思いついた事を色々なさってるんです」

「お酒作りも趣味の1つなの。最近はワインとか洋酒なんかにもチャレンジしてるのよ」

ワインか……少佐が飲んでいる時位しか見たことがないがあれも旨いのだろうか？

「ほらほら大尉、そろそろ始まるから座ってください」

「……」コクッ

シユレディングアの隣に座り目の前にある一升瓶5本と対峙する

「では皆さん、用意はいいですか？それでは早飲み大会用意スタート！」

文が開始の合図を出した瞬間、参加者の皆が1本目を手に取り飲み始める

俺とシュレディンガーも遅れずに1本目を手に取り口にした

・・・が

「ぶふおー」

「ツツ!?!」

口に含んだ瞬間、シュレディンガーがあまりの酒の強さに思わず吐き出して気絶した

それほど強い酒なのだ。前に飲んだ日本酒と比べ物にならないほどに

俺は何とか吐き出さずに飲めたが、もはや2口目に行ける気がしない

「おーっとー！ここでシュレディンガーさんがまさかの即脱落！小夜くんもまだ1本目を飲み干せていなーい！数少ない男の参加者2名が早くも終わり掛けてているー！」

ふざけるな・・・こんな酒、平然と飲める訳がない・・・他の奴らだつてこれにはさすがに苦戦しているはず

「いやあ、このお酒なかなかいけますね」

「幽々子様のお手製なんですから、不味いわけがないです」

「うおー！いつものより効くんだぜ！」

「うまい！もういっぱい！」

・・・嘘だ。出てきた言葉はそれだけだった

魔理沙とチルノは平然と飲みつづけ、美鈴と妖夢は多少顔を赤くしているが特に苦もなく飲み続けていた

(・・・も、もう・・・い、しき・・・が・・・)

アルコールの酔いが回り初め、徐々に意識が薄れていく小夜
そんな最中で小夜は観客側の中で見知らぬ人物が酒を笑いながら
飲んでいっているのがついた

背は小さく、子供のようなだが頭に生えた2本の角のような物が人間
でないことを分からせる。あれは誰なのか？考えようとするがもは
や意識を保てず小夜もシユレインガーと同じように気絶した

「やはり小夜には無理だったか。まったく、男としてなさけないな」

そう呟く霊香は気絶した小夜に膝枕をしてあげながら、同じく膝枕
をされている霊夢の2人にうちわで扇いで風を当てていた

「仕方ないさ、小夜くんはあまりお酒を飲まないからね。しかし、今日
は霊夢も酔いつぶれているとはね」

「ふふふ、立派な巫女と成人妖怪になったと思っただらなんてことは無
い。まだまだ可愛い息子、娘だな♪」

「・・・珍しく君も酔っているのかい？」

霖之助も妹紅と同じように今日の霊香の変わりようには疑問があ
るようだ

古い知り合いである彼女をよく知っているからこそ彼はそう思う
のだ

「ん？ああ・・・今日の花見は何故かいつもより楽しく感じてな」

夜になってもいまだに花見を続ける皆を眺めながらに微笑む霊香

「・・・これで紫たちもくれればいいんだがな」

「ああ、それも楽しそうだ」

「？、霖之助何か言ったか？」

「いや、何も」

「そうか・・・まあいいか」

そう呟いた後、気のせいかと思いつつ手を止めていたうちわをまた扇ぎ始めた

その頃

シュレディンガーは小夜より早く起き上がり、頭を抱えながら寝室へと向かっていた

「うーん、まだ頭がいたい。少佐のワインとか盗み飲んでたりしてたからいけると思っただけだな」

寝室にたどり着き布団に倒れこもうとしたが「あっ」と何かを思い出す

「水くらい飲めば良かったなー・・・いまから井戸に行くのはメンドーだし・・・誰か水持ってきてくんないかな」

「はい、お水どうぞ」

「あ、気がきくね。ありがとうさん」

冷えた水の入ったコップを差し出され、それを手に取って一気に水を飲みほした後シュレディンガーはドサツと布団に倒れ込んだ

(・・・あれ？今水くれたのだれだ？・・・声的に大尉じゃないし、橙ちゃんは来てる筈ないし・・・まあいいか・・・ZZZZ)
「おやすみなさい。シュレディンガーくん♪」

シユレディンガーが寝たのを見届けた後、見知らぬ緑髪の少女は
そつと部屋を後にした

51話

次の日

「・・・ッ」

目を覚まし、上体を起こす小夜

徐々に意識が覚醒していくと同時に頭痛が発症し始め、頭を抱える

「・・・そうだ・・・酒を飲んで、気絶・・・したんだった」

頭を抱えながら何があつたかを少しづつ思い出しはじめる

ゆつくりと立ち上がり襖を開け、居間に向かって行った

居間

「あ、兄さん。おはよう」

「・・・ああ」ズキズキ

「だ、大丈夫？頭抱えてるし、顔色悪いけど？」

「・・・大丈夫・・・では、ない」

「今お水持つてくるから」

水を取りに居間から出た霊夢

とりあえず席について水が来るまでジツとする事にする。何故霊夢は昨日あれだけ酔っていたにも関わらず元気なのだろうか？

・・・霊夢が酒に対して強いのか？それとも俺が皆より酒に対して弱すぎるのだろうか？

「ただいま。はい、兄さん」

「・・・」ゴクゴク

戻ってきた霊夢から水が入ったコップを手渡され、一気に水を飲みほした

「・・・ありがとう」

「本当に大丈夫？無理そうなら永遠亭行って薬貰ってくるけど？」

「・・・そこまで、酷くはない・・・」

「あー、おはようございまーす・・・」

「おはようって、あんた更に酷い顔になってるわね」

「はい、起きてから調子悪いですよ」

更に居間に入ってきたのはシユレディングー。小夜以上に顔色が悪く、いつもの元気は無い

「おかしいですよねー、幻想郷の皆さんがあんな酒をいつも飲んでるなんて」

「あれをいつもはさすがに私も参るわよ」

「お、みんな起きたな。朝食が出来たぞ」

皆の朝食を運んで来た霊香

今日の朝食はお粥だ。小夜とシユレディングーにとっては今の状態で1番食べやすい料理だ

「あれ？霊香さんと霊夢さんもお粥？」

「ああ、昨日はさすがにハメを外し過ぎた。ちよつと体の調子は良いとは言えない」

「平然としてるけど、私と母さんも結構きてるのよねこれが」

「・・・そうか」

「さあ、食べるでしょう。いただきます」

「いただきます」「・・・いただきます」

と言う事で朝食にありつける博麗一家＋１「ちよ、プラーって！」
体調も整っていない為に話もせず黙々とお粥を食べ終えた

「ごちそうさま」

「ごちそうさまでした〜」

「・・・ごちそうさま」

「はい、お粗末様。ああそうだ。霊夢」

「なに？」

「話があるから残ってくれ。小夜、今日は鍛錬は無い。二日酔いで辛
いだろうからゆっくりと休め」

「・・・ああ」

「じゃあ、僕も失礼しまーす」

居間を後にした小夜とシュレディンガー

「さて・・・霊夢、突然だが昨日の花見、何か違和感を感じなかったか
？」

「・・・うん。前の花見でも感じたけど、前回よりも違和感が増したと
いうか・・・あと、あの場に居たみんなとは違う妖気も僅かだけ確
かに感じた」

昨日の花見での出来事を話し合う先代と現の博麗の巫女

異変解決祝いに行った花見でも感じた違和感が昨日の花見で更に
増して感じられたと告げる霊夢

それだけで無く、あの場に居た妖怪達以外の別の妖気

「でも、あの妖気はなんなんだろう。僅かとは言ってもあそこまで強
く感じる妖気だなんて、まず下級の妖怪じゃあ無い」

「・・・」

「母さん？」

「感じた妖気に関しては少しだけ心当たりがあるが、もし本当なら面倒になるな」

「母さんがそこまで言うなんて相当やばい奴なの？」

「いや、西行妖よりはやばくは無いら」

「・・・分かった、私も独自で調べて見る（確かに感じた妖気は西行妖よりも禍々しいものじゃなかった。今度こそ母さんや兄さんの手助け無しで異変解決してみせる！じゃないと母さんから博麗の巫女を受け継いだ意味が無いもの！）」

その頃

小夜の部屋

「・・・どう思う？」

「うーん、やはりあの花見に誰か居ますね。姿は見えない、だけど確かに誰かが居る」

霊香、霊夢と同じように花見で感じた違和感を話し合う小夜とシユレディンガー

霊夢とは違い、はつきりとしていない

「僕が寝る直前に水をくれた誰かさん」

「・・・俺が気絶する前に見た角の生えた少女・・・そいつだったか？」

「すいませんが姿はよく見て無かったです・・・ただ」

「・・・？」

「ほら、花見やる前に大尉が橙ちゃんの主さんと買い物に行った時があるじゃないですか」

「・・・ああ」

霊夢たちが異変解決祝いの花見の準備をしている日に茶菓子が無くて八雲藍と共に人里へ買い出しに行った日だ

花見で八雲藍が作った稲荷寿司は確かに美味かった

「その日になんですけど、鳥居の柱から僕達を見てた女の子が居たんですよね。薄緑髪であのフランドールって吸血鬼の子と同じ背丈で、あと何か青い管っぽいのがあったかな、角は無かったですけどね」

「・・・知らないな」

これまで出会った妖怪や妖精たちの中にシユレディングーが答えた特徴が当てはまる者が居るか思い出してみるが、薄緑髪でフランドと同じ背丈と言ったら大妖精くらいしか思い当たらないが青い管という物が分からない

それにシユレディングーは既に大妖精と面識がある

「うーん、これは怪しい臭いがプンプンしますねえ。どうします大尉？」

「・・・今動くのは得策じゃない」

それに異変解決は博麗の巫女の役割

霊夢たちが異変だと判断しないかぎり情報も少ない今の俺に出来る事など限られる。それに・・・霊香と霊夢との約束もある

「・・・霊夢たちが話して来るまで待つしかない」

「そうですか。じゃあ、今日はのんびりとひなたぼっこでもしようかな。いい天気で暖かいしー」

話を終えて部屋を後にしたシユレディングーを見届けた後、小夜はいつも通り壁を背に規格帽を深くかぶりながら再び微睡みの中へと

落ちていった

52話

宴会から2日目

人生初の酷い二日酔いも治り、いつもの様に鍛錬を行っている

霊夢は朝食を食べ終えてから調べに出掛けると言って朝早くから博麗神社を後にしている。何を調べに行くかを聞いてみたが教えてはくれなかった

まあ、十中八九異変についての事だろう。あんな真剣な表情で調べ事などそれしかない

俺に言わない辺、そこまで危険な異変では無いのだろう。その証拠に霊香も茶を啜りながら俺の鍛錬の様子をただただ見ている程、落ち着いている

「おーい、おおかみ兄ちゃん！きたぞー！」

「お邪魔します霊香さん」

「ああ、よく来たな。ゆっくりしていつてくれ」

丁度、鍛錬のメニューが終わった直後に木刀を持ったチルノと大妖精がやって来た

チルノはいつも通り。大妖精もあの花見で酔いつぶれていたにも関わらず、いつもの元気な様子だ

・・・やはり、俺が酒に対しての耐性が弱いのだろうか

「さあさあ、おおかみ兄ちゃん。今日もさいきようめざして修行だッ！」

「・・・ああ」

汗を軽く拭き終わってから、オーバーコートを着て規格帽を被り、いつもの実戦訓練に移る

「いつくぞー！」

「・・・」グツ

先制攻撃の弾幕を放つチルノ

何度も見た弾幕故に避ける事は容易い。霊香とのリハビリの鍛錬のおかげもあって、思うように体が動いてくれる

「まだまだ！」

『冷符「瞬間冷凍ビーム」』

「・・・」スッ！

体を捻って、空中で直線の冷凍ビームを避ける小夜。そのまま脚を捻る時の動作を利用してチルノに向けて蹴りを放つ
しかし、チルノも後に飛んで小夜の蹴りを避けた

「ようし！今度はコレだ！」

『氷剣「アイスブランド」』

「ッ・・・」

チルノの目の前で形成された氷の剣。両手で柄を握りしめて小夜に斬りかかる

小夜は右腕を霧状にし、縁側に置いてあった剣を掴み取って氷剣をギリ防いだ

(また新しいスペルか・・・ただの水で出来た剣のようだな)

「さすがおおかみ兄ちゃん！だけど美鈴じきでんの剣さばきをなめるなよー！」

両手で力一杯氷剣を振るうチルノに対して冷静に剣撃を防ぐ小夜
美鈴にどんな剣技を教えて貰ったかは知らないが、今のチルノより

も妖夢の振るう剣技の方が勝っている

「フツ」キンツ！

「あー！」

氷剣をチルノの手から弾き飛ばし、そのままチルノの眼前に剣先を向ける

「・・・勝負ありだ」

「うーん、やっぱりまだまだかー」

「・・・両手で振るうより、片手で振るえるサイズにした方が楽だ・・・それに、小型の方が弾幕を放ちながら斬りかかる事も出来るだろう」
「おお！そうか！それは気付かなかった！さすがあたいの師匠！」

実戦訓練を終え、剣を鞘に戻し縁側に腰を降ろす小夜

お盆に乗っている冷水が入ったコップを手に取り、水分補給をしなから一息つける

「しかし、あの美鈴から剣技、か・・・拳技のほうしかイメージが思い浮かばない」

「凄いなだよ美鈴！前にきよく剣でえんぶを見せてもらったんだ！すごく格好よかったけど最後に咲夜にもんばんサボったからおしおきでナイフ刺されて格好悪かった！」

「・・・そうか」

最後の最後でいつものナイフオチだったか美鈴。短い間だったな

「いや、勝手にうちの門番殺さないでくれるお兄さま」

「？・・・レミアア」

「ごんにちは小夜様」

「お兄さまー♪」

「・・・フランに咲夜もか」

日傘をさすレミリアとフラン、そして2人の後に控えるように立っている咲夜が居た

「おー！フラン、お前も来たのか！」

「こんにちはフランちゃん」

「チルノに大ちゃんもこんにちは」

「やれやれ、来客が途絶えないな。いらっしやい」

「お邪魔するわね霊香・・・霊夢は居ないのかしら？」

辺りを見渡していつもならずぐに見つかるハズの霊夢の姿が無いことに気づき、小夜と霊香に問いかけた

「・・・朝早くから出掛けた」

「あら、そうなの。まあいいわ、霊夢がいるとお兄さまとあまりお話が出来ないものね。今日は久々に歩いて来たから少し疲れたわね、座ってもいいかしら？」

「?・・・ああ」

「じゃあ、失礼するわね。よいしょ・・・ふう」

「・・・レミリア」

「なに？」

「・・・なぜ膝の上なんだ？」

レミリアが座った場所は小夜の膝の上だった

「あら？私はちゃんと座ってもいいかしら？」ってお兄さまに聞いてお兄さまは許可してくれたじゃない」

「・・・そうか」

座っていいかとか聞かれていないが確かに俺は何処にとは聞か

なかった

まあ、特に迷惑でもないから良いんだが・・・

そう思う小夜だが、レミリアの行動に1番先に反応したのはフランだった

「あー！お姉さま！お兄さまの膝の上はフランが座ろうと思ったのに！」

「あら、こういうのは早い者勝ち。フラン、貴女から学んだ事よ」

「むー、いいもん。じゃあフランはお兄さまの隣に座るもん」

そう言っってフランは右隣に座りながら右腕に抱きついてきた

「ちよつとフラン！それじゃあお兄さまに両手で抱きしめて貰えないじゃない!!」

「へへーん。お返しだよお姉さま、べー」

腕に抱きついたまま、小さく舌を出すフラン

「おーなんだ？おおかみ兄ちゃんの掴みあいか？よし！大ちゃんはおかみ兄ちゃんの左腕だ！あたいは肩車して頭を掴むから！」

「え!?ちよ、ちよつとダメだよチルノちゃん！お兄さんを困らしたら！」

大妖精の言葉に聞く耳持たず、チルノは小夜の肩に飛び乗り両手でガツシリと頭を抱きつかんだ

「ぐっ・・・」

そして、飛び乗った時にチルノの足がレミリアの後頭部に直撃する

「痛ッ！ツ~~~~、何するのよこの氷精！」

「え？おおかみ兄ちゃんの部分つかみあい対決でしょ？フランは右腕
だけどレミアはつかんでない、けどあたいは頭で大ちゃんが左腕
つかんだらあたいたちの方がたくさんおおかみ兄ちゃんの体の部分
つかんでるからあたいたちの勝ちだよね！だから大ちゃん、早く！」
「え、えー！・・・え、えっと、お兄さん先に謝ります、すみません」

謝罪した後、大妖精もフランとは反対側に座り小夜の左腕を両手で
掴んだ

フランと違い抱きつかないのは羞恥に耐えきれないから

(あわわわ・・・お兄さんの腕、あったかい／＼／)

「んー、出来たらフランみたいにした方がいいけど、とりあえずこの勝
負あたいたちの勝ちだなレミア！」

「そんな勝負してないわよ！あんたは先に私に謝りなさい!!」

「微笑ましいな」ズズ・・・

「そうですね」

「・・・ハア」

とりあえず、何かを諦めたようにため息を吐く

「あややや、相も変わらず大人気ですねえ小夜さん」パシヤツ！

(・・・また面倒なのが)

そう思いながらカメラを構えたまま降りてくる文を見て思う小夜
だった

しばらくして

とりあえずレミリア達に離れてもらって文と話をしていた

「・・・今日はなんだ？」

「まあまあ、そんな邪険にしないで下さいよ小夜くん。そして首にナイフを向けながらニコニコと微笑むのを止めて下さい咲夜さん、シュレディンガーさん」

「えーどうしよつか咲夜さん？」

「お嬢様の羞恥のお姿を記事にされては困りますからここで捌きましようかシュレディンガーさん」

「OK」

「あややや！大丈夫ですよ！記事には絶対しませんからー!!」

先程よりも更にナイフを首に近づけるシュレディンガーと咲夜
とりあえず止める事にした

「・・・シュレディンガー」

「はい」

「咲夜もそこまでいいわ」

「かしこまりましたお嬢様」

小夜とレミリアに従って、ナイフをしまう2人。文は安堵のため息
を吐いて心底安心していた

「で？なんの用で来たのよ鳥」

「え？もちろんネタ探しですよ。といってもあまり良いネタが無いんで博麗神社に来たわけ何ですけどね」

「なら残念だな文。今記事になりそうなネタなんて此処には無いぞ」

「あ、大丈夫ですよ。小夜くんの写真だけでも撮れば充分ですから」

「・・・そういえば、小夜が幼少の頃から何かと写真撮ったりしてるが
全然新聞には載せていないな」

「まあ、色々あるんですよ。そんな事より小夜くんはいつもの力に戻ってきてますね」

話題をいきなり変えた文に疑いの目線を送るレミリア
しかし、小夜は特に気にせず文の話題に話を合わせた

「・・・見てたのか？」

「はい。チルノちゃんと戦ってた時の様子をじっくり見させてもらいました」

「あ、そうだ！フランもお兄さまと久々に弾幕勝負したーい」

「あら、いいわね。私も久々にお兄さまと戦ってみたいわ」

フランの発言にレミリアも食いついてきた

まあ、出来なくはないがチルノとの後だからもう少し休んでからにして貰おう

「いいねえ、その勝負、私も混ざっていいかな？」

「ツ・・・誰だ？」

不意に聞きなれない声が聞こえた方に視線を向けると、そこには角を生やした幼女が瓢箪を片手に立っていた

しかし、その姿には見覚えがあった

「あ、あやや・・・ま、まさか貴方がこんな所に現れると思いませんでした」

「やつほー、久しぶりだね文」

笑みを浮かべながら文に手を振るう幼女とは逆に文は顔面蒼白だ。
その表情からこの幼女に文は恐怖を感じているのが見て分かる

「そういえばこの場で文と霊香以外は初めてだよ。私の名は伊吹萃

香、幻想郷に舞い戻りし鬼だ」

「「!!」」

「「？」」

それを聞いて驚愕したのはレミリアと咲夜、そして大妖精だった
フランとチルノはなんの事だが理解しきれていないようだ

(ちよつと、ヤバめかな? 霊香さんがいるけど一応霊夢さん呼び戻して来ようつと)

そう言っただけにも知られずにシユレインガーはこの場から消え去った

53話

鬼との遭遇から少し前

「なるほどな。だから今日は珍しく朝早くから色んな所回ってんのか」

「ええ、それで魔理沙。一昨日の花見、何か無かった？」

魔法の森、魔理沙の家にて一昨日の花見について話を聞いている霊夢

魔理沙は頭を掻きながら一昨日の花見のことを思いだしていた

「そうだな．．．まあ、あるとしたらやつぱ霊夢や霊香さんがいつもよりハメを外してたくらいかな」

「．．．兄さんとシユレディングーにも言われたけど。私、そんなに飲んでた？」

「ああ、いつもの霊夢ならゆっくり味わう筈だったけど一昨日の花見は勢い良く飲んでたぜ。最初はどうしたのか心配したけど問題無さそうだから敢えて何も言わなかったぜ」

「うーん、そう．．．ありがとうね。じゃあ私は次の場所に行くから」

「おい、待てよ霊夢。異変なら私も一緒に行くぜ」

「まだ異変とは断定出来ないわ。もしもの為に探ってるってだけよ」

「おう！」

机の上に置いてあった帽子を被り、立て掛けていた箒に乗って霊夢と共に聞き込みに加わった

それから2人は花見に参加していた面子の下に赴き、一昨日の花見

で不審に思った事はないか聞き回っていった

しかし、聞いても大抵は霊夢と霊香の変貌と幾人かは霊夢が感じた別の妖気について話してくれた

肝心のその別の妖気がなんの妖怪の者なのかは分からずじまいだ

「うーん、やっぱりその謎の妖怪が原因なのか？」

「確定はしてないけど、怪しいと言えばそれしか無いのよね。あそこまでハッキリとは感じたのに妖気自体は薄らとしてた・・・まるで霧になった時の兄さんみたい」

「でも、小夜の兄ちゃんは普通に居たしなあ。早飲み対決でシユレディングーに続いて即リタイヤして気絶したけど」

「全く、いくら宴だからって無理に兄さんを参加させたりするんじゃないわよ魔理沙・・・まあ、その時は文の性らしいけどね」

「・・・なあ、霊夢。今更な事聞いていいか？」

「何よ？急に改まって」

「お前、小夜の兄ちゃんの事好きなのか？」

「はあ？何聞いてんのよ。好きに決まってるじゃない」

呆れた様に魔理沙の質問に答える霊夢

だが、魔理沙は更に霊夢に問いかけた

「それって、家族としてか？それとも・・・異性としてか？」

「え？・・・」

魔理沙の問いに霊夢は止まって魔理沙の方に振り向く

「魔理沙・・・それ、どういう」

「そのまんまだぜ。ただの兄ちゃんとして好きなのか、異性として好きなのかって」

「ど、どうしたのよ魔理沙。あんたがいきなりそんな話するなんて」

「えっと、な・・・も、もし、異性として好きで兄ちゃんにこ、告白と

かしちやうんだったらアドバイスとかもらおっかなー．．．なんて」
「あ、アドバイスってどういう事よ?」

聞き返す霊夢に魔理沙は人差し指同士をくつつけてそわそわしながら答えた

「え、えと．．．だ、誰にも言うなよ。実はな「霖之助さんの事が好き」こーりんの事．．．ってなんで知ってたんだよ?!」

「そりゃあ、作者がキャラ説で書いてたじゃないとある店主に片思い中って」

「へ?」

「冗談は置いといて勘よ、勘．．．で、なに告白でもするのあんた」

「えつと、まあ．．．うん／＼／＼」

「．．．はあ、あの魔理沙がね．．．でも、どうして急に?」

「．．．前の異変でよ、兄ちゃんが霊夢を庇って西行妖にやられて倒れた時、霊夢すごく泣いて叫んでたろ?．．．最近よ、その時の光景が兄ちゃんがこーりんに霊夢が私になるって嫌な夢とか見ちまって．．．ありえないだろうけどよ、この想いを伝える前にこーりんが何かあって死ぬんじゃないかって考えちまうんだぜ」

「ちよつと、確かに嫌な夢だけどそれは．．．」

「分かってる!こーりんも半分とはいえ妖怪だから簡単に死ぬなんて思っただけ．．．でもよ、もしもって考えると、なんか怖くなっちゃまうんだぜ」

両手で自分を抱きしめて、僅かに震える魔理沙

霊夢はしばらくしてから魔理沙に近づいて一言放った

「じゃあ、好きだって告げればいいじゃない」

「え?」

「後悔したくない、残したくないなら当たって砕けなさいよ。例え駄目だったとしてもその時は諦めるか諦めないかの二択になるだけ．．．」

そんな嫌な後悔残すくらいなら私ならそうするわ」

「霊夢・・・」

「大丈夫よ。もし霖之助さんがフツて魔理沙泣かしたら私と兄さんが霖之助さんを泣かすから」 bグツ！

「そ、そんな笑顔で怖いこと言うなだぜ・・・へへッ、ありがとうな霊夢、やっぱり持つべきはダチだぜ！」

「うん、あんたはやっぱり、いつもみたいに元気過ぎる位がいいわ。頑張りなさい」

「おう！霊夢も一緒に頑張ろうな！」

「・・・え？」

突然の魔理沙の言葉に疑問を持つ霊夢

そんな霊夢に魔理沙は首を傾げながら言った

「いや、え？つて霊夢も告るんだろ兄ちゃんに？」

「は、ハア!?なんでいきなりそんな話になるのよ!!」

「いやだつて、私ならそうするつて事は霊夢も兄ちゃんに告るんだろ？」

「し、しないわよ！「え、じゃあ霊夢は兄ちゃんの事嫌い」好き嫌いが問題じゃないわよ！兄さんは家族なのよ?!家族同士でつ、付き合うつておかしいでしょ！」

「なんだ？霊夢つてそういう近○○姦とか気にするのか？大丈夫だろ血は繋がってないんだし。それに霊夢はいつも兄ちゃんと風呂とかはいつてそうだから見慣れてそうだよな兄ちゃんのきのk」

「だあー！やめなさい！あんた女の子なんだからはしたない言葉つかうなー!!」

「霊夢に女の子なんだからつて説教、なんか似合わないな。もがつー！」
「い・い・か・げ・ん・に・しなさい。魔理沙ちゃん（？）」「グリグリ

「わ、わかつははら、おひやりやいほうでほふおほぐふいぐふいやふえへー（わ、分かったから、お祓い棒で頬をグリグリ止めてー）」

そんなやり取りを終えて、異変調査に戻ろうとした時だ

『はい、どうも霊夢さーん。ちよつといいですかー?』

「は? シュ、シュレディンガー!?!」

「お、おいどうした霊夢? シュレディンガーなんてどこにもいないぜ?」

「え、なに! どういうこと?!」

『落ち着いて下さい霊夢さん。ちよつと霊夢さんに緊急な用事があるんで失礼ながら霊夢さんの精神内に入って直接お伝えしております』

(せ、精神内に入ってってあんたそんな事出来るの?)

『はい、僕が自分を認識出来れば何処だって現れる事が出来ますよ。』

まあ、それはさておきすぐに博麗神社に戻ってきてくれませんかなか変な奴が現れて』

(変な奴?)

『えー、なんでも自分のことを幻想郷に舞い戻った鬼だとか何だとか』

(お、鬼ですって!!? 神社には兄さんだけ?! 母さんは居るの!?)

『大尉と霊香さんは居ます。あと居るのは吸血鬼姉妹と咲夜さん、チルノと大ちゃんくらいですな』

(・・・分かった。すぐに戻るわ)

『はーい。じゃあ、それではく・・・』

頭の中からシュレディンガーの声が聞こえなくなり、霊夢はすぐに博麗神社に向かって飛んだ

その様子を見て魔理沙も急いで霊夢の後を追った

「お、おい霊夢! どうしたんだよいきなり慌てて!?!」

「止まって説明する時間無いからこのまま話すわ。よく聞いて、さっきシュレディンガーから博麗神社に鬼が現れたって聞いたの!」

「お、鬼!?! まさかあの鬼が!?!」

「ええそうよ！だから一刻も早く戻らないと母さんはともかく兄さん
じゃあ絶対に勝てない！」

「よ、よし！急ぐぜ！」

2人は更に加速して博麗神社へと向かっていった

(お願い兄さん！鬼と戦うなんて事は絶対にしないで！)

54話

場所は戻って博麗神社

「お、鬼？貴方があの鬼だと言うの？」

「ああ、そうだよ。同じ鬼の名を持つ吸血鬼」

「・・・」

鬼

かつて妖怪の山を支配していた妖怪の中で最強と言われた種族

この萃香という女は身なりこそ小さいが、頭に生えた角と溢れ出る妖気は伝承に書かれる鬼そのものを思わせる

同じ鬼と言われる吸血鬼のレミリアとフランを西洋の鬼と言うならば伊吹萃香、こいつは東洋の鬼と言うべきか

しかし、もつとも驚く事はこれ程の強い妖気を放っているのにこの萃香は突然あらわれた。八雲紫のスキマでも咲夜の時止めでも無く、シユレディングーとも少し違うがいきなり現れたのだ

（鬼は力を象徴した妖怪と聞く・・・だが、何か特別な力を持っている訳ではない・・・だとすれば、伊吹萃香の程度の能力か）

「ただいま大尉」ボソツ

「・・・どこ行つてた？」ボソツ

「霊夢さん呼び戻しにですよ。あと、魔理沙さんも来るみたいですよ」

「・・・そうか」

急に居なくなつたと思つたが、どうやら霊夢を呼び戻しに行つてくれたようだ

だが、一応こちらには霊香も居る。何かを起こしても霊夢が来る前に俺と霊香だけでも止められるだろう

「それで萃香。何の用で来た？・・・まあ、お前の事だ。また宴会でもやりたいから来たんだろ？今回の異変の首謀者」

「ははは、さすが靈香だな。やっぱりバレてたか」

「あの、靈香さん。どういうことでしょうか？」

「一昨日の花見。みんなを集めて花見を起こしたのはこいつの仕業なのさ」

「そう、私の能力は『密と疎を操る程度の能力』。物質だろうが精神的なものだろうが何でも集めたり散らしたり出来るのさ」

（・・・そうか、八雲紫のスキマでも無ければ咲夜の時止めでも無く突然現れたのは自分自身という散らした物質を再度集めて、いきなり現れた様に見せたのか・・・しかし、花見をすることが何故異変としてなるのだろうか？・・・博麗神社の食糧と財を無くす狙いか？）

「まあ、異変もそうだけど今日はその妖怪君に用があつて来たと言つてもいいかな」

そう言つて萃香は俺の方を見た途端、指を指しながら言つた

「最初に言つておくけど、私はお前が大っ嫌いだ」

「「ッ！」」

その言葉と同時に陽気だった雰囲気は消え、激しい敵意を俺に示した

それと同時にレミリアとフラン、咲夜が構えだし大ちゃんとチルノは腕を組んだまま立っている靈香の後に隠れた。チルノでさえ靈香から放たれた敵意に恐怖を感じていた

「ハア？いきなり何言つちやつてんのこのチビ？いきなり現れて大尉が嫌いって頭おかしいんじゃないの？」

「・・・俺はお前とは初めて話す・・・俺がお前に嫌われる様な事はしなかつたつもりは無い・・・」

「ああ、私とお前がこうして話すのは初めてだ。君が私を知る筈は無

い、私が君を知ってるけどね。君でも知ってるんじゃないかな、鬼は嘘を嫌うって。その吸血鬼はどうかは知らないけど」

「・・・」

「ちよ、ちよっと待って下さい！」

霊香の後に居た筈の大妖精が突然飛び出して萃香に向かって叫んだ

「おや、なんだい妖精？」

「お、鬼が嘘を嫌うっていうのは私の様な妖精でも知ってます。でも、今のす、萃香さんの話ではお兄さんが嘘つきだって事ですよね？」

(え？ そうなの大ちゃん?)

「うん、そうだよ。こいつは嘘つきだよ、とんでもない大嘘つきさ」

「ツ！ どうしてですか?! お兄さんは今まで私やチルノちゃん、他の皆さんにだって酷い嘘なんて言った事はありません！」

大妖精は本当であるという確信を持って萃香に小夜が嘘つきなんかではないと否定した

大妖精にとっても小夜という存在はチルノと同じくらいに大切な人、否、妖怪だ。そんな大切な人物をいきなり現れて嘘つき呼ばわりされるのがたとえ相手が鬼であっても許せなかったのだ

「ははは！ なかなか根性があるなー、鬼の私にそんな風に言える妖精はそうそういないだろうね・・・だけど、私はそんなくだらしない嘘は言わないよ？」

「ひっ・・・」

「なら、話してもらおうじゃない。兄さんが嘘つきだって理由を」ス
タツ

「ッ、霊夢さん！」

大妖精の前に降りてきた霊夢。その後から魔理沙も降りてきた

「よく言ってくれたわ大ちゃん。後は任せて」

「は、はい」

大妖精を下がらせるように促した霊夢。大妖精は霊夢の言われた通りに任せて、また霊香の下へと下がった

「あちゃー、もう戻ってきたか。まあ、そこにいる何処へでも現れる化け猫もどきが知らせたんだろうけどね」

(うわ、なんか僕の特異能力知ってるみたい)

「さあ、話してちょうだい。なんで兄さんが嘘つきなのか納得出来る理由を」

「どういうも何も、言った通りだよ？彼は嘘を突いている。ただ違うのはあんた達に言う意味じゃなく、彼は自分自身に嘘をついているんだよ」

萃香のその答えに対して小夜は動揺している気配はない

ただ無表情で聞いていた

「例をあげよう、人間は嘘をつく。これは今も昔も変わってないし、一部の下級の妖怪だって同じさ。でもね、他人に対しての嘘なら嫌いでもしょうがないとも思えるさ。力の無い人間や弱い妖怪はそうやって生き延びてきたんだからね・・・でも、彼は違う。自分を騙して誤魔化して嘘を付いている。私はそういう奴が特に嫌いなんだよ」

「お兄さまが自分に嘘をついてるって、何の嘘を付いてるって言うの？」

魔理沙もそうだが、フランも萃香の言葉に対してイラつきを感じている

逆にレミリアと文、霊香はただ静かにしていた。まるで萃香の言葉を理解しているかのように

「回りくどい言い方は止めて、とつとと要点を話しなさい」

黙って聞いているだけのつもりだった霊夢もイライラが募っていきついに口を出す

右手に持つお祓い棒を萃香に向けた

「・・・一番近くに居た霊夢と霊香は特に気付いている事だろ？こいつは、自分に対して何の感情も持っていない事を」
「ッ・・・」

強く握っていたお祓い棒を持つ右手が僅かにピクツと動いた

「元いた世界には友も、家族もいなければ同じ仲間もない。そんな場所から抜け出せて幻想郷でこんなにお前を心から慕う家族や友が得られたのに、お前は何一つ喜ばない

居場所を得られた事に感謝して、家族が出来て安堵している。けど、それは誰かの真似をしているだけ、慕ってくれる者に心配をかけたくないから、誰かを真似しているだけ

あんたは他人の事は心配して怒りもしたり悲しみもする。けど、自分にはそれを向ける事は絶対にしてない。あんたには、自分というものがまるでない。何も描かれていない無地そのものだ」

萃香の言葉に皆が思い出す

小夜はいつだってそうだと言うことを

慧音の寺子屋に通ったのも、鈴奈庵で本を借りたり紅魔館の地下図書に行くのも、霊夢と霊香のあしでまといにならない為に知識を付けるため

紅霧異変で偶然地下で出会ったフランの事を気にかけて、レミリアと対峙し自由を与えてあげた

春が来ない事を落ち込むリリーホワイトの為、白玉楼まで霊夢達と行き

八雲紫の約束通り、西行妖から霊夢を命を掛けて守り通した

それ以外にも、阿求の兄がわりも、チルノとの修行も、ちびルミの遊び相手も、人里での手伝いなども

自分の為に行動しているようで、実は誰かの為だった事ばかりだ
ずっと黙っていた小夜は表情を変えること無く遂に萃香に対して
口を開いた

「……聞きたい……何故そこまで俺を心配する?」

「……は?」

「お前は俺を知っているようだが、俺はお前を知らない……鬼というのはそこまで他人を心配する種族なのか?」

あれほど言われたにも関わらず淡々と話す小夜

その異常さに萃香だけでなく霊夢たちも驚いていた

「……俺は何も思わなかった訳じゃない……幻想郷は俺に無かった色んなモノ、たくさんくれた……」

「……」

「霊香、霊夢は家族をくれた……魔理沙、ルーミア、霖之助は友をくれた……慧音、阿求、小鈴は知識をくれた……チルノ、大妖精、ちびルミ、ミステイア、リグルは遊びを教えてくれた……化け物の俺には無いものを皆くれる、だからせめてくれた分を何かの形で返したいと思っている」

「……なんだが、知りたいが為にあれだけ言ってた自分が馬鹿みたいに思えてきたよ」ドサツ

その場に突然座り込んで頭を掻く萃香

そんな萃香に霊香が話しかけた

「どうだった?うちの息子は?」

「……ふっ、完敗だよ。こいつは嘘つきじゃない。鬼である筈の私が嘘に関して勘違いするとは笑い話だな」

「「？」」」

萃香の突然の敗北宣言に小夜とシュレディンガー、霊夢たちは頭に？を浮かべる

小夜はただ思った事を喋っただけのつもり、シュレディンガーに至っては上官である大尉の悪口に怒り心頭で萃香の話の真意などにも分かってない

「ねえねえ咲夜、どういう事か分かった？」

「さ、さあ、少し分からないといえますか・・・」

「・・・どちらにせよ、お兄さまが鬼と戦う事が避けられて良かったと喜ぶべきね」

「そ、そうですね・・・」

どちらにせよ、レミリアや文は小夜が鬼と戦う事だけは避けることが出来て安堵していた

「えーと、とりあえず解決・・・なのか？」

「いいえ、まだ異変解決が終わって無いわ・・・で、萃香だっけ。あなたには色々言いたい事あるけど、それは後。まずは意味不明な異変を今ここで終わらせてあげるわ」

「はあ・・・色々と想定外すぎたけど、気持ちを切り替えて、勝負だ。博麗の巫女！」

そう言っつて弾幕勝負を始める霊夢と萃香

俺はとりあえず霊夢が勝つまでその姿をただ見ていることにしていた

55話

幻想郷に鬼が帰ってきた次の日

僕達は今年最後の花見をしている

あの鬼、萃香との弾幕勝負で霊夢さんは見事に勝利を勝ち取った。あの鬼は敗北を認めて、異変をやめる代わりに今日最後の花見をやりたいとなんともわがままな条件を言ってきたわけですよ

大尉や霊香さんは特に反対する理由も無いらしく、弾幕勝負で勝った霊夢さんに決めて貰うという形になって霊夢さんの賛成を持って花見が開始された訳だ

僕としては前の様な悲惨な目に遭わなければそれでいいんだよね

そして今回の花見も多くの人、妖怪、妖精が参加しているんだよね。あの鬼は能力は使っていないよ、ちなみに名前を呼ばないのは僕があの鬼が嫌いだから

だって出会い頭に僕の上官である大尉にあの暴言なんて好感のこの字も持てるはずないじゃん(呆)

そんなこんなで始まった花見なんだけど、そんな中でずっと納得いかないって顔してる人が1名居るんだよね

「やっぱりなんか・・・釈然としない」

「まだ言ってるのか霊夢？しつこいとは言わないがそろそろ切り替えてもいいんじゃないか」

霊夢さんは昨日からずっとこの調子

冬の異変以来から、巫女さんとしての自覚を再認識して異変早期解決っていう心構えで昨日は朝早くから出かけたのに、首謀者の方からまさかの大尉に近付いてきた

まあ、大尉の気持ちもあの場に居た皆さんも改めてご理解出来た訳だし。その後霊夢さんが退治して、異変は確かに早期解決で終わってはいらぬだよね

でも、それがどうにも納得出来ならしい。人間って面倒くさいね

「あははは、そんな顔してたら楽しい花見も楽しめないよ。ほら、飲んで飲んで」

「首謀者のあんたに言われたくないわよ」

それには全くもって同意見ですよ霊夢さん

異変の首謀者であるあの鬼は既に出来上がっており、霊夢さんの隣で酒を豪快に飲んでいた

「ま、まさか本当に帰ってきていたなんて・・・文先輩、この為に私を呼んだんですか？」

「お願い、今日は居るだけでもいいからさ。帰らないで椀、私を一人にしないで」

「む、無理ですよ。今すぐにも帰りたいですよ！」

ちよつと遠くでこそそこそしてるのが文と犬走椀さん

話によれば鬼は昔、妖怪の山を仕切ってたらしくて、天狗や河童とかを従えてたらしいね

その力関係を忘れていないのか、あの文でさえ一人になるのがやで椀さんを無理矢理に近い形で連れて来たようだ

大尉は椀さんが来たことに少し嬉しそうだったけどね

まあ、珍しい客は椀さんだけじゃないんだな

「・・・頂戴」スツ

「・・・」コクツ

片手に持つお猪口を大尉に差し出して、大尉はそのお猪口に酒を注いでいた

「ほらほら、紫。そんな素っ気ない態度じゃあ小夜くんが悲しんじや

うわよ?」

「幽々子、私はあくまで貴女に誘われたからであってこいつとは「小夜くん」む……」

「お名前があるんだからこいつなんて酷いでしょ。貴女だってこいつとかあいつとかBBAとか言われたら嫌でしょ?」

「最後のは女性なら誰でも嫌よ。ていうか、言ったらスキマに落とす」
「いい……大丈夫」

幽々子さんの注意に対して止めを入れる大尉

珍しい客とはあの八雲紫の事だ

八雲紫は幽々子さんに誘われたから来たらしい

「小夜くん、紫と仲良くしたいならあまり奥手は駄目よ?もつと強引にいかなきゃ」

「幽々子、貴女さんに楽しんでるだけでしょ?」

「……」

「ゴホンッ、いくらこんな事しても私は貴方を信じてはいないわ。その辺は忘れないでね」

「でも、嫌いって訳でもないのよ。嫌いだったらすぐ離れるはずだもの♪」

「ち、違うわ!信じて無いからこそ近くで監視してるのよ!」

「そうだとしても、監視なら藍やスキマを使えばそんな傍に居なくても平気だと思わないか?」ニヤニヤ

「霊香……貴女まで」

笑みを浮かべながら幽々子さんと同じように霊香さんも八雲紫を煽り始めた

いいぞ。もつとやっちゃえお二方

スキマ妖怪ザマア(・▽・)

「……紫」

「なによ、霊夢？」

「兄さんはあげないわよ」ギユ

「いらないわよ!!」

「・・・？」

霊夢さんは何を勘違いしたか大尉の腕に抱きついてあげない宣言しちやったよ

まあ、僕としても八雲紫のものになるとか考えたくないね

「なにになに？遊んでるの？フランも混ざるー♪」ギユ

「あら、残念ねスキマ妖怪。お兄さまは紅魔館の使用人になる予定だから貴女の物にはならないわよ」

「・・・ちよつとレミリア、聞き捨てならないんだけど？」

「あらあら、こわーい赤白の脇巫女さんが睨みつけてくるわ。お兄さま、レミリア怖い♪」ギユ

「・・・近い」

「上等よ。あんたとは戦った事なかったし、この辺で分かせてやろうじゃない」スツ

「ふふふ、夜の吸血鬼の力を甘くみないことね霊夢」

「お！なんだなんだ!?!最強をきめるたたかいならあたかもまざるぞ!!」

「1度、霊夢さんや吸血鬼とも戦ってみたいと思ってました。この魂魄妖夢も是非お手合わせを！」

「おー喧嘩か？この鬼が混ざらない訳にはいかないよ！」

なんだが話が色々拗れてるけどまた弾幕勝負の気配がするから今のうちに避難しとこつと。ていうか宴の時は弾幕勝負はしないんじゃないかなかつたつけ？

そう思いながら消えるシユレディングーと同時に予想通り上空で弾幕勝負が開始された

「お、お兄さん、チルノちゃんが本当にすいません！」ペコペコ

「みんなお兄ちゃんに夢中なのかー？」

「そうだな。何せ霊夢も加えて12人義妹が居るからなあ、1部の奴らは気が気でないんだろう？」

「そうなのかー」

「じゅ、12!?!…さ、小夜！お、お姉ちゃんはそんな風に育ては覚えはありません！」

「そ、そうよ！ま、ましてや小さい子をして、手込めにするなんて草の根妖怪ネットワークの一員として自覚を持ちなさいよ!!」

「権、暴走し過ぎ。それに1日しか世話してないでしょ」

「別にそこまで厳しくもないけどね」

「姫（先輩）は黙ってて（下さい）!!」

「ア、ハイ」

「あいつを傍に置いたら私が休めなくなるわ・・・」

「ふふふ、そうね。妖夢ったらあんなに張り切っちゃって♪」

（うーん・・・紫さまが居る住居は駄目として、マヨヒガなら多少汚れてはいるが住むには問題ないしあくまで来るような事があっても問題は・・・な、何を考えているのだろう私は／＼／＼）

「・・・（魔理沙と霖之助がいない・・・シユレディングーもない・・・何処にいったんだ?）」キヨロキヨロ

その頃
博麗神社の裏

「あーあ、なんか面白い事ないかな．．．ん？あれって．．．」

巻き込まれるのを避けようと宴会場から逃げたシユレディンガーは森の近くで1組の男女を見つけた

白黒を基本とした服に大きな帽子を両手で抱えるように持つ魔理沙と変わらぬ姿の霖之助が居た

「なーにやってんだろ？」

少し興味を持ったシユレディンガーは静かに2人の話が聞き取れる所まで近づく

「魔理沙、本当に大丈夫か？顔も赤いし．．．言い難い事ならまた今度で」

「い、いや！大丈夫だぜ！と、とにかくちよつと待って！」

「あー、うん．．．まあ、しかし、魔理沙も大きくなったな。昔は霊夢と小夜の3人でよく遊んで、少し怖がりな子共だったのに、時の流れって早いもんだ」

「．．．そうだな。こーりんが店持って、母さんが死んで、父さんの家を出てってからもう数年か」

「最初、親父さんが慌てて店に来て、聞いた時は驚いたよ。魔法使いになりたいから魔女、魅魔さんのところに弟子入りする為に家を出たって」

「そうだな．．．でも、こーりんは私を連れ戻そうとはしなかった」

「まあ、魅魔さんなら霊香、ルーミアと同じくらい信頼してるしな。親父さんの説得には大分時間掛かったけど」

「昔っから、こーりんは優しかったよな。霊夢と小夜の兄ちゃんに会わせてくれたり、遊んでくれたり、本を読み聞かせてくれたり・・・悲しい時や辛い時はいつでも店に来なって言ってくれたり」

「ああ、本当に懐かしい」

「だからさ、私は気づいたんだぜ・・・私はこーりんの事が、す、好きなんだって」

「・・・え?」

「だ、だからさこーりん・・・わ、わわ、私と、つ、付き合ってくれだぜ!!」

（おー、これが告白ってやつ?初めて見るよ。さあ、店主どうすんの? w k t k ♪ w k t k ♪）

陰から2人の結末を見守（覗き見）るシユレディンガー

数秒経ってから霖之助は口を開いた

「・・・ありがとう魔理沙。そう思ってくれていたなんて嬉しいよ」

「ツ!じゃ、じゃあ!!」
「だけど」・・・え?」

「すまない。その気持ちに対して僕は受け止める事は出来ない」

「な、なんでだぜ?私の何がいけないんだぜ!?!」

「いや、魔理沙は何も悪くない。魔理沙を妻に持つのも良いと思う・・・
だけど、僕の方が問題だ」

「・・・半分、妖怪だから?」

「・・・」
「コクッ」

半分妖怪

そう、森近霖之助は人里の守護を担う慧音と同じ半人半妖の男性
故に人間より長い時間を生きている

「妖怪だからとか私は気にしないぜ!こーりんはこーりんなんだぜ!!」

「違うんだ魔理沙。僕が恐れているのは僕の目の前から思い人といっ

たかけがえのない存在が消えてしまう時・・・きっと僕はその現実を受け止めきれない、それが何より怖いんだ」

「こーりん・・・」

「魔理沙、すまない・・・長く生きてるのにこんなにも弱いのが、僕はね」

「・・・分かった。ごめんな、こーりん」クイツ

「謝るのは僕の方さ。すまない魔理沙」

帽子を顔を隠すくらい帽子を深くかぶる魔理沙、よくは見えないが体は僅かに震えている。たぶん泣いているんだろう

霖之助は気づいたのかただ帽子越しに魔理沙の頭を撫でる

「・・・ホントに面倒くさいな、人間って」

人間ではないシュレディンガーは一部始終を見終わってからそう
呟く

「でも、いい所でもあるんだよ？だから人間って必死になれる」

「ま、僕からしたらどうでもいい事だよ」

「大丈夫大丈夫、シュレディンガーくんにも分かる日はくるよきつと

♪ スツ

「そうかねえー・・・ん？」

何か不自然なことに気づき周りを見渡す

「僕は今誰と話してたんだ？・・・」キョロキョロ

辺りをいくら見回しても先ほどまで喋っていたハズの相手は見えず首を傾げた

「あーいたー！シュレくんまたどっか行って！」

そんな時に橙が現れ、シユレディングーに声をかけた

「(？●？・？●？)」「ジ―

「な、なに？(す、すごく見てくる・・・な、なんだろうなんか熱くてドキドキする／＼／＼)」

「・・・いや、なあんでもない。なんか腹減ったし戻ろうと」

「え、ちよ、ちよつと待ってよ！」

(違うよなー、橙ちゃんがあんな落ち着いた声で話す筈ないし、まいつか)

気のせいだと決めつけシユレディングーは宴会の場へと戻り橙もその後を追っていった

こうして、幻想郷の1日がまた終わり新しい日がやってくる

設定と紹介 3

シユレデインガー准尉

大尉と同じくミレニアムに所属していた対アーカードの切り札

第二次ゼーレヴェ作戦にてアーカードが持つ全ての命を解き放ち、再度ロンドンを覆い尽くす死者達から血を吸収する際に自ら命を絶ちアーカードに取り込まれ、彼の任務は終わった・・・筈だが、アーカード自ら自身が吸収した全ての命を30年掛けて殺し尽くし遂にシユレデインガーを見つけ身体から排除された

任務も失敗し、ミレニアムも無い世界に未練も無いため自害し大尉と同じように幻想入りを果たす

現在は博麗神社に居候しており、八雲藍の式である橙の部下という立場だが、同じ部下である猫たちと同様に橙の言う事を聞く気は無し
小夜という名を得た大尉を今でも大尉と呼び上司として見ている。
頭が上がらないのも変わらずである

特徴

霊夢より少し背が小さい少年で黒い猫耳。これといった特徴は変わっていない

服装

ヒトラーユーゲントの服装のみ

武装

アーカードに取り込まれる時、自害に使った短剣

能力

正確な特殊能力の名は不明

本人が自身の存在を認識出来る限り頭を撃ち抜かれようが、心臓を潰そうが何もなかったように元通りに現れる。更にそれは他者の精

神や夢、特殊な空間の中でも発揮し現れる事が可能
ある種、不死の能力とも言える

最近の趣味

悪戯・上司（橙）いじり

一言

「これからも前、後書きでメタイ事とか言いまくってあげるよ」

幻想郷住人紹介と小夜の事で一言part3

リリーホワイト

春の訪れを告げる春告精で小夜の義妹（十二人目）

基本はチルノ達が遊び場に行っている霧の湖辺りに居るが春の訪れを告げる時は幻想郷全域を飛び回る。最近博麗神社で目撃する事が多くなった

「・・・春ですよー／＼／」

アリス・マーガトロイド

魔法の森に住まう魔法使い

人形使いでもあり、時々人里に赴いては里の子供達に人形劇を披露している

パチュリーの前から魔理沙の被害にあっていたが急に盗んだ本全てを返却してきた魔理沙に動揺を隠せなかったらしい

「まあ、良い妖怪じゃないかしら？」

上海&蓬莱

アリスが作った人形

主であるアリスからの魔力供給が続く限り糸無しで動く事が出来

る。他の人形と違い喋る事が出来るが「シャンハイ」と「ホラーイ」としか喋れない

「シャンハイー!」「ホラーイ?」

魂魄 妖夢

白玉楼の庭師で小夜の二番弟子

冬の異変にて自分が仕える主の異変に気づけず、西行妖の異変に手を貸してしまった自分の未熟さに悩み、今よりもっと強くなるためにと戦いながらも自分に欠けている部分を指摘してくれた小夜に弟子入りをする

チルノの妹弟子という立場にいるが特に気にはしていない

「師匠の下ならば必ず強くなれる筈です! 現に妖精であるチルノさんは小夜の下で修行してから強くなったと聞いていますから!」

西行寺 幽々子

白玉楼の主にして八雲紫の親友の1人

西行妖の封印時に生前の記憶全てを失ってしまったが西行妖の下に眠る者を見たいという好奇心から自身が封印した筈の西行妖を春を集めて解こうとした

封印が緩むにつれて西行妖に意識を乗っ取られてしまった。記憶が共有されていたのか異変での出来事は全て覚えているらしい
「紫と仲良くなりたいたいなら美少女とか言えば1発だと思わなく♪」

橙

八雲藍の式でシュレディンガーの現上司?

基本は部下の猫たちとマヨヒガの管理をしているらしい

シュレディンガーとは結界で守られているマヨヒガの庭に倒れていた所を発見し、助けた。猫耳を生やしている所から同じ猫の妖怪だと判断して行く場所も帰る場所もないシュレディンガーを部下としてマヨヒガに居させる事にしたが当然言う事を聞くはずもなく振り回されている苦勞化け猫

「どうしたらシユレくんが言う事聞くか小夜さんに相談してる」

八雲 藍

八雲紫の式

紫からは大尉に対して警戒するようにとしか言われてなかった為に本当に警戒するほどの危険な人物なのか試すため、冬の異変時に博麗の巫女に渡すはずの羅針盤を餌にマヨヒガで戦う

後に大尉の幻想郷に対する気持ちを知り、信頼出来る人物とみて羅針盤を託した。冬の異変後からたまたま博麗神社に遊びに来る事があ
る

「少し常識が無いところもあるし寡黙だったりするが根は優しい妖怪だし幻想郷の敵になるような事は無いだろう・・・絶対と言えないのが少し悔しいな」

八雲 紫

妖怪の賢者にして幻想郷創設者の1人

その高い妖力と特殊な程度の能力を持って幻想郷のトップについている大妖怪。スキマを通じて多くの異次元世界を覗き見る事ができ、大尉とシユレディンガーが居た世界も知っている

幻想入りを果たす者の中で脅威となりうるだろう者には自ら出向こうともする

「誰がなんと言おうが信じるつもりなんてないわ・・・まあ、西行妖の件では助かったとは思ってるけど」

聖 命蓮

冥界、閻魔大王の補佐官を務めている男性

三途の川の前で立ち尽くす小夜を見つけ少しだけ彼の話を聞いた。家族の話をしてから自分にも血の繋がった姉の話をする

その後は小町という女性を探しに小夜と別れた

「まだ出会って間もないので、なんと言ったらいいか分かりませんが・・・義理でも家族という存在を大切にしたいと思えます」

因幡 てる

迷いの竹林の奥に存在する永遠亭に住まう妖獣

悪戯好きで永遠亭に向かう道中に落とし穴などの罠を作ったりする

小夜が目覚め、生卵が飛んでくる罠に小夜が引っ掛かった後、お見舞いに来た霊夢とシユレディンガー（悪ノリ）に制裁されたがシユレディンガーとはその後なにかが共鳴したのすぐ仲良くなった

「あの狼に次なにかしたら今度こそ博麗の巫女に殺されるかも」

鈴仙・優曇華院・イナバ

永遠亭の医者八意永琳の弟子

医学の知識はまだただが一般の薬作りには多少自身がある
てるの悪戯によく引っかけかり師の薬品作りで希少な材料集めを頼まれたりと気苦労が絶えない

「ちよつと人間とは違う意味で苦手かな。私は兎であの人は狼だし」

八意 永琳

永遠亭の名医

通常なら出来ないような薬品を能力によって作りあげる事が出来る（あくまで素材があればの話）

元は月に住まう月人で月の都創設者の1人らしい

「特に言うことはいわ。患者ならちゃんと診てあげるだけよ」

藤原 妹紅

迷いの竹林内に居を構え、1人で暮らしている慧音の親友

主に永遠亭に行きたい人の案内と護衛をしたり、人里の防りにも手を貸している

昔は永遠亭に住まう姫という人物とは犬猿の仲で出会ってはすぐに殺し合いが勃発するが霊香によって両成敗され、今はとりあえずは即殺し合いにならないようにはなった（しないとは言っていない）

「別に小夜に対して言うことはないね。あ、一つ言うなら永遠亭にいるあの女の紹介しなくていいからな作者♪」

プリズムリバー三姉妹

ルナサ・プリズムリバー

騒霊の姉妹であるプリズムリバー三姉妹の長女。 姉妹でやっている楽団の弦楽器担当（主にヴァイオリン）兼リーダー

暗い性格のためか、元気で明るくライブでもセンターに居る事の多い妹のメルランがリーダーと勘違いする人もいるらしい

紅魔館でレミアアのヴァイオリンの講師をすることが多い

「少し、親近感があるかな・・・彼は」

メルラン・プリズムリバー

騒霊の姉妹であるプリズムリバー三姉妹の次女。 姉妹でやって

いる楽団の管楽器担当（主にトランペット）

姉のルナサと真逆で明るく目立つ性格でライブにおいては中央にいる事が多いライブの花形

紅魔館で妹のリリカと共にフランの音楽講師をしている。リコーダーを教えたのも彼女

「力強くて、優しく、頼りがいもあってそれにかっこいい。うちのマネージャーとして雇っちゃおうかしら♪」

リリカ・プリズムリバー

騒霊の姉妹であるプリズムリバー三姉妹の三女。 姉妹でやっている楽団のキーボード・パーカッション担当

お調子者で狡猾。普段は姉達をけしかけ自分は戦おうとせず、最小限の力で最大限の利益を得る事しか考えていないらしい。ただ三姉妹の中では最も人間らしい性格で、話がしやすいらしい

紅魔館で姉のメルランと共にフランの音楽講師をしているがほとんどはメルランがやって楽をしている

「どうでもいいかな、興味ないし」

伊吹 萃香

かつて妖怪の山を指揮っていた鬼

そのなかでも実力のある鬼の四天王の一人「技の萃香」

早くに終わってしまふ春に対して勿体なく感じた彼女は自身の能力である密と疎を操る程度の能力で皆を集めて花見をさせていた。動機もただ自分が楽しみたいだけである

「ああ、嫌いだよ。自分の感情を今でも殺し続けてるんだからね」

東方風神録

56話

鬼の異変から数ヶ月

幻想郷は夏も終わりがけ、もうすぐ秋の季節がやってくる

「……」ズズズ

博麗神社では縁側で茶を啜る霊夢と小夜の姿があった

「ふー……涼しくなってきたね」

「……」コクツ

夏の暑い季候も殆ど無く、涼しく過ごしやすい毎日

もうすぐ秋の訪れを身に実感しながら真ん中にある菓子入れから煎餅を取り出して口に運ぶ2人

あの鬼の異変から変わった事と言えば、伊吹萃香は何故かこの博麗神社に住みつくようになった

霊香の話では霊夢を気にいったからだろうと話していた

異変当時は俺の事を嫌っていたようだが特に問題無く普通に生活出来ている

それと、何故俺やシュレインガーの居たミレニウムを知っていたかだが冬の異変に俺が負傷し眠っている間にシュレインガーが一部の皆にミレニウムの事を話していたらしく、その時能力で自身の蜜を下げ霧状になっていた萃香が偶然それを聞いていたらしい

他には……魔理沙と紫を見かけなくなった

八雲紫はいつも通りだが今回は式である藍と橙も居ないとシュレインガーから聞いた。霊夢の勘では「また誰か幻想入りしたんじゃない?」と話す。もしそうだとしたら一体誰なのか少なからず興味はある

魔理沙は最近博麗神社に来る事がなくなった。また魔法の実験で自宅に引きこもっているのかと思っていたが、それでもよく昼飯を食いに来る筈がこの数ヶ月一切来ない

「・・・静かだな」

「そうね。魔理沙も来ないし萃香とシユレディングーも出かけてるし本当に静かよね・・・ふわぁ」

「・・・大丈夫か？」

「うーん、丁度いい季節になってきたからかな少し眠い。膝、借りていい？」

「・・・」コクツ

「やった♪」

真ん中に置いてあった菓子入れを退かし、そのまま頭を小夜の膝の上に乗せる霊夢

「じゃあ、少しだけ寝るね」

「・・・ああ」

「ふふ、おやすみ・・・すう」

「・・・」パキツ　モグモグ

左手で煎餅を一口くらいに小さく割ってそれを口にする小夜空いた右手は霊夢の頭を優しく撫でる

「あらあら、微笑ましい場面に出くわしちゃったわね」

「?・・・レテイ」

「こんにちは小夜くん。前の冬以来ね」

やって来たのはレテイ・ホワイトロック。随分と珍しい人物が訪問してきた

「まだ冬じゃないのに・・・大丈夫なのか？」

「力はただだけど、これくらい涼しければ出歩くくらいは出来るわ」

「・・・そうか。チルノ達には会ったのか？」

「会いに行くつもりよ。でも、その前に貴方に伝えたい事があるの」

「・・・？」

「私ね、最近まで妖怪の山近くの日陰とかに居ただけど、ここ最近あそここの白狼や鴉天狗達が騒がしいのよね。その性でちょうど良かった休み場から離れないと行けなくなっちゃって最悪なのよ。小夜くん、白狼天狗達には人気者でしょ？なにか知らないかなあつて思つて」

「・・・」

妖怪の山、しかも白狼天狗だけでなくその支配してる存在でもある鴉天狗まで騒ぎだすとはなにか尋常ではない事が起きているのか？

確かあの文でさえ、伊吹萃香、つまり鬼が現れた事にはかなり驚いていた。それが山の妖怪達の耳にも入れば騒ぐだろうが

萃香は別に山の再支配など望んでいないし、既に姿を現してから数ヶ月経っているんだ、その間に萃香の話題が出てこないなど、文なら隠すかもしれないが今回は権もあの花見に居たんだ。まずありえないだろう

だとすれば、妖怪の山でなにか事件でもあったのか？

「・・・様子を見に行ってみよう。霊夢を頼めるか？霊香達は居ないがチルノ達は今日も来るだろうから待つて居れば会える」

「ええ、いいわよ。ごめんね、せっかくのお楽しみだったのに邪魔しちゃって♪」

「・・・？」

(あ。やっぱり自覚無しか)

とりあえず霊夢の膝枕をレティに代わってもらい小夜は剣と円盾を持ち、規格帽をかぶって妖怪の山へと向かう為に博麗神社を後にす

る

(ついでに魔理沙の家に寄ってみるか)

霊夢はしばらくはそつとしてあげてと言われたがやはり心配ではある

顔を見に行く程度なら大丈夫であろう

数十分も掛からず魔法の森の魔理沙の自宅、霧雨魔法店に着いた店と付いている様に魔理沙は事実上、何でも屋をやっている。しかし、通常人間はほとんど入らない魔法の森の奥の為、客など来るはずもない

香霖堂を経営してる霖之助は、「商売舐めてるだろ」と呆れていたそう
うだ

とりあえず、いるかどうか確認する為にドアを叩く

「・・・反応なし、留守か」

心の中では半分はそうだろうなと思っていた小夜

居ないのであれば仕方ない、他にもやる事がある為に小夜は霧雨魔法店を後にした

妖怪の山

「・・・で、ある様にこれから我らの山に人間はもちろん、他の妖怪の侵入を一切許すな。よいな？」

「ハッ！」

強大な妖気と威厳を放つ黒い翼を生やした男は隊長格の白狼天狗たちに命令をする

彼は妖怪の山を支配する鴉天狗達の更に上位の存在、大天狗の一人。その力と妖気は鬼には劣るがそこいらの中級の妖怪よりも断然強い

「我からの報告は以上だ。何か疑問があるならば今のうちに聞こう」

「・・・」

背に一から十の数字が書かれた隊長格の衣を身に纏う哨戒白狼天狗たち

数分の沈黙の中、九と背に書かれた白狼天狗が声をだす

「大天狗様、天魔様はこの山に突如幻想入りしてきた神とやらに本当に従うつもりなのですか？」

「・・・名を名乗れ若人」

「ハッ！哨戒白狼天狗第九番隊長、迅です！」

「迅か。天魔様はあの神との交渉をのみ、協力するという立場をおとりになった。従うというよりも対等の扱いだな」

「ですが！我々白狼天狗は天魔様と大天狗様たちの為にと学び鍛え、仕えて来ました！それをいきなり現れた外の神に協力をするなど！」

「頭が高いぞ迅！天魔様と大天狗様たちのお決まりに文句があるのか！？」

一と背に書かれた、この隊長格の中で一番の権限と発言力を持つ白狼天狗が迅に怒鳴り声をあげ、迅は歯をくいしばりながら口を閉じる

「申し訳ございません大天狗様」

「よい。質問を許したのは我だ・・・迅よ、お主の天魔様と我らの為に
尽くさんとするその心構えは褒めてやろう。だが、これは天魔様がお
決めになった事だ。今はその怒りを抑え、我らの、天魔様の命を全う
してくれ」

「・・・ハッ、承知しました！」

「うむ、他にはないか？」

「大天狗様、よろしいでしょうか？」

「・・・名を名乗れ」

「ハッ、哨戒白狼天狗第二番隊隊長、夜宵と申します」

「して、何が聞きたい？」

「先ほど、人間または他の妖怪の山への侵入を阻止するのは分かりま
した・・・もし、それが博麗の巫女、八雲紫、またはその2名の関係
者だった場合はどういたしましたでしょうか？」

「ッ・・・」グッ

夜宵の間に八番隊の隊長である犬走権が反応し拳を握る

「天魔様の命はいかなる存在の侵入を許してはならぬと仰った。いつ
ものように見つけ次第は山から追い返すように警告せよ」

「・・・もし、警告を無視した場合は殺しても構いませんか？」

「ッ!？」ギュー!

「・・・出来るのであればな」

「・・・ハッ、承知いたしました」ニヤリッ

大天狗に頭を下げながら口元を大きく歪める夜宵。権は更に拳を
握りしめて身を震わせる

「その娘、なにか言いたいことはあるか？」

権の異変に気づき、大天狗は権に話しかける

「……い、いえ、なにもありません」

「……名を名乗れ娘」

「……ハツ、哨戒白狼天狗第八番隊隊長、犬走権と申します」

「犬走……ああ、射命丸文の……犬走権に命ずる、後で射命丸文と共に我が屋敷に來い。射命丸文には共に來る様にと我から言っておく」

「え？……は、はい！」

「うむ。では、これ以外に無いのであれば我から話す事はもう無い。各々は自身の役目を全うせよ」

「ハッ！」

敬礼をする白狼天狗たち。大天狗は翼を広げ一陣の風と共に上空へと消えた

「では、各々は自身の部隊の者達に今回の事を伝え任務につけ！解散！」

隊長格の白狼天狗たちはその言葉と同時に各々の部隊へと任務を伝えるために別れた

「小夜……どうか山には來ないで。もし夜宵に見つかれば奴はきつと……」

胸に手を当て、小夜が山に來ない事を願う権

その願いも虚しく、小夜が山へと向かってきている事を権は知る由もない

57話

犬走棍SIDE

妖怪の山 哨戒白狼天狗第八番隊待機所

「・・・以上をもって、天魔様は妖怪の山へと来る部外者を寄せつけぬよう一層警戒を強くせよとのご命令だ。万が一、人間または他の妖怪がやって来た場合はいかなる理由があろうと近づかぬよう警告せよ・・・それでも警告を無視した場合はその者の殺害も許可された」
「・・・」

「任務はいつも通りだが、今までよりも警戒を強めて任務にあたれ！
いいな！」

「ハッ！」

私の言葉に皆が敬礼をする。今回の任務がどれほど重要かは天魔様からのご命令というだけでも彼らは分かるだろう

「それと私はこれから大天狗様の命で1度、上層の方へ赴く。私が居ない間になにか問題があった場合は他の部隊に報告、連携をもって対処にあたれ。報告は以上だ、皆はそれぞれの任にあたり全うせよ。解散！」

皆は蜘蛛の子を散らすが如く、敬礼をした後は颯爽とその場から離れて各々の任務場に向かった

私も準備を済ませて妖怪の山の上層へと向かう

この妖怪の山の居住は三つに分けられており

麓には我々哨戒白狼天狗とは違う戦えない者、つまり子供や隠居した白狼天狗たちと河童、その他の山に住み着くことを許された妖怪が暮らしている

中腹は我々哨戒白狼天狗と下級の鴉天狗たちが暮らしている。下級の鴉天狗には二つの種類があり、一つは我々と同じように山の警備

をする者、もう一つは文先輩のような新聞記者や一般の者たち

上層から頂上はこの山を支配している天魔様をはじめ、8人の大天狗様達とその専属の従者達が暮らしている。そして今は外の世界から来た神とやらが住み着いているのだ

ちなみに我々哨戒白狼天狗の部隊は実力順で一から十の部隊に配属され、警備をする場も番号によって変わる

一から三の部隊は頂上

四から七の部隊が中腹

そして私の部隊である八から十は麓の警備を務める

私は長い道のりを歩ききって、上層の門へと辿りついた

「生まれ！哨戒白狼天狗のようだな。何用か？」

武装した鴉天狗の門番2人が私の行くてを阻む

「哨戒白狼天狗第八番隊長、犬走椀。大天狗様の命によってここに来ました」

「分かった。確認をとる、しばし待て」

「・・・はあ」

小さく溜息をつく、別に待たされる事に文句がある訳じゃない

上層は大天狗様達や天魔様がお住みになる場、そして今回の件で警備にあたる者たちは皆殺気だっているのだ

あの外の世界から来た神達が来なければ今回のような事態にならずに済むのに、と心の中で不満を呟く

「確認が取れた。さあ、入られよ」

「はい。門番、ご苦労様です」

「・・・中に入ってから気をつけよ。皆殺気だっている故な」

「ハッ、ご忠告感謝致します」

私は早歩きでその場を離れて大天狗様の屋敷へと向かった

「あややや、やっと来ましたね椀」

「文先輩。遅れて申し訳ありません」

「大丈夫よ遅れても全然構わない。て言うか出来れば私は来たくなかった」

「・・・ご命令ですので仕方ないですよ」

「はあ、ここはネタもないし皆殺気だつてて落ち着かないし、それにこれから会う大天狗様は個人的にも苦手ですよ」

そんな話をしながら、文先輩と一緒に屋敷の中へと入っていき大天狗様の従者に案内に従って歩いていく

文先輩は新聞記者という事で私たちと同じ山の中腹にある居住地で暮らしていますが私はどうしても文先輩が下級の鴉天狗とは思えない

生きた年数とかではなく、先輩がいつも片手に持っている天狗の団扇、葉団扇。あれは鴉天狗の中で力のある者が持つ事を許されたいわば上級者の証でもある

性格は飄々として適当な所はありますが、断じて弱くは無い筈です

「大天狗様。射命丸文ならびに犬走椀がご到着なされました」

「2人を入れよ」

「ハッ」

案内をしてくれた従者は襖を開け、私と文先輩に入るように促す

「ふう・・・よく来たな射命丸文と犬走椀よ。そこに座りたまえ」

大天狗様の言う通りに指定された席に座る

「すまぬが我がよいと言うまで従者は誰も近づけるな」
「はっ」

後に控えていた従者は大天狗様の命に従い、中にいた数名の従者たちと共に部屋を出た

大天狗様は煙管を片手に一服しだす。やはりこの煙の匂いは辛い、嗅覚が優れているから尚更だ

「ちよつと、権がいるのにそれを吸うのはやめて貰えませんか？」

「ん、ああすまんな文。どうも仕事の後はこれを吸わぬと落ち着かぬ故な」

「はあ、私だつてあまり好きじゃないんですよそれ。少しは周りの迷惑を考えたらどうです。『お爺様』？」

「ははは、孫娘にそう言われては仕方ない、注意するでしょう。すまぬかったな権よ」

「いえ、お気になさらずとも私めは大丈夫です

『射命丸 捷』様」

そう、この大天狗様は文先輩の実の祖父様

射命丸捷（しやめいまる しょう）

古き時代から天魔様と共に居た最古参の鴉天狗の1人だ

「それで話ってなんですか？つまらない事ならそのボケ始めた脳天を叩きますよっ。」

「まあまあ、そう嫌な顔をするな文よ。そう長くはならんはずだ」

「それでお話とは一体？」

「うむ、お前達二人にはとりあえず話しておいた方がいいと思つてな」
「私と権に？」

「今の妖怪の山の現状は話した通りだ。頂上に現れた神と手を組み、我らがその神を信仰する代わりに我らの守護を約束させた。それだけだからまだマシだが頭の硬い馬鹿共は妙な動きを見せておつての」

「つまり？」

「簡潔に話そう、山だけでなく幻想郷の地上を我ら鴉天狗の物としようと企んでおる者達がおる」

「?!」

私は驚愕した。当然文先輩もだ

上の者たちにそのような事を企んでいる輩がいるなんて思いもしなかったのだ

「ちよつと、本当に馬鹿なんじゃないの？八雲紫と博麗の巫女を敵に回すつもり？」

「文。我らのような古き時代から生きる大妖怪の大抵は野望を抱えて生きておった。遙か昔から強き力を持つ者が支配者だ。うまい飯を食い、うまい酒に酔いしれ、好きなように生きれるのは強き種族だけ・・・ワシら鴉天狗もかつてはそうだ、鬼という支配者が現れるまではな」

「しかし、一体誰がそのような事を・・・まさか天魔様が」

「いや、天魔は幻想郷の支配などに興味はない。というより天魔は我らのあり方を変えようと思っている方だ。我が知る限りでは3人の大天狗とその配下達だろう、過去の栄光に今もなお縋っている阿呆どもだ。まだ奴らは我以外にはこの企みに気づいてはいないと思っておる」

「でも、どうやって博麗や八雲紫を倒そうっていうの？普通に考えて無理でしょ」

「神を利用しようと考えているのだろうか。いくら妖怪の賢者や博麗の巫女も信仰を得て力を付けた神と戦うのは骨の折れる事だ・・・だが、どうやって神を奴らとぶつけようと言うのかそれは分からんな」

「やれやれと面倒事を抱え込んだときの様な呆れ顔で溜息を吐く捷様

私はその話を聞いて恐ろしいとしか思えなかった。それに大天狗の中には「あの人」もいる

「……」

「それでその重要な話を聞かせてどうしようと言うんですかお爺様？まさか、止める為に私達を巻き込もうとか考えてるんですか？」

「なに、どうするかはお前達の勝手だ」

「……は？」

先程まで机の上に出ていた煙管や書き物の道具を片付けながら捷様は続けた

「この事を八雲紫、もしくは博麗の巫女に話してもよい。なにも聞かなかったと我関せずでも構わん」

「じゃあ、これを私達に話した意味ってなに?！」

「文。お前は私の大切な孫娘だ、肉親の為に先に知らせてやらねばと思つたまでよ。そして、椀……君は先代の博麗の巫女の息子と友好な関係であつたな」

「ッ!……」

「彼は君、いや君達白狼天狗と似た人狼ではあるが所詮は山の仲間では無い余所者。君はいずれ決めねばなるまい。山の仲間達を取るか、彼ら幻想郷の守護者たちを取るか」

「……」

汗が止まらない

もし、本当にそうなれば八雲紫や博麗の巫女は鴉天狗を、そしてその下に属する我々も許しはしないだろう。必ず幻想郷から排除するために動く

そうだったら私は……小夜と戦えるのか？

「さて、我はそろそろ頭の硬い馬鹿共との会議に行かねばならん。我

の話に付き合ってくれてすまんかったな。従者達には我から伝えておく。屋敷から出たい時は従者の者に言えばよい、ではな」

そう言い残し、捷様は私と文先輩を残して屋敷から出掛けていってしまった

私の頭の中は今もなお混乱し続けている

「権、大丈夫?・・・ではないか」

「・・・」

「一旦ここを出て、あのひきこもり記者の所に行きましょう。ここにいるよりは大分マシだし」

「・・・はい」

妖怪の山麓

「・・・天狗達の動きが慌ただしい・・・やはりなにかあったか?」

妖怪の山から感じる多数の妖気が荒々しく見える

なにかを警戒しているかの様にだ

やはり1度、権の元に行かねばならないか・・・ん?

なにかに気づき、妖気を抑え、息を殺して木々に隠れる小夜。ゆっくりと顔を出し、山から降りて来る一つの影を見つけた

「……誰だ？……あの服装、巫女服の様に見えるが……」

山から降りて来た緑髪の長髪で白と青を基本とした巫女服を身に纏う女性。まず、妖怪の山で1度も会った事のない人物だ

何故、人間や他の妖怪の出入りを基本許さない妖怪の山から降りて来たのだろうか？

妖気が感じられない所から彼女は人間なのは確かだ。どちらかと言えば霊夢と似たような気を感じるがそれ以外にも別の力も感じる、人間だったとしてもなにか特別な力を持った人間だろう
彼女が霊夢が勘で言った幻想入りした人物だろうか？

「博麗神社は向こうの方でしたね。早く用事を終わらせなくては」
バツ

「……」スツ

その場から飛び去って行った緑髪の女性
その口からは確かに博麗神社と言っていた

「……やはり、行ってみるしかないか」

小夜は歩を進め、妖怪の山へと続く山道に足を踏み入れた

58話

博麗神社

「・・・駄目よ。絶対に許さないわ」

「どうしても聞いてはくれないのですか？悪い話ではないと思います
が」

「ここ、博麗神社にて赤い脇巫女と青い脇巫女が一触即発状態で対峙
しているw」

「どうしてこうなったかは数分前に遡るよ」

数分前

「ふあゝ、眠いなゝ」

少し、暇つぶしに博麗神社の周りをぶらぶらと散歩していた僕は歩
き疲れの眠さから神社に戻って来た

途中で野良妖怪に2回くらい殺されたけど問題なく帰ってこれた
よ

「ただいまゝ」

「あら、こんにちは」

「・・・おたく誰？」

「なんか縁側で霊夢さんに膝枕してる見知らぬ女性がいたから声掛
けてみた」

「私はレティ・ホワイトロック。雪女って言えば分かるかしら？」

「・・・ああ、思い出した。冬の異変で大尉が知り合った妖怪だっけ。僕はシュレディングァー、博麗神社に居候してる外から来た大尉の部下です」

「大尉って・・・小夜くんの事？変わった渾名ね」

「渾名って言うか・・・階級名って言ったって分からんか」

とりあえず、眠いけど部屋に行くのもめんどいから縁側で寝ようと

「もしかして寝ちやうの？」

「ちよつとその辺出歩いて疲れたからね」

と、言いながらさつさと寝ようとするけど

「おーい！オオカミ兄ちゃん！今日も来たよー!!」

「・・・タイミング悪」

大尉の下で鍛錬してるあのうるさい氷精が来やがった

こりや、寝れる気がしないよ

「あ！レテイ!!」

「久しぶりチルノちゃん。大ちゃんも」

「はい、レテイさんもお元気そうでなによりです」

「ふふ、ありがとう。でも、霊夢ちゃんが寝てるから静かにね」

人差し指を立てて、口元まで持っていきシューッと静かにするよう促すレテイだが

「今、目が覚めたわ」

「あら、起こしちやった？」

膝枕をされながら呟く、霊夢さん

目が覚めたと言っているが未だにレティの膝から頭をどかそうとはしない

「もう、せつかく兄さんの膝枕堪能してたのに。まあ、レティのも悪くはなかったけど」

「ふふ、ごめんなさい。それにしても霊夢は変わらずお兄ちゃんっ子ね」

「・・・悪かったわね」

ムスツとした顔でレティの膝から離れる霊夢さん

自覚はしてるけど他人に言われるのは嫌いなタイプだな

「で、兄さんはどうしたの?」

「そう言えばおおかみ兄ちゃん居ないね」

「小夜くんは私の頼みで妖怪の山に行ってもらったの。ちょっと様子を見て来て貰うだけだからそんな掛からないと思うけど」

「妖怪の山? 何があったのよ?」

その霊夢さんの間にレティさんは大尉にも話した出来事を全て話した

まあ、簡潔にまとめると寝床が山の近く、それなりにお気に入り場所

でも山の鴉どもの鳴き声で落ち着かないし眠れない

神社に避難、交流がある大尉に山を見てきて欲しい

という訳だ

「ふーん、まあ夏の頃にも萃香が地上に現れて山が騒がしかったって文から聞いたけど、それ以降はほとんど静かだったのにまた騒がしいなんて妙ね」

「お兄さん、大丈夫でしょうか・・・」

「大丈夫だよ大ちゃん! おおかみ兄ちゃんは強いからすぐ帰ってくる

よー！」

「・・・うん、そうだね」

「まあ、遅かったら僕が見に行きますよ。僕なら「どこへでも」行けますから」

「・・・」

おおく霊夢さん、怪しんでる怪しんでる

含みのある言葉で言うとお大抵はあんな感じで不機嫌な表情で見てるからね

やっぱりからかうと面白いね頭のいい人間って

「おお！さすがおおかみ兄ちゃんとおあたいの部下！やるなー！」

「おいチビ、誰がお前の部下だった？」

「なんだどう!!お前だってチビだろうが！」

「うるさい！もう背のびねえーんだよこっちは!!」

「こつちだって好きでチビじゃないよ！それにまだあたいと大ちゃんはせいちよーきってやつなんだよ！慧音先生が言ってたもん！」

「誤魔化しの言葉ってくらいきづけ馬鹿」

「だーれが⑨だー！」

んな事いつてねー

あー、これだから嫌いだ！

頭の悪い自己中心的な馬鹿は！

「喧嘩は良いけどよそでやりなさい」

「よーし！こうなったらおおかみ兄ちゃんとの特訓のせいかを見せてやるー！」

「ぎっけんな！こつちは弾幕使えねえんだよ！」

「もんどどうむようー！」

「ぎゃあああ!!」

ああー、今日は厄日だ、くそ

「あ、あわわ」

「ふふ、楽しそうね」

「楽しくやってそうな感じではないけどね・・・ん?」

僕の心配をすることも無く霊夢さんは鳥居の方を見る

そこには白と青を基本とした巫女服を身にまとい、周りを見渡すかの様にキョロキョロと視線を動かす緑髪の女がいた

本当にここにはあの霖之助以外には女しかこないよ

「初めて見るわね。博麗神社にどういった御用かしら?」

「・・・なるほど、妖怪の集まる神社という話は嘘ではない様ですね」

「・・・嫌みなら聞き慣れてるけどそれを言うためだけに来たなら帰ってくれない」

「いえ、別に嫌みを言いに来た訳ではありません。噂を確かめに来たのどここの巫女に話があつて来ました・・・貴女がこの博麗神社の巫女、博麗霊夢さんでいいんですよね?」

「そうよ。それで私に話つて?」

「その前に自己紹介します。私はつい最近、この幻想郷にやって来ました東風谷早苗と申します。それで話というのはこの博麗神社を私たち、守矢神社に譲ってほしいのです」

「・・・は?」

(なんだこの女、いきなり人の家をよこせつていつてきたぞ)

この幻想郷での大まかな事は聞いている

幻想郷を外の世界、いわゆる僕や大尉がいた現実世界から切り離している結界を生み出し、維持し続けているのは博麗の巫女だ

もし、結界が失われたら幻想郷は消滅するらしい

そしてこの博麗神社自体がその結界を生み出している拠点の一つ、その拠点をよこせつてことは幻想郷を滅ぼすつてことでもあるんだ

けどね

「この神社を譲ってほしい理由は一つ、この博麗神社の信仰を貰うためです」

「信仰?・・・つまり、あんたはうちの参拝客を奪おうつて訳?」

「砕けた言い方ですがそうだと云っても過言ではありません。ただ勘違いして欲しくないのは霊夢さん、あなたの住処を失わせようとする訳ではありません。ただ、この博麗神社を私たちが信仰する神の神社にしたいのです」

「・・・なるほど、言いたい事は分かったわ。あんたに何があつたかは知らないけど、この幻想郷に来てまで信仰を得ないといけない余程の理由があるみたいね」

「では「だけど」ツ・・・」

「アンタに渡すつもりは無いわ。確かにここには祀る神さまは居ない、さつき言ったみたいに妖怪神社とか言われたりする・・・でも、そんな博麗神社にも参拝しに来てくれる人たちは沢山いるの。それは母さんがいることもあるけど、博麗の巫女を受け継いだからには母さんが築きあげた今の博麗神社を、みすみす来たばかりのあんたにくれてやるわけには行かないのよ」スッ!

霊夢さんはお祓い棒の先を東風谷早苗に向けて言い放った

その目は嘘偽りが無いことが僕でもハッキリわかる

「そうですか。でもこちらでも諦めはしません・・・1度妖怪の山に見に来てください。最後の答えはそれからでも遅くはないかと」

「・・・いいわよ。変えるつもりはないけど見せて貰おうじゃない、妖怪の山にあんたがそこまで強く入られる理由を」

「はい。では、先に行っています」

早苗はそれだけを言い残して博麗神社を後にした

霊夢さんは見送った後にふうー、と息を吐く

「さて、兄さんはいないけどお昼にしましょう。それから見に行ってみようじゃない。母さんには置き手紙書いてこ」

「ねー霊夢ちゃん」

「何よレテイ?」

中に取り、食事の用意をする霊夢さん

そんな霊夢の隣に並ぶ様にレテイさんが会話に加わる

「私も一緒に行ってもいい?」

「別に来なくてもいいわよ。あの早苗って奴の強気でいる理由が知りたいだけだし」

「ほら、お兄ちゃんを妖怪の山に行かせちゃって膝枕邪魔しちゃったし、それに私も博麗神社が変わっちゃうのは嫌、今の方が楽しいもの♪」

「…好きにすれば。それと出来たら手伝って、レテイたちの分も作ってあげるから」

「うん♪任せて」

そんな感じで昼飯を作ってる2人をほつといて僕は今度こそ昼寝を…

「おいシュレディンガー!アタイが弾幕おしえてやるからおきろ!お前をきたえてやる!!」

「シュレディンガー、暇なら手伝いなさいよ」

「…ハア」

猫は自由気ままなのに、全然自由になれないよここは

そんな感じで氷漬けが嫌だから霊夢さんの手伝いをするんですけど
ちゃんちゃん

59話

山に入ってから数分

「・・・九天の滝か」

そこは妖怪の山の麓にある大きな滝

ここに来るのは幼少時の文の誘拐から、椀に世話を任された時に案内された以来だ

まだ日は天高く登ったばかり、そろそろ昼時か

「少し、休むか・・・」

背負っていた剣と盾をおき、両手で水をすくい上げそれを口にする
冷たい滝の水が乾いた喉を潤す感覚はなんとも心地がいい

「・・・」

滝の水が落ちる更に上、妖怪の山の頂上辺りを見上げる小夜

山から感じる鴉天狗と白狼天狗、そして山に住み着く多くの妖怪達の妖気が荒々しく感じる

本当に何が起きていると言うのだろうか

そんな事を考えていた時だった

バシヤン！

「・・・？」

「あ、やっぱり君だったか小夜くん」

「・・・にとり」

突如、湖の水が跳ね上がった瞬間、ウェーブのかかった外ハネが特

徹的な青髪を、赤い珠がいくつも付いた数珠のようなアクセサリーでツインテ？にし、緑のキヤスケツトを被った女性が現れた

彼女の名は河城にとり、この妖怪の山に住まう河童の1人で椀の親友だ

「いやあ、久々に会ったけど椀の言う通りほんとに大きくなったね。ていうかなりすぎ？最初にあった頃なんて私より背低かったのに」

「・・・久しぶり、挨拶に行けなくてすまない」

「なーに言ってるの。博麗なら仕方ないとき、新聞とかでも知ったけど随分異変解決で大変な目にあってるみたいじゃないか」

「・・・」

確かに紅霧異変ではわざと捕まる為に負けたり、冬の異変では実際に死にかけたりと、にとりの言う通り大変な目にあってはいるな

「私としてはホントにたまーにでもいいから顔を出す程度で構わないよ」

「・・・」コクッ

「で、今日はどうしたんだい？椀なら今日は来てないけど、あ、もしかして修理か製造の依頼？それとも改造依頼かい!？」

修理、改造という言葉が出てから凄く目を耀かせるにとり

幻想郷に住まう河童は皆、何故か技術に対する関心が非常に高く、外の世界から流れついた機械類をバラしていじったり、製造・修理・改造を得意としているいわゆる幻想郷のエンジニア妖怪だ

それはにとりも例外ではない

「・・・これ、直せるか？」スッ

そう言っただけオーバーコートの両腰に付いているホルダーから銃身が斬られた愛銃、モーゼルM712をとりに見せる

実はこの九天の滝に立ち寄ったはにとりに会ってこの銃を直せるかどうか聞きに来るためなのだ

「む、この形状、外の世界で言う銃ってやつだね。火縄銃とかちよつとこれと似てる物は幾つかいじった事はあるから大丈夫だけど、どこを直せばいいの？」

「・・・」 スツ

更に取り出しのは斬り落とされた銃身の部分だ

「・・・くつつける事は、可能か？」

「うわ、随分長い銃身だね。よくこんなのを使ってたね小夜くんは・・・うーん、ただくつつけるってだけなら簡単だけど問題は銃身の内部なんだよねー」

にとりが指摘した銃身の内部とはライフリングの事だろう

ライフリングとは、銃身、バレル内に施された螺旋状の溝の事。この螺旋状の浅い溝で銃身内で加速される弾丸に旋回運動を与え、ジャイロ効果により弾軸の安定を図り直進性を高める事ができる

「これをなんの出っ張りもなく、くつつけるとなると相当な腕が無いとできない。ていうか、無理だろうしそもそもこのタイプって銃身だけを取り外しとかできないからなく・・・一番の解決策はまた1から銃を作り上げるか、似た物が無縁塚で運よく弾もセットで見つけるしかないかな」

「そうか・・・すまない」

「それはごっちのセリフだよ。何も力になれなくてごめんね」

「・・・」 フルフル

首を左右に振りながら、ホルダーにしまいそろそろ行こうかと盾を背負い、剣を片手に持つ小夜

「お、もう行くのかい？」

「ああ・・・山にちよつと用がある」

「そうか。でも、気をつけてよ。なんだか知らないけど最近上の方が慌ただしくつてさ」

「そうか・・・ッ！」

「え？ひゅい!？」

にとりからの警告を聞いた次の瞬間、四方の木々から光の玉が迫る。弾幕だ

にとりを湖に押し落とし、蹴りで弾幕を相殺する

今の小夜は下級から中級程度の妖怪なら弾幕を蹴りで相殺する事ができる

「・・・囲まれたか」

周りの木々の上や茂みから武装した哨戒白狼天狗達が姿を現した
全員が皆、殺気を放っている

「くくく、ついに来たな博麗小夜く♪」

「・・・？」

声がる方へ視線を向けるとそこには背に二という文字を背負う
白狼天狗が剣を片手に見下ろしていた

(・・・どこかで見た事ある妖気だ。それに多少は他の白狼天狗より強いな)

「お前が来るのをずっと待ってたぜ小夜く。出来れば今すぐ貴様をこの剣の錆にしてやりたいが上から命令があるからとりあえず警告しに来てやったぜ」

「・・・警告？」

「そうだ。これよりこの妖怪の山にはどんな種族も立ち入りを禁ずるようになった、それはお前たち博麗の者も例外じゃあないんだよ。だから今すぐこの山から出ていけば命は取らずに見逃してやる。断ればどうなるか・・・分かるよな？」

周りに立つ配下の白狼天狗達が各々の獲物に手をつけ、臨戦態勢をとっていた

やはり、何かがあるのは確かなようだ

「やはり、博麗の者が来たか夜宵よ」

「ん？ツ!?ここ、これはこれは、大天狗様。自らお越しになる程の事ではないかと」

「よい、大天狗であろうと配下だけに全てを押し付けるつもりは私には無いからな」

「・・・権？」

夜宵という白狼天狗が膝を付き、ひれ伏すように頭を下げる。その視線の先に現れたのは鋭い眼光を放つ権に似た“白狼天狗”だった

「お初お目にかかる博麗の狼よ。私は大天狗の位を授かりし白狼天狗

犬走 楓（いぬばしり かえで）だ」

60話

「犬走……楓？」

その白狼天狗の口から犬走と確かに聞いた

その名を聞く限り、椀との関係者であるのは確かだが椀に兄弟姉妹は居ないはず

「同じ名を聞いた事はある？ 犬走椀、あの白狼天狗は私の実の娘だ」

「……椀の母親」

「そうだ。博麗の狼よ、ここより先はいかなる者の侵入も許されぬ。即刻山を降り、自身の領地に戻れ」

「……椀と話がしたい」

「それは出来ぬ。貴様は娘と多くの同族たちに信頼を得ているが所詮は山の外から来た部外者だ……もう一度言う、すぐにこの山を降りよ」

「……」

やはり、予感的中した。椀の親の事はあまり聞いた事は無いがまさか母親が大天狗の1人とは

白狼天狗でありながらも大天狗の名を与えられていると言うことはそれだけの實力を持っているという事。だが、こちらも退けない理由がある

「……」 スツ、チャキ！

剣を鞘から引き抜き、戦闘態勢をとる小夜

「……それが答えか。良かろう、實力を持って排除する」 スツ

背に背負った鞘に納められた剣を引き抜こうとする楓

「お待ちください、大天狗様」

「・・・なんだ、夜宵よ?」

しかし、夜宵がこれを止め楓は跪く夜宵に視線を落とす

「ここはこの夜宵におまかせ下さい。私とて大天狗様程とはいきませぬがこの二番隊を預かる身、あの者は私めが仕留めて見せます」

「・・・良かろう。やって見せよ」

「はっ!」

引き抜こうとした剣を鞘に戻し、楓が2歩後に下がってから夜宵は剣を引き抜いて小夜に向かって見おろしていた崖から飛び降りた

「さあ、死ねえ!」

「・・・ッ」

ガギンツ!!

2人の剣がぶつかりあい、火花が飛び散る

1歩下がって態勢を立て直してから夜宵は更に剣を振るう

小夜はその猛攻を的確に剣と盾で防ぎ、時には回避する

「ふははっ!どうした!?ビビって攻めにでれねえか小夜!」

「・・・」

夜宵の挑発紛いの台詞にも特に動じることもなく、小夜は守りに徹した

それは別に夜宵の猛攻が激しく反撃ができないという訳ではない。観察しているのだ、夜宵の動きをそして剣を振るう太刀筋を

(・・・大雑把だ。力はあっても剣はなんの考えもなく力任せに振るっているだけ・・・これでは妖夢どころか美鈴に剣技を教わっているチルノにも劣る)

「ハハハ！あの時、恥をかかせた事を後悔して死にやがれ!!博麗小夜ー!!」

大振りに上段から振り下ろされる剣

「・・・」ガツ!

「なっ!？」

「・・・」ブンツ!

「ふおツ!!」

バキツ!ドゴツーーーーーンツツ!!

振り下ろされた剣を手に持つ柄の部分蹴り飛ばし、隙を見せた所を妖気を溜めた反対側の脚で胴体に蹴りを入れ岩壁に叩き込んだ

「がっ・・・あ」ガラガラ、ドサツ

「・・・お前が誰だが知らないが、その程度じゃ俺には勝てない」

振り返る事もなく、そう呟いた小夜は次に犬走楓の方に目をやる

「流石は博麗か。夜宵もそれなりに強い白狼天狗だが、これでは一番隊の者も勝てるか怪しいところだな・・・では次は私が相手だ」

鋭い眼光のまま、鞘から剣を引き抜きついに大天狗は地を蹴った
それと同時に小夜も地を蹴り、犬走楓に向かっていった

ガギンツ!!

互いにぶつかり合う剣。楓は自身の一撃を無表情で受け止めた小夜に対し「ほう・・・」と呟き関心する

小夜は特に思う事も無く、既に次の行動に出ていた

左手に持つ盾を殴る様に振るう。その行動も楓は見切っており盾で防ぎ反撃する

どちらも1歩も引かぬ激しい攻防。その戦闘の様子は小夜を囲んでいた夜宵の部下たちも目を瞠るばかりだった

それは大天狗の称号を与えられた白狼天狗の戦いを間近で見ているからか、それともその大天狗と小夜が互角に戦えているからか

(強い・・・これが大天狗の力か・・・だが、こんな所で止まっていられない)

ダツ!

構えも無く、一気に楓に向かって突っ込む小夜

「構えも無しに、諦めたか?・・・もしそうなら、少しがっかりだぞ」

上段に構え、迎え撃つ準備に入った楓。そして妖気を込めた一撃をそのまま小夜に向けて振り下ろす

「・・・」タツ

「!、なに?!」

上段から振り下ろされた剣の切っ先を当たらないギリギリの所でバックステップで避ける小夜

そしてそのまま左手に持つ盾を相手に向かって投げつける

「くっ!」

突然のことに思考が追いつけず、すぐに盾で防ぐ楓。その一瞬の間、彼女の視界は盾によって遮った

「・・・」スッ

「ッ！」

次に彼女が見たのは右足を高く上げる小夜の姿だった

(くる！)

「・・・」ブンッ！

真っ直ぐに上がった右足を小夜は容赦なく犬走楓に振り下ろした
楓は盾を捨てその場から離れる

ガゴンッ!!!

盾は砕かれ、振り下ろされた右踵がついた地面が陥没し小さなクレーターを作り上げた

「じ、地面が・・・」

「なんて力なんだ」

「あの楓様とやりあうなんて」

「これが博麗の守護者の力・・・」

「・・・」スッ

周りがざわめく中、距離をとった犬走楓に視線を戻す小夜

「・・・ふふ」

「？」

「ふははははははー！」

愉快そうに笑い声をあげる楓

それは相手を侮辱してる訳でも自棄になってもない

「ふふふ、なるほど。これ程とは思わなかったぞ、これは評価を改める必要があるな。見事だ博麗小夜、まさに博麗の巫女の守護者にふさわしい力だ・・・なればこそ」チャキ

「・・・ッ」

犬走楓は剣を背にある鞘に戻し、両腰に備わったまさしく日本刀その物を思わせる刀2本を引き抜き、クロスさせる様に合わせる

「私も見せよう。大天狗の名に恥じぬ為に、全力を！」

その言葉と共に彼女の両刃に一陣の風が走った

その頃

「お邪魔するわよ引きこもり記者さーん」

「毎度毎度言うけどさ、勝手に家を休憩所として使わないでくれる？」

イライラした様子で携帯端末の様な物を片手に記事を書く鴉天狗の少女

彼女は姫海棠はたて

射命丸文と同じ鴉天狗で花果子念報という新聞の記者だ

「いいじゃないの。ていうか少しは出歩いた方がいいわよ、いつまでも念写に頼った記事なんて売れないわよ?」

「うっさいわよ。アンタのゴシック記事よりはだいぶマシよ」

「あやや。そんな記事に負けてる花果子念報なんて書いてる記者さんはどこの誰でしょうねえ?」

「こ、こいつ」

「オー、コワイコワイ」

そんな2人の鴉天狗のやり取りを気にすることもなく俯いて考えている犬走権

「で、権は一体どうしたのよ?」

「まあ、ちよつとあつてね・・・実はねえ」

「?」

文は、はたての耳元にひそひそと先程まで自身の祖父から聞いた内容を丸々話した

「は?ちよつと待つてよ!それマジなの?!」

「信じたくはありませんが私のお爺様は冗談は言いますが、くだらない嘘は言わないわ」

「・・・ちよつとまつて、これを聞かされた私つて」

「・・・」ニヤリ

「アンタ巻き込んだわね!?!」

「さ、一緒にどうするか考えましようか」

「ふざけんじやないわよ!」

理不尽なことに巻き込まれたはたては文の両肩を掴んで前後と揺

さぶるが文は涼しい顔でふふふと笑うだけであった

そんなやりとりをしてると一人の白狼天狗がはたての家に入り込んできた

「突然の訪問すいません！」

「今度は何よ?!」

「申し訳ありません！こちらに権隊長がいるとお聞きしまして！」

「む、私は此処だ。なにがあつた？」

「た、隊長！妖怪の山麓にて博麗の者が大天狗、犬走楓様と交戦中との
報告が！」

「!!」

その報告を聞き、ついに権の表情は絶望その物となった

「あー、恐れていた事が・・・くっ！」

権は立て掛けた剣と盾を持ち、はたての家を飛び出した

61話

九天の滝

(なんだ?・・・一瞬、武器になにか・・・?)

一刀から二刀に変わった犬走楓は先程よりも強力な妖気を纏い、小夜に対峙する

「ゆくぞ、簡単に終わってくれるな」

「・・・」

バツ!

両者が駆け出し、互いに獲物を相手に向かって振るう
だが、さきに異変が起きたのは小夜の方だった

パパシユ!!

「ッ!」

オーバーコートの上肩、右脚の布地が突如切れ、右の頬に薄い切り傷が出来る

危険を察知し、剣を振るのを止めバックステップに入った

「気づいたか、だがもう遅い!」ブンッ!

二刀をクロスを描く様に振り下ろすがその刃よりも小夜のバックステップが早く刃は届かない・・・筈だった

「ッ!?・・・」

その一瞬、小夜の目の前が赤く染まった

胴体に出来たクロスの傷跡

体中に走る無数の斬り傷

全ての傷跡から飛び散る鮮血の雨

「ぐばっ・・・」グラッ

一瞬の出来事に動揺（顔には出てない）する小夜。剣を地面に刺して杖代わりにしふらつく体を抑える

口からも血を吐き出す。その様子から外部だけで無く内部にもダメージを受けたようだ、幸いな事に目や喉といった急所などには傷は出来ていない

それは相手が手を抜いたからか、それとも偶然なのか、今の小夜にはそれを考える程の余裕も無い

「我が一振りは暴風が如し、触れるものを容赦無く斬り刻む風の刃だ」
「・・・」グッ

「ほう、それだけ傷つきながらもなお戦う意思を手放さぬとはな見事だ・・・次で決める」

もう一度構えを取り、刃に風を纏わせる楓。だが・・・

ドガッ！

「ツ・・・」ドサッ

「これはどういうつもりだ？・・・犬走権よ」

「・・・」

倒れる小夜の背後に現れた楓の実の娘、犬走権

小夜の背後に現れた瞬間、首後に手刀を当て気絶させた。先程の攻撃にてほぼ満身創痍の状態だった故に難なく背後を取れたのだ

「この妖怪の山麓は我ら八番隊から十番隊が守るという役目、それを果たしただけです」

「・・・それで？その者はお前が排除するのか」

「いえ、博麗の守護者には利用価値はいくらかあります。捕虜として生かすつもりです」

「天魔様の命を忘れたか？山に入ろうとするものはいかなる存在であろうが排除せねばならない」

「ただ殺すだけならいつでも出来ましょう。ですが、利用出来るものは最大限に使い、不要になった時に排除すればよいと私は思います。この者に関しての責任は私が全て背負います」

「・・・」 スツ

椀の答えを聞き納得したように目を閉じ、背中を向ける楓

バシユ!!

「ぐっ!!」

次の瞬間、小夜より少ないが身体中に無数の斬り傷を負う椀斬ったのだ、実の娘であろうが関係無く

「命を背いた罰だ。その者は貴様に任すぞ」

「くっ・・・は、はい」

刀を鞘に納め、その場を去る犬走楓

小夜を囲んでいた二番隊の哨戒白狼天狗たちもやられた夜宵を連れ、山の上層に戻っていった

「権！」

小夜に湖に落とされ、ずっと様子を見ていたにとりが膝をつく権に近寄った

「に、にとり。無事だったのね」

「ひ、ひどいよ。実の娘にこんな……」

「いいんです……私が、小夜を助ける為に天魔様の命を背くような行いをした当然の結果、です……思っても無いようなことを言うのは流石に大変です、ましてや相手が母では尚更というもの」

「とりあえず傷の手当をしないと……これからどうすんだい権？」

「とりあえず、しばらく小夜は捕虜として牢に入ってもらうしかありません……なんとかして博麗の巫女に伝えなければ」

「権さま！」

「ん、九番隊の……何があった？」

「ハッ！先程、例の神の使いである東風谷早苗から博麗の巫女が此処に来ると！十から八番隊の哨戒白狼天狗並びに麓の警備当たっている鴉天狗と河童は全員集合せよと！」

「ッ!？」

「そ、そんな、博麗の巫女が!?!やばいよ！小夜くんがこんな状態じゃあどんな言い訳を言ったって聞いてくれないよ！」ガクガクブルブル（い、今博麗の巫女が山にすれば捷さまが言っていた事になりかねない！なんとしても山から追い返さないと……小夜、ごめんなさい。貴方の命を使わせて貰うわ）

「にとり、手伝って。小夜を運ぶわ」

「え、一体どこに？」

権は少し黙ってから決心したように口を開いた

「……人質にするわ。博麗の巫女を一度、山から追い返す為に」

62話

妖怪の山 麓近く

「やつと着いたわね、あまりここには来ないけど」

夢
片手に持つお祓い棒を肩に添える様に置き、妖怪の山を見上げる霊

夢
その後には霊夢について行くと行ったレテイにチルノ、大妖精、シユレディングーも同行している

「散歩中に何度か見たことはあるけど間近で見るとやつぱでかいね
〜」

「レテイはともかくあんた達まで付いてこなくても良かったのよ？」

「大丈夫大丈夫！最強のあたがいるんだからなんの問題もなし!!」

「それにレテイさんが困っている原因も気になりますし、お兄さんの事も大丈夫だとは思いますが……やはり心配です」

「ふふ、ありがとうチルノちゃん、大ちゃん」

「……まあ、いいけど足でまといにはならないでね。助けてあげれるかは分からないんだから」

夢
ふう、とため息をしながら早速妖怪の山の中へと足を踏み入れる霊

シユレディングーたちも霊夢に続く

「そう言えば、飛んで行かないの？その方が楽じゃない？」

「妖怪の山での規則みたいなものよ。ただでさえ縄張り意識が強い鴉天狗たちの支配下の山で飛んでたら縄張り内に入った侵入者として見なされて襲いかかってくるのよ問答無用でね。だから用がある人はこうやって山道を歩かないと駄目なの」

「うわあ、めんどくさ」

「まあ、母さんの話では昔よりは大分丸くはなっただけで言っただけね。昔がどれだけ酷かったか私には分からないけど、たぶんどんな理由があるにしても入って来た者は容赦無く襲ってたのかもしれないわね」（まあ、大方霊香さんかあのスキマ女にやられて大人しくならざるおえなかったんじゃないかな）

そんな雑談をしながら山道を歩く霊夢たち

「ついに来ましたね霊夢さん」

「・・・ええ、来てやったわよ」

しばらくして霊夢たちの前に現れたのは東風谷早苗
表情を変えることなく対峙し睨み合う2人に最初に口を開いたのは早苗だった

「先ほどの話、考え直しては貰えたでしょうか？」

「考え直したならこんな態度で此処にくると思う？」

「・・・そうですか。では見せましょう」

ザツ!!

「!!」

早苗はお祓い棒を持つ手を掲げる様に上げた瞬間、彼女の背後から複数の妖怪たちが現れた

この妖怪の山を支配する鴉天狗

その配下である白狼天狗や河童たち

更にその中に妖怪とは違う神性の気を放つ2人の少女の姿もあった

「これが私たちの信仰の証であり、力です」

「妖怪の山を支配する鴉天狗に幻想郷の秋を司る神まで味方にしたとでもいうの……」

「どうですか霊夢さん、これで少しは考えを改めて貰えたでしょうか？」

「……確かに妖怪や別の神様まであなたが信仰する神の下についてるってのは驚いたわ。それだけあなたが堂々としてられる理由がよく分かったわ」

「では「でもね」ツ……」

「なんども言うけど博麗神社はこの幻想郷には無くてはならないものなのよ。例え参拝客が居なくても、信仰する神を祀ってなくとも簡単にくれてやる訳にはいかないのよ」

鋭い視線を早苗へと向ける霊夢

その目からは一切譲るつもりはないという意志が早苗に伝わり苦い表情を見せる

「では、すぐにでもこの山から出ていってもらえますか博麗の巫女」

「え？」

「？、あなたは……」

そんな硬直状態の中で口を開く1人の白狼天狗

その見た目はあまりに酷く、手や腕だけでなく顔にまで巻かれた包帯にそれに滲みついた血の赤が痛々しく見えた

「今や、この妖怪の山では人間はもちろん他所の妖怪も近づかせぬようにと我らの主である天魔様の命がある。それは博麗の巫女として例外では無い」

「どうしてあなたがそんな姿かはさておき、従ってるだけのアんたに言われる筋合いは無いわ権」

「早々に立ち去るなら我らは何もしない、警告し去るように促せとの命だ」

「嫌だと言ったら？」

「・・・」スツ、ブンス!

懐から何かを手に持ちそれを霊夢たちの前に投げ落とす

「・・・ツ!!」

地面に落ちたそれを見た瞬間、霊夢の表情は凍りついた
後で見えていたレティたちも近づいて落ちた物を見た

それは深い緑色の布の上にベツタリと赤い液体がついた帽子
霊夢たちはその帽子に見覚えがあった

「こ、これって、お、お兄さんの・・・ツ!」

「おおかみ兄ちゃんの帽子?」

「・・・」

「・・・間違い無いね。大尉のだ」

シユレディンガーがその帽子を手に持ち、答える

これが自分の上司で会った大尉、博麗小夜が使っていた帽子であると

「その被り物をしていた妖怪の男は我らの忠告を無視した。故に〃排除〃した」

「ど、どういう事ですかこれは!?!」

「どう?先ほど話した通りです守矢の巫女」

「そんな事を聞いているんじゃないです!何故〃殺す〃必要があるんですか?!」

「元よりこの妖怪の山は古くから部外者を寄せ付けぬようにと決まりがある、前までは先代の博麗の巫女の介入があり無闇に部外者を排除しないようにしてきましたがあなた方、外から来た者たちによって状

況が変わったのです」

「では、こうなったのは私たちの性と?!」

「全てとは言いませんが・・・無関係では無いかと」

ベキツ!

そんなやり取りの中、不穏な音と共に皆がその音のした方向を向く
そこには溢れる程に満ちた霊気と、黒い殺気を纏う霊夢の姿

左手には落ちた帽子を掴み、右手に持っていたお祓い棒は折れてお
りその手からは血がたれ落ちる

「・・・よく分かった。あんたたちからの宣戦布告、確かに受け取った
わ」

ゆっくりと立ち上がり、下ろしていた顔をゆっくりと上げて瞑った
目を開き口を開く

「覚悟は出来てるかしら?」

「「「ツ!!」」」」

その言葉と共に霊気と殺気は更に高まり、1歩前に足を運ぶ

その1歩1歩足を踏み入れる事に鴉天狗たちは恐れ、1歩ずつ退いていく。権1人を除いて

「霊夢ちゃん、駄目」

そんな霊夢の前に立ち、彼女の両肩を掴み止めに入ったのはレティだった

「どいてレティ・・・あいつら、殺せない」

「だめよ霊夢ちゃん、相手の口車に乗っちゃ駄目」

「どうして? 兄さんを殺したあいつらをなんで生かす必要があるの?」

「・・・じゃあ、どうして霊夢ちゃんはお兄さんが殺されたと思うの?」

「ツ!これを見て、あいつが言った言葉が何よりの証拠じゃない!!」

「うん、そうね霊夢ちゃん。でも、私たちに見せたのは血のついたお兄さんの帽子よ? 殺して見せしめに出すならこんなものより小夜くん遺体の方がもっと信用性があるじゃない?」

「何が言いたいのよ!? 昔みたいに訳分らない回りくどい言い方しないでハッキリいいなさいよ!!」

「・・・」スツ

「ツ!・・・」

レティは霊夢を両腕で抱きしめ、そのまま小さな声で話す

『霊夢ちゃん、黙ってよく聞いて。小夜くんはまだ生きてるわ』

『ツ!』

『怒りに身を任せずに集中してみて、小夜くんの強い妖気はまだ山のどこかから感じるわ。何が狙いかは知らないけどあの権ちゃんは嘘をついてまで1度あなたに退いて欲しいのよ』

『・・・でも』

『戦うにしても、お兄さんを助けるにしても今私たちだけじゃ駄目。私だって怒ってるわ、霊夢ちゃんをこんな悲しませたあの妖怪たちを・・・でも、今は退いて相手が大人数ならこっちも助けてくれる人たちを集めましょ、お兄さんを助ける為にも』

『・・・グスツ』コクツ

小さく頷き、汚れた顔をゴシゴシと腕で拭き取り、山から背をむける霊夢

「・・・帰るわよ」

「うん。分かったわ」

「お、おう」

「は、はい」

「はーい」

その言葉に皆が頷き、山から離れていく霊夢たち

しかし、霊夢は背をむけたまま視線のみを早苗たちに向けて言った

「次来た時は・・・本当に覚悟しときなさい」

それだけを言い残して霊夢たちは山から去っていった

早苗や妖怪たちはなにも言えず、その姿をただ見送るしか出来なかった

63話

博麗神社

「やっぱり、あーは言っちゃったけど私はすぐにもぶっ飛ばしに行きたい気分だわ」

「ほらほら、いつもの霊夢ちゃんらしく冷静に。リラックスリラックス」

居間で霊夢はイライラしながら折ってしまったお祓い棒を修理していた

そんな霊夢を落ち着かせるようにレティは頭を優しくポンポン叩いたり撫でたりする

「まあまあ、霊夢さん。叩くにしても戦力は欲しいでしょ？なら、まずは味方を増やすことからですよ」

居間で横たわるシュレインガーは笑みを見せながら言った

結局、レティの言葉と犬走権を信じて妖怪の山から退き1度博麗神社へ帰ってきた霊夢たち

それからどうするかをずっと霊夢はレティと考えていた。母である霊香は八雲紫を探しに今日は朝からいない

仮に帰ってきてても博麗の巫女を辞めた霊香からは「霊夢の好きなようにしてみる」つと言われるだろうからと霊夢自身は母の手を借りないように自分でどうにかしようと考えていた

そこでシュレインガーが突如提案したのが戦力を集めて妖怪の山を叩きながら博麗小夜を救出しようという提案だった

シュレインガー曰く、大尉もとい博麗小夜は絶対殺されはしない1度大ちゃんは何ぞかと聞いた

シュレインガーは「大尉は今、博麗だからさ」と答えた

博麗の巫女は幻想郷のパワーバランスであり、幻想郷の結界の一端を担っている重要な存在だ

そんな博麗の巫女と同じ姓を持つ大尉

もし捕虜にせず排除しそれがバレた時、博麗の巫女を敵に回す

そしてそれは幻想郷全てを敵に回すことと同じ

故に彼らは1度捕らえて知らんぷりをしてしばらくは時間を稼ぐ事が出来る手段を打った

しかし、その手も犬走椋によって破られてしまった

博麗小夜が捕虜か排除されたという事を告げてくれた故に博麗の巫女から妖怪の山を叩く口実を作り出す事が出来た

だがもし、犬走椋の件に対して気づく者が現れば当然口封じの為に排除か隔離されてしまう危険がある。そうなれば自分たちは被害者だと相手側はほざけるようにはなれるだろう

故に目的は三つ

1. 博麗小夜の救出
2. 証言者である犬走椋の確保（抵抗したらぶっ叩いてから確保）
3. 妖怪の山の戦力を疲弊させとく

ぶっちやけ3つ目はオマケだ

1と2を成功させれば良い

そしてその目的を達成させるために必要なのがこちらの戦力だ

今の人数で攻めに行ってもまず勝てないし、救出と確保も出来ないならば勝機を上げるために味方を増やそうと言うのがシユレディンガーの思惑だ

話を終えた後、チルノと大ちゃんはさっそく戦力を増やしにまずルーミア姉に妖怪の山であった事を話に行ってもらった。信憑性を確かな物にするために大尉の血で汚れた帽子（少し洗った）も渡していた

「ほとんど面倒臭がりなあんたが随分凄い事を考えついたものね。さすがの私もそこまでの考えに至れないわ」

「まあ、妖怪と人間の間では無闇な殺生をしちやあいけないなんて

甘い考えがあるからね。平和ボケした人間やぬるま湯に浸かりすぎた妖怪どもじゃあまず考えないだろうからね」

「随分楽しそうね。： あんたは争い事や戦いなんて面倒だから嫌いとか言うよな奴だと思ってた、まずあんな提案をするとは思ってなかったわ」

「いや、あつてるよ。争いや戦いなんて面倒臭いし、俺が戦う意味が分からないからね、でもそんな面倒な行動や行為をする馬鹿共を高めから見物するのは好きだね」

「… 褒められた趣味じゃないわね」 キュ

そんな霊夢の言葉も、そらどうもと適当に返すシユレディンガー

そんな2人を見ながらレティは小さく微笑むだけだった

「よし、じゃあ早速あんたの言う通りこっちの味方を増やしに行こうじゃない」

「いつてらっしや〜い」

パシンッ！

「あんたも行くのよ提案者」

横たわりながら適当に返事をしたシユレディンガーにさつき直したばつかのお祓い棒で引っぱたく霊夢

それでも嫌だと言うシユレディンガーの足を掴み、霊夢はシユレディンガーを引き摺りながらレティと共にまずは紅魔館を目指した

その頃
紅魔館

レミリアの部屋

「どうだった咲夜？」

椅子に座り、紅茶の入ったティーカップを片手に少し離れた所で控えている咲夜は話すことを一瞬拒もうとするがゆつくりと口を開いた

「捜索の結果は… 申し訳ございません。地底、冥界を除く幻想郷の行ける場所に全て行きましたがどこにも…」
「そう…」

口につけたティーカップを置くレミリア

「ありがとう咲夜。また、なにかあれば報告に来てちょうだい」
「… 承知いたしました」

スツと部屋から消える咲夜

部屋に残されたレミリアはしばらくの沈黙の後、握りしめた左手を上げてから一気に振り下ろしテーブルを粉碎した

そして怒りを込めながらも心配するよう声音で彼女は呟いた

「一体誰が… どこへ行ってしまったのフラン」

64話

人里

「分かっただけだけど人里は無理だったわね。まあ、慧音は人里守護の役目がある訳だし、妹紅はその手伝いだしね」

「阿求ちゃんと小鈴ちゃんに関しては何がねえ〜」

博麗神社を後にし、シユレディングアの作戦通りに霊夢達は対妖怪の山勢力となる味方を集めに動いていた

最初に訪れたのは人里だ。慧音とたまたま居た妹紅に話をしたが案の定慧音は人里の守りを優先し、妹紅も慧音のサポートの為に不参加となった

阿求と小鈴に関しては、知はあれど戦える力はほぼ皆無と言ってもいい

「まあ、来れないなら仕方ないわ。魔法の森にはレティが行ったし、私たちは紅魔館に向かいましょう」

腕組みを解き、紅魔館へと人里から離れようとする

「そのあんたたち、ちょっと待った」

「？」

「ほえ？」

建物と建物の間から壁を背に2人を呼び止めた声の主は影のなかから手を出してクイツクイツと二人に来るように促す

二人はとりあえずついて行くが霊夢はお祓い棒を持つ右手に力を込め、警戒態勢に入っていた

「急に呼び止めてすまない。あまり人前には出ないからな」

姿を見せたのは赤いマントを身に着け、マフラーのような部分で口が隠しており、ショートカットにリボンという姿の少女だ

一見は只の少女のようだが霊夢は彼女から人には無い物を僅かに感じとった

「・・・あなた、妖怪ね？」

「ふっ、流石は博麗の巫女か。結構抑えてた方なんだがな」

そう言った瞬間、彼女の頭が急に上昇し首から下の体から離れた

「私は赤蛮奇。ろくろ首の妖怪さ、今は人里で人間になりすましてなりを潜めてるけどね」

「だから私たちをこんな物陰にまで呼んだ訳ね。それでここまで呼んだからにはなにかあるんでしょうね」

まどろっこしいのは嫌いな霊夢は率直に赤蛮奇に問い出す。赤蛮奇は頭を元の位置に戻してから話を戻した

「なに、話は至極簡単さ。さつき寺子屋の教師と竹林の案内人が博麗小夜の事を話してたのを聞いてな、何でも妖怪の山の天狗たちを倒すのに味方を集めてるそうじゃないか？」

「ええ、そうよ」

「その話にも乗らせて欲しい、博麗に借りはないけど小夜個人には恩があるから。それに小夜と関わりがある草の根妖怪の二人にも私から声を掛けてやる、所属はしてないが多少の交流があるしね」

「お、いいじゃないですか。数が増えるのは素晴らしいですよ」

「・・・いいわ。こっちも急いで集めなきゃだからそっちは任せたわ、これなら博麗神社で待っててもらおうと助かるわ」

「あー。分かったよ、じゃあ私は行くでしょう邪魔をしたな」

そういつて手を振りながらその場から離れていく赤蛮奇
霊夢もシュレディングーの手を掴み紅魔館へまっすぐ向かって飛
んでいった

その頃

妖怪の山

「遅かったではないか射命丸捷よ。会議は既に始まっておるのだぞ
？」

張りつめた空気の中、5人の大天狗たちが座って話し合っているか
のようにしていた

その中で一人は会議中で居眠りしており、もう一人は会議の場にも
関わらず酒を口にして笑っていた。真剣に会議をしていたのは残る
3名だけだった

「ああ、使いの者に少し頼み事を伝えていたら遅くなったわ・・・大天
狗の会議にしては天魔様がおらんようだな？」

「天魔様は多忙でな。今回の会議には出れぬと使いの者から伝言の文
を貰っておる、これよ」

厳つい顔をした大天狗の一人は捷に1枚の文を差し出しそれを手
に取り目を通す

そこには確かに今回の会議には出席出来ないという内容と天魔が書いたと示す印が押されていた

「・・・ふむ、なるほどな。で、残りの二人はどうした？」

「ふんツ！またいつものサボリであろう。居ようが居まいが同じ事よ」

「全く、大天狗の恥さらしよな」

「では、楓はどうした？」

「今回の会議は特に重要な事。所詮は白狼天狗よ、いくら大天狗の位を天魔様から授かっているとはいえ調子ずいても困る」

（ハア・・・だから来たくないのだ、こんな会議・・・使いに天魔様に伝えるようにしたがこれは楓にも伝えにゆかせるか）

座ることもなくUターンしてその場から離れていく捷

「おい捷よ。来たばかりであろう、どこへ行く？」

「ああ、使いに頼み忘れた事があったの。さつき別れたばかり故まだ間に合うと思つてな、すぐ戻る続けてくれ」

そう言い残し会議場から出た捷

（さて、どう伝えておくか？あやつは冷静に見えて怒りっぽいし、う、下手に伝えたらなにしでかすか分からんし、特にあやつは男嫌いな面もあるからな）

「しよ、捷さま」

「ん、おうちようど良かった・・・お主ら何をしている？」

そこには幼い白狼天狗の子とその背後にはその幼子に刀を構える
鳥天狗

その周りには複数の鳥天狗と白狼天狗の集団が捷をとり囲む

「申し訳ございません射命丸捷さま。大天狗さまからの命で貴方を拘束させていただきます」

「・・・それで？その娘はどうするつもりだ？」

「貴方が下手な抵抗をしないための保険です。どうか我々に従っていただきたい、命令とはいえ同じ大天狗さまである捷さまに手荒な事はしたくありません」

保険、つまり人質というわけだ

周りの白狼天狗には動じない者や同族のしかも子供にたいして行っていることにただ力み我慢するものもいる

いくら命令とはいえ同族を人質に取り自分たちが仕える大天狗に刃を向けようとしてる行為は良心を持つ彼らにとって苦痛でもあった

「・・・ふふふ、子を人質にとって儂に対して手荒をしたくないとは若輩者どもに随分舐められたものだ」

左手に持つ錫杖に似た杖をすこし上げて地面に軽く落とす

カンツ、ブワア!!

「!!？」

軽い落下音がした瞬間、周りに突風が迸る

「なめてくれるな小僧ども」

静かにだが、圧倒的な殺意を持って放ったその妖気に複数の烏天狗と白狼天狗はその殺意に耐えられず白目を向き、泡をふきながら倒れ出す

なんとか耐えた者達も各々の獲物を持ち構えるが顔や手から汗を流し、荒れる呼吸を無理してでも整えようとしていた

「・・・ふう、ほれ」ポイツ

左手に持っていた錫杖をほおり投げる捷

「儂一人ならまだしも関係ない幼子を巻き込むの儂個人が許せんのでな。ほれ、好きな所に連れてゆけ」

「・・・おい」

「は、はッ！」

ほおり投げた錫杖を回収し射命丸捷は白狼天狗の幼子と共に連れていかれた

(やれやれ、文がなんとかしてくれる事を願うか)

その頃小夜は

土牢

「・・・」

荒縄で両手両足を縛られ目には布が巻かれ視界を奪われていた
体中には包帯が巻かれており処々血によつて赤いシミが浮かび上
がっている

彼はいま待っていた

ここから出る気を窺うために失った体力を取り戻そうとしている
のだ

ただ静かに反撃の牙を研ぎ澄ましながら

65話

霊夢 SIDE

その頃

上空

「はあ、やっと見えて来たわね」

人里を後にして、シュレディングーを連れて紅魔館へ向かっていて
ようやく館が見えて来た

シュレディングーは兄さんと同じように飛ぶ事が出来ないから運
んでいるけどやはりこの状態で運ぶのはきついわね

「霊夢さん、ため息してたら幸せが逃げちやいますよ〜?」

「そのため息の主な原因があんたなのよ。あんたが1人で飛べればこ
こまでする面倒が減るのよ」

「えー?前の冬の異変の時に大尉を運んでた時はそんな事言わなかつ
たじゃないですか〜というかむしろ嬉しそ」

「外の世界にはスカイダイビングって遊びがあるって前に紫がいつて
たわねーあなたやったこと無さそうだし経験してみる?ただ高い所
から落ちるだけらしいし」

「それって完全に脅しじゃないですかやだー。ていうかそんな降下僕
みたいな貧弱ヴェアヴォルフには無理でーす」

「・・・はあ」

い 本当になんでこんな奴が兄さんの知り合いなのか不思議でしか
ない

・・・まあ、それは前にシュレディングーが話した事を聞いた母さ
んから全て聞いて納得はしている

「ミレニアム」という組織

人工的に作り出された吸血鬼と兄さんの力を元に作られた数名のヴェアヴォルフを少佐つて奴が率いた「最後の大隊」

結果的に紫が言っていたように確かに兄さんは警戒しなければいけないような人・・・いや、妖怪であるのは確かだった

でも、だからと言って今更兄さんとの関係を変えるつもりは無いのは私だけでなく母さんも同じだ

初めて出会ったあの日から兄さんは大切な家族の一員、そしていつも守られてきた分、今度は私が兄さんをあの天狗どもから助ける

そう心に決めた気持ちを胸にようやく紅魔館についた霊夢

しかし、紅魔館の門前にて門番の美鈴が誰かと話していた

「珍しいわね。あの門番が起きてるなんて」

兄さんの話や今まで見ていた光景から基本仕事をサボって寝ているイメージしかなかったけどなにかしら？

「あれ？あの二人、慧音さんと妹紅さんじゃないですか？」

「どうしてあの二人が？確かにあの後、ちよつと人里を出ると言っていたけど」

とりあえず降りて聞いてみないと分からないわね

かう
霊夢はシュレディンガーを先に下ろし、門の前にいる三人の下へ向かう

「突然の事だとは重々承知はしている。しかし、あの子の教師としてどうしても知りたいのだ」

「で、ですから、お嬢様の許可がなければ入れる事は出来ないんです。それにお嬢様は今日も誰とも面会する気は無いと」

「・・・面倒だからこいつ燃やして、直接姉に聞き出しに行けばいいんじゃないか」スツ・・・

竹林の案内人が片手に炎をチラつかせる
なんだか、穏やかな雰囲気じゃないわね

「止めるんだ妹紅！ 私たちは争いに来たんじゃないんだ！」

「だがな慧音、もう1ヶ月前からこうなんだろ？ 本気で心配なら力づくで行かないとなにも知ることは出来ないぞ？」

「そ、それは・・・」

「気持ちは分かるけど、今ここで血なまぐさい勝負は許さないわよ妹紅」

「れ、霊夢？ どうして君が・・・いや、そうか君は小夜くんを助けるために仲間を集めていたんだったな」

私が間に入って妹紅は手のひらの炎を舌打ちしながら消して、美鈴も構えをといた

とりあえず慧音たちの用事も聞きたいけど今は私の用事を片付けたい

「美鈴、今レミリアはいるかしら？」

「え、ええと居るには居ますが、今お嬢様は誰とも面会は」

「兄さん絡みの件なの。あの吸血鬼でも兄さんの話なら聞いてくれると思うんだけど」

「え!? さ、小夜さんに”も”なにかあったんですか?!」

「まあ、ちよつと面倒な事にね。出来ればレミリアの力を借りたいんだけど」

出来ればあの吸血鬼なんか頼むのは癪だけど今は贅沢は言ってもらえない。協力してくれるなら多い方がいい

しかし、さっきの美鈴がいった”も”という部分が気になる

「うーん、し、しかし、お嬢様の命令がありますし・・・」

「美鈴、もういいわよ」

「え？あ、咲夜さん。でも、お嬢様が」

「そのお嬢様から直々の許可が出たのよ。少しは察しなさい」

「そ、そうなんですか・・・でも、妹様はまだ」

「それも込みで全て話すらしいわ。とりあえずあとは私とお嬢様に任せなさい」

「・・・分かりました」

いつものように突然現れた咲夜の言葉に美鈴は小さく頷きながら門を開けて門前から退いた

「霊夢さん、シュレディンガーさん並びに慧音さんと妹紅さんもお嬢様から許可が降りました。どうぞ中へお入りください、お嬢様の下へ案内致します」

咲夜はそういいながら中へと入っていく

私とシュレディンガー、慧音と妹紅も咲夜の後についていき紅魔館の中へ入っていった

相変わらずの真つ赤な館の中を歩かされ、レミリアの部屋へとついたら

「お嬢様、客人たちをお連れ致しました」

「いいわ。入れて頂戴」

「失礼致します。では、どうぞ」ガチャ

扉を開けて私たちは中へ入るといつものように椅子に座ったレミリアが出迎える

「ようこそ紅魔館へ、今は皆忙しくてマシな歓迎も出来ないけど許してちょうだい」

「今は歓迎とかゆつくりしてる暇は無いの。あんたに協力をお願いしてきたの」

「とりあえず霊夢の話から聞かせて貰うわ。咲夜、紅茶のお代わり」
「かしこまりました」

レミリアの言葉に従い、私は事の顛末を話しこれからやる事を包み隠さず全て話した

レミリアは咲夜が注いだ紅茶の入ったカップを口にしながらただ聞いていた

「・・・という事よ。兄さんを助け出すためにあんたたちの力を借りたいの」

「そう、お兄様が・・・ごめんなさい霊夢。今の私たちはお兄様を助ける手助けをすることは出来ないの」

「珍しいですねー。大尉の事ならすぐ飛びつくかと思つたのになんにも反応しないなんて・・・もしかして、妹のフランちゃんになにかあつたとか?」

「ツ・・・」

シュレディンガーの言葉にレミリアは少なからず反応を示した

「シュレディンガー、どういう事?」

「だって、客人がしかも霊夢さんが来たのに一向に姿を現さないなんておかしいでしょ?普通霊夢さんが来たたら大尉もいるだろうと見に来るじゃないですかあの子なら普通。それが一向に姿を見せない所か来もしない」

確かに、あのフランが兄さんも来たのか確認に来もしないのはおかしい

それにいつにもましてこの紅魔館は静かだった。何度か訪ねたからこそ分かるいつもの紅魔館の騒がしさが今はなにもなく静かだ

「レミリア・スカーレット、私は君の妹、フランが寺子屋に来なくなっ

てからもう1ヶ月は立っているんだ・・・チルノや大妖精、他のみんなも友達であるフランを心配してるんだ。勿論私も教師としてあの子が心配なんだ」

「・・・」

「・・・そうね。霊夢に協力出来ない理由も含むし話しておきましょう」

レミリアは静かにティーカップを置いて、口を開く

「私の妹、フランが・・・行方不明になったの」

66話

「フランが・・・消えた？」

霊夢のその言葉を最後にその場にいる皆が一瞬だが静寂になる

「ええ、もう1ヶ月になるかしら・・・急にあの子がいなくなったのよ。私の能力を使ってもあの子の運命が”見えなかった”。これがどういう意味か分かるかしら霊夢？」

「・・・」

「死んじやったかも知れないとかでしょ？」

答えなかった霊夢の代わりにと言わんばかりにシュレディンガーが答える

「しゅ、シュレディンガーくん！なにもそこまで言わなくても！」

「いいわ、慧音。彼の指摘は間違っていないわ、実際私の能力は屍人や怨霊にはあまり意味をなさない。死んだ者に運命なんてないのは当たり前前だもの」

「レミリア・・・」

「でもね、シュレディンガー。私はあの子が死んだなんて思っていないわ」

「へえ、どうしてそう思えるんです？」

「私があの子の姉だからよ。姉は妹を信じてあげるものだとお兄さまに学んだわ、あの子の屍を見ない限りは私はあの子が死んだなんて絶対に認めないつもりよ」

「ふーん、美しい姉妹愛なこつて。で？結局1ヶ月の搜索は虚しく、成果なしと」

シュレディンガーの更に冷たい一言はなお続き、霊夢や妹紅は空気が読めない馬鹿猫と心の中で罵っていた

「残念ながらその通りね。咲夜には苦勞をかけさせたけどあの子はこの幻想郷のどこにもいないわ、現状はね」

「(そう言えば魔理沙も最近は来なくなっていたけど・・・まさか、よね)とところでレミリア、魔理沙がこっちに来たことあった?」

「魔理沙?咲夜、最後に見たのはいつだったかしら?」

「・・・実はちょうど1ヶ月前、妹様がいなくなった日にパチュリー様の図書館に来ていましたが、パチュリー様は片付けもせずに帰ったと思っわ、と」

「・・・なんか、更に嫌な予感がしてきたわね」

「つまり、魔理沙とフランは何らかの現象に巻き込まれて一緒に消えた、と?」

「仮にそんな事が出来るとしたら私は紫しか思い浮かばないけど、紫にとつてなんの得もないはずよ」

「でも、無関係とも言えないでしょ霊夢?」

「・・・」

霊夢はまた黙り込む、レミリアはその沈黙を肯定と認識し紅茶を飲み終える

「今、あのスキマ妖怪はどこにいるのかしら?」

「・・・分からないわ。ただでさえ気分屋で神出鬼没な紫をこちらから見つけるなんて」

「そんな気分屋が、今来てあげたわよ」スツ

「紫?随分都合よく来・・・ツ、あんた、どうしたのよ”ソレ”」

まるでスタンバっていたと言わんばかりに現れた紫

しかし、スキマから現れた彼女は酷い姿だった

顔の額から右頬まで包帯が巻かれ、左腕も補強材で固定し首後に引っ掛けた布に通してぶら下がっている

一目見れば誰もが酷い状態だと認識出来る

「私なんかはまだいいわよ、霊香や藍はもつと酷かったわ・・・」

「お母さん!?お母さんがどうしたのよ紫!？」

「安心しなさい、死んではいいわ。ただししばらくは動かす訳にはいかないって状態だけど。今は永遠亭で休んで貰ってるわ」

「な、なにがあったのですか賢者殿?あなたや霊香殿がそんな簡単に負けるような方々で無いのはよく知っていたつもりでしたが」

「・・・恐ろしかったわ、こんな私でさえ恐怖を感じる相手が幻想入りを果たそうとしていた。幸いなんとか阻止は出来たわ・・・ただし、事故があったけどね」

包帯が巻かれた部分に触れ、紫が僅かにまだ震えているのを皆気づく

しかし、レミリアはそんな紫に構わず問いただした

「待ちなさいスキマ妖怪、その事故っていうのにまさか・・・フランに関係あるんじゃないでしょうね?」

「え?な、何故だレミリア・スカーレット?」

「簡単な事だ慧音。このスキマ妖怪なら簡単にスキマから盗み聞きできるだろ、そしてさつき紫の話になってからのこの丁度よすぎるタイミングでの出現・・・なにか他に話すことがあるんだろ、なあ?」

「・・・私たちが相手をした化け物をスキマの能力を使ってなんとか幻想郷の外に追いやる事が出来た、けどそいつはスキマにのまれるまで抗い続けてその時に油断してこの様・・・その時に、スキマの力が少し暴走して色んな所が繋がったり、閉じたりしたわ」

「その時だったわ。運悪く二人の幻想郷の住民がスキマにのまれて、その化け物と一緒に外に放たれてしまったわ」

「ま、まさかその二人って・・・」

「靈夢の表情が青ざめるのも気にせず紫は答えた

「霧雨魔理沙、フレンドール・スカーレット・・・彼女たちは化け物と一緒に外の世界に・・・現代入りを果たしてしまったわ」

67話

「魔理沙とフランが現代入り・・・ですって？」

「つまり、魔理沙とフランは幻想郷の外に行ってしまったと言うのですか賢者殿?！」

「・・・予想外の事故とはいえ、そうなるわね」

立つのもやつとという表情をしながら霊夢に椅子まで誘導してもらい席についた紫はふう、と息を吐く

「スキマ妖怪!今すぐ私を外に連れていきなさい！」

「お嬢様!お気持ちは分かりますがさすがにそれは危険です！」

「放っておけばフランが一番危険なのよ!幻想郷とは違って外の世界に霊夢の結界は存在しない、もし日を直に浴びたらあの子は死んでしまうー!」

「・・・残念だけどレミリア、それは出来ないわ」

「どうしてよ!あなたの能力なら結界を越えてすぐ行けるんでしよう?!」

「・・・問題が二つ残っているのよ。一つは私がこのごまで妖力もほぼ無いに等しく、上手くスキマを動かせないのよ」

「なら、霊夢!」

「待ってレミリア。紫、もう一つは?」

「もう一つが一番の問題よ。彼らが行った場所は確かに幻想郷の外の世界だけど、スキマの暴走で開いた場所はその外の世界の歴史とは少し異なった道を進んだ世界・・・いわば平行世界(パラレルワールド)とも言えるわ」

紫の言葉に皆が絶句する

「平行世界はいわば無数の可能性、もしくは違う選択が形になった世界。その数は私たちがさえ計り知れないもの、私はそういった世界を

スキマで覗き込み、その世界の物語を見るのが一つの趣味なの・・・あの番犬、ヴェアヴォルフの大尉、そしてシュレディングーもその別の歴史を歩んだ世界からやってきたのよ、この幻想郷にね」

「別の歴史を歩んだ世界・・・」

「へえ〜そんな事があるんだ〜」

「何だか頭が痛くなる話だな。まあ、簡潔に言うならそんな大量の世界の中から二人を見つけてるのはとても困難って事か」

「ええ、今の状態ではね。全快なら探すだけなら容易なだけけれど」

「・・・」

レミリアは崩れる用に椅子に座り込む

自分の家族、しかも血の繋がった妹が外の世界に投げ出されてしまい、しかも助けに行ける方法もほぼ無くなってしまったのだ

シヨックを受けていて普通であろう

「ところで霊夢、あなたはどのようにしてここに？博麗神社を覗いても居なかったから他の場所も覗いてようやく見つけて来たけど」

「今は妖怪の山での異変解決のために仲間を集めてるって感じよ」

「妖怪の山、最近幻想入りして来たっていう神がいるとは聞いたけど・・・どうやら面倒事を起こしたようね」

「ええ、博麗結界の要である博麗神社を譲って欲しいって行ってきたわ。うちを分社にして信仰を集めるってのが魂胆らしいわ。そのために妖怪の山に住まう妖怪たちを皆自分所の神を信仰させて協力を得ているみたい」

「・・・ところであの戦争犬は「小夜兄さん」・・・ヴェアヴォルフはどうし「小・夜・兄・さ・ん」・・・小夜はどうしたの？一緒ではないのかしら？」

名前では呼ばない紫に対して霊夢は徐々に圧を掛けながら紫に詰め寄っていく

さすがに面倒を避けるために紫は折れた

「大尉はレテイって雪女に頼まれて妖怪の山へ調査に行ったら天狗共に捕まったらうれしいんですね〜」

「・・・まあ、それはしようがないわね。妖怪の山には山の妖怪を束ねる天魔、それに付き従う天狗たちもいるわ、いくらあのヴェアヴォルフでもそれらを相手するのはたまらないでしょうね」

「とりあえずこの異変は私が解決するつもりよ。母さんもいま永遠亭にいるなら頼る事は出来ないわ」

「気をつけなさい霊夢。天魔たちは鬼や西行妖とは違った意味で面倒だから」

「ええ、紫はゆっくり休んで早く魔理沙とフランを探せるようにしときなさいよ・・・じゃあレミリア、私たちは行くから」

「お邪魔しました〜」

霊夢はレミリアに別れを告げた後、シユレディンガーを連れ紅魔館をあとにする

「さて、じゃあ私も一旦もどるわ。言われた通り早めに妖気を取り戻さないとね」

霊夢に続き紫もスキマを開いて紅魔館を出た

慧音と妹紅も今の自分たちに来る事はないと悟り、彼女たちも人里へと戻って行った

「・・・」

「お嬢様・・・なにかお持ち致しましたでしょうか？」

「・・・いいえ咲夜、今は気分じゃないわ。少し一人にさせて」

「・・・かしこまりました」

咲夜はレミリアの指示に従い部屋を出た

外はまだ明るいレミリアの部屋はいつもより暗く静寂だけが

残った

その頃

妖怪の山麓

哨戒白狼天狗の拠点 土牢

「……」

牢の中で特に喋ることなく縛られている小夜

その静けさは逆に死んでいるんじゃないかと思われる程だ

「申し訳ありません大天狗様、この様な牢に入れる事をお許しください」

「構わん、お主は仕事を全うしとるだけじゃ。それに幼子の命を無駄にはできんからのう」

遠くから声が聞こえ、徐々に歩いて来る音が近づいてくる

匂いは四人、三人は白狼天狗一人は烏天狗

妖気の大きさからして一人は子供、鴉天狗はあの楓と同じ感じだ。だとすれば大天狗だが、なぜ大天狗がこんな牢につれて来られるんだ？

「む、先客がおったか。失礼するぞ」

老人くさい喋り方にしては随分若々しい声だ。音の距離からして近くに座り込んだようだ

「申し訳ありません捷さま、ぐすつ、わ、私が迷惑を掛けてしまったばかりに……」

「よいよい。ほれ、泣くでない童よ可愛らしい顔が台無しじやよ」

目隠しをされているため、誰がそこにいるかは分からないが声からして子供が一人に”若い男”だろうか？しかし、話し方は”歳を取った老人”のようでもある

「その若いの。手酷くやられたな、まあ、命を落とさなかつただけ儲けものではあろうがな」

「……縄を切ってくれるか？じつとし過ぎて体が岩にでもなりそうだ」
「まあ、今は同じ牢にはいつてる者同士よ。ほれっ」

男は人差し指を上から下に払うように動かす

スパツ

小夜の両腕両脚の縄、おまけに目隠しの布さえ切れた

「……すまない」

ゆつくりと目を開けるとそこには立ち尽くしたまま両手で必死に涙を拭う小さい女の子と黒髪と白髪が入り交じったような見た目そのまま青年のような男が胡座をかいてこつちを見る

子供は白狼天狗だが、男はどうやら烏天狗、大天狗の類だと思われる

何故妖怪の山の頂点の妖怪がこんな麓の牢に？

「なに、礼には及ばん。儂は射命丸捷という、こっちは儂の使いの者の一人でな、ほれ挨拶をせい」

「え、えっと、しおんつていいいます。はじめまして」

「・・・」ペコッ

射命丸捷としおんと名乗った二人

この捷という男は射命丸と言っていたがまさか文の家族だろうか？

「それでお主は何者だ？白狼天狗たちとは似ているようで違った妖気だが」

「・・・ヴェアヴォルフ、博麗小夜だ」

「なんと博麗・・・うーむ、どうやら犬走の娘に伝えるのが少々遅すぎたか」

「・・・権をしってるのか？」

「まあ、知つとるといいうか権の母親から聞いてはいたからの」

「母親・・・楓か」

九天の滝で戦ったあの白狼天狗の女性

あの時はまさか権の母親だったとは思ひもしなかった

「ほー会ったのか？」

「挑んだが負けた・・・」

一瞬だった。たった一つの行動で俺はやられかけた

その後の記憶は覚えてはいないが

「楓は白狼天狗ではあるがその生まれ持った強い妖気、そして慢心することなく肉体的に精神的にも己を鍛え抜き遂には並の鴉天狗程度では相手にならず、儂とも互角にやり会えた女よ。その功績から天魔

様から大天狗の称号を与えられたたった1人の白狼天狗」

「権の母親は・・・強いんだな」

「ああ、強いぞ。しかしあの男子もよくあんな堅物を嫁に出来た者よ。儂はどちらかと言うとその男子の方が肝が据わつとると思つたわ」

「・・・権の父親？」

「ああ、楓の夫であり権の父親なのだがそやつはまだ哨戒白狼天狗の一番隊隊長であった楓によく突っかかつては九天の滝から落ちていた姿が目撃されたものよ」

「弱かったのか・・・？」

「まあ、白狼天狗の中では多少はやれるが楓と比べたら。しかしその父親もな娘の権が哨戒白狼天狗になった時にな行方をくらましたのだ」

「・・・死んだのか？」

「それも定かでは無い。死んだと言うものも居れば、二人を捨てた言う者もいる」

「・・・」

まさか、権にもそんな過去が・・・だからあまり両親の事は話さなかつたのか？

「して、お主は何故妖怪の山に来たのだ？警告はされたのならそのまま去れば良かったものを」

「・・・知り合いが妖怪の山近くに住んでいたんだが、最近騒がしいから様子を見て欲しいと頼まれた」

「なるほどな・・・ふう、こうなることを未然に防ごうと文と権に話したがまあいい。これも何かの縁じゃお主にも話しておこう、この妖怪の山で何が起こつておるのかをな」

射命丸捷は小夜に今妖怪の山に起きている事の顛末を全て話した

その頃

「ふう・・・よし」

体に巻かれた包帯を取り除き、赤い巫女服を身に纏う女性

「ほんとに大丈夫なの？永琳もかなりやばげだったって言ったのに。もう少し回復してからがいいんじゃない？」

「ふ、月の姫さんにそこまで心配されるとはな。だが安心しろ、この程度なら慣れたものさ」

「まあ、止めたところで勝手に行くだろうしね・・・異変終わったら宴会呼びなさいよ、最近全然誘われて無かったし」

「誘っても来ないのはどこのアホ姫だとおもってるんだか。まあ、無事に終わったらな」

両手に新しい包帯を巻きつけ、良しと相槌をうってから彼女はその後にする

「霊夢と小夜、また無茶振りしてなきやいいがな」

「ちよつと、せっかく初登場したのに見送るだけ？」

68話

夕方

博麗神社

「いやーあまり集まりませんでしたね霊夢さん」

「まあ、そこは仕方ないわ。相手は鴉天狗なんだから」

神社の前には博麗小夜を助けるために協力を受けてくれた者達が集まっていた

元から小夜を助けようとしていた霊夢、シユレディンガー、チルノ、大妖精、レテイを除いてメンツはこれだけだ

ルーミア姉

ルーミア

魂魄妖夢

赤蛮奇

今泉影狼

伊吹萃香

ミスティアにリグルは助けだしたい気持ちはあるようだが相手が相手故に足でまといになる可能性を考えて不参加

わかさぎ姫は特に自分は皆を困らせる事になるだろうと辞退した

紅魔館勢と人里は訳あって完全に協力を得られず、霊香は永遠亭という事もあり頼る事は出来ない

ルーミア姉は快く引き受け、ルーミアは最初は待つように言ったがどうしても付いていくと同行

妖夢は偶然出会った所で話し、幽々子の許可を得て参加

最後に伊吹萃香は面白そうだと付いていくと言った

「あの鬼役立つんですか？どうせ高見の見物しかしない可能性ありですよ」

「でも、いるだけでも下級の妖怪たちなら戦おうとはしないはずよ。まあ虫除けみたいにくれるだけでも意味はあるわ」

「はあ、まあそうですね。それで突撃は明日に変更は？」

「変更はしないわ。暗いとはぐれたりする可能性もあるし、人数は少ないんだから慎重に事を進めるわ」

「はあい」

そしてこの後、具体的な目的とシユレインガーが考えた作戦の流れを皆に話した

主な目的は二つ

1. 博麗小夜の救出
2. 証言者である犬走権の確保（抵抗したらぶつ叩いてから確保）

最後にこの二つを達成した後のおまけ

3. 敵の戦力を退却しながら削る（序盤はできる限り接触を避ける）

ざっとこんなものだ

もう少し戦力があればチームを分けて主目的を2チームでそれぞれ果たせば良かったが今回は人数が少なすぎるために別で2チームに分ける

主目的を果たすチーム
と

麓にて待機し脱出を手助けをするチーム

「とまあ、今日はこの2チーム分けを話し合いたいと思います」

「人数は11人だから、主目的に五人、サポートに六人ずつ分けられたいと思ってるわ。希望があれば言っちゃおうだい、どちらにしても天狗たちと戦う事には変わりはないからどちらかが安全とかは存在しないわ」

その言葉のあと、すかさず手を上げたのが二人だった

「この魂魄妖夢！師匠の救出にぜひ！」

「私も主目的のチームに入れさせて」

魂魄妖夢と今泉影狼が主目的のチームに立候補した

「私とシュレディングーは兄さんの救出に必ず入るつもりだからこれで四人ね。言っちゃって置くけど主目的の方は必ず戦う事になるわ二人共覚悟はできてる？下手したらあつちは弾幕勝負ではなくなる可能性もあるわ」

「この魂魄妖夢、もとより覚悟は出来ています！」

「私は小夜の救出もそうだけど・・・犬走権にも用事があるわ」

「じゃあ二人は確定ね。あと1人は候補いるかな？」

「あ、あの！」

「大ちゃん？」

「わ、私も連れて行ってください!!」

「二!!二」

「だ、大ちゃん!？」

周りも大妖精の立候補に驚きを隠せなかった

「わ、私はチルノちゃんみたいに戦う力はないですけど・・・きつとお役にたちますから霊夢さんお願いします!!」

手に持った木の枝のような物を握りしめて懇願する大妖精

「あははは！私の時と言い、なかなかどうして妖精にしてはほんとの度胸あるじゃないか。霊夢、こうも言ってるんだから連れていったら？」

「・・・言っておくけど手助けは一切出来ないわ」

「は、はい。必ず足でまといになりません！」

「分かったわ。じゃあ他に異論はないわね」

「じゃあ、チームはこうだね」

主目的チーム

博麗霊夢・シユレディンガー・魂魄妖夢・今泉影狼・大妖精

待機チーム

ルーミア姉・ルーミア・赤蛮奇・チルノ・レティ・伊吹萃香

「出来たら私が付いて行ってやりたかったんだがな。私じゃあ妖力が濃すぎるしな、霊夢ゼツたい無理だけはすんじゃないぞ」

「分かってるわルーミア姉。大丈夫、必ず兄さんは助け出して見せるから」

（・・・全く兄妹は似るってな。血は繋がってないけど、どちらも一人で解決したがるんだから）

「じゃあ、今日はこれまで。明日から妖怪の山に行くわ、皆うちでゆっくり休んでいって」

その後は晩御飯を済ませ、皆眠りに落ちた

「・・・」

ただ一人、霊夢は未だに眠れないで居た

いつも家には兄の小夜と母の霊香が居るはずなのに、今はその二人はいない

そんな静寂が今の霊夢にはなりより苦痛だった

「・・・」スッ

霊夢は身体を起こして隅に置いて会った軍帽に手を伸ばす

血の汚れは完全に洗い流せ、シミもない綺麗な軍帽を霊夢は胸に抱えながら徐々に震える

「大丈夫・・・必ず助け出してみせる。もうあんな事にはさせないって約束したんだもん、待ってて兄さん・・・」

そのまま軍帽を抱えながら霊夢はまた横になった

その頃

妖怪の山麓 牢

「・・・」

天井に近い壁に僅かに空いている穴から明かりが差し込み、そこから見える月を小夜は眺めていた

射命丸捷の話聞き、一部の大天狗による陰謀を知った小夜はなんとか脱出する手立てを考えていた

しかし、今回復しきれない状態ではいくら脱出出来たとしても長くは持たずすぐにまた包囲されるのがオチだ

ちなみに射命丸捷は子供を寝かしつけた後、自分も一眠りすると座ったまま寝た

スタツスタツ

「ッ……」スツ

遠くから響いてくる足音に気づき、小夜は瞳を閉じて寝たフリをする

足音は徐々に近くなり、この牢屋の前で足音は止まる

カチャ

鍵を開く音が響き、中に誰かが入ってくる。自身の血の匂いが充満しているが故に匂いで判断できない

足音は自分の真横で止まる

「小夜……眠っているのですね」
「……」

その声には小夜は一番聞き覚えがあった
そう犬走権だ。彼女がそこにいるのだ

「……ごめんなさい。出来れば貴方を今すぐにでも逃がして博麗の下に帰ってあげたいのに……私が弱いばかりにこんな……本当に、ごめんなさい」ポタポタ

雫が手に落ちてくる

ゆっくりと目を開けると権は俯きながら涙を流して泣いていた

そんな権の姿をあの手で冬の異変が終わった後の永遠亭で霊夢が泣いていた姿が重なった

彼女もまた自分の為に泣いているのだ

「・・・権」

「ツ・・・小夜、起こしてしまいましたか?」

涙を急いで拭き取るが権は小夜の顔を見ようとはせず、俯いた状態で話を続けた

「小夜、ごめんなさい。今の私では貴方を逃がしてあげることが出来ない、きつと博麗の巫女たちが助けに来てくれるからそれまでは我慢して待つて」

「・・・」スツ

「ツ!ダメっ!!今の私は貴方に見せられるような顔じゃないから・・・あつ」グイツ

権の静止も意味なく、顔を掴み自分に向けさせた小夜

権の顔には小夜と同じ様に所々に包帯が巻かれ、一部には血の滲んだ跡があつた

「斬られたのか・・・実の母親に?」

「・・・当然の結果、自業自得なの。山に侵入した者を排除する天魔さまの命令を無視して貴方を捕虜として生かした、母様は白狼天狗でも大天狗の位を与えられた妖怪、天魔さまの命令に背いた私を罰しただけ・・・私は後悔していないし、恨んでもいないわ。貴方を生かす事が出来たのだから」ギユツ

顔を掴む小夜の手には権は両手で掴み、自分の顔から退かすと小夜の胸に顔を埋めながら抱きしめた

「良かった、本当に・・・生きてくれて。もし、あの時に間に合わず、母様があなたを殺してしまつたらと考えると怖くて、怖くて・・・」
「・・・」ギユツ、ナデナデ

「・・・私、お姉ちゃんの筈なのに小夜に慰められるなんて。駄目な、お姉ちゃんよね」

「・・・」フルフル

「ありがとう、小夜・・・もう少しだけこのままで居させて」

「・・・」コクッ

権の願いに答えて小夜は抱きしめながら頭を撫で続けた

「・・・(起きるタイミング見失ったわい。もう少しだけ待とうかの)」

捷は空気を読んで寝たフリを続行していた

69話

その頃

妖怪の山 頂上

「ふむ、では貴女方が来たのはそちらの巫女から話が違うという件について聞いただす為にやってきたと・・・異論はないな？」

「・・・」

1つの一室にて一人の鴉天狗とその傍らに控える白狼天狗とその鴉天狗の前に立つ二人と対峙していた

「ああ、うちの巫女の話ではなんでも博麗の身内が妖怪の山での異変に気づいて先にやってきたが警告を無視した為に排除したそうだな」

「・・・それに関しては後に控えている犬走楓から事前に聞いた。妖怪の山への立ち入りを禁ずるように命じた故にその博麗の者に警告をした。しかし、警告を無視したが為に犬走楓と哨戒白狼天狗第八番隊隊長が”排除”したと報告を聞いている」

「・・・はあ、本題を話さないと分からない”天魔”？」

「二体なにかかな？話の内容はちゃんと話して頂かないとこちらも対応に困ります八坂神奈子殿、洩矢諏訪子殿：いや、建御名方神（タケミナカタノカミ）、土着神ミシヤグジとお呼びした方がよろしいか？」

天魔と呼ばれた彼女はこの妖怪の山の頂点に立ち、大天狗を率い鴉天狗と白狼天狗、河童等妖怪の山に住まう妖怪全てを率いる大妖怪だ
それに対峙するはかの大和の神の一柱である諏訪明神

「建御名方神」八坂神奈子

その隣に立つ少女が遙か古代、土着神として崇り神達を束ね、日本の一角にかつて洩矢の王国を築き、国王を務めた

「ミシヤグジ」洩矢諏訪子

「ふん、その名で呼ばれるにはもう我らは外の世界では信仰される事も少なくなつた。今は新しき信仰を得るが為に名を変えている、今の名で呼んで貰えると助かる」

「では八坂神奈子殿、本題を話しては頂けないか？その土着神が我を祟り殺しそうになる前に」

「はあ・・・少し落ち着け諏訪子」

「いでっ・・・何も叩くことないじゃん？」

「気持ち分かるが殺気は抑えろ。我々は争いを起こす為に来たんじゃないんだ」

「・・・」 チャキ

天魔に対して殺気を向ける諏訪子に対して刀に手を添えていた楓
殺気が消えてから刃を鞘に戻した

「話に聞けば、この妖怪の山は我々が来る以前まではそこまで部外者に対する立ち退きは厳しくはなかったと聞くが何が故に警戒を強めた？しかも警告を無視したら排除とはまるでなにか恐れているようじゃないか、この山を治めるほどの大妖怪にしては」

「・・・こちらとしては貴女の方の巫女に対してなんて事をしたと言いたいくらいだ」

「うちの早苗が、なんだって？」

「そこも既にそちらの巫女、東風谷早苗から聞いている。この妖怪の山のみならず人間からも信仰を得ることは我々としては問題にはしていない・・・しかし、分社を作る為とはいえ博麗神社に敵対を示すような宣戦布告はこちらとしては大問題だ」

「なんで、早苗は単に分社を作るために博麗神社を渡して欲しいとは言ったけど別に住処を奪うとは言っていない。勝手に宣戦布告したのはあっちじゃない」

「はあ・・・これだから紅魔館の吸血鬼連中といい、新参者は困る。失礼を承知で言わせて貰うが貴女方は幻想郷を甘く見ている」

「ふむ、別段甘く見ていた訳では無いが・・・貴様がそこまで言わせる程に強いのか博麗の巫女とは」

「今は代は変わり、まだまだ若い巫女だが我が認める人間の数少ない友である先代は今代の巫女の才能に期待を寄せている・・・それに我は出来れば先代とはもう刃を交えたくはない」

「それって単に友達と戦いたくないって言い訳してるだけじゃん」

「神ともあろうものが天魔様のお考えがまるで理解出来ないか」
「なにを」

「我らの長たる天魔様が配下である者の前で自らそのような弱気になるような事を言うほど恐れている事がわからんのか」

「ツ・・・」

「ふむ」

頂点に立つ者、多くを統べる長たる者はどのような恐怖、不安があらうと下々には恐れる姿を見せはしない

それは率いられる者たちの信頼を裏切らないため振る舞うのは至極当然、そうでなければ下々の者たちはついては来なくなるからだ

しかし天魔はそんな弱気な発言を配下である大天狗を前にして言ったのだ

それが一体どれだけ、天魔が博麗の巫女を敵に回したくないのかが窺える

「神ともあろう者がその程度も察せぬとは信仰を失うのも納得だな」

「いちいちムカつくなこの犬っころ！」

「やるか？私にはなから貴様らに対して信頼もなければ信仰などしてない。貴様らを信仰し加護を授かって舞い上がってる下級妖怪どもと一緒にだと思わない事だ」シャキン！

互いに構える諏訪子と楓

「やめろと言ってるだろ諏訪子」

「楓、頭に乗るのもいい加減にしろ。お前如きが私の考えを理解出来ると思っただか？」

「むー・・・」

「はっ、申し訳ありません天魔様」

「配下が失礼した。どちらにしても博麗の巫女が来るのは時間の問題、配下はお貸ししますし我も事に当たる所存です」

「・・・こちらでも失礼した。それと早苗にも色々言っておくよ、少し甘やかしすぎたかもしれないとこちらも気付かされたしな。まあ主に一人が甘やかしすぎただけだね」

二人の神は一室から退去して天魔は一息をつける

「やれやれ、あの二神の加護を得た事によってこの山に住まう下級妖怪は調子づいてる。中には博麗の巫女打倒目的に東風谷早苗の傘下に入ってる阿呆もおる」

「天魔様、よろしいのですか？八雲紫との約束を破ることもありませんが。あのスキマ妖怪ならどんな事もやるかと」

「・・・とはいえど、あの新参者たちとの契約を大天狗たち皆で話で出した結果だ。今更契約を無しにしても下々の不満が増すだけだろう」

「私が黙らせるという手もありますか？」チャキ

「刀をしまえ阿呆」

呆れながら背後で刀を少し抜きながら物騒な事を呟いた楓を静止させる天魔

「それよりも楓、第八番隊隊長は確かお前の娘だったよな」

「ええ」

「お前の娘は今代の巫女の兄とは仲睦まじいと聞いたが、本当に排除してしまったのか？」

「私が斬り捨てました。仮に生かしてたとしても応急処置だけでは長くは持ちません」

「やれやれ、相変わらず堅い奴だな。もしかしたら娘の伴侶になるかもしれないだろうが」

「それは私が決める事ではないので」

「やれやれ・・・なあ、そろそろ素にならない？今日は私の屋敷にはもう誰も居ないし」

「・・・」

その一言の後、楓はプルプルと震えだし

「うううわああああああああああん!!!」

楓はいきなり大号泣しだしてその場に座りこんでしまった

「わだじだつでぎりだぐながつだよー!!ぎよぐん、ぎずづげるつもりながつだのにー!!!そればかりかもみじぢやんまでぎつじやつだじー!!もうだいでんぐやらああ!!!」

「はあ、やれやれ。いつもより厚があると思ったらやつぱさういう事か」

呆れるようにため息を吐きながら大号泣する楓を慣れてるかのよう
うに慰める天魔

楓自身は確かに大天狗の位を与えられる程には強い。普段は隙もなく常に高圧な態度で周りからは恐れられていたりするが

本当は実の娘が大好きなその辺の女性と何ら変わりようがない母親なのだ

「ひぐつ、絶対嫌われた・・・権ちゃん、もう敬語でしか話してくれなくなつちやうんだあ。何か祝い事あったら綺麗なお花とかくれてたけどもうくれなくなつちやうんだあ」

「全く、周りの目があつたとはいえ確かに今回はやりすぎたが権も分かつてくれるだろうさ」

「無理だよ!! 霊香ちゃんだつてあんなに腕っぷし強くて博麗の守護なんて大役背負つてて、あいつ本当に人間か?! なんて言われて男性から恐れられて結婚出来てないのに霊夢ちゃんや小夜ちゃんに好かれてるくらいママやれてるんだもん! 私なんかじゃ無理だあ! 分かつてもらえない〜!」

「遠回しにかなり失礼な事を言つてしまつてるのには自覚はあるか
楓」

「どぼじよ天魔ちゃんく小夜くんなら権ちゃんのいい夫になれると思うのにわだじのせいで権ちゃん嫌われちゃったりしたらくズズズッ」

「泣きすぎだし鼻水凄い事なつてるつて。鼻かめほら」

「あじがどう」

天魔から紙をもらい、鼻水を拭き取り丸めてゴミ箱に捨てた

これが小夜を窮地に追い詰めた大天狗の位を与えられた白狼天狗などとは夢にも思わないだろう

ちなみに彼女の本性に関して知っているのは天魔と捷、霊香とルミア、紫だけである

「うう、権ちゃんに私の白無垢使つて欲しかった・・・」

「話飛びすぎ。とにかくこの件が片付いたら権と少し話合ったりしたらいいだろう? 私も時間作れるように協力してあげるから、な?」

「ありがとう天魔ちゃん」

（はあ、椰（なぎ）の奴はこんな奥さん置いてどこいってんだか・・・
帰ってきたら今まで愚痴聞いた分殴つてやる・・・）

さらにその頃

「も、申し訳ありません捷様／＼／＼お見苦しい所をお見せして／＼／＼」
「起きてたのか・・・？」

「まあの、声が聞こえたから起きたまでの事（若いっていいのお）」

70話

次の日

博麗神社にて

「・・・」キユ

後ろ髪を止めるリボンを縛り、お祓い棒を手に持つ霊夢
外にでて博麗神社の屋根に立ち、そこから見える景色を眺める

「・・・」スツ

左手に持っていた小夜の軍帽を見つめたそれを頭に軽く被った後、
妖怪の山へと視線を向けた

「遂にこの日が来たわね・・・あの早苗がわざわざ外の世界から信仰を
得るために幻想郷に来たって事は当然信仰している神もいるはずね。
ものによるけど信仰を得た神の力は侮れないって聞いた事がある・・・
だからって諦めるつもりは一切ないけどね」

「ふふふ、いい顔になって来たな霊夢。博麗の巫女としての貫禄が出
てきたんじゃないか?」

「え?お、お母さん!?永遠亭で治療してたんじゃない?」

下から聞こえてきた母親の姿を確認し、下りて霊香の元に走る霊夢

「まあ、完治までとはいかないが娘、息子が心配で夜も眠れなくなてな。
まあ片目は包帯のせいで見えないが両腕両足が治ってれば事足りる。
あと失明はしてないから心配しなくていい」

「で、でも、かなりやばい奴と戦ってたって紫から聞いてたけど」

「ああ、流石の私や紫も今回はやばかったな。まさか外の世界にはあ
んな奴が存在してたとは思わなかった・・・しかも、そいつはボロボ

口で胸に穴が開いてるほど重症の状態で私たちをここまで追い込んだんだ。下手な上級妖怪よりも化け物だな」

(しかし、奴がさんざん叫んでいた・・・なんだったか、カカ、口・・・うーん、思い出せん。恐らく名前だと思っただがあれほど憎しみのこもった敵を相手にするのは初めてだ)

「それで母さん。私は」

「いや、紫から聞いてるよ。妖怪の山へ小夜を助けに行くんだろ、もちろん私も行くぞ」

「本当に大丈夫なの？」

「ああ、問題無い。一緒に心配させたがりの馬鹿息子を助けに行こうじゃないか」

「・・・うん！」

新たに霊香も加わり改めて朝食を済ました後に皆が庭に集まった

「そうか、お前やあの紫が苦戦する程だったのか」

「まあな。次また来たたら倒せる気はしないな、恐らくあの時一人だけだったら私は死んでたろうな」

「おいおい、頼むから不吉な事を言うな。種族は違えど友人が死んだら私だって悲しいぞ」

「ふっ、まさかあのルーミアにそんなふうに言われるとはな」

「そんな私をこうしたのはお前らだろうが」

呆れたような顔で溜め息を吐くルーミアに霊香は「冗談だ」といいながら笑う

「さて、色々あつて母さんも合流したわけだけど母さんも私たち前線組に入って一緒に兄さんを助けに行く事になったわ。概ねは予定通り行くわ」

「じゃあ行きますか、大尉を助けに」

「ええ」

シュレディンガーは靈香に背負ってもらい、一同は妖怪の山へと向かう

『♪』

その後をもう1人、その場には居ないはずの少女も一緒に

時を同じくして妖怪の山の麓は慌ただしかった

「ですから！今その捕虜は八番隊隊長の下で管理しています！こればかりは隊長の許可がおりない限りは承諾できません！」

「だまれ下っ端が!!これは二番隊の隊長である夜宵さまの命令だ!すぐさま博麗小夜をこちらに渡せ！」

牢屋前の入口にて白狼天狗たちが騒いでいた

その周りには複数の河童等の妖怪たちも見ていた

「おーいみんなー」

「あ、にとり」

「なんかあったの?凄いい騒がしいけど」

「なんでもあの夜宵がある捕虜を渡せっていきなり詰めかけて来たん

だつて」

（うわー、その捕虜つて絶対小夜くんだ。まいったな、あの夜宵の事だから諦めてないとは思つてたけど）

仲間の河童から話を聞いてすぐ理解したにとり

「いかに隊長格であろうとこればかりは犬走権隊長に許可をとつてからにしていただきたい！」

「この俺の命令も聞けねえたあ・・・この役たたずが！」 チャキ

バシユ！

「があっ!?」 ドサツ

ざわっ!!!

突然の事に周りが騒ぎ出す

言うことを聞かないことについてに我慢ならず剣を引き抜いた夜宵は同族を斬り捨てた

牢屋の番をしていた哨戒白狼天狗は危険を感じ、身を逸らして左腕に切り傷をおうだけに抑えたが血は止まらずその場を血の絨毯を作り上げる

「クソが！邪魔ばかりしやがつて!!」

夜宵はそのまま牢屋の中へと進んでいく

姿が見えなくなつてから周りは斬られた白狼天狗に集まり、血止めの作業をしだす

「おい大丈夫か?!くそっ！血止めを急げ！」

「だ、だれか権隊長をお呼びしろ！」

「あわわわ、どうしよう。い、今権は別の方の警備場だし今からじゃ到底間に合わない」

混乱する現場、そんな中でにとりはどうするか迷って慌てだす
しかし、次の瞬間にその騒がしきは静寂となった

『はっ！』

ズザザザッ

「・・・あれ？」

先程中へと入っていたはずの夜宵が飛び出してきた
しかも右頬には殴られたかの様な跡と共に赤く腫れていた

「全く、夜宵隊長殿。ご勝手はなされては困る」

後から出てきたのは背に一が書かれた装束を着た女の白狼天狗が
現れ、そのさらに後には両手を縛られた小夜が続いて出てきた

「ぐ、ぐぬぬ！一番隊！なんのつもりだ!?捕虜を牢から出すなんざ！」

「彼はこれから移送します。大天狗さまからの命令です」

「な、大天狗様が?!」

「ええ、大天狗さまから自ら会って話をしたいとの事。そこで私が彼の移送並びに護衛を指名されました」

「お、お待ち下さい！一番隊隊長！」シユタ！

「おや？」「権！」

走ってやってきたのは犬走権だった

彼女は一番隊の白狼天狗の前に立ちいい放った

「その捕虜に関してはずべて私が楓さまから任されている身！勝手な移送は困ります！」

「そうは言われましてこちらも大天狗さまの命に従っているわけですし・・・それに大天狗は楓さまのみでない、そんな幼子でも分かることを知らないわけではないでしょう？」

「ぐっ！し、しかし・・・」

「へへへ、なら解決策は1つだな」

「っ！夜宵！」

「余所者には死だ！小夜!!」

「・・・」

スツ、ギンツ！

「なっ?!」

ブンツ！

「ごぼっ!!」

上段からの攻撃に対して蹴りで剣を粉碎して、更に反対側の脚で夜宵の腹に鋭い蹴りを叩き込む小夜

夜宵は腹を抑えながら徐々に後に下がる

普段ならこれで終わるはずだが小夜はその場から夜宵に向かって飛び上がり、空中で1回転しながら夜宵の左肩に目掛けて踵落としを放った

「ツ”ツ”————~~~~~~~~~~~~・・!!」

小夜の踵が肩にめり込み、ゴキツと鈍い音が夜宵の肩辺りから響いた

「ぎ、小夜！何もそこまで!？」

「・・・」

「ああ、そうでした。夜宵はあなたの部下を斬り捨てていましたね。言う事を聞かない下っ端だと、ですよね夜宵？」

「ぐぐうー。くそつたれがあ・・・」ズルズル

夜宵は動かなくなった左腕を右手で支えながら森の中へと逃げるように消えていった

「夜宵、貴方は一体どこまで・・・」

「夜宵には困ったものです、よくあれで隊長が勤められるものだ。しかし、今回の事で罰は逃れられないでしょう。では行きますよ小夜さん」

「・・・」

「ツ・・・(捷様がせっかく手は出さないと行ってくださっていたのに・・・一体誰が小夜を?)」

その頃

「クソが！クソが!!クソがア!!!」

夜宵は森の中で喚いていた

左肩は脱臼などではすまされず、ほぼ骨は砕け散っており完全に動

かす事が出来ない

なにも語らず容赦の無い一撃を放つ時にみたあの無表情の顔を夜宵は幼少の頃の小夜と重ね、痛みを紛らわすように更に喚く

「殺してやる！殺してやる！！殺してやるうー！！」

「あーいいねえそういう殺意は」

「ツ!?誰だあ!？」

不意に後から聞こえる声に夜宵は振り返る

そこには幻想郷には似つかわしくない格好した男が手帳に何かをメモリ、メモリ終わってペンをしまってから長方形の薄い何かを弄り出す

最初夜宵は新聞を作っている鴉天狗がネタ集めに来たかと思ったが答えはすぐに分かった

この男からは”妖気”が感じられない

つまり”人間”だ

「おい貴様、此処は妖怪の山だ。人間が入って来ていい場所じゃねえ」

「うん、知ってるよ。そういう命令を天魔がしたんだからねえ」

「・・・なら、さっさと立ち去れ。死にたいなら、別だが？」 チャキ

夜宵は砕かれた剣を掴み、戦闘態勢に入る

「やめとけやめとけ、急遽”考えて出しただけのモブ”には俺は殺せない」

「やってみるか!!」 バッ！

右手に持った壊れた剣を男に向かって振り下ろす
しかし、夜宵の視点は男から急に空へと変わる

「ツ?!」 ドサッ

そして男は黒い空間を開き、その中へと喋りながら消えていった